

東京都立産業技術大学院大学

シラバス

2022

(令和4)
年度

東京都立産業技術大学院大学の授業実施形態に関わる用語等について

本学では授業実施形態に関わる次の用語を用います。カッコ内は省略語を表します。

本学の授業には、以下①～③の形態があります。1科目15回の授業の中で、各回における①～③の授業形態は、あらかじめ決まっています。詳しくは、シラバスを参照の上、初回授業等で担当教員へ確認してください。

①対面型授業 [対]

教室の開講：あり、遠隔（Web会議システムによる同時視聴）：なし、ビデオ録画：あり

②ハイフレックス型授業 [ハ]

教室の開講：あり、遠隔：あり、ビデオ録画：あり

③録画視聴型授業 [録]

教室の開講：なし、遠隔：なし、ビデオ録画：あり

※学生の参加の方法については、各授業回の特性に応じて講義担当者によって指定するものとする。

授業によって、各コマごとに異なる授業形態となる。シラバスの記載内容、そして各講義の冒頭やmanabaによる指示に注意すること。

これ以外に、本学でも用いる次の用語を掲げます。

- グループワーク：少人数からなるグループを構成し、グループ内またはグループ間の議論やプレゼンテーションを経て、気づきや啓発を受けることを目的とする授業実施形態の一種です。
- LMS (Learning Managemet System)：学習管理システムを意味する。本学はmanabaを使用しています。

授業実施形態を含め上記の定義は、他の機関で少し異なる場合がありますが、本学は上記の定義を用います。

上記の用語に関わる内容で、本学の履修に関する注意事項として次があります。

【履修の注意事項】

- 各授業には、教育の質を保証するために、履修条件が設けられています。この条件には、教室／施設の許容人数、または、要求される前提知識などです。履修条件は、各授業のシラバスで説明されています。
- 教室／施設の許容人数を超えたときの対処は授業内容に依存するため、授業担当教員からその対処がシラバスで説明、または事前にLMSまたは大学掲示板などで周知されます。

上記とは別に、参考として、授業実施形態を表す文部科学省の用語を次に紹介します。

- **同時性**：教員と学生間、または、学生同士の間での講義や議論などの情報伝達がリアルタイムに行われる性質を意味する。同期性とも称される。この反対語が非同時性（非同期性）です。
- **双方向性**：教員と学生間、または、学生同士の間で質疑応答や議論が双方向に情報伝達ができることを意味する。

これらの性質について、教室内での議論は2つの性質を両方とも満足していることはわかるでしょう。次に、LMS上で質疑応答の書き込みを考えます。これは、質問（学生⇒教員）に対して回答（教員⇒学生）があるという点で双方向性を有しているとみなされます。また、質問に対する回答が1日程度後にされるとします。この遅延の程度が授業の内容上許容されるならば、同時性は確保されているとみなされます。他のメディアを利用した場合も同様です。

大学院の授業は、この両方の性質を満たすことが求められています。このことは大学院設置基準に記載されています。ここに、授業形態の説明は大学設置基準の規定（大学設置基準第二十五条第二項）を準用しています。

目次

【事業設計工学コース】

授業科目	必修 選択	開講 クォータ	授業担当教員	ページ
事業設計工学基礎科目群				
事業設計工学概論	選択	1	コース担当教員	4
スタートアップ戦略特論	選択	3	板倉 宏昭	6
会計・ファイナンス工学特論	選択	1	三好 祐輔	8
エマージング・イノベーション特論	選択	2	吉田 敏	10
サービスサイエンス特論	選択	1	松尾 徳朗	12
ビジネスシステム科目群				
マネジメントシステム基礎特論	選択	2	板倉 宏昭	16
マネジメントシステム応用特論	選択	4	板倉 宏昭	18
統計・数理計量ファイナンス特別演習	選択	3	三好 祐輔	20
地域経済分析特別演習	選択	4	三好 祐輔	22
リーダーシップ特論	選択	2	嶋津 恵子	24
事業設計イノベーション科目群				
製品開発組織特論	選択	3	吉田 敏	28
技術経営戦略特論	選択	4	吉田 敏	30
エマージング・テクノロジー特論	選択	2	廣瀬 雄大	32
事業方向性設計特論	選択	1	廣瀬 雄大	34
事業方向性設計演習	選択	3	廣瀬 雄大	36
サービスイノベーション科目群				
ネットワーク事業設計特論	選択	3	細田 貴明	40
意思決定サイエンス特論	選択	2	細田 貴明	42
イノベティブサービス技術特論	選択	4	細田 貴明	44
市場創造技術特論	選択	2	松尾 徳朗	46
事業継続戦略特論	選択	4	松尾 徳朗	48
事業設計工学特別演習				
事業設計工学特別演習1	必修	1・2	コース担当教員	52
事業設計工学特別演習2	必修	3・4	コース担当教員	53

*: 非常勤講師

目次

【情報アーキテクチャコース】

授業科目	必修 選択	開講 クォータ	授業担当教員	ページ
IT系科目群				
ネットワークシステム特別講義	選択	2	飛田 博章	58
セキュアシステム管理運用特論	選択	4	真鍋 敬士*（小山 裕司）	60
IoT開発特論	選択	4	飛田 博章	62
システムプログラミング特論	選択	2	小山 裕司	64
ネットワーク特論	選択	2	宮崎 淳*（嶋津 恵子）	66
Javaプログラミング技法	選択	1	張 晁逢	68
システムソフトウェア特論	選択	2	柴田 淳司	70
情報アーキテクチャ特論1	選択	1	小山 裕司	72
情報セキュリティ特論	選択	1	奥原 雅之	74
OSS特論	選択	3	小山 裕司	76
データベース特論	選択	2	木下 修司	78
データインテリジェンス特論	選択	3	追川 修一	80
ビッグデータ解析特論	選択	4	追川 修一	82
クラウドインフラ構築特論	選択	3	山崎 泰宏*（小山 裕司）	84
IT・CIO特論	選択	未定	未定	**
エンタープライズ系科目群				
コミュニケーション技術特論	選択	1	中鉢 欣秀	88
標準化と知財戦略	選択	未定	未定	**
情報アーキテクチャ特論2	選択	2	庄司 敏浩*（中鉢 欣秀）	90
情報アーキテクチャ特論3	選択	2	中鉢 欣秀	92
情報システム特論2	選択	4	亀井 省吾*（板倉 宏昭）	94
情報ビジネス特別講義1	選択	3	六川 浩明*（小山 裕司）	96
情報ビジネス特別講義3	選択	4	川名 周*（小山 裕司）	98
サービスサイエンス特論	選択	1	松尾 徳朗	12
システム開発系科目群				
ソフトウェア工学特論	選択	1	追川 修一	102
フレームワーク開発特論	選択	1	安川 要平*（中鉢 欣秀）	104
セキュアプログラミング特論	選択	3	黄 緒平	106
クラウドサーバ構築特論	選択	3	飛田 博章	108
情報セキュリティ特別講義2	選択	4	奥原 雅之	110
アジャイル開発手法特論	選択	3	細澤 あゆみ*（中鉢 欣秀）	112
コラボレイティブ開発特論	選択	4	中鉢 欣秀	114
マネジメント系科目群				
プロジェクト管理特論1	選択	1	三好 きよみ	118
プロジェクト管理特論2	選択	3	上條 英樹*（三好 きよみ）	120
プロジェクト管理特論3	選択	4	三好 きよみ	122
プロジェクト管理特別講義	選択	2	三好 きよみ	124
情報システム特論1	選択	4	嶋津 恵子	126
情報ビジネス特別講義2	選択	3	小酒井 正和*（小山 裕司）	128
情報セキュリティ特別講義1	選択	2	奥原 雅之	130
情報システム学特別演習				
情報システム学特別演習1	必修	1・2	コース担当教員	134
情報システム学特別演習2	必修	3・4	コース担当教員	135

*: 非常勤講師

(): 非常勤教員の受入担当教員

目次

【創造技術コース】

授業科目	必修 選択	開講 クォータ	授業担当教員	ページ
創造技術基礎科目群				
グローバルコミュニケーション特論	選択	2	前田 充浩	140
人間中心デザイン特論	選択	3	伊藤 潤	142
デザインマネジメント特論	選択	2	高嶋 晋治*(村越 英樹)	144
インテリジェントシステム特論	選択	1	林 久志	146
プロダクト・イノベーション科目群				
設計工学特論	選択	2	伊藤 潤	150
プロトタイピング工学特論	選択	1	内山 純/近藤 嘉男*(内山 純)	152
システムインテグレーション特論	選択	未定	未定	**
サービス工学特論	選択	未定	未定	**
品質工学特論	選択	4	越水 重臣	154
信頼性工学特論	選択	2	越水 重臣	156
創造設計特論	選択	1	越水 重臣	158
チーム設計・試作特別演習	選択	4	伊藤 潤	160
インダストリアル・デザイン科目群				
プロダクトデザイン特論	選択	1	内山 純	164
価値デザイン特論	選択	4	蓮池 公威*(伊藤 潤)	166
コミュニケーションデザイン特論	選択	3	高嶋 晋治*(村越 英樹)/河西 大介	168
工業デザイン材料特論	選択	3	内山 純	170
デジタルデザイン実習	選択	2	村田 桂太*(村越 英樹)	172
デザイン表現実習	選択	1	高嶋 晋治*(村越 英樹)/和泉 秀明*(内山 純)	174
造形デザイン特別演習	選択	2	内山 純/和泉 秀明*(内山 純)	176
プロダクトデザイン特別演習	選択	3	伊藤 潤/村田 桂太*(村越 英樹)	178
デジタル技術科目群				
組み込みシステム特論	選択	2	村越 英樹	182
システムモデリング特論	選択	4	村越 英樹	184
ET(Embedded Technology)特別演習	選択	3	村越 英樹	186
機械学習特論	選択	3	林 久志	188
AIデザイン特論	選択	4	林 久志	190
データサイエンス特論	選択	1	岩政 幹人*(大久保 友幸)/大久保 友幸	192
データサイエンス特別演習	選択	4	浅野 浩美*/小畑 崇弘*/宮津 和弘*(林 久志)	194
イノベーションデザイン特別演習				
イノベーションデザイン特別演習1	必修	1・2	コース担当教員	198
イノベーションデザイン特別演習2	必修	3・4	コース担当教員	199

*:非常勤講師

**:確定し次第、追加掲載いたします。

():非常勤教員の受入担当教員

目次

【全コース共通】

授業科目	必修 選択	開講 クォータ	授業担当者	ページ
産業技術研究科科目群				
国際経営特論	選択	4	前田 充浩	204
国際開発特論	選択	3	前田 充浩	206
Technical Writing in English	選択	3	嶋津 恵子	208
DESIGN[RE]THINKING	選択	4	松井 実	210
選択必修科目群				
技術倫理	選択必修	1	伏見 靖*(越水 重臣)	214
情報技術者倫理	選択必修	3	稲垣 実*(小山 裕司)	216

*:非常勤講師

**:確定し次第、追加掲載いたします。

():非常勤教員の受入担当教員

事業設計工学コース

I 事業設計工学基礎科目群

事業設計工学概論

スタートアップ戦略特論

会計・ファイナンス工学特論

エマージング・イノベーション特論

サービスサイエンス特論

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	事業設計工学基礎科目群	科目名 (英文表記)	事業設計工学概論 Introduction to the "business innovator"			教員名	コース担当教員

概要	この授業を受講することによって、本コースで学ぶ内容を体系的に俯瞰し、今後の学習の明確な動機付けを行う。事業設計工学コースが育成する事業イノベーターを理解するために、本学の専任教員やゲストスピーカーがそれぞれの専門分野の立場から、「事業イノベーター」について言及し、「事業イノベーター」の実像をうかびあがらせるようにする。			
目的・狙い	この「事業イノベーター」の概念としては、情報技術やデザインエンジニアリングを活かして具体的に現状を理解し、また何をすべきか具体的な考え方を持つ高度専門職業人である。事業設計工学を俯瞰して今後の学習の動機づけとする。 修得できる知識単位： 1-2-3 社会/マーケット視点を獲得できる。社会/マーケット視点から、技術をビジネスに結び付けられる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） 2-1-3 リファレンスを探し、入手することができる。リファレンスを精査した上で、取捨選択して自分のものにできる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） 3-1-3 必要な経営資源の獲得ができる。経営資源の獲得し、それを開発できる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） 3-2-3 必要な財務知識を獲得できる。財務知識を用いて予算管理できる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） 4-2-3 環境スキャニングができる。・環境スキャニングを通して、革新的なシナリオ構築ができる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）			
履修条件 （履修数の上限、 要求する前提知識 等）	特になし。			
到達目標	上位到達目標			
	「事業イノベーター」となるために自らの目標を設定し、その目標に向かって学習を進められるようになる。			
	最低到達目標			
	「事業イノベーター」という人材をイメージできるようになる。			
授業実施形態 （単一または複数 から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点	
	対面型	—		
	ハイフレックス型	○	教室または遠隔での出席を求め、双方向で多方面に行われる議論や討論、質疑応答を通じた学修。これには学修内容を深めるための個人ワーク及びグループワークが含まれる。	
	録画視聴型	○	第5回と第6回はビデオ視聴のみで受講。授業外の学習サーバーにアップロードされた講義資料をダウンロードして予習・復習をすること。課題が出ている場合には、期限までに課題を提出すること。	
授業外の学習	各講義の中でレポートなどの課題が示され。講義後にまとめることが課される。各回の講師から授業外の学習についての指示が出されることがある。			
授業の進め方 （グループワーク 方式など、進め方 の特徴）	本講義では、事業イノベーターに必要な各種の最新事情についての知識を修得する。 オムニバス形式であり、講義内容と順序については、第1回目に学生に提示する。また、第1回目には、新入生を対象とした自己紹介の時間を取る。各講師がそれぞれのテーマについて1～2コマ担当していく。各講義の講義日については、第1回の「総論」の中で明示する。 （板倉 宏昭／2回） 総論とマネジメントシステム （吉田 敏／2回） 人工物に関する基礎理論 （三好 祐輔／2回） ファイナンスと数理計量 （松尾 徳朗／2回） 失敗した企業の事例研究 （細田 貴明／2回） 事業設計に向けたテクノロジーの理解 （廣瀬 雄大／2回） 事業方向性設計 （田部井 賢一／1回） 医療・福祉と事業設計 （木下 修司／1回） サービス継続のためのディペンダビリティ（総合信頼性） （中島 修／1回） 移住起業と地域定着			
授業の計画	回数	内容		授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	総論とマネジメントシステム①（板倉） 本授業のガイダンスを行う。新入生を対象とした自己紹介の時間を取る。また、事業設計工学を考える上で必要な経営学に関する基本的な視点について考える。		[ハ]
	第2回	総論とマネジメントシステム②（板倉） 事業設計工学を考える上で必要な経営学に関する基本的な視点について考える。特に、市場、組織および地域を巡る基本的な考え方について学ぶ。		[ハ]

	第3回	人工物に関する基礎理論①（吉田） 製品やサービスなどの人工物に関し、基礎的な理論面を考える。特に、自然科学の対象である自然物との違いを理解し、どのように人工物を創造すべきかを考えていく。	[ハ]
	第4回	人工物に関する基礎理論②（吉田） 第3回に引き続き、人工物に関する基礎的な理論面を考えていく。第4回は、できるだけグループで議論を行い、人の話を聞き、自分の考えを発言しながら、理解を深め、最終的に各自がレポートにまとめていく。	[ハ]
	第5回	ファイナンスと数理計量①（三好） 事業設計を考察する上で、事業の実態を客観的に把握することは欠かすことができない。そのために必要となる数理統計分析に関する技術の基礎を学ぶ。	[録]
	第6回	ファイナンスと数理計量②（三好） 事業設計を考察する上で、ファイナンス的発想がなぜ必要なのか、フィールドワークやインタビュー調査を事例型研究にどのように活かせるかについて学ぶ。	[録]
	第7回	ビジネスの空白地帯と顧客価値提案①（松尾） ビジネスが成功するためには、（1）収益構造の明確性、（2）収益事業の持続的成長、（3）成長の阻害要因の排除、および（4）これらを実現するための実務体制とそのマネジメント、の4つが重要である。本講義では、これらについての基礎を学び、ビジネスの成功および失敗の実例を通した、望ましいビジネスの姿を模索する。	[ハ]
	第8回	ビジネスの空白地帯と顧客価値提案②（松尾） ビジネスモデルは、顧客価値提案、利益方程式、主要経営資源・業務プロセスの3つに対して、業種ごとに性格が異なる。本講義では、これらについて詳細を学ぶ。さらに、商品やサービスの差別化に関する曲線をグラフ状に描き、既存のビジネスと差別できる形態のビジネスを模索する。	[ハ]
	第9回	事業設計に向けたテクノロジーの理解①（細田） ビジネスを検討するうえで、テクノロジーに関する知識は必須のものとなっている。イノベーションに必要となるテクノロジーの基本的知識や考え方、取り組み方について紹介し、その基礎を学習する。	[ハ]
	第10回	事業設計に向けたテクノロジーの理解②（細田） 前回講義に引き続きテクノロジーの基本的知識や考え方、取り組み方について紹介する。今回講義では前回までに学習したことをもとにグループで議論を行い、意見交換を行いながら学習内容の理解を深め、最終的にレポートにまとめる。	[ハ]
	第11回	事業方向性設計①（廣瀬） ロードマッピング思考を使った事業戦略立案支援の方法論について、また、必要となる分析と議論のプロセスについて理解を深める。グループに分かれて議論し、各自でレポートにまとめる。	[ハ]
	第12回	事業方向性設計②（廣瀬） 第11回の続きとして、ロードマッピング思考を使った事業戦略立案支援の方法論について、また、必要となる分析と議論のプロセスについて理解を深める。グループに分かれて議論し、各自でレポートにまとめる。	[ハ]
	第13回	医療・福祉と事業設計（田部井） 事業設計の観点から医療・福祉を考えていく。認知症予防事業を例として、グループで議論を行い、理解を深め、最終的に各自がレポートにまとめていく。	[ハ]
	第14回	サービス継続のためのディペンダビリティ（木下） 設計した事業を継続するために必須の性質であるディペンダビリティ（総合信頼性）とその保証方法について、最新の研究動向を紹介する。グループでの小演習、ディスカッションを実施する。	[ハ]
	第15回	移住起業と地域定着（中島） 移住地で仕事を興すことを伴う「移住起業」は、移住による環境変化だけでなく、移住者が持つ職能やスキルを地域コミュニティで活かせるかが影響する。そこで本講義では移住者が特定の地域へ定着する要因についてグループで議論し理解を深め、最終的には各自がレポートにまとめていく。	[ハ]
	試験	実施しない。各講義の中でレポートなどの課題が示される。	
成績評価	各講義の中でレポートなどの課題が示される。提出された課題の内容を中心に、評価する。1週間以内に提出すること。		
教科書・教材	必要な資料は、講義ごとに示される。		
参考図書	必要な資料は、講義ごとに示される。		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	事業設計工学基礎科目群	科目名 (英文表記)	スタートアップ戦略特論 Business Startup Strategy			教員名	板倉 宏昭

概要	<p>起業あるいは新規事業を立ち上げ、成長を遂げていくためのスタートアップの活動を理解する。活動の流れを体系的に理解し、事業計画、資金調達、人材・知財等の資源管理、ブランディング等のマネジメントを学ぶ。</p> <p>本講義は一般的な事業戦略や企業経営の用語について簡単に整理して理解したのち、起業に関して外部講師を招待し、起業に関する体験や専門的知識について説明していただく。その後、それぞれの講演内容について学生間で議論する。</p>		
目的・狙い	<p>新しいビジネスを立ち上げるためには、事前のマーケティング戦略やブランディングから始まり、企業のミッションやビジョンづくり、企業における資金調達から、人材の調達、チーム育成など様々なマネジメントワークが必要になる。</p> <p>本講義では、まず、企業の戦略手法、経営理念の構築、マーケティングやブランディング、ビジネス戦略の立案から、組織経営、チームマネジメント、など必要な基本技術、財務・会計を学ぶ。さらに、スタートアップに関する各界の第1号者に、事例を紹介していただき、それをたたき台にしたチームでの議論を通じて、さらに実践的なスタートアップ戦略について理解を深める。</p> <p>A-1-3 ・事業化の提案から事業設計・構築にいたる様々な業務を自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。(レベル3:自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。)</p> <p>A-3-3 ・技術等のシーズを獲得できる。・ビジネス価値に変換できる。(レベル3:自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。)</p> <p>C-1-3 ・必要な経営資源の獲得ができる。・経営資源の獲得し、それを開発できる。(レベル3:自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。)</p> <p>D-1-3 ・将来像(ビジョン)を描ける。・将来像を描き、それを具体化できる。(レベル3:自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。)</p> <p>D-3-3 ・新たな関係構築をすることができる。・新たな関係構築を築き、調整・牽引できる。(レベル3:自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。)</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<ul style="list-style-type: none"> ・前提知識は特に必要ないが、業務経験があるか、将来自ら起業、あるいは企業の中で新規事業の立ち上げを考えている人にふさわしい。 ・チームの議論には、積極的な取り組みが求められる。 ・授業の議論には、積極的な取り組みが求められる。 		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・新規ビジネスの立ち上げについて、基本的な考え方を理解し人に説明できる。 ・自ら新規ビジネスを起業したり、企業内で新しい事業の企画を創造することができるようになる。 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・新規ビジネスの立ち上げについて、基本的な考え方を理解する。 ・新規ビジネスの立ち上げや、新しい事業創造にスタッフとして関与しマネジメントを補佐することができる。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	○	
授業外の学習	・課題が指示された場合は、その課題に取り組み、報告すること。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	・本講義は、講義・議論及びグループワーク・プレゼンテーションから構成される。授業計画を以下に示す。グループ演習への積極的参加が求められる。グループは、4名～6名のチームとする。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	本講義の概要の解説、スタートアップとは何か俯瞰的な講義を行い、受講するにあたっての心構えについて説明する。スタートアップに必要な企業経営概要、経営戦略などの講義を行う。スタートアップに必要な技術商業化マネジメントについて講義を行う。テーマとしては、技術の市場性、リニアモデル、マーケティングモデル、ループモデル、クイックルック、ビジネスモデル・デザインなどである。	[ハ]
	第2回	ビジネスモデルの作成方法について基本的なツールを学ぶ。	[録]
	第3回	ビジネスモデルの作成方法について発表を行う。	[ハ]
	第4回	* オープンポスト合同会社 代表社員 小泉満 スタートアップ事例として講師からブロックチェーン技術を活用したコンテンツ共創プラットフォームの取り組みについてレクチャーを受け、エンターテインメント×テクノロジーのスタートアップについてディスカッションを行う。	[録]
	第5回	スタートアップの事例に関する討論を行う。	[ハ]
	第6回	* アライオリーブ 園主 荒井 信雅 最高品質を目指した国産オリーブオイル作りを目指し、酸度 0.1%以下という世界でも類をみない鮮度を保つエキストラバージンオリーブオイルの開発に成功。シンガポール、香港など海外への商品展開を進めているお話を伺う。	[録]
	第7回	スタートアップの事例に関する討論を行う。	[録]
	第8回	* 株式会社生命科学インスティテュート事業開発室長 向平隆創 創薬・ヘルスケア産業におけるスタートアップについて紹介し、ディスカッションを行う。	[録]
	第9回	* 株式会社生命科学インスティテュート事業開発室長 向平隆創 創薬・ヘルスケア産業におけるスタートアップについて紹介し、ディスカッションを行う。(続き)	[録]
	第10回	* 株式会社トーラス代表取締役 木村 幹夫 日本全国の不動産登記にかかわる情報をWebで検索できるサービスなどで注目されている木村幹夫氏から起業、特に、営業マーケティングについてのお話を伺う。	[ハ]
	第11回	各自がスタートアップに有効な戦略についてプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションは1人あたりコメントを含めて20分程度を想定している。積極的にコメントすること。	[録]
	第12回	各自がスタートアップに有効な戦略についてプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションは1人あたりコメントを含めて20分程度を想定している。積極的にコメントすること。	[ハ]
	第13回	各自がスタートアップに有効な戦略についてプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションは1人あたりコメントを含めて20分程度を想定している。積極的にコメントすること。	[録]
	第14回	各自がスタートアップに有効な戦略についてプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションは1人あたりコメントを含めて20分程度を想定している。積極的にコメントすること。	[ハ]
	第15回	スタートアップの事例について解説を行う。	[録]
	試験	プレゼンテーションは、第12回、第13回か第14回のいずれかを受けること。各人のスタートアップ戦略についてプレゼンテーションをしてもらう。「自己の所属組織(あるいは事例の企業)を対象に、未来の有効な事業案についてプレゼンテーションしてください。」時間:1人20分程度(質疑応答を含む)	[ハ]
成績評価	課題(レポート、演習)40%、プレゼンテーション40%、授業への貢献度20%を総合的に評価する。 ※授業への貢献度は、単なる出席点ではない。		
教科書・教材	板倉宏昭『新訂 経営学講義』勁草書房 2017		
参考図書	Alexander Osterwalder & Yves Pigneur, Business Model Generation -A Handbook for Visionaries, Game Changers, and Challengers, Wiley, 2010 (小山龍介訳『ビジネスモデルジェネレーションービジネスモデル設計書』翔泳社, 2012) 板倉宏昭・石丸亜矢子『地域バリューチェーンー持続可能な地域を創る』		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	事業設計工学基礎科目群	科目名 (英文表記)	会計・ファイナンス工学特論 Accounting and Finance Engineering			教員名	三好 祐輔

概要	<p>企業再編の増加や株主重視経営の定着などに伴い、財務知識の重要性が高まっている。ファイナンスという学問は、資金の調達や運用など、企業経営のうち資金に関係する分野を対象とした学問である。具体的には、企業にはどのような資金調達の手段があるのか？調達した資金を複数ある投資案件のどれに投下するのか？意思決定の問題を扱う。本講義は、資金の投資先の決定・資金調達先の決定・配当政策の決定など、企業経営のうち資金に関係する分野を対象とする。そして、経済学及び経営学の理論的な考え方を習得し、問題意識の持ち方、ケーススタディに応用するにはどうしたらいいか。その結果、課題探求・問題解決ができる能力を身に付けることを目指す。</p>		
目的・狙い	<p>金融工学の分析手法を身に付けることが本授業の目的である。このため、次の項目を重点的に学ぶ。対面の授業は基礎的な知識の習得、録画はアドバンス的な内容になっている。受講者は、まず対面の授業で基礎を学び、課題実習を完成できるようにする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 資金を調達する方法の違いが資本コストにどのような影響を及ぼすのかを説明できる。 2. 調達した資金を使って投資を行う際、どのような計算によって投資決定を行うのかを説明できる。 3. 財務管理に密接に関連する証券および証券市場の機能について説明できる。 4. 企業の財務的意思決定に関する知識を習得し、ファイナンス工学の基礎的な考え方を現実の様々な場面で応用できることを目標とする。 <p>修得できる知識単位</p> <p><1-2-3>・社会/マーケット視点を獲得できる。・社会/マーケット視点から、技術をビジネスに結び付けられる。(レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p><2-1-3>・リファレンスを探し、入手することができる。・リファレンスを精査した上で、取捨選択して自分のものにできる。(レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p><3-1-3>・必要な経営資源の獲得ができる。・経営資源の獲得し、それを開発できる。(レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p><3-2-3>・必要な財務知識を獲得できる。・財務知識を用いて予算管理できる。(レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p><4-2-3>・環境スキャニングができる。・環境スキャニングを通して、革新的なシナリオ構築ができる。(レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>「マネジメントシステム基礎特論」、「マネジメントシステム応用特論」など、経営学を学ぶうえで必要な考え方（特に、経営に関する基本概念のうち、市場と経営、組織と経営を巡る考え方、会計の知識）を事前知識として知っておくことが望ましい。また受講者はPCを持参し、エクセルの表計算を行えるようにしておく必要がある。また、非常勤講師の先生に、会計に関する知識を交えて、企業価値の測定についての講義をすることもある。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・企業価値経営をファイナンスの観点から評価できる。 ・企業価値向上のための金融工学に関する知見の理解とその応用ができる。 ・金融工学分野での実証分析を行うことができる。 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・金融工学に関する関心を高める。 ・企業価値経営に対する金融工学が果たす役割を具体的に理解する。 		
授業実施形態 (単一または 複数から構成 される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	遠隔での出席可。グループワーク(3～4名程度のグループによる協働作業)、グループ討議、クラス討議を行う。学生による授業参加を特に期待する。
	録画視聴型	○	試験はmanaba上でのオンライン実施とする
授業外の学習	<p>予習：配布されたレジュメを講義前に読んでおく。復習：講義で学んだ内容を中心に、自らが関心を抱くテーマについて、講義で扱った技術を反復練習することが課される。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>講義は配布する資料を使用して行う。これらは、本学の授業支援システム(manaba)を活用する。イントロダクション、チーム討議、発表・クラス討議、解題講義から構成される。授業計画を以下に示すとおりである。受講生の興味、履修者数等から、内容及び順序は適宜調整する可能性がある。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第 1 回	本講義の目的と狙い、学修内容、課題、最終試験、評価方法について解説し、学生が講義選択の判断ができるようにする。	[ハ]
	第 2 回	起業と観光業	[録]
	第 3 回	グループワークと事業計画書の作成①	[ハ]
	第 4 回	事業計画と企業価値 (DCF)	[録]
	第 5 回	グループワークと事業計画書の作成②	[ハ]
	第 6 回	事業計画と企業価値 (IRR)	[録]
	第 7 回	グループワークと事業計画書の作成③	[ハ]
	第 8 回	事業計画と企業価値 (WACC と資本構成)	[録]
	第 9 回	グループワークと事業計画書の作成④	[ハ]
	第 10 回	事業計画と企業価値 (CAPM)	[録]
	第 11 回	グループワークと事業計画書の作成⑤	[ハ]
	第 12 回	事業計画と企業価値 (EVA)	[録]
	第 13 回	事業計画と企業価値 (MVA)	[録]
	第 14 回	グループ発表①	[ハ]
	第 15 回	グループ発表②	[ハ]
	試験	録画講義に対する課題を求める。また、最終発表会の後に、定期試験を課す場合もある。	[録]
成績評価	次のポイントで評価する(合計 100 点満点) ・講義への参画度 20 点 ・レポート 60 点：レポート内容の評価 ・最終試験 20 点：講義終了後に、これまで獲得した知識・スキルを総合的に評価		
教科書・教材	・三好祐輔,「地域活性化のための処方箋」(九州大学出版会) 総 302 頁(単著),2019 年 11 月 配布資料としてサーバー上にアップして提供する。		
参考図書	・仁科一彦(2004)『現代ファイナンス理論入門』(中央経済社) ・板倉宏昭(2017)『新訂 経営学講義』(勁草書房)		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	事業設計工学基礎科目群	科目名 (英文表記)	エマージング・イノベーション特論 Emerging Innovation		教員名	吉田 敏	

概要	<p>イノベーションという概念は、経済活動などの慣行の非連続性に基づいた発展を表す一つの現象であり、技術の変化、市場の変化、組織の変化など様々なものに根ざす可能性を持っている。近年、国内の個々の企業において、今までの経営路線に行き詰まり、閉塞感が語られている感があるが、その反面、このイノベーションの可能性について期待感がある傾向が認められる。</p> <p>ここでは、これからイノベーションを起こしていくために、イノベーションを支える構造とプロセスや、技術環境や市場環境におけるイノベーションの制約要因などを、実際の事例を参照しながら理解していくものである。このような理解により、実際の社会活動における方向性を指し示すことが出来る可能性を得ると考えられる。</p>		
目的・狙い	<p>本講義の目的は、実際の社会活動の中でイノベーションを起こす可能性を得るために、実践的・戦略的なレベルで社会活動に対して論理的、客観的な理解を深めることである。特に、これからイノベーションを送ることが出来る内部環境、外部環境を判断し、実践的な活動ができるための資質を養うことである。</p> <p>受講者は、この講義を通じて、現実に行われている社会活動、企業活動の中の課題を理解し、その対応のためのイノベーションの可能性を思考するための基盤的知識を習得できる。獲得可能な具体的な知見としては、ユーザーに関する知見、製品やサービスの創造プロセスに関する知見、デザインの論理的な考え方に関する知見である。</p> <p>修得できる知識単位：</p> <ol style="list-style-type: none"> 問題解決力 <ol style="list-style-type: none"> 1-1 新結合力（レベル4）様々な課題を理解していく力（レベル4：単独で行うことができる） 1-2 環境分析力（レベル3）外部環境を把握する力（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） 1-3 事業構想力（レベル3）新しいビジネスモデルを考案する力（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） 知識獲得力 <ol style="list-style-type: none"> 2-2 技術分析力（レベル4）技術領域の特性を理解する力（レベル4：単独で行うことができる） 2-3 活用力（レベル4）収集した情報を活用する力（レベル4：単独で行うことができる） マネジメント能力 <ol style="list-style-type: none"> 3-1 開発力（レベル3）製品等の開発におけるマネジメントを行う力（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） 総合的企画力 <ol style="list-style-type: none"> 4-1 将来像構想力（レベル4）今後の外部環境・内部環境に関する考え方を基に事業を展開する力（レベル4：単独で行うことができる） 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	特になし		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・イノベーションの創出に関し、論理的な理解ができるようになること。 ・得ることが出来た理解によって、実際のイノベーションを中心となって推進する資質を修得すること。 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・実際のものづくりにおいて、直面する課題の概要を理解すること。 ・イノベーションという現象を誤解なく理解し、その可能性の範囲を説明できるようになる。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	講義の内容を、教科書、参考書により予習、復習すること。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>講義は毎回配布する資料を使用して行う。資料は独自にこの講義のために作成するもので、第1回から第15回まで連続したものである。毎回授業の始めに重要ポイントを記述させる小レポートの課題を出し、終了時に回収する。このレポートの内容から把握できる受講者の理解度、問題意識の傾向などは、その後の講義内容に反映させていく。また、毎回できるだけグループ単位の議論を行い、自分の考え方や理解度を、受講生がお互いに確認できるようにしていく。</p> <p>但し、本講義のテーマであるイノベーションという現象は、日々急激な変化や議論がなされており、必要がある場合は積極的に講義内容を最新の情報に当てはめるよう、変更していく場合がある。</p> <p>(ただし、コロナ禍への対応で、Meetなどによる遠隔講義としつつ、内容が一部変更となることが考えられる。)</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	講義概要の説明。 現在、不明瞭に広く使われている「イノベーション」という概念を、学術的な背景から概説し、正確に認識していく素地を確立する。その上で、本講義の全体像を説明していく。	[ハ]
	第2回	イノベーションの類型化 イノベーションという概念の全体像を理解するために、対象となる現象を体系的に整理し、類型化をしていく。特に、影響力が強いパラメータを抽出し、その意味を学んでいく。	[ハ]
	第3回	イノベーションの理論化① イノベーションがどのように起こる可能性があるのかを理論的に考えていく。これまでに生じたイノベーションの事例から、イノベーションが起こるメカニズムを理解していく。	[ハ]
	第4回	イノベーションの理論化② 第3回に引き続き、過去の事例に加え、現在起こりつつある事例を考えていく。	[ハ]
	第5回	グループ学習① イノベーションを起こすために理解すべき要因や因子を、具体的な事例を取り上げて、グループ単位で議論していく。	[ハ]
	第6回	グループ学習② 第5回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。	[ハ]
	第7回	グループ学習③ 第6回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。 特に、プレゼンテーションにまとめることを実践していく。	[ハ]
	第8回	グループプレゼンテーション① ここまでのグループ議論の内容を、グループ単位で発表する。また、質疑応答により、各発表内容について、発表者だけでなく、受講生全員で考え、知見の共有を進めていく。	[ハ]
	第9回	イノベーションの実践例① イノベーションの実際の例を学び、そこにある様々な要因を理解する。	[ハ]
	第10回	イノベーションの実践例②	[ハ]
	第11回	現在のイノベーションに関する課題の理解 国内企業を中心に、現在のイノベーションに関する課題や問題点を把握し、これからどのようにイノベーションを起こすのかを考える。	[ハ]
	第12回	グループ議論④ 対象を絞り、ここまでに学んだ内容を活用しながら、実際にイノベーションを起こすための方向性や考え方を、グループ単位で議論していく。	[ハ]
	第13回	グループ議論⑤ 第12回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。	[ハ]
	第14回	グループ議論⑥ 第6回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。 特に、プレゼンテーションにまとめることを実践していく。	[ハ]
	第15回	グループプレゼンテーション② グループプレゼンテーション①と同様に、ここまでのグループ議論の内容を、グループ単位で発表する。また、質疑応答により、各発表内容について、発表者だけでなく、受講生全員で考え、知見の共有を進めていく。	[ハ]
	試験	なし	
成績評価	・各講義の時間内に、講義内のポイントについて課題が出され、それを小レポートにまとめて提出する。(60%) ・第8回と第15回にグループ単位でプレゼンテーションを行う。(40%) (ただし、コロナ禍への対応で、Meet などによる遠隔講義としつつ、内容が一部変更となることが考えられる。)		
教科書・教材	・吉田敏編著、『技術経営 ―MOTの体系と実践―』、理工図書、2012年。		
参考図書	・藤本隆宏、野城智也、安藤正雄、吉田敏 著、『建築ものづくり論』、有斐閣、2015年。 ・前田正史、吉田敏 他共著、『Beyond Innovation 「イノベーションの議論」を超えて』、丸善プラネット株式会社、2009年。		

コース名	事業設計工学コース 情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	事業設計工学基礎科目群 エンタープライズ系科目群	科目名 (英文表記)	サービスサイエンス特論 Service Science			教員名	松尾 徳朗

概要	本講義では、人間の意思決定の不合理性、消費者の行動、産業心理学などの知見と研究事例からその特徴を明らかにする。サービス提供者が満足するのではなく、顧客が満足する姿を目標としたサービスや市場がのぞまれる。そこで、本講義においては、近年注目を集めているサービスと消費者行動、サービスサイエンス、サービスエコノミクス、サービスマーケティング、サービスマネジメントについて扱う。さらに、サービスプロフィットチェーンなどの従業員のモチベーション向上とカスタマーロイヤルティのサイクル、顧客経験と市場の理解についても論じる。また、これらをもとにして演習を個人・グループベースで行う。		
目的・狙い	<p>本講義の目的は、（１）これまでに成熟したサービスサイエンス分野について俯瞰するとともに、その本質を理解すること、（２）消費者の行動やそれを導く方法論を習得すること、（３）事例を通じたサービスの種類やその特徴を理解することである。特に、損失回避の法則と損得の心理、価値基準の法則、評価バイアスの法則と無料の力、価格設定と商品組み合わせ、消費者の不合理な行動や行動の法則性、行動を導く売り手の演技、コミットメントの法則、サービスエコノミクス、サービスコストや需要者の行動、サービスのコンポーネント化、サービスの価格とダイナミックプライシング、サービスクオリティギャップとサービスプロフィットチェーン、顧客ロイヤルティ戦略について理解し、これらについてグループ演習を通じて概念と具体的な方法論について体得する。</p> <p>1-2-3 社会/マーケット視点を獲得できる。社会/マーケット視点から、技術をビジネスに結び付けられる。（レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。）</p> <p>1-3-3 技術等のシーズを獲得できる。ビジネス価値に変換できる。（レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。）</p> <p>2-3-4 新しいものや本質的なものを見抜くことができる。新しいものや本質的なものを活用できる。（レベル4:単独で行うことができる。）</p> <p>4-1-3 将来像（ビジョン）を描ける。将来像を描き、それを具現化できる。（レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。）</p> <p>4-2-3 環境スキャニングができる。環境スキャニングを通して、革新的なシナリオ構築ができる。（レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。）</p>		
履修条件 (履修数の上限、要求する前提知識等)	特に前提知識は求めないが、人間とサービスのつながり、消費者の行動とサービス提供者の業務の関係性を考えようと探求する姿勢を持つこと。		
到達目標	上位到達目標		
	サービスサイエンス、サービスエコノミクス、サービスマーケティングに関して、業務にどのように活かすことができるか具体的に理解できる。		
	最低到達目標		
	サービスの概念を理解することで消費者の行動について考えることができる。		
授業実施形態 (単一または複数から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	積極的に授業中に発言すること。 グループ演習の基礎となる個人演習を実施することがある。 積極的にグループでのディスカッションに参加すること。
	録画視聴型	○	録画授業スケジュールに留意すること。 録画授業は実施回に必ず視聴しておくこと。
授業外の学習	必要に応じて LMS で資料を配布するので、授業前に予習すること。また、毎回、次回の授業に関連する課題を指示するので、事前に作成すること。必要に応じて参考書等を活用し、授業での理解の助けにすること。グループで実施する演習課題は事前に理解しておかないとグループ作業に影響する。		
授業の進め方 (グループワーク方式など、進め方の特徴)	序盤において近年注目を集めているサービスと消費者行動、商品の選択の不合理性、サービスサイエンス、サービスエコノミクス、サービスマーケティングについて論じる。これらの内容について、受講者がグループで討議し、理解を深める。		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	本講義のガイダンスを実施する。授業における狙い、方針、授業実施方法、評価方法、および資料等の配布方法について説明する。これらの説明を通して、学生が講義選択の判断ができるように、講義の目的と全15回の構成を説明する。また、具体的な導入として、簡単な事例について説明する。	[ハ]
	第2回	損失回避の法則と損得の心理(vc01)、価値基準の法則(vc02)：損失回避の法則と損得の心理、および価値基準の法則について説明する。具体的に大きなリスクを回避することを見落として、小さなリスクを回避することに執着することによるあらたなリスク発生に関する事例、および評価に対してどのように価値付けを行い、その後の判断につながるかについて説明する。	[録]
	第3回	損失回避の法則と損得の心理、および価値基準の法則について、グループ演習で理解を深める。具体的には、これらの失敗の発生に関して、起こり得る状況についてストーリーを作り、学習事項の本質にせまる。また、改善方法についてのアイデアについても議論する。	[ハ]

	第 4 回	評価バイアスの法則と無料の力(VC03)、価格設定と商品組み合わせ(VC04)：評価バイアスの法則と無料の力、価格設定と商品組み合わせについて説明する。初期の評価がその後の評価や意志決定に与える影響について説明する。さらに、それに価格が組み合わせられた際に、無料配布での商品が存在する状況について事例を研究する。	[録]
	第 5 回	評価バイアスの法則と無料の力、価格設定と商品組み合わせについてグループで演習を行い理解を深める。特にサービス観点で、学習事項を含めた制度設計およびそれを用いることでどのように顧客を増やすことが可能となるかの方策について議論を行う。	[ハ]
	第 6 回	コミットメントの法則、売り手の演技(VC05)、消費者の不合理行動や行動の法則性(VC06)：消費者の不合理行動や行動の法則性、コミットメントの法則、および行動を導く売り手の演技について説明する。特にコミットメントの法則について、失敗が増大する状況についてストーリーを作成する。さらに、それを商取引にもちいることで、買い手が購入し続けるモデルについて考察する。	[録]
	第 7 回	商取引における演技についてグループ演習により理解を深める。特に、演技の効果を商取引システムやサービスシステムに導入可能かどうかを検討し、それが可能な場合、どのような演技が可能となるか検討し、各々のグループで発表を行う。	[ハ]
	第 8 回	サービス産業の成長(VC07)、サービスコスト(VC08)、サービスコストや需要者の行動について説明する。特に、金銭としてのサービスコストと、金銭としてではないサービスコストについて説明する。またサービス需要者の行動について、その代替案がある場合や、混雑している時の心理について解説する。	[録]
	第 9 回	サービスエコノミクスについて説明し、グループ演習を実施する。特に平日と休日に関する価格やサービスの価値、財としてのサービスの取引に関する概念、およびそれらの事例を説明するとともに、与えられた題材についてグループで討議する。	[ハ]
	第 10 回	サービスの事例と拡張(VC09)、サービスの価格(VC10)：サービスのコンポーネント化や拡張について説明する。サービスの価格とダイナミックプライシングについて理解する。とくに、差別価格やイールドマネジメントについて説明する。さらに、ダイナミックプライシングについて、需用量や供給量による動的な価格変化の事例を説明する。	[録]
	第 11 回	サービスのコンポーネント化やサービスの価格について、グループ演習により理解を深める。サービスを部品として組み合わせた場合に発生するあらたなサービスについて、その価値のレベルや収益が得られるかについて検討する。	[ハ]
	第 12 回	サービス品質の分析(VC11)、サービスクリティギャップとサービスプロフィットチェーン(VC12)：サービスクオリティギャップとサービスプロフィットチェーンについて説明する。また、サービスクオリティについて、どのように顧客が知覚するかを解説する。さらに、従業員のモチベーションを含めた、事業におけるロイヤルティ向上の理論について解説する。	[録]
	第 13 回	サービス提供のプロセスについてフロントステージや従業員の望ましい対応、サービス知覚に関する内在的手がかりと外在的手がかり、および顧客苦情申立行動に関して、倫理面価値面での失敗の例について、グループワークを通して深く理解する。	[ハ]
	第 14 回	顧客経験と市場の理解(VC13)、カスタマーロイヤルティ(VC14)：顧客の意思決定プロセスとカスタマージャーニーマップについて説明する。さらに、顧客ロイヤルティ戦略について説明する。特に、良い売り上げと悪い売り上げについて説明し、それがどのように顧客ロイヤルティに関係しているか検討する。さらに、継続的に顧客ロイヤルティを高めることができる方策について検討する。	[録]
	第 15 回	サービスを提供するビジネスについて、具体的な業種をグループごとにとりあげ、カスタマージャーニーマップを描き、売り上げ増加が見込める 2～3 のサービスや商品のバンドルを提案し、価格を検討する。さらに、予想外価値への感動を生むサービスを提案することで、事業の価値について理解する。	[ハ]
	試験	最終試験：本科目の理解度を評価するために最終試験を実施する。 (試験の方法は、別途説明する)	[ハ]
成績評価	次の 2 つのポイントで評価する(合計 100 点満点)。 ・ レポート演習 ・ 最終試験		
教科書・教材	適宜 LMS で配布する。		
参考図書	<ul style="list-style-type: none"> ・ R. P. フィスク、S. J. グローブ、J. ジョン、「サービス・マーケティング入門」、法政大学出版局、2005 ・ クリストファー・ラブロック、ローレン・ライト他、「サービス・マーケティング原理」、白桃書房、2002 ・ 小宮路 雅博、「サービス・マーケティング」、創成社、2012 ・ 近藤隆雄、「サービス・マーケティング」、生産性出版、2010 ・ 諏訪 良武、北城 悟太郎、「顧客はサービスを買っている」、ダイヤモンド社、2009 ・ 山本昭二、「新装版 サービス・クオリティーサービス品質の評価過程」、千倉書房、2010 ・ 山本昭二、国枝 よしみ他、「サービスと消費者行動」、千倉書房、2020 ・ ダン アリエリー、「予想どおりに不合理：行動経済学が明かす「あなたがそれを選ぶわけ」」、早川書房、2013 ・ ダン アリエリー、「不合理だからうまくいく：行動経済学で「人を動かす」」、早川書房、2014 		

Ⅱ ビジネスシステム科目群

マネジメントシステム基礎特論

マネジメントシステム応用特論

統計・数理計量ファイナンス特別演習

地域経済分析特別演習

リーダーシップ特論

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	ビジネスシステム科目群	科目名 (英文表記)	マネジメントシステム基礎特論 Basic Management Systems			教員名	板倉 宏昭

概要	経営学・経営戦略論を学ぶうえで、必要と考える考え方を解説し、基本的理解に重点を置く。経営に関する基本概念のうち、市場、組織及び地域を巡る基本的な考え方を中心にまとめる。公判では経済的アプローチを用いて講師の米国ビジネススクールの経験を踏まえて、MBA での伝統的な考え方と対比しながら、展開するように心がける。事例を取り入れながら客観的に解説し、現実の社会において経営学・経営戦略論が果たす機能を具体的に理解する。		
目的・狙い	<p>この授業では、ビジネスに関する基本的な概念を理解し、経営に関する関心を深める。また、実証分析に関する方法を学ぶ。経営学と経営戦略論に関わる基本的な考え方を検討することで、これらの理論が、経営実務においてどのように有効か、妥当かを、自分の実務に照らして検証する。</p> <p>1-2-3・社会マーケット視点を獲得できる。・社会／マーケット視点から、技術をビジネスに結び付けられる。（レベル 3:自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。）</p> <p>2-3-3・新しいものや本質的なものを見抜くことができる。新しいものや本質的なものを活用できる。（レベル 3:自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。）</p> <p>3-2-3・必要な財務知識を獲得できる。・財務知識を用いて予算管理できる。（レベル 3:自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。）</p> <p>4-1-4・将来像（ビジョン）を描ける。・将来像を描き、それを具体化できる。（レベル 4:単独で行うことができる。）</p> <p>4-2-3・環境スキャニングができる。・環境スキャニングを通して、革新的なシナリオ構築ができる。（レベル 3:自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。）</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし。 ・ケース討議には、積極的な取り組みが求められる。 		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・企業経営と経営戦略に関して説明できる。 ・企業経営と経営戦略が果たす機能を具体的に理解する。 ・事例について、経営戦略の基本的な考え方を使って、企業戦略や事業戦略の策定や実証分析を行うことができる。 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・経営戦略への関心を深める。 ・企業経営と経営戦略に関する基本的な概念を理解し、説明できる。 ・実証分析に関する方法を理解する。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	○	
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・予習：教科書を読む。教科書の問題集とケースを事前に解くことが望ましい。 ・復習：学んだ部分を中心に、教科書、教科書の問題集、ケースを読み返す。 		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<ul style="list-style-type: none"> ・企業経営・事業展開で必要とされる経営戦略の基本的理論構成とその体系、経営思想、経営計画、事業戦略構築、組織戦略等を学ぶ。また、経営・事業の戦略の構築・実行・評価のための枠組み・手法を修得する。 ・教科書を用いた解説、問題演習、ケース討議の順番で進める。 ・ケースは、教科書のショートケースを中心とする。3人～5人程度のグループで討議し、発表する。 		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	オリエンテーション、授業の進め方、経営の基本視点、経営学の意義（経営学の定義、企業活動と経営学・経営戦略）	[ハ]
	第2回	米国の経営学・経営戦略論の流れ、経営学の性質、経営学上の人間観（限定された合理性）、企業の目標（利潤最大化説、複数目的説、ステークホルダー志向）、コストリーダーシップ戦略、差別化戦略、集中化戦略の3つの経営の基本戦略、競争優位性、市場と組織の競争優位の源泉、理念・ビジョン、経営戦略の構造、戦略の策定。	[録]
	第3回	ケース討議（キャノン）	[ハ]
	第4回	コーポレート・ガバナンス、経営責任、企業の社会的責任、経営学のデザイン志向、経営学のデザイン志向、ビジネスモデルデザイン（教科書 9.5）、資本コスト、WACC、MM 定理。	[録]
	第5回	ケース討議（企業の社会的責任）	[ハ]
	第6回	3つの基本戦略（コストリーダーシップ戦略、差別化戦略、集中化戦略）、バリューチェーンの支配、コスト優位、差別化）、分析の手法（歴史分析、マクロ環境分析、業界分析、SWOT 分析、プロダクト・ポートフォリオ・マネジメント（PPM）、製品ライフサイクル（PLC）、ケース討議（地域振興）	[録]
	第7回	ケース討議（冷凍食品業界）	[ハ]
	第8回	市場と経営：競争優位の源泉である市場に関する考え方を扱う。PIMS 研究、市場構造と経営（市場構造の種類、参入障壁と差別化、独占市場、寡占市場、独占的競争市場、完全競争市場）、コスト・リーダーシップ戦略（規模の経済、規模の経済の源泉、規模の経済の限界、範囲の経済、経験や学習による優位、デファクトスタンダード、スイッチングコスト市場とロックイン）、ケース討議（ロックインの事例） 市場と経営：競争優位の源泉である市場に関する考え方を扱う。ブランド市場構造と経営、コスト・リーダーシップ戦略、市場支配力に対する戦略	[録]
	第9回	ケース討議（鉄鋼）	[ハ]
	第10回	競争優位の源泉である組織に関する考え方を扱う。具体的には組織構造（官僚制組織、機能別組織、事業部制組織、マトリックス組織、プロジェクト組織、インフォーマル組織）、プロセス、経営資源などである。	[録]
	第11回	ケース討議（自己組織の分析）	[ハ]
	第12回	組織体と従業員の関係を示す組織コミットメントについて代表的な考え方を理解する。マネジメントにとっていかにコミットメントを確保するのか検討する。	[録]
	第13回	ケース討議（組織コミットメント分析）	[ハ]
	第14回	優れたリーダーを雇用するためのリーダーシップ理論を検討する（マネジメントとリーダーシップ、特性アプローチ、行動アプローチ、コンティンジェンシー・アプローチ）、リーダーシップと関連して権限の三原則について権限受容説、権限法定説、権限職能説などを検討する。マズローの欲求段階説、シャインのキャリアアンカー、知識マネジメントを解説する。	[録]
	第15回	ケース討議（リーダーシップ自己分析） ケース討議（キャリアアンカー自己分析）	[ハ]
	試験	教科書にある問題をよく復習しておくこと	[ハ]
成績評価	グループレポート・発表 15%、個人レポート 25%、筆記試験 50%、授業への貢献度 10% ※グループレポート・発表の評価は、原則としてグループ内のメンバーで同じ評価とする。 ※授業への貢献度は、単なる出席点ではない。		
教科書・教材	板倉宏昭『新訂 経営学講義』勁草書房 2017 年		
参考図書	板倉宏昭・石丸亜矢子『地域バリューチェーン持続可能な地域を創るー』勁草書房 2021 年 Porter, M. E., Competitive Strategy, The Free Press, 1980 (土岐他訳『競争の戦略』ダイヤモンド社, 1982) Barney, J. B., "Is Sustained Competitive Advantage Still Possible in the New Economy?", 2001(岡田監訳「リソース・ベースト・ビュー」『DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』May, 2005, 78-87 頁) 板倉宏昭, ケースブック地方発企業の挑戦, 税務経理協会, 2005 板倉宏昭他. ネットワークが生み出す地域力, 白桃書房, 2008 Alexander Osterwalder & Yves Pigneur, Business Model Generation -A Handbook for Visionaries, Game Changers, and Challengers, Wiley, 2010 (小山龍介訳『ビジネスモデルジェネレーションービジネスモデル設計書』翔泳社, 2012)		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	ビジネスシステム科目群	科目名 (英文表記)	マネジメントシステム応用特論 Applied Management Systems			教員名	板倉 宏昭

概要	経営を学ぶうえで、必要な考え方を復習したのちに、国際経営、地域ビジネス、イノベーション、デジタル化に関する概念を解説する。地域ビジネスについては、地域価値連鎖からも論じる。マネジメントシステム基礎特論の各論に相当する。		
目的・狙い	1.経営戦略への関心を深める。 2.企業経営と経営戦略に関する基本的な概念を理解する。 3.地域ビジネス、国際経営、イノベーション、デジタル化と実証分析に関する方法を理解する。 1-1-3 事業化の提案から事業設計・構築にいたる様々な業務を自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。(レベル3:自分の専門領域を中心に単独で行うことができる。) 1-2-4・社会／マーケット視点を獲得できる。・社会／マーケット視点から、技術をビジネスに結び付けられる。(レベル4:単独で行うことができる。) 2-2-4・技術を探し入手することができる。・技術を精査した上で、取捨選択して自分のものにできる。(レベル4:単独で行うことができる。) 3-1-4・必要な経営資源の獲得ができる。・経営資源の獲得し、それを開発できる。(レベル4:単独で行うことができる。) 3-3-4・必要なリーダーシップを発揮できる。・リーダーシップを発揮し、それを用いて運営組織できる。(レベル4:単独で行うことができる。) 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	・特になし。 ・ケース討議には、積極的な取り組みが求められる。		
到達目標	上位到達目標		
	1.経営戦略について説明できる。 2.企業経営と経営戦略に関する基本的な概念を実践できる。 3.国際経営、イノベーション、デジタル化、地域ビジネスに関する方法を実践できる。		
	最低到達目標		
	1.経営戦略への関心を深める。 2.企業経営と経営戦略に関する基本的な概念を理解する。 3.国際経営、イノベーション、デジタル化、地域ビジネスに関する方法を理解する。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	○	
授業外の学習	・レポート、課題が指示された場合は、その課題に取り組み、期日までに報告すること。 ・教科書を予習・復習すること。		
授業の内容	講義は教科書を利用して行う。 実際に行う講義の順序・内容は変わる可能性がある。 戦略については、事例を基に議論を行う。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	本講義の概要の解説、俯瞰的な講義を行い、受講するにあたっての心構えについて説明する。 経営の基本視点、分析の手法、市場と経営、組織と経営。	[ハ]
	第2回	日本的経営（ネオ資本主義、生産システム、多能化、不完全な分業、知的熟練、双対原理、競争と日本企業）を米国や欧州の企業システムと比較して理解する。日本の企業システムを「ネオ資本主義」とも呼ぶ特徴を理解する。日本的経営の起源、今後の日本的経営、日本的経営の起源として戦後改革説、民族性連続仮説、1940年体制説が挙げられる。日本的経営のメリット、デメリットを理解し外国との経営システムとの比較に基づき今後の経営システムについて考える。	[録]
	第3回	ケース討議（今後の日本的経営について述べよ）	[ハ]
	第4回	国際経営（世界市場のセグメンテーション、多国籍企業の組織モデル、異文化マネジメント） 多国籍企業モデルとしてパートレット・ゴシャール（マイケル・ポーター）や発展モデルやIRを用いる異文化マネジメントとしてのホフステッドのモデルを扱う。	[録]
	第5回	ケース討議（日産）	[ハ]
	第6回	イノベーションと経営について（社会－技術システム論、イノベーションによる競争優位、金融サービス業のイノベーション、イノベーションのジレンマを検討する。さらに、ドミナント・デザイン、プロダクト・イノベーションとプロセス・イノベーション、革新的なイノベーションの出現について（Sカーブ）、オープン・イノベーション、擦り合わせ統合能力）、技術商業化マネジメント（MTC）を検討する。	[録]
	第7回	ケース討議（擦り合わせ統合能力）	[ハ]
	第8回	地域と経営について学習する。具体的には地域コミットメント、地域価値連鎖、外部力（ヨソモノ）と内部力（ジモティ）の新結合、3S(サイト・スペシフィック・ストーリーテリング) などである。馬路村の事例。	[録]
	第9回	ケース討議（徳島県神山町ケース）	[ハ]
	第10回	第8回に続いて、地域と経営について学習する。具体的には地域コミットメント、地域価値連鎖、外部力（ヨソモノ）と内部力（ジモティ）の新結合、3S(サイト・スペシフィック・ストーリーテリング) などである。神山の事例や東京都港区の事例を取り上げる。	[録]
	第11回	ケース討議（都市部の中の地域性）	[ハ]
	第12回	情報通信技術の進展と市場構造。伝統的な通説から、インターネットを中心とする情報技術の市場構造への影響を検討する。情報技術の高度化と組織について検討する。デジタル時代であるからこそ組織力に依存性をいう「IT 組織力依存論」について議論する。	[録]
	第13回	第12回の続きとケース討議（デジタル時代の組織コミットメント）。	[ハ]
	第14回	AI(人工知能)の可能性、AIの特性、AIと日本企業、AIと地域ビジネスについて検討する。 ブロックチェーンあるいは分散型台帳技術の可能性について検討する。 分散自律型企業と呼ばれる小企業や個人のビジネスの可能性について検討する。	[録]
	第15回	調査研究(研究の計画、論文の基本構造、研究対象の選び方、ケース・スタディ、調査票（アンケート）、データの測定水準、多変量解析の選択、言葉使い(ワーディング)、グラフ表現、モデルの重要性、二次分析、インタビュー、インタビューの種類、インタビューの注意事項)、まとめ。	[ハ]
	試験	教科書のケースや問題集を復習すること。	[録]
成績評価	課題（レポート、演習）40%、試験（筆記）40%、授業への貢献度20%を総合的に評価する。 ※授業への貢献度は、単なる出席点ではありません。		
教科書・教材	板倉宏昭『新訂 経営学講義』勁草書房 2017		
参考図書	板倉宏昭『デジタル時代の組織設計』白桃書房 2009		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	ビジネスシステム科目群	科目名 (英文表記)	統計・数理計量ファイナンス特別演習 Statistical and mathematical metrology financing		教員名	三好 祐輔	

概要	<p>この講義は、計量経済学の基本を習得することが目的である。計量経済学とは、統計学的手法を用いて、観察可能な経済データからその発生メカニズムを経済理論に基づいて推測する学問である。経済現象を数理的及び定量的に分析することによって、現実の社会現象に関する理解が深まる。また、現代社会のさまざまな分野において政策的課題や実践的な問題の解決に応用することもできる。それ故、社会科学の学習において、計量経済学の知識は必要不可欠のものである。この講義では、統計学で学んだ知識をもとに、現実の経済・経営に関する統計データを用いた実証分析の手法を学ぶ。具体的には、観測データの集約方法を解説し、複数の変量間の関連性を、回帰や相関といった概念を用いて考察できるようになることを目指す。</p>
目的・狙い	<p>統計学と計量経済学の基礎と標準的な分析手法を身に付けることが本授業の目的である。このため、次の項目を重点的に学ぶ。基礎的な知識（計量経済学の基礎）の習得をし、その後に統計ソフトを扱う内容になっている。受講者は最終的には課題実習を完成できるようになることを目指す。偶数回の講義では、統計学の基礎を復習するとともに計量経済学で用いられる線形回帰分析の基礎を学ぶ。具体的には、一般化線形回帰分析と、実際のデータ分析に有用な手法として、質的従属変数、切断・検閲された従属変数の場合についての適切な分析手法（計量分析の理論）を学ぶ。一方、奇数回(第15回を除く)では、講義担当者が修士課程の時に履修した、時系列分析を得意とするSTATAという統計解析ソフトを用い、現実の様々な場面で応用できることを目標とする。これは、実証研究のためのデータの入手・加工方法から、統計解析ソフトを用いた分析方法までの解説を行い、受講生には統計解析ソフトを用いて将来は実習を行えるようになることを求める。</p> <p>第1回 データの加工と整理① 第2回 応用計量経済学（1） 第3回 データの加工と整理② 第4回 応用計量経済学（2） 第5回 単回帰モデル 第6回 応用計量経済学（3） 第7回 重回帰モデルとダミー変数を含む回帰 第8回 応用計量経済学（7） 第9回 同時方程式モデルと二段階最小二乗法 第10回 応用計量経済学（10） 第11回 パネル分析 第12回 応用計量経済学（11） 第13回 2値応答モデル 第14回 総括 第15回 試験 第16回 予備日</p> <p>修得できる知識単位： <1-2-3>・社会/マーケット視点を獲得できる。・社会/マーケット視点から、技術をビジネスに結び付けられる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） <2-1-4>・リファレンスを探し、入手することができる。・リファレンスを精査した上で、取捨選択して自分のものにできる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） <2-3-4>・新しいものや本質的なものを見抜くことができる。・新しいものや本質的なものを活用できる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） <3-2-3>・必要な財務知識を獲得できる。・財務知識を用いて予算管理できる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） <4-2-3>・環境スキャニングができる。・環境スキャニングを通して、革新的なシナリオ構築ができる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p>
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>「地域経済分析特別演習」「マネジメントシステム基礎特論」など、社会科学を学ぶうえで必要な考え方を事前知識として知っておくことが望ましい。</p>
到達目標	<p>上位到達目標</p> <p>(1)計量経済学の分析手法を用いて、現実のデータから規則性を発見できる。 (2)データ分析を通して、推定式の持つ経済学的な解釈ができる。</p> <p>最低到達目標</p> <p>(1)計量分析に関する関心を高める。 (2)実証分析に関する知識を理解する。</p>

授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	教室または遠隔での出席を求め、双方向で多方面に行われる議論や討論、質疑応答を通じた学修（これには学修内容を深めるための個人ワーク及びグループワークが含まれる）
	録画視聴型	○	偶数回はビデオ視聴のみで受講とする。
授業外の学習	予習：配布された資料（たとえば、郵政研究所月報）を講義前に読んでおく。 復習：講義で学んだ内容を中心に、自らが関心を抱く分析手法について、講義で扱った技術を反復練習することが課される。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	講義は配布する資料を使用して行う。これらは、本学の授業支援システム(manaba)を活用する。イントロダクション、チーム討議、発表・クラス討議、解題講義から構成される。授業計画を以下に示すとおりである。受講生の興味、履修者数等から、内容及び順序は適宜調整する可能性がある。		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	本講義の目的と狙い、学修内容、課題、最終試験、評価方法について解説し、学生が講義選択の判断ができるようにする。	[ハ]
	第2回	ミクロデータの入手方法 データマイニングの基本的な考え方と、数理統計の分析への応用について解説をする。	[録]
	第3回	ログ（作業記録）の作成	[ハ]
	第4回	記述統計の出力	[録]
	第5回	Stata での単回帰分析	[ハ]
	第6回	単回帰モデルの推定	[録]
	第7回	Stata での最小二乗法及び一般化最小二乗法での推定	[ハ]
	第8回	重回帰モデルの推定	[録]
	第9回	Stata での重回帰分析	[ハ]
	第10回	前半のまとめ（最小二乗法と検定について）	[録]
	第11回	Stata でのダミー変数を含む回帰分析	[ハ]
	第12回	ダミー変数を含む回帰	[録]
	第13回	データセット作成の復習	[ハ]
	第14回	2 値応答モデルの推定	[録]
	第15回	Stata での 2 値応答モデル	[ハ]
	試験	本講義で学修した Stata による最小二乗法と 2 値応答モデルについて、関連 知識・スキルに関する内容の試験を実施する。	[ハ]
成績評価	次のポイントで評価する(合計 100 点満点) 1, 講義への参画度 20 点 2, レポート 60 点：レポート内容を評価 3, 最終試験 20 点：講義終了後に、これまで獲得した知識・スキルを総合的に評価		
教科書・教材	特になし。配布資料としてサーバー上にアップして提供する。		
参考図書	Ernst R. Berndt(1991)「The Practice of Econometrics: Classic and Contemporary」 Jeffrey M. Wooldridge, Introductory Econometrics: A Modern Approach, 5thed., South-Western Cengage Learning, 2013 縄田和満『TSP による計量経済分析入門』(朝倉書店) 和合肇・伴金美『TSP による経済データの分析』第2版(東京大学出版会)		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	ビジネスシステム科目群	科目名 (英文表記)	地域経済分析特別演習 Regional economic analysis			教員名	三好 祐輔

概要	現代経済理論は、個々の経済主体の行動を中心に分析を進めるミクロ経済理論と、一国の経済全体を一つのものとして分析を進めるマクロ経済理論に分けることができる。ミクロ経済理論とは、消費者や生産者などの個々の経済主体の行動原理を分析し、その上で市場のメカニズムによって達成される資源配分の性質を明らかにするものである。また、マクロ経済理論とは、投資や消費、雇用などの一国の経済全体の集計量を中心に、これらの相互関係を分析するものである。この講義では、特にミクロ経済学の基本的な理論を説明する。その際、経済理論、数量分析手法、を織り交ぜながら弾力的に進める。本講義では、受講生の理解度を確認しながら、データ分析の実習を行って実践力を養う予定である。
目的・狙い	<p>経済経済学の基礎と標準的なデータ分析を行う際に身に付けることの必要な技法を学ぶことが本授業の目的である。このため、次の項目を重点的に学ぶ。まず、第1回と第2回の基礎的なミクロ経済学の知識の習得は、実証分析を行う際に留意する内容になっている。その知識を踏まえて、第3回以降は、実証分析を行う際に必要なテクニカルな内容となっている。そのため、受講生は、統計ソフトを扱える基礎的な技能を修得していることが望ましい。同様に、第9回と第10回では、基礎的なマクロ経済学の知識の習得をし、それ以降は実証分析を行う際に必要となる検定の方法について説明する内容になっている。また、第10回と第11回では上級者向けに対し、非常勤講師に依頼し、経済学の理論に基づいたデータ分析の見本を紹介する予定になっている。受講生に対し統計ソフトを用いて、第15回の総括の際には課題の提出を求める予定である。具体的な内容は以下のとおりである。</p> <p>第1回 需要と供給について 第2回 消費者余剰と生産者余剰 第3回 実証分析に用いるデータの加工 第4回 統計ソフトに取り込む 第5回 記述統計の確認 第6回 需要関数の推定と単回帰分析 第7回 需関数の推定と重回帰分析 第8回 供給関数の推定と推定後の検定 第9回 Sargan テスト及び識別性条件 第10回 貿易が富を増やすー比較優位 第11回 地域経済の実証分析の紹介① 第12回 地域経済の実証分析の紹介② 第13回 回帰分析結果表の作成 第14回 二標本検定 第15回 総括 第16回 最終試験</p> <p>修得できる知識単位</p> <p><1-2-4>・社会/マーケット視点を獲得できる。・社会/マーケット視点から、技術をビジネスに結び付けられる。(レベル4:単独で行うことができる)</p> <p><2-1-4>・リファレンスを探し、入手することができる。・リファレンスを精査した上で、取捨選択して自分のものにできる。(レベル4:単独で行うことができる)</p> <p><2-3-4>・新しいものや本質的なものを見抜くことができる。・新しいものや本質的なものを活用できる。(レベル4:単独で行うことができる)</p> <p><4-1-4>・将来像(ビジョン)を描ける。・将来像を描き、それを具現化できる。(レベル4:単独で行うことができる)</p> <p><4-3-4>・新たな関係構築を築くことができる。・新たな関係構築を築き、調整・牽引できる。(レベル4:単独で行うことができる)</p>
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	「数理計量ファイナンス特別演習」、「マネジメントシステム基礎特論」など、経済学を学ぶうえで必要な考え方を事前知識として知っておくことが望ましい。
到達目標	上位到達目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・需要と供給に基づいた市場の効率性から政策評価ができる。 ・需要と供給の背景にある経済主体の意思決定分析を理解できる。 ・市場が果たす役割と限界について、モデル(概念やグラフ等)を用いながら説明することができる。
	最低到達目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・需要と供給に関する知識を身に付ける。 ・経済学に関する興味を抱く。

授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	教室または遠隔での出席を求め、双方向で多方面に行われる議論や討論、質疑応答を通じた学修（これには学修内容を深めるための個人ワーク及びグループワークが含まれる）
	録画視聴型	○	ビデオ視聴のみで受講 授業外の学習サーバーにアップロードされた講義資料をダウンロードして予習・復習をすること。課題が出ている場合には、期限までに課題を提出すること。
授業外の学習	予習：教科書を講義前に読んでおく。 復習：講義で学んだ内容を中心に、自らが関心を抱くテーマについて、講義で扱った技術を反復練習することが課される。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	教科書の一部を PPT でアップさせるので、本学の授業支援システム(manaba)を活用する。イントロダクション、チーム討議、発表・クラス討議、解題講義から構成される。授業計画を以下に示すとおりである。受講生の興味、履修者数等から、内容及び順序は適宜調整する可能性がある。		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	本講義の目的と狙い、学修内容、課題、最終試験、評価方法について解説し、学生が講義選択の判断ができるようにする。	[ハ]
	第 2 回	データの加工・整理:Stata を用いて実証分析を実演する。	[録]
	第 3 回	単回帰モデルの推定	[録]
	第 4 回	Stata での単回帰分析	[ハ]
	第 5 回	線形同時方程式モデル	[録]
	第 6 回	Stata での需要・供給モデル	[ハ]
	第 7 回	2SLS における係数の仮説検定	[録]
	第 8 回	Stata での 2SLS 推定	[ハ]
	第 9 回	パネルデータ	[録]
	第 10 回	Stata での固定効果モデルの LSDV 推定	[ハ]
	第 11 回	固定効果モデルの Within 推定	[録]
	第 12 回	Stata での固定効果モデルの Within 推定	[ハ]
	第 13 回	ウー・ハウスマン検定	[録]
	第 14 回	地域における企業分析の紹介	[録]
	第 15 回	Stata での 2 SLS の実証分析解説	[ハ]
	試験	本講義で学修したパネル分析と操作変数法等について、関連 知識・スキルに関する内容の試験を実施する。試験は manaba 上でのオンライン実施とする。	
成績評価	次のポイントで評価する(合計 100 点満点)」 1, 講義への参画度 20 点 2, レポート 60 点：レポート内容の評価 3, 最終試験 20 点：講義終了後に、これまで獲得した知識・スキルを総合的に評価		
教科書・教材	マンキュー入門経済学 (東洋経済新報社), (第 2 版) 2014 マンキュー経済学 1 ミクロ編 (東洋経済新報社), (第 2 版) 2014 第一回、第二回、第九回、第十回の講義が対象。		
参考図書	福田 慎一, 照山 博司 マクロ経済学・入門 第 5 版 (有斐閣アルマ) 西村和雄 ミクロ経済学入門〔第 2 版〕 岩波書店		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	ビジネスシステム科目群	科目名 (英文表記)	リーダーシップ特論 Leadership			教員名	嶋津 恵子

概要	<p>毎回の授業は、講義と実習（拡張版ケーススタディ）の構成を取る。</p> <p>近年特に高度成長期以降、日本の産業界では協調性ととともにリーダーシップの重要性が説かれ、特にその基本要素として積極性（アグレッシブ）がもてはやされてきた。一方、欧米では、15 年ほど前から、アサーティブの重要性が注目され、リーダーシップに重要な要素とされている。これは、決して新しい発見ではなく、第二次世界大戦当時から、特に米国海軍でフォロワーシップカとして教育が徹底されてきている。</p> <p>この教本は、日本でも 防衛大学校で日本の国防の監部候補生らの教育に利用されている。</p> <p>本講義では、リーダーシップの基本に立ち返り、フォロワーシップに基づく社会的実用性の高いリーダーシップカの獲得を目指す。</p>		
目的・狙い	<p>目的 フォロワーシップに基づく社会的実用性の高いリーダーシップカに必要な知識と基本的な実践力の獲得</p> <p>狙い 自身が突出することによるリーダーシップではなく、他者を押し上げることによるフォロワーシップカがリーダーシップに直結することを実感し、現在の日本の産業界復興につながることを認識する。</p> <p>修得できる知識単位 企業活動 レベル4 実行実践力 レベル4 コミュニケーション力 レベル4 法規・基準・標準 レベル3 (支援活動) 人材育成・教育・研修 レベル4</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	何らかの組織活動に参加し、組織や小集団を牽引した経験があることが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	強力なフォロワーシップカを基盤とする実行力のあるリーダーシップカを発揮できる。		
	最低到達目標		
	リーダーシップカ醸成のために必要不可欠なフォロワーシップカの獲得に関し理解する。 また、最低限のフォロワーシップカを獲得し、実行することができる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	授業で指示された課題に取り組み、期限までに提出すること。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	本科目は、講義・議論及びグループワークから構成される。授業計画を以下に示す。グループ演習への積極的参加が求められる。なお、2 限目の実習に関し、本シラバスには、ほとんどの回で 2 回のロールプレイを行うとしているが、これは、2019 年度とほぼ同数かそれを下回る数の履修生であった場合である。		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	授業担当教員の経歴等紹介 授業のオリエンテーション 使用する教科書の紹介、授業の概要と特長の説明、評価方法の解説 昨年度の授業に対する履修生のみなさんの声	[ハ]
	第 2 回	教科書の構成の把握 第 1 章：リーダーシップの概念	[ハ]
	第 3 回	第 1 回小テスト 掲示板に掲載くださった記事の紹介と解説 前回の復習：第 1 章	[ハ]
	第 4 回	フォロワーシップカを基盤とするリーダーシップカを実践練習する準備 アクティブラーニングの代表例であるケーススタディの課題と利用 多角的な議論実践方法と基礎としての 6 hats thinking の利用	[ハ]

	第 5 回	第 2 回小テスト 第 1 回小テストレビュー 掲示板に掲載くださった記事の紹介と解説 第 2 章：心理学研究の歴史的背景 第 3 章：人間行動の研究における科学的方法	[A]
	第 6 回	実習：6 Hats Thinking を使ってみる その 1 伊豆大島ロケット打上イベントの意見対立事例	[A]
	第 7 回	第 3 回小テスト 第 2 回実施小テストレビュー 掲示板に掲載くださった記事の紹介と解説 第 5 回講義補足：客観的に自分を観る/知る 第 4 章：集団の構造と機能	[A]
	第 8 回	参考書「ケースで鍛える人間力リーダーシップ」の 第 1 部 リーダーシップの危機 の 第 1 章 リーダーシップ空回り症候群 から ケース 1 「リーダーは俺だ！俺についてこい！」を使って、 意見の提示を練習する。	[A]
	第 9 回	第 4 回小テスト 第 3 回小テストレビュー 掲示板に掲載くださった記事の紹介と解説 第 5 章：道義的リーダーシップ 第 6 章：“垂範指導”および“リーダーシップの賛否両論”	[A]
	第 10 回	参考書「ケースで鍛える人間力リーダーシップ」の 第 1 部リーダーシップの危機 の第 2 章 だから業績が向上しない から ケース 4 「『いつでも相談に来い』と言っ たって」を参照し、6 つの視点にたって、ロールプレーで発言する。	[A]
	第 11 回	第 5 回小テスト 第 4 回小テストレビュー 掲示板に掲載くださった記事の紹介と解説 第 7 章：有能なリーダーシップの人格的特徴 第 8 章：リーダーシップのダイナミックな特性	[A]
	第 12 回	2019 年コロナ禍の中で実際に発生した伊豆大島ロケット打上イベントの開催の可否を めぐる意見対立事例を題材にした第 2 回目の実習。 6 つの視点にたって効果的な質問を提示する練習を行う。	[A]
	第 13 回	第 6 回小テスト 第 5 回小テストレビュー 掲示板に掲載くださった記事の紹介と解説 第 9 章：その他の重要な成功要因 第 10 章：人間関係（重要箇所のみ） 第 11 章：カウンセリングと面接（重要箇所のみ） 第 12 章：規律と士気（重要箇所のみ）	[A]
	第 14 回	第 10 回で使用したケースを対象に、フォローアップを発揮する質問を 6 つの視点か らロールプレーで発言する。 特に黄色の視点を、効果的に利用することを試みる。	[A]
	第 15 回	第 7 回小テスト 第 6 回実施小テストレビュー 掲示板に掲載くださった記事の紹介と解説 授業全体総括	[A]
	試験	最終試験を行う。	[A]
成績評価	1. 知識を問う筆記式小テスト全 7 回： 70% 2. レポート/実習： 10% 3. 最終試験： 10% 4. 授業貢献（高品質自由レポート提出、高品質質問 他） 10% を基準として総合的に評価する。		
教科書・教材	リーダーシップ: アメリカ海軍士官候補生読本、アメリカ海軍協会、生産性出版社		
参考図書	ケースで鍛える 人間力リーダーシップ、保田健治、ダイヤモンド社 Six Thinking Hats: An Essential Approach to Business Management, Edward De Bono		

Ⅲ 事業設計イノベーション科目群

製品開発組織特論

技術経営戦略特論

エマージング・テクノロジー特論

事業方向性設計特論

事業方向性設計演習

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	事業設計イノベーション科目群	科目名 (英文表記)	製品開発組織特論 Product Development Organization Management			教員名	吉田 敏

概要	<p>有形・無形の製品を創り出す各企業において、その組織的能力が、どのような特性があり、どのように活かされているのかということについて、これまでは議論が深めに進んできたとは言いがちである。</p> <p>本講義では、これまでの組織論に関する知識を供与しながら、有形・無形の製品を創る企業の特性を軸にしつつ、社会の中の実践的な企業活動や組織活動に応用できるような考え方を修得していくものである。</p>		
目的・狙い	<p>現在、様々な有形・無形の製品をつくる国内企業が、成長面からの閉塞感を感じ、短期的な対処のために、自らの強みを切り捨てるような判断をしている可能性が考えられる。それぞれの組織には独自の組織的能力が存在しているが、それを理解していくのには論理的な考え方が必要である。しかし、実際の社会活動の中では、それぞれの組織の中の構成員が、組織内部から組織的能力の特性を理解することは困難な面がある。</p> <p>本講義の目的は、有形・無形の製品をつくる組織において、どのような組織的能力を保持しているのか、また、その組織的能力を活かすのにはどうすればよいのか、実践的な考え方や判断力を持つための資質を育成することが、本講義の目的となる。</p> <p>修得できる知識単位：</p> <p>1 問題解決力</p> <p>1-2 環境分析力（レベル3） 外部環境を把握する力（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p> <p>1-3 事業構想力（レベル3） 新しいビジネスモデルを考案する力（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p> <p>2 知識獲得力</p> <p>2-3 活用力（レベル3） 収集した情報を活用する力（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p> <p>3 マネジメント能力</p> <p>3-2 管理力（レベル4） マネジメントのための管理推敲を行う力（レベル4：単独で行うことができる）</p> <p>3-3 リーダーシップ力（レベル3） リーダーとして組織を統制し方向性を見極める力（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	特になし		
到達目標	<p>上位到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・有形・無形の製品をつくる組織における、組織的能力を把握するために理解力を修得すること。 ・組織的能力の特性を活かすための方向性を指し示す判断力を得ること。 <p>最低到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各組織が、それぞれ独自の組織的能力を持っていることを理解すること。 ・組織的能力が、経済的活動に影響を及ぼしている傾向を理解すること。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	講義の内容を、教科書、参考書により予習、復習すること。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>講義は毎回配布する資料を使用して行う。資料は独自にこの講義のために作成するもので、第1回から第15回まで連続したものである。毎回授業の始めに重要ポイントを記述させる小レポートの課題を出し、終了時に回収する。このレポートの内容から把握できる受講者の理解度、問題意識の傾向などは、その後の講義内容に反映させていく。また、毎回できるだけグループ単位の議論を行い、自分の考え方や理解度を、受講生がお互いに確認できるようにしていく。</p> <p>但し、本講義のテーマである実践的な社会活動は、日々急激な変化や議論がなされており、必要がある場合は積極的に講義内容を最新の情報に当てはめるよう、変更していく場合がある。</p> <p>(ただし、コロナ禍への対応で、Meet などによる遠隔講義としつつ、内容が一部変更となることが考えられる。)</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	講義概要の説明 これまでの、モノやサービスを創る企業が、どのような強みや特性を持ってきたかを、また、どのような弱みや課題を抱えてきたかを、考えるための知見の重要性を概説し、講義全体の説明を行っていく。	[ハ]
	第2回	ものづくり組織の特性① 有形の製品をつくる産業における組織の特性と傾向を、これまでの事例を取り上げながら学んでいく。特に、国内企業の組織特性を理解しながら、事業の実践に対する重要な側面を理解していく。	[ハ]
	第3回	ものづくり組織の特性② 第2回に引き続き、有形の製品に関する産業分野、製品分野の組織について学ぶ。特に、産業領域特性、製品領域特性の影響を考えていく。	[ハ]
	第4回	ものづくり組織の特性③ 第3回に引き続き、有形の製品に関する産業分野、製品分野の組織について、事例を取り上げながら、総括的な視点から学んでいく。	[ハ]
	第5回	グループ議論① ものづくり組織の特性について、具体的な対象を絞りながら、課題や今後の方向性を、グループ単位で議論していく。	[ハ]
	第6回	グループ議論② 第5回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。	[ハ]
	第7回	グループ議論③ 第6回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。特に、プレゼンテーションにまとめることを実践していく。	[ハ]
	第8回	グループプレゼンテーション① ここまでのグループ議論の内容を、グループ単位で発表する。また、質疑応答により、各発表内容について、発表者だけでなく、受講生全員で考え、知見の共有を進めていく。	[ハ]
	第9回	ことづくり組織の特性① サービスや情報など、無形の製品をつくる産業における組織の特性と傾向を、これまでの事例を取り上げながら学んでいく。特に、国内企業の組織特性を理解しながら、事業の実践に対する重要な側面を理解していく。	[ハ]
	第10回	ことづくり組織の特性② 第9回に引き続き、無形の製品に関する産業分野、製品分野の組織について学ぶ。特に、サービスや情報などを対象とした、産業領域特性、製品領域特性の影響を考えていく。	[ハ]
	第11回	ことづくり組織の特性③ 第10回に引き続き、無形の製品領域の組織の設計思想の理解に基づきながら、具体的な対象を取り上げ、組織の強みと弱みの理解を進めていく。	[ハ]
	第12回	グループ議論④ 無形の製品を対象とした、ことづくり組織の特性について、具体的な対象を絞りながら、課題や今後の方向性を、グループ単位で議論していく。	[ハ]
	第13回	グループ議論⑤ 第12回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。	[ハ]
	第14回	グループ議論⑥ 第13回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。特に、プレゼンテーションにまとめることを実践していく。	[ハ]
	第15回	グループプレゼンテーション② ここまでの組織に関する内容、対象製品分野に関する内容を、グループ単位で発表する。また、質疑応答により、各発表内容について、発表者だけでなく、受講生全員で考え、知見の共有を進めていく。	[ハ]
	試験	なし	
成績評価	・各講義の時間内に、講義内のポイントについて課題が出され、それを小レポートにまとめて提出する。(60%) ・第8回と第15回にグループ単位でプレゼンテーションを行う。(40%) (ただし、コロナ禍への対応で、Meet などによる遠隔講義としつつ、内容が一部変更となることが考えられる。)		
教科書・教材	・吉田敏編著、『技術経営 ―MOTの体系と実践―』、理工図書、2012年。		
参考図書	・藤本隆宏、野城智也、安藤正雄、吉田敏 著、『建築ものづくり論』、有斐閣、2015年。 ・前田正史、吉田敏 他共著、『Beyond Innovation 「イノベーションの議論」を超えて』、丸善プラネット株式会社、2009年。		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	事業設計イノベーション科目群	科目名 (英文表記)	技術経営戦略特論 Technology Management Strategy			教員名	吉田 敏

概要	<p>高度経済成長期前後を経て、日本は世界に誇るだけの様々な分野の技術力を持つようになった。しかし、近年、ものづくりの各産業で業績や将来の方向性に対して閉塞感が広がっている。この講義では、技術的な基盤を持ちつつ、実際に社会の中で製品やサービスを創っていく上で必要な戦略性を解説していく。特に、これまでに成功を収めてきた有形・無形の製品に関する企業や組織の活動に着目しながら、成功する製品開発行為の戦略に関する説明をしていくものである。</p>		
目的・狙い	<p>ここでは、技術経営分野を俯瞰的に把握すると同時に、戦略的に製品開発をするための基礎的な知識体系を説明していく。</p> <p>近年、国内の企業では、技術力が深まり高い品質の製品をつくることが出来ている傾向がある。しかし、その反面、ポリウムゾーンでは海外の企業に後れを取り、価格を抑えながら必要とされる確かな品質をつくることに苦戦していると考えられる。これまでは、とにかく品質を上げることのみが重要な課題として理解されてきた。しかし、多くの基盤技術が急激に発達する中、各製品の価値を高めることが品質面だけでない多くの要素に関する課題が見えてきたといえる。</p> <p>本講義では、実社会の企業活動の中で有形・無形の製品をつくるために、どのような考え方をすべきかについて考え、その戦略性に関する基礎知識を習得していくことを目的とする。</p> <p>1 問題解決力</p> <p>1-1 新結合力 (レベル3) 様々な課題を理解していく力 (レベル3: 自分の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p>1-3 事業構想力 (レベル4) 新しいビジネスモデルを考案する力 (レベル4: 単独で行うことができる)</p> <p>2 知識獲得力</p> <p>2-1 情報収集力 (レベル3) 情報を的確に収集する力 (レベル3: 自分の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p>2-2 技術分析力 (レベル3) 技術領域の特性を理解する力 (レベル3: 自分の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p>2-3 活用力 (レベル3) 収集した情報を活用する力 (レベル3: 自分の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p>3 マネジメント能力</p> <p>3-1 開発力 (レベル4) 製品等の開発におけるマネジメントを行う力 (レベル4: 単独で行うことができる)</p> <p>4 総合的企画力</p> <p>4-1 将来像構想力 (レベル4) 今後の外部環境・内部環境に関する考え方を基に事業を展開する力 (レベル4: 単独で行うことができる)</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	特になし		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・有形・無形の製品をつくる組織における、製品開発の戦略性に関する深い知見を身に着けること。 ・それぞれの産業における外部環境、内部環境の特性を理解し、実践的な活動に結びつける能力を得ること。 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・製品開発における、戦略の必要性に関し、十分に理解すること。 ・技術的な強みがある企業の、製品開発における強みと弱みに関する傾向を理解すること。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	グループ議論は、対面で行う。 (ただし、コロナ対策などで対面が難しい場合、Google Meet による遠隔でのグループ議論とする。)
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	○	講義は、時間的に自由度が高い録画視聴で行う。
授業外の学習	講義の内容を、教科書、参考書により予習、復習すること。		
授業の内容	<p>講義は毎回配布する資料を使用して行う。資料は独自にこの講義のために作成するもので、第1回から第15回まで連続したものである。毎回授業の始めに重要ポイントを記述させる小レポートの課題を出し、終了時に回収する。このレポートの内容から把握できる受講者の理解度、問題意識の傾向などは、その後の講義内容に反映させていく。また、毎回できるだけグループ単位の議論を行い、自分の考え方や理解度を、受講生がお互いに確認できるようにしていく。</p> <p>但し、本講義のテーマである実践的な社会活動は、日々急激な変化や議論がなされており、必要がある場合は積極的に講義内容を最新の情報に当てはめよう、変更していく場合がある。</p> <p>(ただし、コロナ禍への対応で、Meet などによる遠隔講義としつつ、内容が一部変更となることが考えられる。)</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	講義概要の説明 技術経営という概念について、概説を行う。また、その重要性について考えるための基盤的な知識と情報を理解していく。 その上で、本講義全体の概要の説明を行っていく。	[対]
	第2回	組織の設計思想の戦略的応用① アーキテクチャ概念（構成要素の相互依存性に基づく設計思想）を理解し、戦略的な活用に関する考え方を修得するために、基盤的な内容を学んでいく。	[録]
	第3回	グループ議論① アーキテクチャ概念の戦略的な事業への活用について、基礎的な考え方をまとめる。 その目的に基づき、グループ単位で議論していく。	[対]
	第4回	組織の設計思想の戦略的応用② 第2回に引き続き、アーキテクチャ概念の戦略的な活用に関する考え方を修得するために、基盤的な内容を学んでいく。特に、戦略に関する具体的な考え方を示し、その意味を理解していく。	[録]
	第5回	グループ議論② 第3回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。	[対]
	第6回	組織の設計思想の戦略的応用③ 第4回に引き続き、アーキテクチャ概念の戦略的な活用に関する考え方を学んでいく。 戦略的な活用の具体的な考え方を修得し、この概念の持つ可能性について考えていく。	[録]
	第7回	グループ議論③ 第5回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。 ここまでの内容を、グループによるパワーポイントと、個人のレポートにまとめる。	[対]
	第8回	ものづくりプロセスに基づく技術経営戦略① ものをつくる最も基盤的な様相から、これからの事業モデルを考えていくため、創るプロセスについて深く考えていく。このプロセスの考え方と理解が、全ての事業モデルの作成に与える影響をよく考えながら、実践に活かすことが出来る知見の構築の素地を作る。	[録]
	第9回	グループ議論④ ここまで学んだ全ての知識や考え方を活用しながら、実際の対象を絞り、実践的なビジネスモデルの構築に関する議論を、グループ単位で進めていく。	[対]
	第10回	ものづくりプロセスに基づく技術経営戦略② 第8回に引き続き、ものを創るプロセスについて深く考えていく。特に、国内企業による具体例を取り上げながら、重要な視点を出来るだけ正確に学んでいく。	[録]
	第11回	グループ議論⑤ 第9回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。	[対]
	第12回	ものづくりプロセスに基づく技術経営戦略③ 第10回に引き続き、ものを創るプロセスを考え、実践的な知見を身に着けていく。ここでは、複数の事業戦略的な考え方を学習し、これからの実践的なビジネスモデルの構築に活かすための基盤的な知識を修得し、実際の企業活動で実践的な活用ができるための知見を身に着ける。	[録]
	第13回	グループ議論⑥ 第11回に引き続き、受講生によるグループにて、議論を進めていく。	[対]
	第14回	まとめ 第12回目までの内容をまとめ直し、復習する。	[録]
	第15回	グループ議論③ グループ議論④から⑥までの内容を、受講生によるグループによって、議論を進めていく。 ここまでの内容を、グループによるパワーポイントと、個人のレポートにまとめる。	[対]
	試験	なし（各回のレポートとグループ発表内容により、評価される。）	[対]
成績評価	・各対面講義（第1回、第3回、第5回、第7回、第9回、第11回、第13回、第15回）の時間内に、録画講義の内容を含む小レポートを提出する。講義内のポイントについて課題が出され、それを小レポートにまとめて提出する。（60%） ・第7回と第15回に、グループ単位で、パワーポイントに議論の内容をまとめる。（40%） （ただし、コロナ禍への対応で、Meet などによる遠隔講義としつつ、内容が一部変更となることが考えられる。）		
教科書・教材	・吉田敏編著、『技術経営 ―MOTの体系と実践―』、理工図書、2012年。		
参考図書	・藤本隆宏、野城智也、安藤正雄、吉田敏 著、『建築ものづくり論』、有斐閣、2015年。 ・前田正史、吉田敏 他共著、『Beyond Innovation 「イノベーションの議論」を超えて』、丸善プラネット株式会社、2009年。		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	事業設計イノベーション科目群	科目名 (英文表記)	エマージング・テクノロジー特論 Emerging Technology Studies		教員名	廣瀬 雄大	

概要	本講義では、これまでの基盤的技術や応用技術の変化について俯瞰的に情報整理を行い、注視すべき企業の戦略について俯瞰的分析を行う。社会レベルで大きな影響を与える可能性のある技術的变化の捉え方について、演習を中心に知見を身につけていく。		
目的・狙い	<p>本講義の目的は、社会レベルで大きな影響を与える可能性がある技術的变化について、俯瞰的に理解をしていくために必要となる考え方や、認知手法の活用場面や活用方法を学ぶことである。具体的には、技術的变化の捉え方の理解を深めること、技術的变化の俯瞰的認知と分析における方法論を体得すること、である。</p> <p>1-2-4 社会、市場、事業、技術、経営資源といった多方面の環境からの視点が獲得できる。（レベル 4：単独で行うことができる）</p> <p>2-1-3 俯瞰的に情報整理を行う手法を獲得し、それを情報収集の際に使用することができる。（レベル 3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p> <p>2-3-3 俯瞰的認知手法を学修し、それを実践で活用することができる。（レベル 3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p> <p>3-1-3 講義と演習を通して学修することによって、必要となる経営資源を理解することができ、それを開発できる。（レベル 3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>前提知識は特に必要なし。</p> <p>Microsoft のワード、エクセル、パワーポイントの基本を扱えることが望ましい。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・技術的变化における基本的な考え方を理解して他者へ説明ができるレベル。 ・起業または企業内新事業において、技術的变化の俯瞰的な認知や分析を行うことができ、実践的なアウトプットができるレベル。 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・技術的变化における基本的な考え方を理解できるレベル。 ・技術的变化の俯瞰的な認知や分析における方法論を正確に理解し、実践的な活用場面や方法について理解できるレベル。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	教室または遠隔での出席を求め、双方向で多方面に行われる議論や討論、質疑応答を通じた学修（これには学修内容を深めるための個人ワーク及びグループワークが含まれる）
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<p>サーバーにアップロードされた講義資料をダウンロードして予習・復習をすること。</p> <p>課題が出ている場合には、期限までに課題を提出すること。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	講義は PPT の資料に基づいて行い、必要に応じて資料を配布する。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第 1 回	本講義のガイダンス 本講義の目的と狙い、学修内容、課題、最終試験、評価方法について解説し、学生が講義選択の判断ができるようにする。	[録]
	第 2 回	技術的変化の考え方と認知手法 産業レベルの技術的変化の基本的な考え方と、ロードマッピング思考を使った認知手法について解説し、第 15 回まで取り組むグループ決めをする。	[ハ]
	第 3 回	技術的変化の過去分析マップ作成に向けた計画 各グループでテーマの設定をしたうえで、産業レベルの技術的変化における過去分析マップ作成に向けた計画を各グループで立てる。	[ハ]
	第 4 回	技術的変化の過去分析マッピング (1) 産業レベルの技術的変化について、社会、市場、事業、技術、経営資源といった多方面の環境からの視点で過去分析マッピングを行う。	[ハ]
	第 5 回	技術的変化の過去分析マッピング (2) 第 4 回の続きを行い、産業レベルの技術的変化について、社会、市場、事業、技術、経営資源といった多方面の環境からの視点で過去分析マッピングを行う。	[ハ]
	第 6 回	要点整理マッピング 過去分析マッピングの結果に基づいて、産業レベルの技術的変化について、要点を整理するマッピングを行う。	[ハ]
	第 7 回	知識ギャップの抽出 これまでに進めてきた過去分析マッピングと要点整理マッピングの結果に基づいて、更なる理解と分析が必要と考えられる点について知識ギャップを抽出する。	[ハ]
	第 8 回	<中間プレゼンテーション> 各グループが進めてきた過去分析マッピングと要点整理マッピングについて、中間プレゼンテーションとして発表する。産業レベルの技術的変化と俯瞰的認知手法における役割と位置付けの理解を深めていく。	[ハ]
	第 9 回	戦略の俯瞰的分析の考え方 産業レベルの技術的変化における企業の戦略分析の考え方について解説する。	[ハ]
	第 10 回	戦略の俯瞰的分析 (1) 各グループで検討してきた技術的変化の過去分析マッピングと要点整理マッピングに基づいて、企業の戦略について俯瞰的分析と議論を行う。	[ハ]
	第 11 回	戦略の俯瞰的分析 (2) 第 10 回の続きを行い、各グループで検討してきた技術的変化の過去分析マッピングと要点整理マッピングに基づいて、企業の戦略について俯瞰的分析と議論を行う。	[ハ]
	第 12 回	戦略の俯瞰的分析 (3) 第 11 回の続きを行い、各グループで検討してきた技術的変化の過去分析マッピングと要点整理マッピングに基づいて、企業の戦略について俯瞰的分析と議論を行う。	[ハ]
	第 13 回	過去分析マップの総合的な考察のまとめ 各チームで検討してきた技術的変化の過去分析マッピング、要点整理マッピング、戦略の俯瞰的分析に基づいて、総合的な考察のまとめを各グループで行う。	[ハ]
	第 14 回	最終プレゼンテーションに向けた準備 中間プレゼンテーションで発表した内容と後半で行った戦略の俯瞰的分析結果について総合的に発表するために、最終プレゼンテーションに向けて準備を行う。	[ハ]
	第 15 回	<最終プレゼンテーション> 各チームで検討してきた技術的変化の過去分析結果と企業における戦略の俯瞰的分析を全体で発表し、産業レベルの技術的変化とロードマッピング思考を使った過去分析について総論を行う。	[ハ]
	試験	産業レベルの技術的変化と本講義で学修した過去分析マッピング等について、関連 知識・スキルに関する内容の試験を実施する。	
成績評価	以下の項目で評価を行う (合計 100 点) ・講義への参画度 50 点: 講義内演習、プレゼンテーションを評価 ・レポート課題 30 点: 数回のレポート内容を評価 ・最終試験 20 点: 講義終了後に、これまで獲得した知識・スキルを総合的に評価		
教科書・教材	教科書・教材は、サーバー上にアップロードした講義資料を提供する。		
参考図書	吉田敏、武市祥司、富田純一、ロバート・ファール、森下有、鎗目雅著、『技術経営—MOT の体系と実践』(理工図書社、2012 年) ロバート・ファール、クレア・ファルク、デービッド・プロバート著、『Roadmapping for Strategy and Innovation—Aligning Technology and Markets in a Dynamic World』(英国ケンブリッジ大学 Institute for Manufacturing (IfM)、2010 年) トゥグリル・ダイム、テリー・オリバー、ロバート・ファール著、『Technology Roadmapping』(World Scientific Publishing、2018 年)		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	事業設計イノベーション科目群	科目名 (英文表記)	事業方向性設計特論 Roadmapping for Technology Ventures			教員名	廣瀬 雄大

概要	本講義では、起業または企業内新事業の立ち上げに向けた事業戦略立案支援の方法論について、必要となる分析と議論のプロセスについて理解を深め、実践に必要な知見を、演習を中心に身につけていく。		
目的・狙い	<p>本講義の目的は、社会や市場、技術や経営資源などの変化の相互関係が、これから創り出される製品やサービスやシステムに大きな影響を及ぼす可能性があることを理解したうえで、起業・創業または企業内新事業の立ち上げに向けた戦略立案支援の方法論を学修することである。具体的には、ロードマッピング思考の理解を深めること、その方法論について演習を通して体得すること、である。</p> <p>1-1-3 戦略の見える化に関するグループ演習を通して新結合力が獲得できる。（レベル 3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p> <p>1-2-4 社会、市場、事業、技術、経営資源といった多方面の環境からの視点が獲得できる。（レベル 4：単独で行うことができる）</p> <p>1-3-3 戦略の見える化に関するグループ演習を通して事業構築力が獲得できる。（レベル 3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p> <p>2-3-4 戦略の見える化に関する方法を学修し、それを実践で活用することができる。（レベル 4：単独で行うことができる）</p> <p>4-1-3 戦略立案支援の中で取り扱うビジネスモデル分析を通して将来像構築力を獲得できる。（レベル 3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>前提知識は特に必要なし。</p> <p>Microsoft のワード、エクセル、パワーポイントの基本を扱えることが望ましい。</p>		
到達目標	<p>上位到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロードマッピング思考を使った事業戦略立案支援の方法論における基本的な考え方を理解して他者へ説明ができるレベル。 ・本講義で学修するアプローチを実施することができ、事業戦略立案へ直接活かすことができるレベル。 <p>最低到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロードマッピング思考を使った事業戦略立案支援の方法論における基本的な考え方を理解できるレベル。 ・本講義で紹介するアプローチを正確に理解し、活用方法や活用場面を理解しているレベル。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	教室または遠隔での出席を求め、双方向で多方面に行われる議論や討論、質疑応答を通じた学修（これには学修内容を深めるための個人ワーク及びグループワークが含まれる）
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<p>サーバーにアップロードされた講義資料をダウンロードして予習・復習すること。</p> <p>課題が出ている場合には、期限までに課題を提出すること。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	講義は PPT の資料に基づいて行い、必要に応じて資料を配布する。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第 1 回	本講義のガイダンス 本講義の目的と狙い、学修内容、課題、最終試験、評価方法について解説し、学生が講義選択の判断ができるようにする。	[録]
	第 2 回	ロードマッピングの基礎 ロードマップ策定・活用における基礎について学術面及び実践面の内容も含めて解説する。	[ハ]
	第 3 回	ロードマッピングの応用 ロードマップ策定・活用における応用について学術面及び実践面の内容も含めて解説する。	[ハ]
	第 4 回	ロードマッピング思考を使った事業戦略立案プロセス ロードマッピングの基礎と応用をふまえたうえで、ロードマッピング思考を使った事業戦略立案プロセスの全体と本科目で演習対象とする範囲を解説し、第 15 回まで進めていく演習のグループ決めをする。	[ハ]
	第 5 回	戦略的テーマと方向性（１） 前提を設定したうえで戦略的テーマと方向性決めに向けてグループ演習をする。	[ハ]
	第 6 回	戦略的テーマと方向性（２） 第 5 回の続きとして、前提を設定したうえで戦略的テーマと方向性決めに向けてグループ演習をする。	[ハ]
	第 7 回	まとめと考察（前半） 各グループで進めてきた戦略的テーマと方向性決めについてまとめと考察を行い、中間プレゼンテーションに向けた準備を行う。	[ハ]
	第 8 回	＜中間プレゼンテーション＞ 各グループが決めた戦略的テーマと方向性について発表し、全体での意見交換を通して後半に向けたブラッシュアップを行う。	[ハ]
	第 9 回	ビジョン構築（１） 第 8 回までの成果に基づいてビジョン構築を行うグループ演習をする。	[ハ]
	第 10 回	ビジョン構築（２） 第 9 回の続きとして、第 8 回までの成果に基づいてビジョン構築を行うグループ演習をする。	[ハ]
	第 11 回	3 ステップの道筋（１） 第 9 回と第 10 回で構築したビジョンの実現に向けた道筋を 3 ステップで策定するグループ演習をする。	[ハ]
	第 12 回	3 ステップの道筋（２） 第 11 回の続きとして、第 9 回と第 10 回で構築したビジョンの実現に向けた道筋を 3 ステップで策定するグループ演習をする。	[ハ]
	第 13 回	＜グループ間意見交換＞ これまでに進めてきた演習の成果について、全体発表とグループ間意見交換を行い、ブラッシュアップを行う。	[ハ]
	第 14 回	まとめと考察（後半） これまで各グループで進めてきた演習内容について、総合的なまとめと考察を行い、最終プレゼンテーションに向けた準備を行う。	[ハ]
	第 15 回	＜最終プレゼンテーション＞ 各グループでまとめた演習成果を全体で発表し、ロードマッピング思考を使った事業戦略立案プロセスについて総論を行う。	[ハ]
	試験	本講義で紹介してきたロードマッピング思考を使った事業戦略立案支援の方法論における知識・スキルに関する内容の試験を実施する。	
成績評価	以下の項目で評価を行う（合計 100 点） ・講義への参画度 50 点：講義内演習、プレゼンテーションを評価 ・レポート課題 30 点：数回のレポート内容を評価 ・最終試験 20 点：講義終了後に、これまで獲得した知識・スキルを総合的に評価		
教科書・教材	教科書・教材は、サーバー上にアップロードした講義資料を提供する。		
参考図書	吉田敏、武市祥司、富田純一、ロバート・ファール、森下有、鎗目雅著、『技術経営—MOT の体系と実践』（理工図書社、2012 年） ロバート・ファール、クレア・ファルク、デービッド・プロバート著、『Roadmapping for Strategy and Innovation—Aligning Technology and Markets in a Dynamic World』（英国ケンブリッジ大学 Institute for Manufacturing (IfM)、2010 年） トゥグリル・ダイム、テリー・オリバー、ロバート・ファール著、『Technology Roadmapping』（World Scientific Publishing、2018 年）		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	事業設計イノベーション科目群	科目名 (英文表記)	事業方向性設計演習 Roadmapping Workshop Design			教員名	廣瀬 雄大

概要	本講義では、ロードマッピング思考を使った戦略の見える化を実施するために必要となる設計方法について理解を深めていく。このことによって、実際の社会活動の様々な場面で、ロードマッピング思考の実践的な理論の活用が実現できるものとなる。			
目的・狙い	本講義の目的は、ロードマッピングの実施に向けた設計について、グループ演習を通して体得することである。具体的には、実際に世の中で行われているロードマッピングを理解して役割と位置付けを学ぶこと、ロードマッピングの実施に向けた設計方法を学び、演習を通して体得すること、である。グループ演習を通して、組織内外のコミュニケーションを促進することの大切さや、組織体制づくりの支援をすること、そのアウトプットを組織内外に示すことについて、ロードマッピングにおける総合的な知見を身につけていく。 1-2-4 社会、市場、事業、技術、経営資源といった多方面の環境からの視点が獲得できる。（レベル4：単独で行うことができる） 2-1-4 社会、市場、事業、技術、経営資源といった多方面の調査を通して、情報収集力を獲得できる。（レベル4：単独で行うことができる） 2-3-4 戦略の見える化を学修し、それを実践で活用することができる。（レベル4：単独で行うことができる） 3-1-3 戦略の見える化を学修し、必要となる経営資源を理解することができ、それを開発できる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる） 4-3-4 演習を通して学生同士におけるネットワーク構築力を獲得できる。（レベル4：単独で行うことができる）			
履修条件 （履修数の上限、 要求する前提知識 等）	事業方向性設計特論またはエマージング・テクノロジー特論の履修を終えていることが望ましいが、必須ではない。Microsoft のワード、エクセル、パワーポイントの基本を扱えることが望ましい。			
到達目標	上位到達目標			
	・ロードマッピングの実施に向けた設計方法を理解して、他者へ説明できるレベル。 ・起業または企業内新事業において、目的に合わせたロードマッピングの実施に向けた設計ができ、実践的にアウトプットできるレベル。			
	最低到達目標			
	・ロードマッピングの役割や位置付けを理解できるレベル。 ・ロードマッピングの実施に向けた設計方法を正確に理解し、活用方法や活用場面を理解しているレベル。			
授業実施形態 （単一または複数 から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点	
	対面型	—		
	ハイフレックス型	○	教室または遠隔での出席を求め、双方向で多方面に行われる議論や討論、質疑応答を通した学修（これには学修内容を深めるための個人ワーク及びグループワークが含まれる）	
	録画視聴型	—		
授業外の学習	サーバーにアップロードされた講義資料をダウンロードして予習・復習すること。 課題が出ている場合には、事前に課題をこなしてくること。			
授業の進め方 （グループワーク 方式など、進め方 の特徴）	講義は PPT の資料に基づいて行い、必要に応じて資料を配布する。			
授業の計画	回数	内容		授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	本講義のガイダンス 本講義の目的と狙い、学修内容、課題、評価方法について解説し、学生が講義選択の判断ができるようにする。		[録]
	第 2 回	ロードマッピングの基礎と応用 本学のロードマッピング関連科目で紹介してきた学修内容の振り返りも含めて、基礎と応用、実践的な活用場面や方法について解説し、第 15 回まで取り組むグループを決める。		[ハ]
	第 3 回	世の中で行われているロードマッピングの調査（1） グループに分かれて、ロードマッピングの役割や位置付けについて理解を深めるために、世の中で実際に行われているロードマッピングについて背景、経緯、目的、実施内容、成果について調査を行う。		[ハ]

	第 4 回	世の中で行われているロードマッピングの調査 (2) 第 3 回の続きとして、グループに分かれて、ロードマッピングの役割や位置付けについて理解を深めるために、世の中で実際に行われているロードマッピングについて背景、経緯、目的、実施内容、成果について調査を行う。	[ハ]
	第 5 回	世の中で行われているロードマッピングの調査 (3) 第 4 回の続きとして、グループに分かれて、ロードマッピングの役割や位置付けについて理解を深めるために、世の中で実際に行われているロードマッピングについて背景、経緯、目的、実施内容、成果について調査を行う。	[ハ]
	第 6 回	まとめと考察 (前半) これまで進めてきたロードマッピングの調査について、まとめと考察を行い、中間プレゼンテーションの準備を行う。	[ハ]
	第 7 回	<中間プレゼンテーション> 各グループで進めてきた調査について全体で発表し、ロードマッピングの役割と位置付けの総論を行う。	[ハ]
	第 8 回	ロードマッピングの実施に向けた設計方法の考え方 ロードマッピングを実施する際に必要となる設計方法の考え方について解説する。	[ハ]
	第 9 回	ロードマッピングの実施に向けた設計演習 (1) 演習テーマに沿って、グループに分かれてロードマッピングの実施に向けた設計を行う。	[ハ]
	第 10 回	ロードマッピングの実施に向けた設計演習 (2) 第 9 回の続きを行い、演習テーマに沿って、グループに分かれてロードマッピングの実施に向けた設計を行う。	[ハ]
	第 11 回	ロードマッピング実施に向けた設計演習 (3) 第 10 回の続きを行い、演習テーマに沿って、グループに分かれてロードマッピングの実施に向けた設計を行う。	[ハ]
	第 12 回	<グループ間意見交換> 各グループがこれまで進めてきた設計の成果を、他のグループと共有し合い、今後のブラッシュアップに向けてグループ間で意見交換を行う。	[ハ]
	第 13 回	設計内容のブラッシュアップ 第 12 回で行ったグループ間での意見交換に基づいて、各グループは設計内容のブラッシュアップを行う。	[ハ]
	第 14 回	まとめと考察 (後半) これまで進めてきたロードマッピングの実施に向けた設計について、まとめと考察を行い、最終プレゼンテーションの準備を行う。	[ハ]
	第 15 回	<最終プレゼンテーション> これまで各グループで進めてきた演習内容の結果について、最終プレゼンテーションとして全体で発表し、ロードマッピングの実施に向けた設計方法について総論を行う。	[ハ]
	試験	本講義で紹介してきたロードマッピングを実施するための設計方法における知識・スキルに関する内容の試験を実施する。	
成績評価	以下の項目で評価を行う (合計 100 点) ・ 講義への参画度 50 点 : 講義内演習、プレゼンテーションを評価 ・ レポート課題 30 点 : 数回のレポート内容を評価 ・ 最終試験 20 点 : 講義終了後に、これまで獲得した知識・スキルを総合的に評価		
教科書・教材	教科書・教材は、サーバー上にアップロードした講義資料を提供する。		
参考図書	古田敏、武市祥司、富田純一、ロバート・ファール、森下有、鎗目雅著、『技術経営—MOT の体系と実践』(理工図書社、2012 年) ロバート・ファール、クレア・ファルク、デービッド・プロバート著、『Roadmapping for Strategy and Innovation—Aligning Technology and Markets in a Dynamic World』(英国ケンブリッジ大学 Institute for Manufacturing (IfM)、2010 年) トゥグリル・ダイム、テリー・オリバー、ロバート・ファール著、『Technology Roadmapping』(World Scientific Publishing、2018 年)		

IV サービスイノベーション科目群

ネットワーク事業設計特論

意思決定サイエンス特論

イノベティブサービス技術特論

市場創造技術特論

事業継続戦略特論

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	サービスイノベーション科目群	科目名 (英文表記)	ネットワーク事業設計特論 Planning Methodology for e-commerce			教員名	細田 貴明

概要	計算機やインターネットを用いた経済活動は、ビジネスの利便性のみならずサービス提供の効率性を格段に飛躍させた。本科目では、ネットワークを活用したビジネスに関連する事例について、各種経営理論に基づく成功要因分析と事業戦略の特徴づけについて紹介する。その上で、オンラインサービスを提供する業界におけるサービスのモデル、企業内情報システムに関する事例とその効果、および物流、観光、医療・福祉・物流などの成長分野でのITやインターネットの活用事例について議論する。			
目的・狙い	<p>本講義の目的は、①ネットワークを活用したビジネスにおけるサービスの基本的な考え方を理解すること、②当該ビジネスを展開するために必要となる知識習得を図ること、③習得した知識を活かし、ネットワークを活用したビジネスの事例をもとに具体的なアプローチを可能とするスキルを習得することである。</p> <p>特に、ネットワークを活用したビジネスの事例を通して、金融業、小売業、観光業、医療・福祉、物流業といった業界におけるネットワークビジネスにおける成功要因分析と事業戦略の特徴づけ、さらにはそれらを支えたIT技術の活用方法を理解し、これらについてグループでのディスカッションで検討することを通してイノベーションに向けた具体的なアプローチの方法を体得する。</p> <p>1-2-3 社会/マーケット視点を獲得できる。／社会/マーケット視点から、技術をビジネスに結び付けられる。(レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p>1-3-4 技術等のシーズを獲得できる。／ビジネス価値に変換できる。(レベル4:単独で行うことができる)</p> <p>2-3-3 新しいものや本質的なものを見抜くことができる。／新しいものや本質的なものを活用できる。(レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p>3-1-3 必要な経営資源の獲得ができる。／経営資源の獲得し、それを開発できる。(レベル3:自分の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p>4-1-3 将来像(ビジョン)を描ける。／将来像を描き、それを具現化できる。(レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p> <p>4-2-3 環境スキャニングができる。／環境スキャニングを通して、革新的なシナリオ構築ができる。(レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる)</p>			
履修条件 (履修数の上限、要求する前提知識等)	特に前提知識は問わない。			
到達目標	上位到達目標			
	・サービスマネジメントの視点を持ってビジネスに取り組むことができる。 ・ネットワークを活用したビジネスを展開することができる。			
	最低到達目標			
	・サービスマネジメントの基本的な内容を理解することができる。 ・ネットワークを活用したビジネスを展開するために必要な基本的な内容を理解することができる。			
授業実施形態 (単一または複数から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点	
	対面型	—		
	ハイフレックス型	○	積極的に授業中に発言すること。 グループ演習の基礎となる個人演習を実施することがある。 積極的にグループでのディスカッションに参加すること。	
	録画視聴型	○		
授業外の学習	・講義後に配布するワークシート(簡単な質問や感想等)に回答する。 ・必要に応じて次回講義(特に演習)に必要な簡単なタスクを課す。 ・演習においては、講義外でのグループ活動として調査・検討・グループ発表準備を行う。			
授業の進め方 (グループワーク方式など、進め方の特徴)	・講義の進め方は、配布するレジュメに基づき解説、事例研究、演習・議論の流れで進める。特に定量的分析に関わる領域は、本学特任助教である丸山博之先生からのレクチャーを紹介する。 ・演習としてグループ内ディスカッションを実施し、グループ発表を行う。			
授業の計画	回数	内容		授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	本講義のオリエンテーションを実施する。授業の概要とその狙い、授業実施方法、評価方法を説明する。これらの説明に加え、学生の講義選択判断が可能となるように、全15回の講義テーマの紹介を行う。 オリエンテーションに加えて講義も実施する。 サービスマネジメント概論(1):サービスの捉え方 ネットワークを活用したビジネスにおけるサービスを論じる前提として、そもそもサービスというものがどういうものであるか理解する必要がある。サービスという言葉は、日常において多様な使い方をされることから、そもそもサービスとはどのようなものを理解することで、次回以降の講義に活かすことができることを目指す。		[録]
	第2回	前回講義で紹介したサービスの特徴に基づき、実際に世の中で提供されているサービスについて、コアサービスやサブサービス、コンティンジェントサービスに分類し、そのサービス構成に至った背景についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに今後のサービス分類の方向性のトレンドについて展望しその可能性を検討する。		[ハ]
	第3回	サービスマネジメント概論(2):サービスマネジメントとは 前回講義で学んだサービスに対する理解をもとに、それを維持し発展させていくために必要となるサービスマネジメントについて概観する。サービスマネジメントを維持していくための組織のあり方と、その活動に必要なマネジメント活動について検討する。		[録]

	第 4 回	前回講義で紹介したサービスマネジメントの考え方にに基づき、各企業におけるサービスマネジメントの考え方を分析し、サービスマネジメントの成功に至った背景についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとにサービスマネジメントシステムとして機能するために必要な成功要素について検討する。	[ハ]
	第 5 回	ネットワークを活用したビジネスの事例研究（１）：金融業界の事例をもとにインターネットが普及する以前までは、電話や FAX を用いた取引が行われていたが、外部からの接続は限定的なものであった。しかし 1990 代後半からのインターネットの普及により金融業界ではインターネットバンキングの展開が進んだ。現在では、銀行法の改正により先進技術を持っている企業とともに新しい技術の導入を容易にする金融サービスの高度化に対応できる環境に変化している。このような金融機関におけるネットワークを活用したビジネスの変遷を紹介する。	[録]
	第 6 回	前回講義で紹介した金融業界におけるネットワークを活用したビジネスの展開に関する特長を理解して今後の金融業界のサービスの改善や新たなサービスについて各自で考案し、その内容をもとに金融業界におけるネットワークビジネスのイノベーションの可能性についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに今後の金融業界のビジネスの将来性について展望しその可能性を検討する。	[ハ]
	第 7 回	ネットワークを活用したビジネスの事例研究（２）：小売業の事例をもとにインターネット通販が一般化するにつれて、既存小売業は販売戦略の転換が求められてきた。その一つとして小売業においてもインターネット通販を強化する動きは加速させるといった対策を店舗販売と並行する形で進出することが行われている。一方で、インターネット通販のようなオンラインだけでなく、店舗での販売による価値を見出すオフラインの重要性も見直されつつある。このような小売業におけるネットワークを活用したビジネスについて紹介する。	[録]
	第 8 回	前回講義で紹介した小売業におけるネットワークを活用したビジネスの展開に関する特長を理解して今後の小売業のサービスの改善や新たなサービスについて各自で考案し、その内容をもとに小売業におけるネットワークビジネスのイノベーションの可能性についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに今後の小売業のビジネスの将来性について展望しその可能性を検討する。	[ハ]
	第 9 回	ネットワークを活用したビジネスの事例研究（３）：医療・福祉分野の事例をもとに医療・福祉分野におけるネットワークの活用は、現在までも進められてきたものであるが、さらなる活用の余地があると言える。医療・福祉関連情報のネットワークでの活用は可能性が大きい反面、取り扱い情報の性質から情報セキュリティの十分な確保が求められ、利便性とのバランスが難しいことがその背景にあると考えることができる。このような医療・福祉分野におけるネットワークを活用したビジネスについて現状と今後の取り組みについて紹介する。	[録]
	第 10 回	前回講義で紹介した医療・福祉分野におけるネットワークを活用したビジネスの展開に関する特長を理解して今後の医療・福祉分野のサービスの改善や新たなサービスについて各自で考案し、その内容をもとに医療・福祉分野におけるネットワークビジネスのイノベーションの可能性についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに今後の医療・福祉分野のビジネスの将来性について展望しその可能性を検討する。	[ハ]
	第 11 回	ネットワークを活用したビジネスの事例研究（４）：物流業の事例をもとに物流業におけるネットワークの活用は、インターネット通販の発展との関連が大きい。インターネット通販の発展に対応するため、物流業では、ものの流れを管理するためのロジスティクスシステムが導入され、コスト削減や効率化が進んだ。一方で、インターネット通販の業務拡大に物流業務が追いつくことができず、人員問題や再配達問題といった様々な課題が浮き彫りになっている。このような物流業におけるネットワークを活用したビジネスについて現状と取り組みについて紹介する。	[録]
	第 12 回	前回講義で紹介した物流業におけるネットワークを活用したビジネスの展開に関する特長を理解して今の物流業のサービスの改善や新たなサービスについて各自で考案し、その内容をもとに物流業におけるネットワークビジネスのイノベーションの可能性についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに今後の物流業のビジネスの将来性について展望しその可能性を検討する。	[ハ]
	第 13 回	ネットワークを活用したビジネスの事例研究（５）：特筆すべき業界の事例をもとにこれまで検討してきた事例の対象となる業界以外にも、教育、観光、農業等でネットワークを活用した様々な取り組みが行われている。本講義では、ネットワークを活用した特筆すべき事例を持つ業界を対象として、現状と今後の取り組みについて紹介する。	[録]
	第 14 回	前回講義で紹介した特筆すべき事例を持つ業界における、ネットワークを活用したビジネスの展開に関する特長を理解して、今後のサービスの改善や新たなサービスについて各自で考案し、その内容をもとにネットワークビジネスのイノベーションの可能性についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに今後のビジネスの将来性について展望しその可能性を検討する。	[ハ]
	第 15 回	本講義全体のまとめとして、本講義で紹介した全体の振り返りとその総括を行う。これまでの学習内容をもとに、各業界の特徴を振り返り、どのような視点・アイデアでサービスを展開しているのか、導入していくべきかを改めて検討する。	[録]
	試験	最終試験?基礎知識の確認と、それを利用したイノベーション想起に関して問う問題に解答する。	[ハ]
成績評価	次の４つのポイントで評価する(合計 100 点満点) ・講義後ワークシート提出 15 点 (1 点×15 回) ・グループ演習課題提出 50 点 (10 点×5 回。ただし、1 回以上の提出は必須とする) ・最終試験 35 点		
教科書・教材	適宜 LMS で配布する。		
参考図書	必要に応じて講義中に指示する。		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	サービスイノベーション科目群	科目名 (英文表記)	意思決定サイエンス特論 Decision Science		教員名	細田 貴明	

概要	ビジネスにおける意思決定は、経営者が行う経営上の意思決定と現場の実務担当者が行う実務的意思決定が存在し、この2つが成功することがビジネスの成功において不可欠である。本講義では、これらの意思決定に関する理論と実務上の手法について論じる。具体的には、経営上および実務上の意思決定の成功例や失敗例を議論するとともに、ビジネス上の事例等をもとにした意思決定演習を行う。		
目的・狙い	本講義の目的は、受講を通して意思決定理論を学習することで、①これまでの意思決定を見直す契機を得ること、②よりよい意思決定を行うための方法論や方法、手法を理解すること、③実務で活用できるような実践的なスキルを習得することである。 特に、ビジネス上での意思決定に関する事例を通して、意思決定の行われている実態や意思決定時に発生する様々なバイアスが存在することを理解する。加えて、実務で意思決定を行うために必要となる問題認識や問題分析に活用可能なシステム思考アプローチ等の方法論、方法、手法を習得する。これらについてグループでのディスカッションで検討することを通して実務におけるよりよい意思決定に向けたアプローチを体得する。 1-2-4 社会/マーケット視点を獲得できる。／社会/マーケット視点から、技術をビジネスに結び付けられる。(レベル4：単独で行うことができる) 2-1-3 リファレンスを探し、入手することができる。／リファレンスを精査した上で、取捨選択して自分のものにできる。(レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる) 3-2-3 必要な財務知識を獲得できる。／財務知識を用いて予算管理できる。(レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる) 3-3-3 必要なリーダーシップを発揮できる。／リーダーシップを発揮し、それを用いて組織運営ができる。(レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる) 4-1-3 将来像(ビジョン)を描ける。／将来像を描き、それを具現化できる。(レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる)		
履修条件 (履修数の上限、要求する前提知識等)	特に前提知識は問わない。		
到達目標	上位到達目標		
	・意思決定理論の経営実務における意義を説明できる。 ・実務的意思決定における方法論、方法、手法の適用を通して、実務に活用できる力を涵養し、さらにその有効性と限界を論理的に理解することができる。 ・各種手法の適用を通して問題の構造を正しく把握し、モデル化ができる。		
	最低到達目標		
	・意思決定理論の概要を説明することができる。 ・実務的意思決定における方法論に関する基本概念を説明することができる。 ・各種方法および手法を実務的意思決定に利用できる。		
授業実施形態 (単一または複数から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	積極的に授業中に発言すること。 グループ演習の基礎となる個人演習を実施することがある。 積極的にグループでのディスカッションに参加すること。
	録画視聴型	○	録画授業スケジュールに留意すること。 録画授業は実施回に必ず視聴しておくこと。
授業外の学習	・講義後に配布するワークシート(簡単な質問や感想等)に回答する。 ・必要に応じて次回講義(特に演習)に必要な簡単なタスクを課す。 ・演習においては、講義外でのグループ活動として調査・検討・グループ発表準備を行う。		
授業の進め方 (グループワーク方式など、進め方の特徴)	・講義の進め方は、配布するレジュメに基づき解説、事例研究、演習・議論の流れで進める。特に経済学的アプローチに関わる領域は、本学特任助教である丸山博之先生からのレクチャーを紹介する。 ・演習としてグループ内ディスカッションを実施し、グループ発表を行う。		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	本講義のオリエンテーションを実施する。授業の概要とその狙い、授業実施方法、評価方法を説明する。これらの説明に加え、学生の講義選択判断が可能となるように、全15回の講義テーマの紹介を行う。オリエンテーションに加えて講義も実施する。 また、円滑に次回以降の講義に参加できるよう、具体的な意思決定事例の紹介と簡単なディスカッションを行う。 ビジネスにおける合理的な意思決定の方法とその限界:意思決定理論の一つである規範的意思決定理論では、実務的意思決定問題において合理的な最適解を導出することを可能とする。しかし、実務家の限られた時間の中で、その理論的前提を担保することは困難であり、規範的意思決定理論による意思決定を行っていることはほとんどない。ここでは、実務的意思決定における規範的意思決定理論の貢献と限界について検討する。	[録]
	第2回	前回講義で紹介した規範的意思決定理論は、最適性が保証された選択肢を選択することが可能であり有効であるが、理論的アプローチには大きな障壁がある。そこで、履修者の意思決定経験の内容をもとに、有効性とその限界についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに今後の自らの意思決定への向き合い方について検討する。	[ハ]

	第3回	ビジネスにおける意思決定の実態：規範的意思決定理論による意思決定を行っていることはほとんどないという実態において、人間はどのように意思決定を行っているか。この問題を追求しようとする記述的意思決定理論としてハーバード・A・サイモン、H・モントゴメリらの研究を紹介し、実務家の意思決定のあり様とその特徴について検討する。	[録]
	第4回	前回講義で紹介した記述的意思決定は、人間の意思決定のひとつの姿を映していたものであると考えることができる。そこで、履修者の意思決定経験の内容をもとに、意思決定における基準とその設定の仕方、さらにはそれが合理的であったかについてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに人間の合理性のあり方について検討する。	[凡]
	第5回	ビジネスにおける意思決定理論の活用：意思決定理論の研究が発展していく中で、人間の持つ心理的な面を踏まえて人間の経済的活動を分析するアプローチとして行動経済学的アプローチが発展している。このような行動経済学的アプローチによる研究・理論を紹介し、ビジネス上の活用方法について検討する。	[録]
	第6回	前回講義で紹介した行動経済学に基づくアプローチは、人間の意思決定の特徴を踏まえたよい意思決定を行うための仕組みの提供と考えることができる。しかし、人間の意思決定にはバイアスが掛かることも多い。そこで、ある意思決定のケーススタディをもとに、意思決定を分析し、どういった特徴があらわれているかについてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに如何に人間の意思決定の癖と向き合うかについて検討する。	[凡]
	第7回	ビジネスにおける組織的意思決定、集団的意思決定の実態：ビジネスを推進していくうえで個人の活動で為せる範囲には限界があることから、組織または集団によるビジネスを行うことが大半である。ここでは、組織的意思決定、集団的意思決定の持つメリット／デメリットを紹介し、ビジネス上の留意点等について検討する。	[録]
	第8回	前回講義で紹介した組織的意思決定は、多くの履修者が経験し、成功と失敗したことがあるものである。そこで、個人の意思決定と対比する形で組織的意思決定について、履修者の意思決定経験の内容をもとに、メリット／デメリットについてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに組織的意思決定への向き合い方について検討する。	[凡]
	第9回	意思決定手法の習得（AHP）：AHP(Analytic Hierarchy Process：階層分析法)とは、複数の選択肢と評価基準がある意思決定において人間の主観を定量化しそれをシステムアプローチに組み込んで問題解決を行う意思決定手法である。ここでは、実際の意思決定事例をもとに適用方法と適用にあたっての留意事項について紹介する。	[録]
	第10回	意思決定手法の演習（AHP）：課題として提示する意思決定問題に対して、受講者がその意思決定問題を AHP が適用可能となるように検討を行いながら、その意思決定問題に AHP を適用して解を導出する演習を行う。さらに、適用結果の成否及びその成否の原因を明確にするための議論を行い、その結果についてグループ発表を実施する。	[凡]
	第11回	意思決定手法の習得（システム思考）：システム思考とは、解決すべき事象や問題を「システム」として捉え、多面的な見方でその問題が発生している原因を追究し問題解決を目指す方法論である。ここでは、システム思考によるアプローチで問題解決に至った意思決定事例をもとに適用方法と適用にあたっての留意事項について紹介する。	[録]
	第12回	意思決定手法の演習（システム思考）：課題として提示される複雑で曖昧な問題事例に対して、実際にシステム思考によるアプローチを用いて問題解決を目指す演習を行う。さらに、その各自のシステム思考によるアプローチについてグループ討議を行い、適用結果の成否及びその成否の原因を明確にするための議論を行う。さらに、適用結果の成否及びその成否の原因を明確にするための議論を行い、その結果についてグループ発表を実施する。	[凡]
	第13回	意思決定手法の習得（納得できる意思決定のための方法）：意思決定を行う際の価値基準として、サイモンの主張した満足化原理が有名である。ここでは、満足という概念に対して納得という概念について講師の研究内容を紹介し、意思決定における納得とはどのようなものであるか、どのように行われるものであるかという理論について議論する。	[録]
	第14回	意思決定手法の演習（納得できる意思決定のための方法）：納得できる意思決定というテーマで受講者各自がこれまでの経験から意思決定事例を考え、実際にその意思決定事例に対して納得した根拠をグループ内で議論する。さらに、その各自の検討結果に基づいてグループ討議を行い、その結果についてグループ発表を実施する。	[凡]
	第15回	本講義全体のまとめとして、本講義で紹介した理論・事例の全体の振り返りとその総括を行う。これまでの学習内容をもとに、どのような意識で意思決定を行うべきか、行われていることを理解するかを改めて確認するとともに、全体を振り返る。	[録]
	試験	最終試験：意思決定理論や意思決定手法など講義内容に関する論述試験を実施する。	[凡]
成績評価	次の4つのポイントで評価する(合計 100 点満点) ・講義後ワークシート提出 15点 (1点×15回) ・個人課題提出 30点 (15点×2回。ただし、1回以上の提出は必須とする) ・グループ演習課題提出 30点 (10点×3回。ただし、1回以上の提出は必須とする) ・最終試験 25点		
教科書・教材	適宜 LMS で配布する。		
参考図書	必要に応じて講義中に指示するが、以下については講義に併せて活用すること。 ・田村洋一、『CREATIVE DECISION MAKING 意思決定の地図とコンパス』、Evolving、2021年。 ・齊木由香、『トップの意思決定』、イースト・プレス、2022年。 ・E.A. ウィルヘルムス 他、『神経経済学と意思決定』、北大路書房、2019年。		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	サービスイノベーション科目群	科目名 (英文表記)	イノベティブサービス技術特論 Innovative Technology for Service Business		教員名	細田 貴明	

概要	モバイル端末の進化や人工知能技術の発展に伴い、金融サービスやeコマースといった関連産業の著しい成長が認められる。これらの産業の発展の要因は、電子マネーによる決済行為の電子化や仮想通貨の活用といった国を超えた経済活動のさらなる活発化が背景にある。本講義では、フィンテックの基盤となる基本的技術や関連産業の発展に寄与するITソリューションを理解し、イノベーションの検討に必要な知識を習得する。これらの知識をもとに、サプライチェーンや電子政府、医療・福祉、観光など、様々な分野に対してブロックチェーンを代表とするIT技術の適用可能性とその課題について議論し、具体的な導入手法について検討する。			
目的・狙い	<p>本講義の目的は、①イノベーションに必要な基本的IT技術やITソリューションを理解すること、②理解したスキルを活用しビジネスを展開するために必要となる思考力を養うこと、③ビジネスにおけるイノベーションの想起を促す実践的なスキルを習得することである。</p> <p>特に、ビジネスへの適用事例を通して、クラウドサービス、入出力デバイス、通信技術に関する基本的技術について習得し、その基礎技術をもとに活用されているIoT技術、フィンテック関連技術（ブロックチェーン、電子決済等）といったITソリューションでの活用方法を理解する。これらについてグループでのディスカッションで検討することを通してイノベーションに向けた具体的なアプローチの方法を体得する。</p> <p>1-1-3 異なる技術と人材を組み合わせることができる。／異なる技術と人材を組み合わせ、新たな価値を生み出せる。（レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p> <p>2-2-3 リファレンスを探し、入手することができる。／リファレンスを精査した上で、取捨選択して自分のものにできる。（レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p> <p>2-3-4 新しいものや本質的なものを見抜くことができる。／新しいものや本質的なものを活用できる。（レベル4：単独で行うことができる）</p> <p>3-1-3 必要な経営資源の獲得ができる。／経営資源の獲得し、それを開発できる。（レベル3：自分の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p> <p>4-2-3 環境スキャンニングができる。／環境スキャンニングを通して、革新的なシナリオ構築ができる。（レベル3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる）</p>			
履修条件 （履修数の上限、要求する前提知識等）	特に前提知識は問わない。			
到達目標	上位到達目標			
	・イノベーションに必要な基本的技術やITソリューションを他分野へ応用することができる。 ・習得した知識を活用したイノベーションを想起し各分野のビジネスに展開することができる。			
	最低到達目標			
	・イノベーションに必要な基本的技術やITソリューションを理解することができる。 ・各分野のイノベーション事例に関して理解することができる。			
授業実施形態 （単一または複数から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点	
	対面型	—		
	ハイフレックス型	○	積極的に授業中に発言すること。 グループ演習の基礎となる個人演習を実施することがある。 積極的にグループでのディスカッションに参加すること。	
	録画視聴型	○		
授業外の学習	・講義後に配布するワークシート（簡単な質問や感想等）に回答する。 ・必要に応じて次回講義（特に演習）に必要な簡単なタスクを課す。 ・演習においては、講義外でのグループ活動として調査・検討・グループ発表準備を行う。			
授業の進め方 （グループワーク方式など、進め方の特徴）	・講義の進め方は、配布するレジюмеに基づき解説、事例研究、演習・議論の流れで進める。特にIT分野におけるデータ活用に関わる領域は、本学特任助教である丸山博之先生からのレクチャーを紹介する。 ・事例の検討をもとに、演習としてグループ内ディスカッションを実施し、グループ発表を行う。			
授業の計画	回数	内容		授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	本講義のオリエンテーションを実施する。授業の概要とその狙い、授業実施方法、評価方法を説明する。これらの説明に加え、学生の講義選択判断が可能となるように、全15回の講義テーマの紹介を行う。オリエンテーションに加えて講義も実施する。 事例研究（1）：昨今では、クラウドサービスを利用することがビジネス上不可欠な要素となりつつあることから、そのサービスの性質やセキュリティの基礎を理解しておく必要がある。そこでここでは、クラウドサービスを活用したイノベーションの紹介と、本テーマに関するグループ討議を行いその理解を深める。		[録]
	第2回	前回講義で紹介したクラウドサービスは、我々の日常のサービスとして活用することが一般的になっているが、自分がサービスを提供する場合には、必要なクラウドサービスの選定を行う必要がある。自身の提供するサービスに求められるサービスレベルを踏まえて、どのようなクラウドサービスを使うべきかの勘所を養うことを目指す。		[ハ]
	第3回	事例研究（2）：スマートフォンやスマートウォッチといったモバイル・ウェアラブル端末は、サービスを効果的に提供するために重要な役割を占めることからそれらの持つ機能や特長を理解しておく必要がある。ここでは、現在提供されているサービスがモバイル・ウェア		[録]

		ラブル端末をどのように活用しているかを紹介する。	
第4回		前回講義で紹介したモバイル・ウェアラブル端末の機能や特長を活用して既存サービスの改善や新たなサービスについて各自で考案し、その内容をもとにイノベーションの可能性についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに今後のモバイル・ウェアラブル端末の将来性について展望しその可能性を検討する。	[ハ]
第5回		事例研究(3)：いわゆる5Gと呼ばれる移動通信システムは、「高速・大容量」、「超低遅延」、「同時・多接続」を実現すると言われている。従来までの通信技術を上回る性能を発揮することから、これまで不可能であった新たなサービスを提供する可能性を秘めている。そのため、5Gの持つ機能や特長を理解しておく必要がある。ここでは、5Gがもたらすと言われる新しいサービスを確認し、ビジネスチャンスを検討する。	[録]
第6回		前回講義で紹介した5Gと呼ばれる移動通信システムの機能や特長を活用して既存サービスの改善や新たなサービスについて各自で考案し、その内容をもとにイノベーションの可能性についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに5Gの将来性について展望しその可能性を検討する。	[ハ]
第7回		事例研究(4)：IoT(Internet of Things)により、インターネットを介してセンサーや通信機能を持った様々なモノの情報を収集し、その情報を活用することが可能となった。それにより、これまでのビジネスでは対象とならなかった、または対象とできなかった情報を取得し分析することを通して、これまで不可能であった新たなサービスを提供する可能性を秘めている。そのため、IoTの持つ機能や特長を理解しておく必要がある。ここでは、現在提供されているサービスがIoTをどのように活用しているかを紹介する。	[録]
第8回		前回講義で紹介したIoTの機能や特長を活用して既存サービスの改善や新たなサービスについて各自で考案し、その内容をもとにイノベーションの可能性についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとにIoTの将来性について展望しその可能性を検討する。	[ハ]
第9回		事例研究(5)：電子決済はECサイトだけでなく、実店舗でも導入が進んでおり、その活用がますます進展するものである。また、NFC決済やQRコード決済といった多くの電子決済の手段が提供され電子決済が浸透することで人々の消費行動にも変化が起こることが想定されることから、ビジネスを行う上で活用の可能性を秘めている。そのため、電子決済の持つ機能や特長を理解しておく必要がある。ここでは、現在提供されているサービスがどのように活用しているかを紹介する。	[録]
第10回		前回講義で紹介したNFC決済やQRコード決済といった多くの電子決済の機能や特長を活用して既存サービスの改善や新たなサービスについて各自で考案し、その内容をもとにイノベーションの可能性についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに電子決済の将来性について展望しその可能性を検討する。	[ハ]
第11回		事例研究(6)：最新技術をもとに業界×Techが盛んであり、例えば、金融サービスに応用する「フィンテック(Fintech)」のようにAIやビッグデータ解析、ブロックチェーンといった技術が活用されている。ビジネスを広く展開する上で業界とテクノロジーの融合は必要となっており、特に新しいビジネスを立ち上げる上ではその事例を通して機能や特長を理解しておく必要がある。ここでは、現在提供されているサービスがどのように活用しているかを紹介する。	[録]
第12回		前回講義で紹介した業界×Techの機能や特長を活用して既存サービスの改善や新たなサービスについて各自で考案し、その内容をもとにイノベーションの可能性についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとに新たな業界への展開や新たな技術の導入まで視野を広げつつ、各業界の将来性について展望しその可能性を検討する。	[ハ]
第13回		事例研究(7)：前回及び前々回講義で紹介した技術の中でも、特にブロックチェーン技術は、様々な分野において適用可能性が検討されており、ブロックチェーンの持つ機能や特長を理解しておく必要がある。ここでは、ブロックチェーン技術に注目しどのように活用しているかを紹介する。	[録]
第14回		前回講義で紹介したブロックチェーンの機能や特長を活用して既存サービスの改善や新たなサービスについて各自で考案し、その内容をもとにイノベーションの可能性についてグループ討議を行い、講義内容の理解を深める。さらには、その理解をもとにブロックチェーンの適否を踏まえた将来性や、他分野への応用についても展望しその可能性を検討する。	[ハ]
第15回		本講義全体のまとめとして、本講義で紹介した事例全体の振り返りとその総括を行う。これまでの学習内容をもとに、どのような視点・アイデアでイノベーションに繋がりうるサービスを考案し、導入していくべきかを改めて検討するとともに、その検討結果を各グループとして発表を行いその知見を皆で共有する。	[録]
試験		最終試験：基礎知識の確認と、それを利用したイノベーション想起に関して問う問題に解答する。	[ハ]
成績評価	次の2つのポイントで評価する(合計100点満点) ・講義後ワークシート提出 15点(1点×15回) ・グループ演習課題提出 70点(10点×7回) ・最終試験15点		
教科書・教材	適宜LMSで配布する。		
参考図書	必要に応じて講義中に指示するが、以下については講義に併せて活用すること。 ・板生清他『生体データ活用の最前線～スマートセンシングによる生体情報計測とその応用～』、サイエンス&テクノロジー株式会社、2017年。 ・高安篤史、『IoT:モノのインターネット』、創元社、2021年。 ・石角友愛、『いまこそ知りたいDX戦略』、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2021年。		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	サービスイノベーション科目群	科目名 (英文表記)	市場創造技術特論 Market Creation			教員名	松尾 徳朗

概要	市場を理解するためのマーケティング手法を概説するとともに、市場を創造するための各種戦略として、ブルーオーシャン戦略を紹介する。ブルーオーシャン戦略による新市場創造においては、戦略キャンバス作成、脱セグメンテーション分析、非顧客のグループ分類、プロダクトコンセプトの具現化の手法の理解、ビジネスモデルの再構築、戦略的な価格設定、事業セグメント整理のためのPMS マップ、アクションマトリックス（ERRC グリッド）の作成が必要となる。これらを個人・グループ演習を通じて理解する。			
目的・狙い	本講義の目的は、これまでに存在しない市場を創造し、市場を独占できるビジネスを展開できる可能性を持つ商品開発手法であるブルー・オーシャン戦略について理解し、実際に商品開発を可能とするための方法である戦略キャンバスの作成、脱セグメンテーションの分析、非顧客グループの分類、プロダクトコンセプトの具現化の手法の理解、ビジネスモデルの再構築、PMS マップ、戦略的な価格の設定、アクションマトリックス（ERRC グリッド）の作成ができるようになることである。 1-2-3 社会/マーケット視点を獲得できる。社会/マーケット視点から、技術をビジネスに結び付けられる。（レベル 3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。） 1-3-4 技術等のシーズを獲得できる。ビジネス価値に変換できる。（レベル 4:単独で行うことができる。） 3-1-4 必要な経営資源の獲得ができる。経営資源の獲得し、それを開発できる。（レベル 4:単独で行うことができる。） 4-1-3 将来像（ビジョン）を描ける。将来像を描き、それを具現化できる。（レベル 3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。） 4-2-3 環境スキャニングができる。環境スキャニングを通して、革新的なシナリオ構築ができる。（レベル 3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。）			
履修条件 （履修数の上限、要求する前提知識等）	グループ活動やグループ演習では、積極的に活動に参加し、チームリーダーや発表者の役割を積極的に複数回担当すること。			
到達目標	上位到達目標			
	ブルー・オーシャン戦略において、次のそれぞれの概念を用いて新市場を創造することができる。 ・戦略キャンバス ・脱セグメンテーション ・非顧客のグループ分類 ・プロダクトコンセプトの具現化を実現する8つのパス ・ビジネスモデルの再構築 ・戦略的な価格設定 ・アクションマトリックス			
	最低到達目標			
	ブルー・オーシャン戦略において、次の事項について理解し、説明できる。 ・戦略キャンバス ・脱セグメンテーション ・非顧客のグループ分類 ・プロダクトコンセプトの具現化を実現する8つのパス ・ビジネスモデルの再構築 ・戦略的な価格設定 ・アクションマトリックス			
授業実施形態 （単一または複数から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点	
	対面型	—		
	ハイフレックス型	○	授業中に学生に対する発問や質問を行う。積極的に授業中に発言すること。 グループ演習を補完するために個人演習を行うことがある。 原則毎回グループでの演習を行う。積極的に行うこと。	
	録画視聴型	○	録画コンテンツは事前に視聴し、その後の授業でのグループ演習に支障がないようにしておく。 録画授業は実施回に必ず視聴しておくこと。 授業のスケジュールを確認しておくこと。	
授業外の学習	必要に応じて LMS で資料を配布するので、授業前に予習すること。また、毎回、次回の授業に関連する課題を指示するので、事前に作成すること。必要に応じて参考書等を活用し、授業での理解の助けにすること。グループで実施する演習課題は事前に理解しておかないとグループ作業に影響する。			
授業の進め方 （グループワーク方式など、進め方の特徴）	市場を創造するための各種戦略の一つとして、ブルーオーシャン戦略を紹介する。また、グループ演習を通じてサービスを創造するとともに新市場の創成にチャレンジする。さらに、カジノ業界のビジネスや旅行業界のビジネスについて紹介し、演習に活用する。			
授業の計画	回数	内容		授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	本講義のガイダンス：学生が講義選択の判断ができるように、講義の目的と全 15 回の構成を説明する。授業の内容を概観できるようにするために、ブルーオーシャン戦略によるビジネスプランニングの事例や用いるツールについて簡単に説明する。		[ハ]
	第 2 回	因果と結果(VC01)、経営戦略の予備知識（１）(VC02)、経営戦略の予備知識（２）(VC03)：ビジネスにおいて、成功確度を高めるには、原因を追求することが肝要であり、その可視化手法について説明する。さらに、マーケティング技術の基本である PEST 分析、5 Forces 分析、バリューチェーン分析、VRIO 分析、3C 分析、SWOT 分析について概説する。		[録]

	第3回	実存する企業を取り上げ、因果モデルを作成するグループワークを実施する。関係性は論理的に結び、正の影響伝播は実線、負の影響伝播は破線で示すことにより、関係性の詳細な分析を行い、ビジネス活動を阻害する要因をあぶりだす。グループ活動で得られたグラフを発表することで、深く理解できるようにする。	【凡】
	第4回	市場における戦略(VC04)、成功の事例から学ぶ(VC05)：企業の立ち位置により、具体的にどのような戦略をとるべきか、自らのビジネスでの有効な戦略を見出すための知見を得る。コストリーダーシップと差別化の戦略について学ぶ。さらに、実存する企業の成功例について、その要因について理解する。	【録】
	第5回	グループワークを実施する。実存していた企業のうち、過去に高い成功を収めていたリーダー企業を挙げるとともに、その業界のチャレンジャー企業、フォロワー企業、ニッチャー企業を考える。さらに、リーダー企業のビジネスモデル、戦略、KFSを明らかにし、失敗することにより地位が入れ替わった、または廃業した原因を考える。	【凡】
	第6回	書籍の紹介(VO6)、レッドオーシャンの落とし穴(VC07)、ブルーオーシャン戦略(VC08)、戦略キャンパス(VC09)：本講義に関連する書籍を紹介する。市場において、競争の激化しやすいレッドオーシャンの特徴や欠点を説明する。市場創造の概念について説明し、ブルー・オーシャン戦略の概要について説明する。さらに、競争要因を可視化する手法である戦略キャンパスについて説明する。	【録】
	第7回	実在する(していた)企業を対象として、戦略キャンパス作成に関するグループ演習を実施し、最後に発表を行う。同じ業界でこれまでに成功を収めた製品・サービス(1つないし2つ)と、失敗した製品・サービス(1つないし2つ)をあげる。戦略キャンパスの競争要因を8～12個整理し、戦略キャンパスを描き、それぞれの特徴を分析する。グループで作成したプロダクトに関して、戦略キャンパスを用いて従来の製品・サービスと比較して差別化されているかグループで検証する。	【凡】
	第8回	PMS マップ(VC10)、バリューブレイクスルーマーケティング(VC11)：現状の事業ポートフォリオからどのようにして業界パイオニアになりうるかを検討するためにPMSマップを学ぶ。既存の事業ポートフォリオや製品・サービスを一つの図表上にプロットし、評価し、業績の先行きを予測する手法を理解する。さらに、市場創造とバリューイノベーションを実現するために、市場レベル、製品レベル、マクロ環境レベルの3つの観点から検討する。	【録】
	第9回	グループ演習により理解を深める。具体的に、与えられた企業の情報を収集し、それを元にPMSマップ(既存の事業ポートフォリオ、理想の事業ポートフォリオ)を作成する。理想の事業ポートフォリオを実現するために何が必要か、アイデアを出し、最後に発表を行い討議する。	【凡】
	第10回	非顧客層の3つのグループ(VC12)、買い手の効用マップ(VC13)：非顧客の3つのグループについて理解する。それぞれのグループの特徴を整理し、第3のグループを取り込み新市場を創造できた事例を紹介する。従来の製品やサービス、および新規に開発した製品・サービスについて、顧客が購入から使用に至るまでの不便性、不都合をみつけるための顧客の効用マップについて説明する。	【録】
	第11回	グループ演習を実施し、理解を深める。実存する業種を元に、購入者の効用マップを作成し、その課題を明らかにする。さらに、既存の課題を解決できるアイデアをグループで考案し、それを効用マップに描くことで、多面から課題を解決できているか検討する。最後にグループで発表を行う。	【凡】
	第12回	バリューイノベーションに向けた4つのアクション(VC14)、戦略的価格設定とBOIインデックス(VC15)：ビジネスモデルの再構築、戦略的な価格設定、アクションマトリックス(ERRCグリッド)の作成について学習する。発表を行う。また、作成したマトリックスについて、容易にレッドオーシャン化しないか検討を行う。	【録】
	第13回	ビジネスモデルの再構築、戦略的な価格設定、アクションマトリックス(ERRCグリッド)の作成についてグループワークを実施する。具体的には、新規に事業を考案し、そこでの差別化と低コストを実現するためにERRCグリッドを作成し、考案した新ビジネスの価格を顧客の密集する価格帯から競争的かつ十分に利益が得られる価格を設定する。	【凡】
	第14回	ブルーオーシャン戦略を実行に移す(VC16)：ブルーオーシャン戦略を実行に移すために、ブルー・オーシャンの視点を取り入れて視野を広げ、事業機会の所在についての考え方について説明する。ブルーオーシャン戦略の実行プロセスを説明する。さらに、実存する(した)製品やサービスについて、それが新市場を創造できたことを確認する。	【録】
	第15回	サービス業を対象とした新市場の創造に関するグループ演習を実施する。ブルーオーシャン戦略の手法のほか、マーケティング手法、価値創造手法などを活用する。収益、戦略等について、実現性を考慮に入れて発表を行い、その後他の受講者との討論を行う。	【凡】
	試験	最終試験：学習内容に関して、理解を確認するために最終試験を実施する。 試験の方法は別途アナウンスする。	【凡】
成績評価	次の2つにより評価する(合計100点満点)。 ・ レポート ・ 最終試験 点数の配分は、別途説明する。		
教科書・教材	適宜LMSで配布する。		
参考図書	・ ジョアン・マグリッタ、「マイケル・ポーターの競争戦略」、早川書房、2012年 ・ マイケル・ポーター、「新版 競争戦略論Ⅰ・Ⅱ」、ダイヤモンド社、2018年 ・ フィリップ・コトラー、ケビン・レーン・ケラー、「マーケティング・マネジメント」、丸善出版、2014年 ・ フィリップ・コトラー、「マーケティング原理」、ダイヤモンド社、2003年 ・ W. チャン・キム、レネ・モボルニユ、「ブルーオーシャン・シフト」、ダイヤモンド社、2018年 ・ W. チャン・キム、レネ・モボルニユ、「新版 ブルー・オーシャン戦略」、ダイヤモンド社、2015年 ・ W. チャン・キム、レネ・モボルニユ、「ブルー・オーシャン戦略論文集」、ダイヤモンド社、2018年 ・ 入山章栄、「世界標準の経営理論」、ダイヤモンド社、2019年 ・ 板倉宏昭、「新訂 経営学講義」、勁草書房、2017年 ・ ポール・ミルグロム、ジョン・ロバーツ、「組織の経済学」、NTT出版、1997年 ・ 小川孔輔、「マーケティング入門」、日本経済新聞出版、2009年		

コース名	事業設計工学コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	サービスイノベーション科目群	科目名 (英文表記)	事業継続戦略特論 Business Continuity Management			教員名	松尾 徳朗

概要	近年の不確実な世界において、組織が永続的にビジネスを継続させることができるよう望ましい戦略を持つことが注目されている。本講義では、主として次の2点について取り組む。一つ目は、ビジネスサステイナビリティの観点で、高品質な商品やサービスの提供を実現し、ビジネス継続性を維持するための顧客のパーセプション理解とビジネス意思決定のためのマーケティングリサーチの基礎である。二つ目は、不測の事態が発生した際に、組織が持つ情報や周りの環境の情報をいち早く収集し、それに基づいた事業再開の戦略を立案し、ビジネスを継続させることができる方法論として注目を集めている事業継続計画（BCP: Business Continuity Plan）についてである。			
目的・狙い	本講義の目的は、様々な状況における組織の意思決定に関連する。具体的に、（１）ビジネス継続のための顧客パーセプションの分析及び意思決定のためのマーケティングリサーチの基礎、および（２）非常時におけるリソースとシナリオを基盤とした事業の継続を実現する事業継続計画の策定について扱う。（１）では、ビジネス戦略の基盤となるような環境の変化に応じた商品開発及びサービス設計に関して、顧客のパーセプション理解を可能とする調査手法、調査結果に応じた商品やサービスの内容、提供手法、提供プロセスの再構築について扱う。顧客のパーセプションや組織やもつ情報をよりの確に知り、それに基づいた戦略を立案することにより、様々な状況を想定したビジネスの継続戦略立案について習得する。（２）では、破壊的脅威が発生した状況を想定したインパクトの分析（ビジネスインパクト分析、リスクアセスメント、事業継続戦略）について扱う。企業にとっては組織内部に起因するリスクである情報漏洩や不正は世界標準化されている COSO フレームワークなどによる内部統制によりそのリスクを軽減可能であるが、外部起因のリスクの場合、不確定要素が大きいため発生後の対策が重要とされる。そこで、組織の重要な業務（事業）とリソースを基盤として、リスクシナリオを考慮した事業継続戦略の立案について、手法および手順を習得する。 1-2-3 社会/マーケット視点を獲得できる。社会/マーケット視点から、技術をビジネスに結び付けられる。（レベル 3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。） 2-1-3 リファレンスを探し、入手することができる。リファレンスを精査した上で、取捨選択して自分のものにできる。（レベル 3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。） 3-1-3 必要な経営資源の獲得ができる。経営資源の獲得し、それを開発できる。（レベル 3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。）る。） 3-2-3 必要な財務知識を獲得できる。財務知識を用いて予算管理できる。（レベル 3:自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。） 4-1-4 将来像（ビジョン）を描ける。将来像を描き、それを具現化できる。（レベル 4:単独で行うことができる。）			
履修条件 （履修数の上限、要求する前提知識等）	特に前提知識は問わないが、グループワークを実施するため、積極的にグループ活動に参加し、最低1～2回はグループリーダーを担当し、グループワークでの自らの役割に熱意を持つこと。			
到達目標	上位到達目標			
	顧客パーセプション理解のための調査計画ができる。また、事業継続戦略を立案でき、チームメンバーとして、ディスカッションを通じて、顧客理解や組織理解を実践することができるレベル。			
	最低到達目標			
	顧客パーセプション理解のための調査コンテンツを作成できる。また、ビジネスインパクト分析とリスクアセスメント及び事業継続戦略のドキュメンテーションができる。			
授業実施形態 （単一または複数から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点	
	対面型	—		
	ハイフレックス型	○	発問とディスカッションを多用した講義形式。 単独でリスク分析を行う。 グループで事業継続計画の策定を行う。	
	録画視聴型	○	演習の基礎知識となる講義を実施する。	
授業外の学習	毎回の講義前に、LMS で配布する資料で予習すること。グループで実施する演習課題は事前に理解しておかないとグループ作業に影響するため、復習しておくこと。事業継続計画の実施においては、ディスカッションが重要であるため、授業外でもグループメンバーと積極的に議論に参加する心がけをもつこと。			
授業の進め方 （グループワーク方式など、進め方の特徴）	本講義は、前半で主としてビジネスを永続させるための調査手法及び事例について学習する。具体的には、定量的調査手法および定性的（質的）調査手法である。後半では、事業継続計画の基礎と関連する事例について学習する。組織及びステークホルダーに関する知識の抽出と、これらをもとにして演習をグループベースで行い、その成果について発表及びディスカッションを行う。これらを実施する原則においては、組織を的確に理解することが求められるため、会社情報（会社四季報）などの読み方や、数字や組織構成の裏に隠れている組織の特色発見についても学習する。			
授業の計画	回数	内容		授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	本講義のガイダンス：学生が講義選択の判断ができるように、講義の目的と全15回の構成を説明する。特に、前半の授業で扱う調査手法のタイプ、後半の授業で扱う事業継続戦略における概念について説明を行い。評価方法などについても説明する。		[ハ]
	第2回	調査手法（１）：ステークホルダー分析の事例について紹介する。特に、アンケート、インタビュー、観察など多種多様な調査手法について、その特徴や効果について説明を行い、状況に応じた事例やプロセスについて検討する。顧客パーセプション分析の事例について紹介する。顧客が体験する前に収集する体験に関する調査の手法やその内容について説明する。さらに、収集した顧客パーセプションの分析手法の一例について紹介する。		[録]

	第3回	調査手法（２）：ステークホルダー分析や顧客のパーセプション分析を行うための調査コンテンツをグループで作成する。さらに、そのコンテンツによりどのような分析が可能か討議を行うことで、不足している項目や不要な項目について理解する。	[凡]
	第4回	調査手法（３）：簡単な調査からの知識発見と事業創造の事例について紹介する。これらの調査のステップやプロセス、内容、および方法について説明するとともに、それを用いることで、どのようにビジネスが発展するかについて解説する。	[録]
	第5回	調査手法（４）：顧客調査のための調査シート作成について紹介し、演習を行う。グループごとに、考えられる業種やシチュエーション、課題に対して、それを本質的に分析し、見極めるための調査シートを作成し、その調査シートの品質について検討する。収集したいデータと調査シートに整合性があるかを検討する。さらに、作成した調査シートについて、発表を行い、改善点について議論する。	[凡]
	第6回	調査手法（５）：ステークホルダーの分析や顧客パーセプション分析を経た事業創造アプローチについて説明する。顧客のウォンツとニーズについて整理し、そのような方策を取りうるかどうか、その一例について解説する。	[録]
	第7回	調査手法（６）：調査内容から具体的な事業創造を試みる。グループで開発した調査シートや調査項目を元に、どのように事業創造が可能か検討を行い、いくつかの例の作成を試みる。成果について発表を行い、改善点について討議する。	[凡]
	第8回	事業継続計画の基礎（１）：事業継続計画の必要性及びその根拠について説明し、策定時の注意点、運用方法の概要について説明する。特に、過去に事業継続計画を策定していた企業がどのように破壊的脅威から逃れることができたかなど事例を通して学習する。	[録]
	第9回	事業継続計画の基礎（２）：具体的な災害においてとりうる行動についてグループで討議する。特に、地図上に災害により発生するインシデントを描画し、目的を達成するための代替的手法を発見することが可能かどうか検討する。	[凡]
	第10回	ビジネスインパクト分析（１）：ビジネスインパクト分析について説明する。重要業務の選定のための影響度分析、ビジネスインパクト分析による業務がストップした際にビジネスに対して与える影響度を分析する。	[録]
	第11回	ビジネスインパクト分析（２）：具体的な業種における重要業務の選定とビジネスインパクト分析に関する演習を行う。とくに、重要業務の選定とその重要業務が含むタスクの種類やステークホルダーを明らかにし、その業務がストップした場合の影響度を分析する。	[凡]
	第12回	リスクアセスメントと事業継続戦略（１）：リスクアセスメントについて説明する。事業に対して起こりうる災害とインシデントの発生度、脆弱度、影響度を分析する手法を説明する。さらに、事業継続戦略シートを用いた事業の再開シナリオの設計について説明する。	[録]
	第13回	リスクアセスメントと事業継続戦略（２）：複数の状況を想定し演習を行う。リスクアセスメントについては、発生度、影響度、脆弱度などを分析することで、どのような戦略立案が必要となるか検討するための材料を収集する。また、事業継続に必要なボトルネック資源の発見も行う。具体的に事業継続戦略シートをこれまでに作成したビジネスインパクト分析やリスクアセスメントの各表を元に作成し、復旧や事業再開の戦略立案を実施する。	[凡]
	第14回	VBCP と発展内容（１）：ビジネスインパクト分析、リスクアセスメント、事業継続戦略を図的に実施できる手法の一つである VBCP を紹介する。具体的に活用された例を紹介する。さらにパンデミックやテロ、サイバーテロに関して、説明する。	[録]
	第15回	VBCP と発展内容（２）：具体的な事業を対象として VBCP を体験する。その際に、パンデミック、テロ、サイバーテロなどを脅威として、VBCP のマップを描画するグループ演習を実施する。グループ間で発表を行い、討議を行う。	[凡]
	試験	最終試験：本授業で扱った内容に関して、理解度を評価するために最終試験を実施する。	[凡]
成績評価	次の2つにより評価する(合計 100 点満点)。 ・レポート課題 ・最終試験 点数の配分については、別途アナウンスする。		
教科書・教材	適宜 LMS で配布する。		
参考図書	<ul style="list-style-type: none"> ・村上・田附・中野、『事業継続マネジメント』、オーム社、2011 年 ・昆、『実践 BCP 策定マニュアル』、オーム社、2012 年 ・緒方・石丸、『BCP 入門』、日経文庫、日本経済新聞社、2012 年 ・昆、『あなたが作る等身大の BCP』、日刊工業新聞社、2016 年 ・岸・石岡・ほか、『質的社会調査の方法』、有斐閣、2016 年 ・岸川・JMRX、『マーケティング・リサーチの基本』、日本実業出版社、2016 年 ・谷 富夫、芦田 徹郎、『よくわかる質的社会調査 技法編』、ミネルヴァ書房、2009 年 ・谷 富夫、山本 努、『よくわかる質的社会調査 プロセス編』、ミネルヴァ書房、2010 年 ・チャールズ テッドリー、アッバス タシャコリ、『混合研究法の基礎: 社会・行動科学の量的・質的アプローチの統合』、西村書店、2017 年 ・清水裕士、『個人と集団のマルチレベル分析』、ナカニシヤ出版、2014 年 		

V 事業設計工学特別演習

事業設計工学特別演習 1

事業設計工学特別演習 2

専攻名	事業設計工学コース	必修・選択	必修	単位	6	学期	1Q、2Q
科目群	事業設計工学特別演習	科目名	事業設計工学特別演習 1			教員名	コース全教員
		(英文表記)	Advanced Exercises: Business Systems Design Engineering 1				

概要	<p>1 年次では、知識とスキルを講義・演習型科目を通して修得するが、これだけでは未来の価値づくりを担う高度専門職業人「事業イノベーター」として活躍することはできない。実際の業務を成功に導くためには、経験及び業務遂行能力（コンピテンシー）が不可欠である。2 年次で必修となる当科目では、事業イノベーター養成の最終段階として、事業化の提案から事業設計・構築にいたる様々な業務を遂行する未来の価値づくりのプロジェクトを実行する。実際の業務に近いプロジェクトを体験することで、知識・スキルの活用経験を蓄積し、さらにコンピテンシーを修得するために PBL（Project Based Learning）型の演習授業を行う。</p> <p>各プロジェクトの内容は別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照すること。</p>
目的・狙い	<p>当科目の履修段階では、以下の知識・スキル・経験等を有していることが想定・期待される。</p> <p>(1) 本学修学前から既に有している知識・スキル・経験</p> <p>(2) 講義・演習型科目（1 年次）で修得した事業イノベーターとしての知識・スキルと対象領域の現状・課題等</p> <p>これらの知識・スキル・経験等を活用・駆使して、PBL 型のプロジェクト演習を行うことで、事業開発型の高度専門職人材に期待される経験及び業務遂行能力（コンピテンシー）を修得する。PBL のプロジェクト演習を通して各自が修得する知識・スキル・経験は「事業化の提案から事業設計・構築にいたる様々な業務を単独で行うことができる」（レベル 4）を想定している。なお、PBL のプロジェクト演習を通して評価対象となる業務遂行能力（コンピテンシー）の詳細については、「PBL 型科目の成績評価基準」を参照すること。</p>
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<ul style="list-style-type: none"> 22 単位以上（ただし、10 月入学で翌年当科目を履修する学生は 12 単位以上）を取得していること。 PBL 履修期間は PBL 活動に専念することが期待され、並行して講義・演習型科目を履修すべきではなく、修了要件を満足できるように、PBL を履修するまでにあらかじめ必要単位（28 単位）を取得することを推奨する。 履修した科目のうち 7 科目以上は成績評価 4 以上が期待される。 PBL 配属ルール及び履修条件の詳細は、別途配布する「PBL 説明会」を参照すること。
到達目標	<p>上位到達目標</p> <p>事業化の提案から事業設計・構築にいたる様々な業務を単独で行うことができるレベル。「PBL プロジェクト説明書」でのコンピテンシーの評価基準で概ね 4 以上（80 点以上）の評価を受ける。</p> <p>最低到達目標</p> <p>事業化の提案から事業設計・構築にいたる様々な業務を指導者などの指示に基づきアシストできるレベル。「PBL プロジェクト説明書」でのコンピテンシーの評価基準で概ね 2 以上（60 点以上）の評価を受ける。</p>
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	<p>別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照すること。学生自ら場所及び時間を決め、活動する。原則、フェイスツーフェイスでの活動であるが、必要であれば遠隔会議システム等のオンラインコミュニケーションでの活動を行うことがある。</p>
授業外の学習	<p>別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照のこと。</p> <p>原則として週に 9 時間以上の授業活動のほかに、9 時間の授業外活動を 16 週間以上継続すること。授業外活動では、授業活動に必要とされる事前学修、またメンバーに分担された活動中の課題作業（調査、プログラミング、ドキュメント作成等）を行う。</p>
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>原則として、週に 9 時間以上、16 週間以上の活動を計画的に行う。</p> <p>また、月 1 回の教員報告、週 1 回の週報（週間活動報告）提出、学期末ごとのセルフアセスメント提出、第 2 クォータ終了時に実施するコンピテンシースコアシート提出を適切に行うこと。詳細は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」、4 月に開催される「PBL ガイダンス」を参照すること。</p>
成績評価	<p>PBL の成績評価は、成果、セルフアセスメント、コンピテンシースコアシート、週報、活動実績、年間活動報告書等を参照し、PBL の活動及び成果に対する量及び質による評価（100 点満点）と、コンピテンシー獲得度の評価（100 点満点）から総合的に評価する。前者は PBL 活動を評価するもので、後者は獲得したコンピテンシーという汎用能力の評価を行うものである。</p> <p>前者 PBL 活動の評価は、活動の質と量、及び成果の質と量の 4 つの視点で評価項目を定め、100 点満点で評価する。また獲得したコンピテンシー評価は 7 項目のコンピテンシーごとに、1～5 の評価基準を作成し基準の達成度により点数を付ける。活動の評価とメタペテンシーの評価項目や評価基準は PBL ごとに作成する。</p> <p>評価は 3 名の担当教員で成績案を作成し、すべての教員による PBL 成績判定会議で審議し、確定する。</p> <p>評価基準は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」及び「PBL 型科目の成績評価基準」を参照すること。プロジェクトは 1 年間通して行うが、成績・単位は半期（前期・後期）ごとに付ける。</p>
教科書・教材	<p>別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照すること。</p>
参考図書	<p>別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照すること。</p>

専攻名	事業設計工学コース	必修・選択	必修	単位	6	学期	3Q、4Q
科目群	事業設計工学特別演習	科目名 (英文表記)	事業設計工学特別演習 2 Advanced Exercises: Business Systems Design Engineering 2			教員名	コース全教員

概要	<p>1 年次では、知識とスキルを講義・演習型科目を通して修得するが、これだけでは未来の価値づくりを担う高度専門職業人「事業イノベーター」として活躍することはできない。実際の業務を成功に導くためには、経験及び業務遂行能力（コンピテンシー）が不可欠である。2 年次で必修となる当科目では、事業イノベーター養成の最終段階として、事業化の提案から事業設計・構築にいたる様々な業務を遂行する未来の価値づくりのプロジェクトを実行する。実際の業務に近いプロジェクトを体験することで、知識・スキルの活用経験を蓄積し、さらにコンピテンシーを修得するために PBL（Project Based Learning）型の演習授業を行う。</p> <p>各プロジェクトの内容は別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照すること。</p>
目的・狙い	<p>当科目の履修段階では、以下の知識・スキル・経験等を有していることが想定・期待される。</p> <p>(1) 本学修学前から既に有している知識・スキル・経験</p> <p>(2) 講義・演習型科目（1 年次）で修得した事業イノベーターとしての知識・スキルと対象領域の現状・課題等</p> <p>これらの知識・スキル・経験等を活用・駆使して、PBL 型のプロジェクト演習を行うことで、事業開発型の高度専門職人材に期待される経験及び業務遂行能力（コンピテンシー）を修得する。PBL のプロジェクト演習を通して各自が修得する知識・スキル・経験は「事業化の提案から事業設計・構築にいたる様々な業務を単独で行うことができる」（レベル 4）を想定している。なお、PBL のプロジェクト演習を通して評価対象となる業務遂行能力（コンピテンシー）の詳細については、メタコンピテンシー及びコアコンピテンシーの「PBL 型科目の成績評価基準」を参照すること。</p>
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	事業設計工学特別演習 1 の単位を取得していること。
到達目標	上位到達目標
	事業化の提案から事業設計・構築にいたる様々な業務を単独で行うことができるレベル。「PBL プロジェクト説明書」でのコンピテンシーの評価基準で概ね 4 以上（80 点以上）の評価を受ける。
	最低到達目標
	事業化の提案から事業設計・構築にいたる様々な業務を指導者などの指示に基づきアシストできるレベル。「PBL プロジェクト説明書」でのコンピテンシーの評価基準で概ね 2 以上（60 点以上）の評価を受ける。
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照すること。学生自ら場所及び時間を決め、活動する。原則、フェイスツーフェイスでの活動であるが、必要であれば遠隔会議システム等のオンラインコミュニケーションでの活動を行うことがある。
授業外の学習	<p>別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照すること。</p> <p>原則として週に 9 時間以上の授業活動のほかに、9 時間の授業外活動を 16 週間以上継続すること。授業外活動では、授業活動に必要とされる事前学修、またメンバーに分担された活動中の課題作業（調査、プログラミング、ドキュメント作成等）を行う。</p>
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>原則として、週に 9 時間以上、16 週間以上の活動を計画的に行う。</p> <p>また、月 1 回の教員報告、週 1 回の週報（週間活動報告）提出、学期末ごとのセルフアセスメント提出、第 4 クォータ終了時に実施するコンピテンシースコアシート提出を適切に行うこと。詳細は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」、4 月に開催される「PBL ガイダンス」を参照すること。</p>
成績評価	<p>PBL の成績評価は、成果、セルフアセスメント、コンピテンシースコアシート、週報、活動実績、年間活動報告書等を参照し、PBL の活動及び成果に対する量及び質による評価（100 点満点）と、コンピテンシー獲得度の評価（100 点満点）から総合的に評価する。前者は PBL 活動を評価するもので、後者は獲得したコンピテンシーという汎用能力の評価を行うものである。</p> <p>前者 PBL 活動の評価は、活動の質と量、及び成果の質と量の 4 つの視点で評価項目を定め、100 点満点で評価する。また獲得したコンピテンシーの評価は 7 項目のコンピテンシーごとに、1～5 の評価基準を作成し基準の達成度により点数を付ける。活動の評価とコンピテンシーの評価項目や評価基準は PBL ごとに作成する。</p> <p>評価は 3 名の担当教員で成績案を作成し、すべての教員による PBL 成績判定会議で審議し、確定する。</p> <p>評価基準は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」及び「PBL 型科目の成績評価基準」を参照すること。プロジェクトは 1 年間通して行うが、成績・単位は半期（前期・後期）ごとに付ける。</p>
教科書・教材	別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照すること。
参考図書	別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照すること。

情報アーキテクチャコース

I IT 系科目群

ネットワークシステム特別講義

セキュアシステム管理運用特論

IoT 開発特論

システムプログラミング特論

ネットワーク特論

Java プログラミング技法

システムソフトウェア特論

情報アーキテクチャ特論 1

情報セキュリティ特論

OSS 特論

データベース特論

データインテリジェンス特論

ビッグデータ解析特論

クラウドインフラ構築特論

IT・CIO 特論

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	ネットワークシステム特別講義 Network System Design		教員名	飛田 博章	

概要	<p>本講義では、数名の学生から成るプロジェクトにより、小規模ネットワークシステムを実際に設計・構築しながら、ネットワークシステム構築プロセスの修得を目指す。構築プロセスの修得を第一の目的とし、あらかじめ設定されたプロセスに沿って作業を行うことにより、ネットワークシステム構築プロジェクトを遂行する能力を身に付ける。なお、演習の開催が不可能な場合はすべての授業を遠隔による授業に差し替える。</p>		
目的・狙い	<p>本講義では、プロセスの管理に重点をおき、プロジェクトメンバの役割を明確にした上で、設計、構築、テスト、運用という一連の作業を実施していく。ここでは、構築プロセスの修得が第一の目的であるが、同時にネットワークシステムの設計、構築に関する知識、スキルの修得を目指す。さらに、プロジェクト作業を通じ、コミュニケーション、モデリング、ドキュメンテーション、マネジメントなどのスキル強化も図る。構築対象となるネットワークシステムは、グローバル IP アドレスを一つ割り当てられた小規模な組織であり、数台のサーバとルータを利用し、組織外部からのアクセスに対し、DNS、メール等のサービスを提供する。学外ネットワークに対してサービスを公開するため、セキュアなネットワークシステムを設計、構築、運用する能力が修得できる。</p> <p>修得できる知識単位:</p> <p>(システム) ネットワークの基礎技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) ネットワークの構築技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) ネットワークの利用技術 (レベル 4)</p> <p>(非機能要件) セキュリティの構築技術 (レベル 3)</p> <p>(非機能要件) セキュリティの利用技術 (レベル 3)</p> <p>(非機能要件) セーフティ (分析、設計) (レベル 3)</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	ネットワーク特論を履修していること、又は同等の知識を有していること。		
到達目標	上位到達目標		
	ネットワーク技術・ネットワークサービスの動向を広く見通し、目的に応じて適用可能な技術・サービスを選択できる。また、要求仕様に応じたネットワークシステムの設計ができる。		
	最低到達目標		
	小規模なネットワークシステム（インターネットサーバ）の構築・運用ができる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	グループに分かれ、小規模ネットワークの設計・構築を行う。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<p>毎回の講義前に、テキストで該当箇所を予習すること。講義時間内の演習時間はチームメンバが集まれる貴重な時間である。この時間に効率良く共同作業を行い、個人作業を分担して、次回の講義に備えること。毎回、講義前日までに、作成ドキュメントの途中経過、プロジェクト管理に関するドキュメントをチームごとに提出する。提出物の内容は、進捗報告書、作業手順書、作業ログ、各種ドキュメントの途中経過（設計書等）、セキュリティ関連書類等である。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>10 人程度の小規模な組織を対象に、ネットワークシステムを構築し、運用するという形態を想定する。ネットワーク接続形態は、ISP と契約し、グローバル IP アドレスを 1 つ割り当てられている状態とする。サーバ構築には PC サーバを利用し、アクセスルータ、内部ルータ、外部公開用サーバ (SSH、DNS、SMTP、HTTP など)、内部用サーバ (SSH、DNS、SMTP、POP/IMAP、DHCP など) の 4 種類のシステムを構築する。ここでは、イテレーション型の構築プロセスを採用し、サイクル (1) において学外ネットワークからの SSH アクセスを実現した後、サイクル (2) においてその他のサービスの構築を行っていく。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	講義の目的と15回の学習内容を解説する。また、グループ分けを行う。	[対]
	第2回	ネットワーク設計書とシステム設計書に関する説明をする。	[ハ]
	第3回	グループごとに小規模ネットワークシステムの構築を行う。	[対]
	第4回	ネットワーク機器と、SSHとhttpに設定方法を学ぶ。	[ハ]
	第5回	グループごとに小規模ネットワークシステムの構築を行う。	[対]
	第6回	ルータとルーティングに関して理解を深める。	[ハ]
	第7回	グループごとに小規模ネットワークシステムの構築を行う。	[対]
	第8回	ネットワークセキュリティに関する考え方を学ぶ。	[ハ]
	第9回	グループごとに小規模ネットワークシステムの構築を行う。	[対]
	第10回	ネットワークの運用管理について学ぶ。	[ハ]
	第11回	グループごとに小規模ネットワークシステムの構築を行う。	[対]
	第12回	ネットワークの監視について学ぶ。	[ハ]
	第13回	グループごとに小規模ネットワークシステムの構築を行う。	[対]
	第14回	ネットワークとグラフ理論について学ぶ。	[ハ]
	第15回	ネットワークシステム構築成果をチームごとに発表する。	[対]
	試験	授業の振り返りを行う。	[ハ]
成績評価	次の3つのポイントで評価する(合計100点満点)。 プロジェクト活動状況(活動の質と量、チームへの貢献度を総合的に評価) 30点 提出物(毎回の提出物、最終成果物) 40点 振り返り 30点		
教科書・教材	LMSで配布するので、各自授業前にダウンロードすること。		
参考図書	みやた ひろし著、『インフラ/ネットワークエンジニアのためのネットワーク技術&設計入門 第2版』(SBクリエイティブ、2019年) 谷本 篤民著、『1週間でCCNAの基礎が学べる本 第2版』(インプレス、2016年) Jay LaCroix 著、『Mastering Ubuntu Server: Master the art of deploying, configuring, managing, and troubleshooting Ubuntu Server 18.04, 2nd Edition』(Packt Publishing, 2018年)		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	セキュアシステム管理運用特論 Secure System Operation		教員名	真鍋 敬士	

概要	<p>情報セキュリティ上の脅威に対抗するためには、最新の情報セキュリティに関する情報を収集するとともに、平時におけるシステムの状況を把握できるようにする等、日常的な運用作業での取り組みが有効である。</p> <p>本講義では、情報システムに対する攻撃を想定したシステム運用や事案発生時の対処方法について事例をあげながら紹介する。また、情報セキュリティに関するテーマでグループワークを行い、調査方法や対策等の提案も含めてプレゼンテーション形式で報告していただく。</p>		
目的・狙い	<p>システムをセキュアに管理運用していく上で関係する要素技術の整理を行い、それらが情報セキュリティ上の脅威に対してどのように影響を及ぼすのかについて理解することを目的とする。特に、事案発生時の調査や分析においてどのようなデータがどのように活用され得るかについて学習することにより、それらを意識した平時の運用や対応を習慣化することを目指す。</p> <p>具体的には、学習者はこの講義を通じて以下の知識・能力を習得することができる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 情報システムに対する脅威の変遷と最新の傾向や動向についての知識を習得する。 2. 実際のデータを用いた作業や事例の調査を通して、学習した要素技術の実用方法を理解する。 <p>この科目を通して学習・体験する技術や手法には、専門事業者が持つ高価な設備と経験に基づく高度な知識を背景に実施されるべきものもある。この科目ではそれらを習得することを目指すのではなく、それらに対する認識を深めることにより、専門事業者をより有効に活用する視点を養うことを狙いとしている。</p> <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (システム) ネットワークの利用技術 ・ (保守・運用) システム保守・運用・評価 ・ (保守・運用) 障害修理技術 ・ (保守・運用) 施工実務技術 ・ (非機能要件) セキュリティの基礎技術 ・ (非機能要件) セキュリティの構築技術 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	コンピュータのアーキテクチャやネットワークに関する知識を前提として講義を行うため、ネットワーク関係の講義を受講しているか、業務等において同等の知識を持っていること。		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最新の情報セキュリティに関する情報を収集することができるようになる。 ・ 発生し得る事案に対して、可能な限り早期に検知するために必要なシステムの構成を検討、提案できるようになる。 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習時における情報セキュリティ事情を知識として持つことができる。 ・ 発生した事案に対してトリアージを行い、担当者や専門事業者等への依頼を適切に行うことができるようになる。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	<p>グループワーク(ドリル形式と CTF 形式の演習とプレゼンテーション) および試験は対面もしくは遠隔での出席を求める。出席票の提出をもって出席とみなす。</p> <p>なお、グループワークへの参加実績は講義時間外での作業も含めて判断するものとし、当日欠席の場合でも録画視聴と出席票の提出を期待する。</p>
	録画視聴型	○	<p>座学講義とハンズオン型の演習は対面、遠隔、録画視聴のいずれでも出席を可とする。録画視聴については、特段の理由がない限り、次回講義前に済ませることを期待する。出席票の出席をもって出席とみなす。</p>
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業後に提出する出席票にフィードバックを記入する。 ・ 報道等で取り上げられる情報セキュリティに関する話題に注目し、日常的に情報収集する習慣を身に付ける。 ・ ハンズオンの内容の再確認を各自で行う。 ・ グループワーク等に関する調査や取りまとめをグループ内で調整・分担して行う。 		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>授業は、以下の3部構成となっている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション: 情報セキュリティの概論や関連する要素技術について、この科目の視点で(再)学習する。 2. 調査・分析: ネットワーク、マルウェア、システムの調査・分析手法について、その意味や手法等を学習する。 3. 事案対応 <p>この科目では、講義の中でも可能な限り実作業を実施できるように、早い回において作業環境の構築を行う。その環境を使うことで、随時ハンズオンを行ったり、グループワークにおいてドリルや CTF のような方式を採用することにより、トレーニング手法を体験していただく。なお、ハンズオンやグループワークのテーマや実施日程は、講義日程等により調整する可能性がある。</p>		

	なお、新型コロナウイルス感染症の流行状況によっては、対面授業を減らし、遠隔及び録画授業を多めにする等の工夫を行う。		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	この科目における学習内容と講義の進め方についての概説と情報セキュリティの基礎となる考え方の紹介を行う。	[録]
	第2回	情報システムに対する脅威の変遷と最新の傾向を学習する。	[録]
	第3回	ネットワーク、オペレーティングシステム、プログラミング、認証等の要素技術を情報セキュリティの視点から再確認する。	[録]
	第4回	第3回に続いて要素技術の再確認を行い、情報システムの調査を題材としたハンズオンを実施する。	[録]
	第5回	ネットワーク上のデータを解析する手法について学習する。	[録]
	第6回	【グループワーク】ネットワーク解析に関する課題に対する調査を実施する。	[ハ]
	第7回	ネット上の公開情報をもとに調査・収集を行うオープンソースインテリジェンスについて学習する。	[録]
	第8回	ウイルスや攻撃ツール等の「マルウェア」の解析で使われる技術や求められる環境等について学習する。	[録]
	第9回	システムの調査・解析の手法や環境について説明することで、デジタルフォレンジックスにおいて使われる技術について学習する。	[録]
	第10回	第8,9回で学習したシステム解析やマルウェア解析において使われる手法や技術のいくつかを取り上げて、ハンズオンを実施する。	[録]
	第11回	情報セキュリティに関する実際の事件や事案を取り上げ、報道のされ方や関係する法令、その後の取り組み等の視点から学習する。	[録]
	第12回	【グループワーク】これまで学習した分析手法を体感することを目的とした演習を実施する。初回は提示された課題を解くことで教材データへの理解を深める。	[ハ]
	第13回	【グループワーク】第12回で扱った教材データから状況を想定してとるべき対処を検討する。	[ハ]
	第14回	【グループワーク】第12,13回の分析や検討の結果をもとに、原因や対策、実際の事案等について調査する。	[ハ]
	第15回	【グループワーク】第12,13,14回の内容についてプレゼンテーションを行う。	[ハ]
	試験	第15回の講義終了後に試験を行う。試験を同等のレポート提出とする場合もある。	[ハ]
成績評価	次の3つのポイントで評価する(合計100点満点)。 ・課題 10点 講義後に課した課題を各個人で1週間内に提出する。適切な質問や意見など講義への積極的な参加実績も加味する。 ・プレゼンテーション(発表内容) 40点 グループ単位で発表内容によって評価する。評価は学生による採点を中心に行う。 ・最終試験 50点 第15回の講義終了後に試験を行う。試験を同等のレポート提出とする場合もある。		
教科書・教材	LMSで配布するので、各自授業前にダウンロードすること。		
参考図書	Chris Sanders 著『実践 パケット解析 第3版 ―Wiresharkを使ったトラブルシューティング』(オライリージャパン、2012年)、3,456円、ISBN4873118441 新井 悠, 岩村 誠, 川古谷 裕平, 青木 一史, 星澤 裕二著『アナライジング・マルウェア ―フリーツールを使った感染事案対処』(オライリージャパン、2010年)、3,240円、ISBN4873114551 鎌田 敬介著『サイバーセキュリティマネジメント入門』(きんざい、2017年)、1,728円、ISBN4322132151 Douglas E. Comer 著『Internetworking with TCP/IP Volume One』(Prentice Hall、2013年)、\$157.8、ISBN013608530X Michael Ligh, Steven Adair, Blake Hartstein, Matthew Richard 著『Malware Analyst's Cookbook and DVD: Tools and Techniques for Fighting Malicious Code』(Wiley、2010年)、\$59.99、ISBN0470613033 不正アクセス対策法制研究会 編著『逐条 不正アクセス行為の禁止等に関する法律〔第2版〕』(立花書房、2012年)、3,640円、ISBN480370919X 山本 正行 著『クレジットカードの仕組と決済代行業者の位置づけ』、 https://www.cao.go.jp/consumer/doc/100924_shiryu1.pdf		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	IT 系科目群	科目名	IoT 開発特論			教員名	飛田 博章
		(英文表記)	IoT (Internet of Things) Development				

概要	大規模システムや基幹システムの開発分野と同様に、IoT(Internet of things)で注目されている組込システム分野は、ソフトウェアとハードウェアをはじめとした様々な要素技術を組み合わせて実現したサービスやプロダクトは産業の重要な一角を占め、従事する情報アーキテクトも増えている。近年では、スマートホーム、ロボットや、自動運転などでも注目されている。本講義では、IoT や組込分野・各種デバイスで用いられるソフトウェア及びハードウェア技術を学ぶ。実際にセンサーを動作させることにより実践的なスキルの修得を目指すとともに、3D プリンターや学習手法など関連技術についても学ぶ。		
目的・狙い	<p>組込システム分野のソフトウェア技術と組込分野のソフトウェア産業に深い理解と応用力を身につけた技術者を育成することを目的とし以下のスキルを獲得することを狙いとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・IoT、組込システム環境で用いられるソフトウェアやハードウェアの基本技術が理解できる。 ・これらを用いた簡単なプログラミングができる。 ・関連の業界の技術や業界の動向を把握できる。 <p>これらを活用した実システムやそれを活用したビジネスを理解できる。</p> <p>修得できる知識単位:</p> <p>(システム) Web システムの基礎技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) プラットフォームの基礎技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) プラットフォームの構築技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) ネットワークの基礎技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) IoT の基礎技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) IoT の構築技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) IoT の利用技術 (レベル 4)</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	IT 技術者として実務経験があるか、言語を問わないがプログラミング技術を習得済であること。		
到達目標	上位到達目標		
	関連の業界の技術や業界の動向を把握できる。		
	これらを活用したシステムやサービスのプロトタイプを実現できる。		
	最低到達目標		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	IoT、組込システムで用いられる技術が理解できる。		
	これらを用いた簡単なプログラミングができる。		
	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	○	平日の講義はビデオのみで行い、質問などは LMS 又は土曜日の対面講義で受け付ける。土曜日の対面講義はオンライン又は品川キャンパスで行う。
授業外の学習	受講準備として、LMS で配布する教材を授業前に目を通しておく。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	本講義では、講義、個人演習、グループ演習よりなる。個人とグループ演習はプレゼンテーションを行う。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
授業の計画	第 1 回	学生が講義選択の判断ができるよう講師紹介、講義目的と、15 回の学習内容を説明する。IoT や組み込み分野・各種デバイスで用いられる技術、背景となる要件、実システムの例、業界動向を学ぶ。	[対]
	第 2 回	プログラムによりセンサーを動作させる。 主に出力に関するハードウェアを扱う。	[録]
	第 3 回	第 2 回の授業をもとに演習を行う。	[対]
	第 4 回	様々なセンサーを動作させる。 入力と出力に関するハードウェアを扱う。	[録]
	第 5 回	第 4 回の授業をもとに演習を行う。	[対]
	第 6 回	プロトタイピングと 3D プリンターについて概要を学ぶ。	[録]
	第 7 回	テーマをもとにアイデアスケッチを行う。	[対]
	第 8 回	より高度な開発を行うためのソフトウェアとハードウェアの連携手法を学ぶ。	[録]
	第 9 回	アイデアをもとに実現したプロトタイピングの発表を行う。	[対]
	第 10 回	画像を中心に、データ収集と学習について学ぶ。	[録]
	第 11 回	グループに分かれ、テーマを設定する。	[対]
	第 12 回	センシングデータを中心に、データ収集と学習について学ぶ。	[録]
	第 13 回	グループに分かれ、テーマをもとに実装作業を行う。	[対]
	第 14 回	IoT に関する事例を学ぶ。	[録]
	第 15 回	グループ演習の発表を行う。	[対]
	試験	総括	[録]
成績評価	レポート 30 点、個人演習 30 点、グループ演習 40 点として、評価する(合計 100 点満点)。		
教科書・教材	LMS で配布する。		
参考図書	八子 知礼 他, IoT の基本・仕組み・重要事項が全部わかる教科書, SB Creative, 2017.		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	システムプログラミング特論 System Programming			教員名	小山 裕司

概要	<p>プログラミングを効率的に行うには、プログラミング言語及び開発環境の理解が不可欠である。数百のプログラミング言語が存在し、得手不得手がある。単独の言語であらゆる問題に対峙することは難しい。言語次第で、問題の扱い自体が変わる。また、実用のプログラムを実装する際、実行効率及び開発効率を考慮する必要がある。</p> <p>当科目では、各種のプログラミング言語（スクリプト言語等）と開発環境に関する講義及び演習からプログラミング技術を修得する。さらに、実行効率の改善のために、データ構造、アルゴリズム、計算量を扱う。優れたデータ構造及びアルゴリズムは実行効率を劇的に改善することができる。開発効率の改善のために、システムコール及びライブラリを活用した API プログラミングを扱う。API の活用は優れた先人のプログラミング成果の再利用に相当する。ライブラリの活用は実行効率及び移植効率にも効果がある。</p>		
目的・狙い	<p>当科目はプログラミング言語、開発環境、実行効率、開発効率に関連する以下の事項の理解、修得を目的とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラミング言語の処理系、開発支援ツール及びプログラミング技術 ・計算機科学基礎（計算量、データ構造、アルゴリズム） ・各種システムコール、ライブラリの活用（各種コレクション技術、I/O、インターネット技術等）及び実装 ・各種 Open API（Web API）及びクラウド技術の活用 <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（システム）ソフトウェアの基礎技術（レベル4） ・（システム）ソフトウェアの構築技術（レベル4） ・（システム）Web システムの基礎技術（レベル3） ・（システム）プラットフォームの基礎技術（レベル3） ・（システム）クラウドコンピューティングの基礎技術（レベル3） ・（非機能要件）非機能要件（可用性、性能・拡張性）（レベル3） ・（共通技術）IT 基礎（レベル4） 		
履修条件 （履修数の上限、 要求する前提知識 等）	<ul style="list-style-type: none"> ・基本情報技術者試験レベルの知識があること。特に、ハードウェア、ソフトウェア、ネットワーク、プログラミングの基礎知識、またプログラミング言語の変数、制御の流れ、関数等の理解は必須である。 ・PC の基本操作ができること。 ・プログラミングの経験が無い学生は「Java プログラミング技法」、Unix 互換 OS 操作の経験が無い学生は「システムソフトウェア特論」を履修することを強く推奨する。 		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・各プログラミング言語の特徴を理解し、特定のプログラミング言語をある程度自由に活用できるレベル ・各種開発ツールの特徴を理解し、ある程度活用できるレベル ・ある程度計算量を考慮したプログラミングができるレベル ・拡張ライブラリの調査及び選択ができるレベル ・Open API（Web API 等）、クラウド等の知識が修得できているレベル 		
	最低到達目標		
授業実施形態 （単一または複数 から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	遠隔での出席可。グループワーク、グループ討議、クラス討議、試験を行う。学生による授業参加を特に期待する。
	録画視聴型	○	当科目は奇数回の授業は録画のみ。授業で指定された視聴確認で出席扱いとする。偶数回（土曜1限）の授業には、直前の奇数回の録画を視聴し、内容を理解した上で出席すること。
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の前に、配布資料で授業の内容を確認すること。 ・授業で指示された課題に取り組み、期限までに提出すること。 		
授業の進め方 （グループワーク 方式など、進め方 の特徴）	当科目は、講義、演習から構成される。授業計画を以下に示す。時間的制約等から、課題の内容相当を試験の際に出題することがある。学生の興味等から、内容は適宜調整する可能性がある。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第 1 回	<p>〈概要〉</p> <p>学生が科目選択の判断ができるように授業の目的と 15 回の授業内容を解説する。</p> <p>〈プログラミング言語〉</p> <p>当科目では、Python スクリプト言語をメインに、例には C、Java、Perl 等の言語を引用する。現行のシステム開発の効率を考慮すると、スクリプト言語を自由自在に活用するスキルは不可欠である。プログラミング言語の概論、プログラムの作成と実行、変数と演算、関数と制御の流れを扱う。</p>	[録]
	第 2 回	<p>〈演習〉</p> <p>前回の内容の演習及びコード評価を行う。</p>	[ハ]
	第 3 回	<p>〈スクリプト言語の特徴〉</p> <p>スクリプト言語の特徴として、文字列とリスト等を扱う。</p>	[録]
	第 4 回	<p>〈演習〉《課題 1》</p> <p>前回の内容の演習及びコード評価を行う。開発支援ツールにも言及する。</p>	[ハ]
	第 5 回	<p>〈効率〉</p> <p>実行効率（計算量等）と開発効率を扱う。実行効率を改善するため、アルゴリズムとデータ構造の理解を確認する。</p>	[録]
	第 6 回	<p>〈演習〉《課題 2》</p> <p>前回の内容の演習及びコード評価を行う。</p>	[ハ]
	第 7 回	<p>〈コレクション〉</p> <p>現行のプログラミング言語でのコレクション（Jcf 等）型を扱う。List（ArrayList、LinkedList、Queue 等）、Set、Map 等の特徴を理解する。</p>	[録]
	第 8 回	<p>〈演習〉《試験 1》</p> <p>前回の内容の演習及びコード評価を行う。コーディングの試験を行う。</p>	[ハ]
	第 9 回	<p>〈API 1〉</p> <p>開発効率及び実行効率の改善のため、システムコール、ライブラリ（I/O、スレッド、インターネット等）を扱う。</p>	[録]
	第 10 回	<p>〈演習〉</p> <p>前回の内容の演習及びコード評価を行う。</p>	[ハ]
	第 11 回	<p>〈API 2〉</p> <p>システム関連の操作のためのシステムコール、ライブラリを扱う。</p>	[録]
	第 12 回	<p>〈演習〉《課題 3》《課題 4》</p> <p>前回の内容の演習及びコード評価を行う。</p>	[ハ]
	第 13 回	<p>〈Open API〉</p> <p>インターネット上に公開されている Open API の概要と特徴を扱う。</p>	[録]
	第 14 回	<p>〈発表〉</p> <p>課題 4 の発表及び議論あるいは課題 3 に関する演習及びコード評価を行う。</p>	[ハ]
	第 15 回	<p>〈クラウド技術〉</p> <p>Google App Engine 等のクラウド技術の概要、プログラミングを扱う。</p>	[録]
	試験	<p>〈総括、試験〉《試験 2》</p> <p>これまでの講義を振り返り、総括する。第 1 回から第 15 回までの内容の理解に関する筆記試験を行う。</p>	[ハ]
成績評価	課題（レポート、演習）50%、試験（コーディング及び筆記）50%を基準として総合的に評価する。レポート等の提出物は締切を厳守されたし。		
教科書・教材	資料は LMS 上にオンラインで配布する。		
参考図書	講義時に適宜指示する。		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	ネットワーク特論 Computer Networks			教員名	宮崎 淳

概要	<p>近年のシステムは Web を介したネットワークシステムとして構築されており、ネットワークシステムの基礎を理解することが、社会的ネットワークシステムにおける数々の応用、課題を理解するために欠かせないものとなっている。</p> <p>授業は講義と演習から構成されており、講義では TCP/IP ネットワークの基礎及びネットワークシステムに関する近年理論の理解、ネットワークシステムの設計運用の基礎について学ぶ。演習では、実験や課題作製などを通して基礎的知識の定着を図るとともに、知識を利用する応用?、授業終了後の継続的学修の指針の獲得を目指す。</p>		
目的・狙い	<p>当科目はネットワークシステムに関連する以下の事項の理解・修得を目的とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネットワークシステムに関する基本的な理解 ・ネットワークの種類や特徴、データ通信と制御、プロトコル ・DNS サーバ、メールサーバ、HTTP サーバなど、各種サーバの構造・動作原理と構築方法 ・ネットワークシステム構築プロセス（設計、構築、テスト、運用管理）の概要 <p>修得できる知識単位:</p> <p>(システム) Web システムの基礎技術 (レベル 2)</p> <p>(システム) ネットワークの基礎技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) ネットワークの構築技術 (レベル 2)</p> <p>(システム) ネットワークの利用技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) IoT の構築利用技術 (レベル 3)</p> <p>(システム) ネットワークシステムの理論 (レベル 3)</p> <p>(システム) ネットワークシステム上の情報伝搬・社会ネットワークシステムにおける感染伝播 (レベル 3)</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<ul style="list-style-type: none"> ・Unix システムのシステムコマンド、Shell Script を使ったオペレーティングシステムの管理の基礎が分かっていること ・C 言語、Python 言語を読むことができ、変更を加えながら、コンパイル(make)、実行ができること ・グラフ理論の基礎について理解していることは望ましいが、授業で補う ・微分方程式の基礎は理解していること 		
到達目標	上位到達目標		
	<p>(1) ネットワークシステムについて、理論面を理解し、現実の Web システムの中で、自分が思い描くシステムを設計し、実装できること</p> <p>(2) 目的に応じて、適切なネットワーク技術・ネットワークサービスを選択するための知識を修得している。</p> <p>(3) ネットワーク応用システムにおける課題を理解し、自ら課題解決を実践できる。</p>		
	最低到達目標		
	Web システムの設計を将来企画遂行する場合に、ローカル PC 等自分が管理できる小規模なネットワークシステム（インターネットサーバ）の構築・運用に必要な知識とスキルを獲得していること		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	教室及び遠隔で出席を求める。録画視聴では出席とならない。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・予習：テキストや参考資料などを用いて、授業内容の概要を把握すること。（詳細は、第 1 回目授業にて案内） ・復習：毎回の授業後に、小テストの受験やミニレポートの作成などを行い、授業内容を復習すること。（詳細は、第 1 回目授業にて案内する） ・演習にて課される課題に対してレポートを作成、プログラム演習の場合はソースコードを添付して、指定された提出期限までに提出すること。 		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>本授業では、ネットワークシステムの基礎的知識を学習し、後半はプロトコルの詳細やインターネットサーバの機能、ネットワーク設計を支える理論などを学習する。さらに演習は個人及びグループで行い、実験やネットワークシステムに関する近年動向のサーベイなどを通して、ネットワークシステムに対する理解を深める。</p> <p>なお、受講生の興味や関心に応じて、内容の深浅、順序等は適宜調整する可能性がある。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	授業の概要&ネットワークシステムの歴史?授業選択の判断ができるように、授業の目的と全15回の学習内容を確認する。また、第1回目の内容として、ネットワークシステムを学際的にとらえた全体像について俯瞰する。	[ハ]
	第2回	演習1：ネットワークシステムの形態上の分析、ビジュアライゼーションについてグループ演習し、発表する。	[ハ]
	第3回	OSI 参照モデルやプロトコルの概念等ネットワークの基本的な背景知識について学ぶ。ネットワーク機器：OSI 参照モデル、TCP/IP の4つの階層とネットワーク機器について学ぶ。	[ハ]
	第4回	IP アドレスとネットワーク：IPv4 を中心とした IP アドレスの仕組みと IP アドレスによるデータ通信について学ぶ。ルーティング：IP によってデータがどのようにしてネットワーク上を運ばれていくかを学ぶ。	[ハ]
	第5回	演習2：IP に関連する技術：DNS、ICMP、DHCP の主な機能、プロトコル、実装技術、サーバ構築の際の主な設定方法を学ぶ。	[ハ]
	第6回	アプリケーションプロトコル（1）：HTTP、FTP の主な機能、プロトコル、実装技術、サーバ構築の際の主な設定項目等を学ぶ。	[ハ]
	第7回	演習3：ローカルサーバを構築する。Docker を設定する。	[ハ]
	第8回	アプリケーションプロトコル（1）：HTTP、FTP の主な機能、プロトコル、実装技術、サーバ構築の際の主な設定項目等を学ぶ。 アプリケーションプロトコル（2）：SMTP、POP/IMAP の主な機能、プロトコル、実装技術、サーバ構築の際の主な設定項目等を学ぶ。 アプリケーションプロトコル（3）REST の基礎を学ぶ。	[ハ]
	第9回	演習4：演習3で構築したローカルサーバ上で、各アプリケーションプロトコルを確認する。グループ演習とし、各プロトコルの操作ログをレポート化する。（各自）	[ハ]
	第10回	IoT システムの基本について学ぶ。	[ハ]
	第11回	演習5：RasPi を活用した IoT 向け edge server を設定する。グループ演習とし、IoT サーバの構築概要をレポート化する。（各自）スクリーンショットをつける。	[ハ]
	第12回	ネットワークシステムのデザインパターンについて学ぶ。	[ハ]
	第13回	演習6：参考図書2のデザインパターンの幾つかのデザインパターンについて学び、グループ討議を通してネットワークシステム設計におけるデザインパターンの留意点をレポート化する。（各自）	[ハ]
	第14回	ネットワーク科学についてその概要を学ぶ。	[ハ]
	第15回	演習7：ネットワーク科学が対象とするネットワークと、コンピュータネットワークシステムの接点、相違点、課題についてグループ討議しレポート化する。（各自）	[ハ]
	試験	記述形式の筆記試験を実施する。	[ハ]
成績評価	次の2つのポイントで評価する(合計100点満点)。 ・各演習群にて課す課題 計50点 (演習1：5点、演習2：5点、演習3：5点、演習4：5点、演習5：10点、演習6：5点、演習7：10点) ・最終試験 55点		
教科書・教材	・みやたひろし著, "仕組み・動作が見てわかる図解入門 TCP/IP" 発行 SB クリエイティブ, INBN978-4-8156-0497-4 ・RaspberryPie 2 modeB ワンボードマイコン (調達・購買は別途相談、演習2で使用予定, IoT 実験です)		
参考図書	1. Philip Mille, 菊田幸雄, "マスタリング TCP/IP 基礎編", 発行 Ohmsha, ISBN978-4-274-22447-8 2. みやたひろし著, "ネットワークデザインパターン", 発行 SB クリエイティブ, ISBN978-4-7973-8284-6 3. バラバジ, 池田裕一他, "ネットワーク科学", 発行共立出版, ISBN978-4-320-12447-9		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	Java プログラミング技法 Software Development Using Java			教員名	張 晁逢

概要	<p>オブジェクト指向によるソフトウェア開発での基礎と実践力を育成する。オブジェクト指向言語に分類される Java は、サーバ・クラウド・デスクトップ等で稼働するソフトウェアを開発するために広く利用されているプログラミング言語である。</p> <p>そこで本講義の前半で、ここに至るオブジェクト指向に関しその本質を学ぶ。オブジェクト指向とは、拡張性や保守性の高いプログラムを書くために不可欠な考え方です。講義ではアクティブラーニングの手法を取り入れ、講義中に受講者自身で実際にプログラムを作成し、主体的・積極的に学ぶことで知識を定着させる。後半で、理解したアクティブラーニングとシステムへの展開方法を習得する。これにより実務で Java を利用したプログラムを作成する応用力を身に付ける。</p> <p>本講義では、Java 以外のプログラミング言語を少なくとも 1 つ修得している受講者を主な対象とし、Java 言語によるプログラミングについての授業を行う。講義では Java 言語の中級程度の知識を簡潔にまとめる。</p>		
目的・狙い	<p>本講義では、オブジェクト指向プログラミング (oop) 共通文法の基礎を修得し、特にクラス (構造) の仕組みを理解しプログラムの読解と作成ができることを目的とする。具体的には以下の内容についての講義を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オブジェクト指向誕生の背景と本質 ・システム開発におけるモデルとアーキテクチャと、それらへのオブジェクト指向利用の意義 ・メソッドの引数と戻り値、コンストラクタ、メンバへのアクセス制御、オーバーロード、クラス変数、クラスメソッド、継承といったクラスの仕組みの理解 ・クラスライブラリ、参照、入出力、例外といったクラスの使い方の理解 ・Maven リポジトリを通じたオープンソースのクラスライブラリ活用 ・統合開発環境 Eclipse を活用した Java 言語のソフトウェアの開発 ・オブジェクト指向に基づくアルゴリズムの作成および効率的なソフトウェア開発 <p>修得できる知識単位：</p> <ul style="list-style-type: none"> (実装) アーキテクチャ設計手法 (レベル4) (システム) ソフトウェアの基礎技術 (レベル4) (システム) ソフトウェアの構築技術 (レベル2) (システム) プラットフォームの基礎技術 (レベル3) (開発) システムアーキテクチャ技術 (レベル4) 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>必須ではないがプログラミング言語を少なくとも一つ修得していることが望ましい。プログラミング言語初学者は、最低でも第 1 回の講義開始前に参考書[1]の内容を自習しておくこと。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの仕組みを理解し、クラスライブラリを独力で調査及び活用できる。 ・2 画面 300 行程度のアプリケーションをひな形無しで 2 週間程度の期間で作成できる。 ・調査開発の成果を後進の開発者の指導に活用できる。 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・仕様書に従って 1 画面 200 字程度の Java 言語のプログラムを単独で 2 週間程度で作成できるレベル ・他のプログラマが作成した 200 字程度のオブジェクト指向のプログラムを理解し、作業仕様書に従って 100 字程度の改修を単独で 1 週間程度で行うことができるレベル 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	質疑応答時、演習時に積極的な参加を期待する。
	ハイフレックス型	○	録画 (対面あり) 授業を受講した場合は演習課題の提出をもって視聴確認とする。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に LMS で講義資料を提示するので、予習を行ってから講義に臨むこと。 ・演習課題として基礎課題と応用課題の 2 問を出題する。授業時間外に課題を実施する時間を用意し、2 問とも仕様を満たしたプログラムを完成させること。 		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>Java 言語の中級程度の内容を学修し、その応用スキルを修得する。講義において、Java 言語とその周辺に関する知識を学修する。そして統合開発環境の一つである Eclipse を利用し、毎回の演習課題を実装することで、プログラミングの実践スキルを磨く。具体的にはメソッドの引数と戻り値、コンストラクタ、メンバへのアクセス制御、オーバーロード、クラス変数、クラスメソッド、継承といったクラスの仕組みを理解する。次に、クラスライブラリ、参照、入出力、例外といった、クラスの使い方、ビルドシステム Maven を利用したオープンソースのクラスライブラリの活用スキルを修得する。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第 1 回	オリエンテーション:本講義の概要に関し、講義の進め方を参照しながら説明する。 オブジェクト指向導入:オブジェクト指向の本質は何かを、システムとソフトウェアの構造化の必要性・利点の観点から説明する。特にソフトウェアは本質的に複雑であることに注目し、アーキテクチャとモデルとオブジェクト指向の視点から重要性を理解する。その後統合開発環境 Eclipse の利用法、言語の文法（変数、基本型、演算子）について説明する。	[対]
	第 2 回	プログラミングの言語基礎： 開発環境 Eclipse を利用し、言語共通の制御構造（分岐、繰返）及び配列について説明する。	[対]
	第 3 回	オブジェクト指向基本概念 1： オブジェクト指向言語における基本的な概念、クラスとフィールド、クラスの宣言とインスタンスの作成、複数インスタンスの作成について説明する。	[ハ]
	第 4 回	オブジェクト指向基本概念 2： 前回の講義をベースに実践上、クラスのメンバー、特にメソッド及びクラスのフィールドと局所変数について説明する。	[ハ]
	第 5 回	オブジェクト指向基本概念 3： クラスメンバへのアクセス制御、オーバーロード、コンストラクタについて説明する。 オブジェクト指向言語のメソッドの特徴とメリットについて説明する。	[ハ]
	第 6 回	オブジェクト指向言語のクラス構築 1： データメンバ：インスタンスとインスタンス変数、クラス変数について説明する。	[ハ]
	第 7 回	オブジェクト指向言語のクラス構築 2： メソッド（関数）：インスタンスメソッドとクラスメソッド及び、static なメンバの利用方法を説明する。	[ハ]
	第 8 回	プログラミング言語の開発環境： クラスライブラリの利用方法及びオブジェクトの配列について説明する。	[ハ]
	第 9 回	オブジェクト指向の三原則： 継承とそのアクセス制御、またスーパークラスのコンストラクタ呼び出し、オーバーライド、多態性について説明する。	[ハ]
	第 10 回	オブジェクト指向型アーキテクティング技法： パッケージ及びクラスのパッケージ化、またパッケージに含めたクラスの利用方法について説明する。	[ハ]
	第 11 回	オブジェクト指向のクラス設計手法 1： 抽象クラスの考え方及び利用方法について説明する。	[ハ]
	第 12 回	オブジェクト指向のクラス設計手法 2： インタフェースの考え方及び利用方法について説明する。	[ハ]
	第 13 回	オブジェクト指向の例外処理： 例外処理及び例外クラス、例外の作成と送出方法について説明する。	[ハ]
	第 14 回	システムの入出力： 言語の入出力及び、キーボード、ファイルからの入力、ファイルへの出力方法について説明する。	[ハ]
	第 15 回	応用演習： テスト過去問を中心に練習する。Apache Maven 及び、Eclipse、コマンドラインでの Maven 利用方法、中央リポジトリのライブラリについて説明する。	[ハ]
	試験	選択及び記述形式の筆記試験を実施する。	[対]
成績評価	筆記試験 50%、演習課題 50%で評価する。筆記試験では、Java 言語仕様についての理解度を選択式問題及び記述問題で評価する。演習課題は毎回の授業で実施し、授業内容に基づいたプログラムを作成する。課題は講義で学んだことに基づいて作成する基礎課題と、それまで学んだ知識を含めて作成する応用課題の 2 題を出題する。それぞれの課題について、講義で学んだ正しい仕様で実装しているか、また実行に問題が無いかを評価する。		
教科書・教材	講義資料は LMS で提供する。		
参考図書	[1] 大野澄雄編、『アクティブラーニングで学ぶ Java プログラミングの基礎 1』、コロナ社、2015 年 [2] 大野澄雄編、『アクティブラーニングで学ぶ Java プログラミングの基礎 2』、コロナ社、2014 年 [3] パートランド・メイヤー 著、酒匂 寛 翻訳、『オブジェクト指向入門 第 2 版 原則・コンセプト』、翔泳社、2007 年		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	システムソフトウェア特論 System Software			教員名	柴田 淳司

概要	<p>PC、スマートフォン、タブレットなどを通して、誰でも簡単に情報サービスを利用できる社会となった。こうした背景には人とソフトウェア、ハードウェアの架け橋となるシステムソフトウェアの存在がある。システムソフトウェアを代表する OS の仕組みと特性を学ぶことは、利用者としてでなく、情報技術者、情報サービス提供者を目指す上で大きな助けとなる。</p> <p>本科目ではコンピュータを業務に使えるようになることを目的とし、ハードウェア、ソフトウェア、通信を広く扱うことで Unix 互換 OS の仕組みと特性の理解を目指す。また、技術を扱う科目として、座学に加えて多くの演習、自学自習を含む。授業は大きく基本操作、サーバ管理、開発の 3 篇に分かれる。基本操作ではコマンドラインによる操作、シェルスクリプトを学ぶ。サーバ管理では、通信、ユーザ・プロセス管理、ハードウェアについて学ぶ。開発ではバージョン管理システムと仮想環境について学ぶ。</p>		
目的・狙い	<p>OS の本流に当たる Unix 互換 OS の仕組みと特性の理解を通して、コンピュータを業務に生かせるようになることを目的とする。そのために以下の項目を小目的とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> - コンピュータの基本構造と CLI を用いた操作を学び、簡単な処理を自動化できるようになる - 通信、アカウント、プロセスの仕組みを学び、ネットワーク・サーバを扱うための基礎教養を身につける - 仮想化技術やクラウドサービスを利用し、PBL のような共同作業を行うための下地を整える <p>習得できる知識単位</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (実装) ソフトウェアエンジニアリング手法 (レベル 2) ・ (システム) ソフトウェアの基礎技術 (レベル 2) ・ (システム) ソフトウェアの利用方法 (レベル 2) ・ (システム) プラットフォーム基礎技術 (レベル 4) ・ (システム) ハードウェアの基礎技術 (レベル 2) ・ (システム) ネットワークの基礎技術 (レベル 2) ・ (システム) クラウドコンピューティングの基礎技術 (レベル 2) ・ (共通技術) IT 基礎 (レベル 2) 		
履修条件 (履修数の上限、要求する前提知識等)	<p>本科目は基礎科目であり、履修条件を設けない。</p> <p>ただし、扱う範囲が広く、授業内演習を多く含むため、マウス操作やタイピング、ソフトウェアの概念などコンピュータを操作する上での最低限の知識は有することを勧める。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> - 自分で環境構築をすることができる - 自らの業務に Unix 系 OS を活用できる - 持続的に Unix 系 OS の知識、スキルを向上できる 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> - シェルスクリプトで簡単なファイル操作を行える - 周囲の補助を受けながらコンピュータの環境構築をすることができる 		
授業実施形態 (単一または複数から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	座学に加えて Linux の操作演習を行う。 対面授業・録画授業に関わらず、自宅で学習を行うために自宅 PC に仮想マシンを入れることを強く推奨している。学内コンピュータで演習・自習を行う場合、USB メモリ (10GB 以上) を準備することで自宅と同じ環境を持参することが可能である。
	ハイフレックス型	○	座学に加えて Linux の操作演習を行う。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	授業資料と録画講義をもとに、自身で操作方法の復習を行うことが望ましい。		
授業の進め方 (グループワーク方式など、進め方の特徴)	<p>Unix 互換 OS (Linux) の仕組みと特性を理解するため、座学と端末操作の演習を行う。演習課題を出すため、自宅でも仮想環境を整えることを強く推奨する。また、学生の興味次第で、内容の深淺、順序等は適宜調整する可能性がある。</p> <p>全 15 回とし、講義はハイフレックス型とする。</p>		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	<p>《概要》</p> <p>授業概要の説明と OS の基礎知識に関して学ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 授業概要 - OS の機能と歴史的背景 - OS の種類 	[ハ]
	第 2 回	<p>《基礎：OS のインストールとコンピュータの起動》</p> <p>仮想マシンを用いて、コンピュータの起動とインストールについて学ぶとともに、演習環境を構築する。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 仮想マシン - コンピュータ起動 - OS のインストール 	[ハ]
	第 3 回	<p>《基礎：CLI》</p> <p>コマンドを使ったコンピュータの基本操作方法について学ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> - コマンドの基本操作 - データとファイル - エディタ 	[ハ]
	第 4 回	<p>《基礎：シェルとコマンド》</p> <p>シェルの挙動を意識しながら、コマンド操作について深く学ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> - ディレクトリ構造 	[ハ]

		<ul style="list-style-type: none"> - コマンドとシェルの解釈 - 変数 - パッケージ管理システム 	
	第 5 回	《基礎：フィルタコマンド》 フィルタコマンドを使い、高度な処理について学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> - フィルタコマンド - パイプ・リダイレクト - 正規表現 	[ノ]
	第 6 回	《基礎：シェルスクリプト 1》 コマンドとシェルの関係についてより深く学び、シェルスクリプトによる自動化を目指す。 <ul style="list-style-type: none"> - シェルスクリプト - 終了ステータス - テストコマンド 	[ノ]
	第 7 回	《基礎：シェルスクリプト 2》 制御構文を用いた様々な処理方法について学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> - 制御構文 - 数値演算 - プログラミング基礎 	[ノ]
	第 8 回	《サーバ管理：通信と暗号化》 外部への接続とその設定方法、接続される側の設定について学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> - IP とポート - SSH 通信とサーバ - 暗号化通信 	[ノ]
	第 9 回	《サーバ管理：ユーザ管理》 複数人が接続、利用するコンピュータのユーザとファイルの管理方法について学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> - ユーザとグループ - 任意アクセス制御 - 強制アクセス制御 	[ノ]
	第 10 回	《サーバ管理：プロセス管理》 実行中の処理とその管理方法について学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> - プロセス - シグナル - デモン 	[ノ]
	第 11 回	《サーバ管理：物理マシン上のデータ》 データが物理的マシン上でどのように扱われているかを学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> - HDD 上のデータ - メモリ上のデータ - 仮想ファイルシステム - 疑似ファイル - 疑似デバイス 	[ノ]
	第 12 回	《共同開発：仮想化技術》 仮想化技術と、その代表としてコンテナ仮想化について学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> - 仮想化技術 - Docker 	[ノ]
	第 13 回	《共同開発：バージョン管理システム》 プログラムやドキュメントのバージョン管理を手助けするソフトの使い方を学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> - バージョン管理システム - Git 	[ノ]
	第 14 回	《共同開発：クラウドサービスの利用》 外部サービスを利用し、オープンソース文化とその開発方法について学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> - オープンソース・ソフトウェア - GitHub 	[ノ]
	第 15 回	《共同開発：持続的開発》 外部サービスを利用し、継続的にする方法を学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> - 継続的インテグレーション - TravisCI 	[ノ]
	試験	本科目では課題と小テストにより成績評価を行う。 《課題》 授業の内容理解に関する課題を複数回出題する。 《小テスト》 授業の内容理解に関する小テストを毎授業出題する。	[録]
成績評価	課題(60 点)+小テスト(40 点)=計 100 点 ただし、授業への積極参加や課題の出来により加点する場合がある。		
教科書・教材	LMS で配布するので、各自授業前にダウンロードすること。		
参考図書	D. Taylor(著), 酒井 皇治(訳): "入門 Unix for OS X," O'Reilly, 2013. 木本雅彦他: "はじめて UNIX で仕事をする人が読む本," KADOKAWA, ,2014. B. Blinn(著), 山下哲典(訳), "入門 UNIX シェルプログラミング", ソフトバンククリエイティブ, 2003. 吉村 総一郎, "Web プログラミングが面白いほどわかる本 環境構築から Web サービスの作成まで、はじめてからでないに", N 高校のプログラミング教育, 2018.		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	IT 系科目群	科目名	情報アーキテクチャ特論 1			教員名	小山 裕司
		(英文表記)	Information Systems Architecture 1				

概要	<p>情報アーキテクチャ領域の当カリキュラムでは、情報システム開発に関する各種の知識及びスキルを体系的に設計された科目で学ぶことができるが、各科目は大学院レベルの講義であるため、相当の知識を前提としている。修学にあたって、知識の土台がしっかりしていれば、高いレベルで授業の内容を理解できる。また、IT 基礎知識の定着は、実際の情報システム開発でも不可欠である。当科目は、IT 関連の基礎知識の整理及び定着を目的に、離散数学、システム構成、戦略、アーキテクチャ等の情報アーキテクチャ領域の基礎にあたる内容を学ぶ。</p>		
目的・狙い	<p>当科目は、当カリキュラムの履修に必要とされる基礎知識の整理及び定着のため、以下の事項の理解及び修得を目的にする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・離散数学（情報の表現、論理、計数、確率、グラフ等） ・システム構成（ハードウェア、情報機器の構成要素、システムの構成、クラウド等） ・戦略（計算量、アルゴリズム、戦略等） ・アーキテクチャ（アーキテクチャ、検索技術、ソーシャルメディア等） <p>修得できる知識単位：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（実装）アーキテクチャ設計手法（レベル4） ・（システム）ハードウェアの基礎技術（レベル4） ・（システム）ハードウェアの構築技術（レベル4） ・（開発）システムアーキテクティング技術（レベル4） ・（共通技術）IT 基礎（レベル4） 		
履修条件 （履修数の上限、 要求する前提知識 等）	<ul style="list-style-type: none"> ・基本情報技術者試験レベルの知識があること （特に、ハードウェア、ソフトウェア、ネットワーク、プログラミング等の基礎知識）。 		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・離散数学、システム構成、戦略、アーキテクチャを高いレベルで理解し、これらの知識を土台に当専攻の専門科目に対する準備ができているレベル 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・離散数学、システム構成、戦略、アーキテクチャの知識をある程度修得しているレベル 		
授業実施形態 （単一または複数 から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	遠隔での出席可。グループワーク（3～4 名程度のグループによる協働作業）、グループ討議、クラス討議、試験を行う。学生による授業参加を特に期待する。
	録画視聴型	○	遠隔及び録画での出席可。授業で指定された視聴確認で出席扱いとする。
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の前に、配布資料で授業の内容を確認すること。 ・授業で指示された課題に取り組み、期限までに提出すること（グループ討議、クラス討議のための事前課題あり）。 		
授業の進め方 （グループワーク 方式など、進め方 の特徴）	<p>当科目は、講義、グループワーク、グループ討議、クラス討議から構成される。授業計画を以下に示す。時間的制約等から、課題の内容相当を試験の際に出題することがある。学生の興味等から、内容及び順序は適宜調整する可能性がある。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	〈概要〉 学生が科目選択の判断ができるように、授業の目的と15回の授業内容を解説する。	[ハ]
	第2回	〈離散数学1〉 情報の単位、情報の表現、論理を扱う。	[ハ]
	第3回	〈離散数学2〉《視聴確認》 カウント、確率を扱う。	[ハ]
	第4回	〈離散数学3〉《課題1》 グラフ、オートマトンを扱う。	[ハ]
	第5回	〈システム構成1〉 計算機、Web、情報システムの構成アーキテクチャを扱う。	[ハ]
	第6回	〈システム構成2〉《課題2》 安定稼働システム、大規模システム等の構成アーキテクチャを扱う。	[ハ]
	第7回	〈システム構成3〉 クラウド等の構成アーキテクチャを扱う。	[ハ]
	第8回	〈演習〉《試験1》 前半の授業を振り返り、総括する。第1回から第7回までの内容の理解に関する筆記試験を行う。	[ハ]
	第9回	〈戦略1〉 計算量、アルゴリズムを扱う。	[ハ]
	第10回	〈戦略2〉《課題3》 各種の戦略（反復、再帰、総当たり、バックトラック等）を扱う。	[ハ]
	第11回	〈アーキテクチャ1〉 アーキテクチャの概念を扱う。	[ハ]
	第12回	〈アーキテクチャ2〉《課題3》 アーキテクチャの事例を扱う（グループワーク）。	[ハ]
	第13回	〈アーキテクチャ3〉《視聴確認》 アーキテクチャの設計を扱う（グループワーク）。	[ハ]
	第14回	〈アーキテクチャ4〉《課題4》 アーキテクチャ設計の演習を行う（グループワーク）。	[ハ]
	第15回	〈情報技術の活用及び展開〉《視聴確認》 検索、ソーシャルメディアを扱う。	[ハ]
	試験	〈総括、試験〉《試験》 これまでの講義を振り返り、総括する。第1回から第15回までの内容の理解に関する筆記試験を行う。	[ハ]
成績評価	課題（レポート、演習）50%、試験（筆記）50%を基準として総合的に評価する。レポート等の提出物は締切を厳守されたし。		
教科書・教材	資料はLMS上にオンラインで配布する。		
参考図書	<ul style="list-style-type: none"> ・Wladston Ferreira Filho 著、小山 裕司 監訳、『みんなのコンピュータサイエンス』、翔泳社、2019/1 ・Lawrence Lessig 著、山形 浩生 訳、『CODE VERSION 2.0』、翔泳社、2007/12 ・Donald E.Knuth、Oren Patashnik、Ronald L.Graham 著、有澤 誠、安村 通晃、萩野 達也、石畑 清 訳、『コンピュータの数学』、共立出版、1993/8 また、講義時にも適宜指示する。		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	情報セキュリティ特論 Information Security			教員名	奥原 雅之

概要	情報セキュリティは、暗号（共通鍵、公開鍵、デジタル署名、PKI）からネットワーク（データセキュリティ、アプリケーションセキュリティ）、組織マネジメント（リスク分析、内部統制）、国際標準規格（ISMS、CC 認証）、法と倫理まで広範囲に渡る学際分野に関わる。当科目は、情報セキュリティの機能である「機密性、完全性、可用性」の観点から情報セキュリティ技術の知識体系及び情報セキュリティでの情報倫理を学ぶ。		
目的・狙い	<p>情報セキュリティ技術の進展は非常に速い。この技術に対応するためには知識体系の理解が必要であり、継続学修のための知識基盤を修得する必要がある。当科目の目的は以下の2点である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報セキュリティ技術を学ぶための基礎: 知識の修得 本学が準備している各種の情報セキュリティ関連科目を学ぶための基礎知識の修得及び情報セキュリティ技術関連の知識体系の理解 ・情報セキュリティ技術関連の知識体系の修得: テクニカルスペシャリスト（データベース技術者、ネットワーク技術者、ソフトウェア技術者等）に必要とされるセキュリティ技術関連の知識体系の修得 <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（支援活動） 情報セキュリティ（レベル4） ・（非機能要件） セキュリティの基礎技術（レベル4） ・（非機能要件） セキュリティの構築技術（レベル4） ・（共通技術） IT 基礎（レベル3） 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	特に履修条件は無い。当科目は本学のすべての学生が学ぶべき IT リテラシーにあたる。		
到達目標	上位到達目標		
	IT スキル標準（レベル3 相当） <ul style="list-style-type: none"> ・ソフトウェア及び情報システム開発で、適切にセキュリティ機能を提案できるレベル ・情報セキュリティ技術によって問題解決を実践できるレベル ・情報処理技術者試験合格レベル（情報セキュリティスペシャリスト 午前問題） 		
	最低到達目標		
	IT スキル標準（レベル2 相当） <ul style="list-style-type: none"> ・情報セキュリティの要素技術（暗号、生体認証、ネットワークセキュリティ、セキュリティ評価等）を理解でき、上位の情報セキュリティ技術を学ぶことができるレベル ・上位技術者の指示のもと、情報セキュリティ機能構築を行うことができるレベル ・情報処理技術者試験合格レベル（IT パスポート、基本情報技術者、応用情報技術者合格レベル） 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	中間試験および最終試験を実施する回は対面型とする。
	ハイフレックス型	○	講義受講後に受講確認の小テストを受けること。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の前に、配布資料で授業の内容を確認すること。 ・授業で指定されたテスト等（事前テスト、視聴確認テスト、アンケートなど）を受けること。 ・授業で指示された課題に取り組み、期限までに提出すること。 		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	当科目の授業計画を以下に示す。学生の興味および授業実施時のセキュリティ分野の動向次第で、内容、順序等は適宜調整する可能性がある。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	〈概要〉 学生が講義選択の判断ができるように授業の目的と15回の授業内容を解説する。また、合わせて講義全体を理解するために必要な基礎的な概念について解説する。	[ハ]
	第2回	〈暗号技術1〉 暗号技術の基礎、共通鍵暗号の基礎と応用、DES暗号の原理などについて解説する。	[ハ]
	第3回	〈暗号技術2〉 公開鍵暗号の基礎と応用、RSA暗号の基礎、ハッシュ関数、ハイブリッド暗号、電子署名の基礎などについて解説する。	[ハ]
	第4回	〈暗号技術の応用1〉 電子署名の原理、電子署名技術と公開鍵暗号フレームワーク(PKI)の概要、PKIの信頼モデル、PGP暗号の概要などについて解説する。	[ハ]
	第5回	〈暗号技術の応用2〉 セキュアプロトコルの必要性、セキュアプロトコルの例としてIPsec、SSL/TLSなどについて解説する。	[ハ]
	第6回	〈暗号技術の応用3〉 暗号技術のハードウェア実装の基本、耐タンパー性、FIPS140-2の概要と要求事項などについて解説する。	[ハ]
	第7回	〈画像技術1〉 電子透かし、ステガノグラフィ等の情報ハイディング技術と原理と応用などについて解説する。本講義時間内に中間試験を実施する。	[対]
	第8回	〈画像技術2〉 バイオメトリック認証技術の基礎と応用について解説する。	[ハ]
	第9回	〈ネットワーク1〉 サイバー攻撃を理解するために必要となる概念の基礎、およびマルウェアの原理などについて解説する。	[ハ]
	第10回	〈ネットワーク2〉 マルウェアなどのサイバー攻撃に対して対策するための技術の基本、および代表的な対策としてのファイアウォールなどの装置の原理について解説する。	[ハ]
	第11回	〈ネットワーク3〉 サイバー攻撃と防御について基本的な概念と事例などについて解説する。また、優秀なレポートについての発表を行う。	[ハ]
	第12回	〈評価〉 セキュリティリスクマネジメント、情報セキュリティマネジメントフレームワーク(ISMS)とISO/IEC 27001の背景と目的、ISO/IEC 15408の背景と目的などについて解説する。	[ハ]
	第13回	〈プライバシー保護〉 プライバシーの課題、個人情報保護法の概要とプライバシーとの関係、プライバシー影響評価の概要などについて解説する。	[ハ]
	第14回	〈デジタルフォレンジック〉 デジタルフォレンジックの意義と目的、電子的証拠の収集と分析、証拠保全の要件などについて解説する。	[ハ]
	第15回	《第15回》〈法と倫理〉 情報セキュリティに関連する国内外の法令、および技術者が共通して持つべき倫理などについて解説する。	[ハ]
	試験	〈最終試験〉 第1回から第15回の内容の理解に関する試験を行う。	[対]
成績評価	課題(レポート)50%、試験(中間試験、最終試験)50%を基準に総合的に評価する。課題の評価規準は授業内で説明する。提出期限を超えて提出された課題は不受理または減点の対象となる。		
教科書・教材	教材はLMS上にオンラインで配布する。		
参考図書	瀬戸洋一・他「改訂版 情報セキュリティ概論」日本工業出版 アダム・ゴードン 編、笠原 久嗣 監訳「新版 CISSP CBK 公式ガイドブック (日本語)」NTT出版		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	OSS 特論 Open Source Software			教員名	小山 裕司

概要	Linux カーネル、GNU ソフトウェア、Apache HTTP サーバに代表されるオープンソースソフトウェア（OSS）は、インターネット基盤のサーバ類に広く普及していると同時に、2000 年ごろまでの古いソフトウェア産業を根底から変革してきた。当科目は、（1）OSS の思想、背景、歴史、（2）OSS の定義、使用許諾契約、（3）OSS の開発体制（バザールスタイル）、（4）OSS の事例、（5）OSS 関連の話題を扱う。		
目的・狙い	<p>当科目は、以下の OSS 関連の各事項の修得から、OSS に関する理解を深めることを目的とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ OSS の思想、背景、歴史 ・ OSS の定義、使用許諾契約 ・ OSS の開発体制 ・ OSS の事例 ・ OSS 関連の話題 <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（実装）ソフトウェアエンジニアリング手法（レベル 3） ・（支援活動）標準化・再利用手法（レベル 4） ・（システム）ソフトウェアの基礎技術（レベル 4） ・（システム）ソフトウェアの構築技術（レベル 4） ・（システム）ソフトウェアの利用技術（レベル 4） ・（関連知識）法規・基準・標準（レベル 4） 		
履修条件 （履修数の上限、 要求する前提知識 等）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本情報技術者試験レベルの知識があること （特に、ハードウェア、ソフトウェア、ネットワーク、プログラミング、経営、関連法規等の基礎知識）。 ・ PC の基本操作ができること。 		
到達目標	上位到達目標		
	・ OSS 活動に参加できる、あるいは OSS の啓蒙に貢献できる程度の深い理解レベル		
	最低到達目標		
	・ OSS を活用できるだけの、OSS の各事項（思想、使用許諾契約等）の理解レベル		
授業実施形態 （単一または複数 から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	遠隔での出席可。グループワーク（3～4 名程度のグループによる協働作業）、グループ討議、クラス討議、試験を行う。学生による授業参加を特に期待する。
	録画視聴型	○	遠隔及び録画での出席可。授業で指定された視聴確認で出席扱いとする。
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の前に、配布資料で授業の内容を確認すること。 ・ 授業で指示された課題に取り組み、期限までに提出すること（グループ討議、クラス討議のための事前課題あり）。 		
授業の進め方 （グループワーク 方式など、進め方 の特徴）	当科目は、講義、グループワーク、グループ討議、クラス討議から構成される。授業計画を以下に示す。時間的制約等から、課題の内容相当を試験の際に出題することがある。学生の興味、履修者数等から、内容及び順序は適宜調整する可能性がある。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	〈概要〉 学生が科目選択の判断ができるように、授業の目的と15回の授業内容を解説する。	[ハ]
	第2回	〈OSSの思想、背景、歴史1〉《課題1》 OSSの思想、背景、歴史の理解のため、Unix等のOSS前史を扱う。	[ハ]
	第3回	〈OSSの思想、背景、歴史2〉 ARPANET、GNU等のOSS前史を扱う。OSS前史に関する調査を行う（グループワーク）。	[ハ]
	第4回	〈OSSの定義、使用許諾契約1〉《課題2》 OSIによるOSSの定義（OSD）と、OSSの使用許諾契約、GNU GPLの特徴等を扱う。	[ハ]
	第5回	〈OSSの開発体制1〉 分散開発体制、バザールスタイル、アジャイル開発の概要と特徴を扱う。ソフトウェアの再利用に関しても言及する。	[ハ]
	第6回	〈OSSの開発体制2〉 オープンソース現象と呼ばれる、OSSの開発体制のソフトウェア以外への応用を扱う。	[ハ]
	第7回	〈OSSの事例1〉 OSSの事例として、Linuxカーネルを扱う。	[ハ]
	第8回	〈OSSの事例2〉 OSSの事例として、とLinuxの各種配布パッケージ、言語処理系、TeX等を扱う。	[ハ]
	第9回	〈使用許諾契約2〉 GPL第3版、AGPL等の使用許諾契約関連の話題を扱う。	[ハ]
	第10回	〈OSS関連の話題〉 企業、公的機関等でのOSSの活用事例、OSS関連の事業事例、SCO事件等を扱う。	[ハ]
	第11回	〈コーディング規約〉《課題3》 コーディング規約、テスト、ドキュメント作成を扱う。 〈OSSコミュニティの活動〉 OSSコミュニティの活動と参加に関する事項を扱う。	[ハ]
	第12回	〈演習〉《課題4》 課題4のOSS関連の構成あるいは調査を行う（グループワーク）。	[ハ]
	第13回	〈OSS関連の各種動向〉 デジタル、GNU FDL、Creative Commons等の話題を扱う。	[ハ]
	第14回	〈発表1〉 課題4の発表及び議論を行う（グループワーク）。	[ハ]
	第15回	〈発表2〉 課題4の発表及び議論を行う（グループワーク）。	[ハ]
	試験	〈総括、試験〉《試験》 これまでの講義を振り返り、総括する。第1回から第15回までの内容の理解に関する筆記試験を行う。	[ハ]
成績評価	課題（レポート、演習）60%、試験（筆記）40%を基準として総合的に評価する。レポート等の提出物は締切を厳守されたし。演習は、グループワーク等の結果及び貢献内容から各学生の評価を算出する。また、評価の際には、発表を聞いた学生の評価も参考にする。		
教科書・教材	資料はLMS上にオンラインで配布する。		
参考図書	<ul style="list-style-type: none"> ・Eric S.Raymond 著、長尾 高弘 訳、『The Art of UNIX Programming』、ASCII、2007/6 ・Glyn Moody 著、小山 裕司 監訳、『ソースコードの反逆』、ASCII、2002/6 また、講義時にも適宜指示する。		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	データベース特論 Database Theory			教員名	木下 修司

概要	Web2.0 以降の情報処理システムでは、従来の情報配信環境から、コンテンツ収集を主体にした情報の自動獲得環境へとパラダイムシフトが進行しつつあり、データベースの理解が一層重要になっている。本科目では、データベース技術者が学ぶべきデータベースの基本知識の修得を目的として、SQL の基礎からアプリケーションへの応用、それらの背後にある関係代数等の理論を体系的に説明する。		
目的・狙い	<p>当科目は、今まで本格的にデータベース理論を学んでいなかった学生を対象にして、データベース及び DBMS（データベース管理システム）の基礎から応用までの内容を体系的に修得することを目的とする。具体的には、当科目では以下の知識・スキルを修得できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リレーショナルモデルの理解と SQL によるデータベース操作スキル ・データベースのトランザクション処理の知識 ・DBMS の選択及び構成に対する広い視野に基づく判断スキル <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（システム） データベースの基礎技術（レベル 4） ・（システム） データベースの構築技術（レベル 4） ・（システム） データベースの利用技術（レベル 4） ・（非機能要件） 非機能要件（可用性、性能・拡張性）（レベル 3） ・（非機能要件） セーフティ（分析、設計）（レベル 3） ・（共通技術） IT 基礎（レベル 3） 		
履修条件 （履修数の上限、 要求する前提知識 等）	基礎科目のため特に履修条件は無い。ただし、ハッシュ、木構造等の基本的なデータ構造及びアルゴリズムの知識があることが望ましい。また、英文テキストを利用するため、履修を通じて英文読解スキルを向上させたい意欲的な学生の履修を歓迎する。		
到達目標	上位到達目標		
	DBMS の選択及び構成に対する広い視野に基づく判断スキル NoSQL 等の新しいデータ管理を提案できるスキル		
	最低到達目標		
	リレーショナルモデルに基づくデータベース設計と SQL によるデータベース検索のスキル データ構造とアルゴリズムに関する基礎知識		
授業実施形態 （単一または複数 から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	○	ハイフレックス型授業と録画のみの講義をそれぞれ約半分ずつで全体を構成する。
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の前に、テキストと配布資料で授業の内容を確認すること。 ・授業で指示された課題に取り組み、期限までに提出すること。 		
授業の進め方 （グループワーク 方式など、進め方 の特徴）	当科目は、録画による講義回と、ハイフレックス型による演習回から構成される。授業計画を以下に示す。基本的に、録画講義を各自で視聴後、理解を確認する課題を提出し、ハイフレックス型の授業回にて課題の解説やディスカッションを実施するスタイルである。特に重要と思われる技術内容に関しては、必要に応じて具体例を取り上げた演習を行い、理解を高めるようにする。学生の興味次第で、内容の深淺、順序等は適宜調整する可能性がある。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第 1 回	＜概要＞ 学生が科目選択の判断ができるように、授業の目的と 15 回の授業内容を解説する。加えて、データベース及び DBMS の発達の歴史と標準規格の経緯、近年のデータベース関連の技術動向を扱う。	[ハ]
	第 2 回	＜リレーショナルモデルの導入＞ リレーショナルデータベースの構造、データベーススキーマ、キーといった基本的事項及び関係代数の基礎を扱う。 ＜SQL 導入＞ クエリ言語 SQL の基本と基本的なオペレーション、Null 値などの概念を扱う。	[録]
	第 3 回	前回の講義課題の解説・ディスカッション及び発展的演習を行う。	[ハ]
	第 4 回	＜SQL 中級＞ 結合操作 (Join) やデータ型、インデックスや権限付与の基本を扱う。 ＜SQL 上級＞ プログラミング言語からの SQL 操作、関数やプロシージャ、トリガなどを扱う。	[録]
	第 5 回	前回の講義課題の解説・ディスカッション及び発展的演習を行う。	[ハ]
	第 6 回	＜ER モデルを利用したデータベース設計＞ ER モデルの基本及びそれを利用したデータベース設計の基礎を扱う。 ＜リレーショナルデータベース設計＞ リレーショナルデータベースの設計における諸問題と、各種正規化を扱う。	[録]
	第 7 回	前回の講義課題の解説・ディスカッション及び発展的演習を行う。	[ハ]
	第 8 回	＜複雑なデータ型＞ リレーショナルデータベース以外で扱われる JSON、XML、RDF といったデータ形式や、それらの問い合わせ言語を扱う。 ＜データベースを用いたアプリケーション開発＞ データベースを利用した基本的な Web アプリケーション開発を扱う。	[録]
	第 9 回	前回の講義課題の解説・ディスカッション及び発展的演習を行う。	[ハ]
	第 10 回	＜ビッグデータ、NoSQL＞ ビッグデータを扱うためのデータベースシステムの基礎として、分散データベースや Key-Value Store を扱う。 ＜データ分析 導入＞ データウェアハウス、OLAP(Online analytic processing)、データマイニングなどの分析の基礎を扱う。	[録]
	第 11 回	前回の講義課題の解説・ディスカッション及び発展的演習を行う。	[ハ]
	第 12 回	＜物理的ストレージ＞ ハードディスクやフラッシュメモリなど、データが保管される物理的ストレージについての基礎を扱う。 ＜ストレージとファイル構造＞ データベースシステムにおけるファイル構成やバッファリングを扱う。	[録]
	第 13 回	前回の講義課題の解説・ディスカッション及び発展的演習を行う。	[ハ]
	第 14 回	＜インデックス＞ B-Tree 等を用いたインデックス処理やハッシングを扱う。 ＜クエリの処理＞ リレーショナルデータベースにおける SQL クエリの処理コストについて扱う。	[録]
	第 15 回	前回の講義課題の解説・ディスカッション及び発展的演習を行う。	[ハ]
	試験	これまでの講義を振り返り、総括する。第 1 回から第 15 回までの内容の理解に関する筆記試験を行う。	[ハ]
成績評価	課題（レポート、演習）50%、試験（筆記）50%を基準として総合的に評価する。		
教科書・教材	<ul style="list-style-type: none"> ・テキスト "Database System Concepts Seventh Edition" (Silberschatz, Korth, Sudarshan 著、McGrawHill 社、2019) ※本テキストは英文。海外の多くの大学のコンピュータ・サイエンス学科で、データベース講義のテキストとして採用されている。 ・テキストの補足情報は公式サイト https://www.db-book.com/ より参照可能。 ・日本語による解説資料を適宜配布する。講義は日本語で実施する。 		
参考図書	<ul style="list-style-type: none"> ・『リレーショナルデータベース入門 第3版』（増永良文著、サイエンス社、2017） ・その他、講義時に適宜指示する。 		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	データインテリジェンス特論 Data Intelligence			教員名	追川 修一

概要	現在、データ分析は幅広い分野で活用されており、その重要性はさらに高まっている。本講義では、データから有用な知識・価値を発掘するデータ分析技術として、推定統計やデータマイニング、その基本となる機械学習技術について、体系的な説明を行う。特にデータマイニング技術、機械学習技術として、動作原理だけでなく、データセットの処理をととした具体的な動作および得られる結果を理解することで、実際のデータ解析の基礎を習得することを目指す。		
目的・狙い	集積されたデータから有用な知識・価値を発掘、すなわちデータマイニングを行うためには、体系的なデータ分析技術の修得が不可欠である。本講義では、データ分析技術として、推定統計やデータマイニング、その基本となる機械学習技術について、体系的に学習することで知識を身に付け、Python プログラムによるデータセットのデータセットの処理をととして、実践的な分析のスキルを身につけることを目的とする。 修得できる知識単位： (実装) データマイニング手法 (レベル 4) (システム) データベースの利用技術 (レベル 4) (共通技術) IT 基礎 (レベル 4) (共通技術) ナレッジマネジメント技術 (レベル 4)		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	高校数学の基礎を理解していること。PC の基本操作ができ、ファイルやフォルダの管理ができること。Python のプログラミングおよび Python のパッケージ管理ができること。ファイルやフォルダの管理について十分な知識が無い場合は「システムソフトウェア特論」、プログラミングの経験が無い場合は「Java プログラミング技法」、Python のプログラミングの経験が無い場合は「システムプログラミング特論」を履修することを強く推奨する。		
到達目標	上位到達目標		
	・推定統計やデータマイニングの原理をアルゴリズムレベルで理解できる。 ・データ分析に必要な実践的なプログラミングが行える。		
	最低到達目標		
	・データマイニングの基本的な機能である、予測、分類、クラスタリング、相関ルールマイニングの原理の概要が理解できる。 ・Python を用いた基本的なデータ分析が行える。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	第 1 回をのぞく奇数回の授業は、ハイフレックス型で実施するため、対面または遠隔で受講可能。直前の偶数回の録画授業を視聴し、内容を理解したうえで受講すること。 試験は予め決められた時間にハイフレックス型で実施する。
	録画視聴型	○	第 1 回および偶数回の講義は録画視聴型で実施するため、録画授業のみ。次の奇数回の授業前に視聴すること。質問等は確認テスト、LMS、奇数回の授業で受け付ける。
授業外の学習	講義への参加および学習内容の理解を確認するため、各講義後に内容のまとめを含む確認テストを受け、2 回の課題レポートを提出すること。レポートは締切を厳守すること。締切後の提出は認めない。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	授業計画を以下に示す。講義は毎回配布する資料を使用して行う。資料は事前に LMS にて配布する。各講義後に内容のまとめを含む確認テストを受けること。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	データインテリジェンス序論：データインテリジェンスの位置付けについて学び、科目選択の判断ができるように、授業の目的と全体概要、各トピックの概要について理解する。	[録]
	第2回	可視化・要約統計量・相関分析（Ⅰ）：かたちや数値でデータの特徴を捉える、データの関連性（連動性）の定量的な分析について理解する。	[録]
	第3回	可視化・要約統計量・相関分析（Ⅱ）：かたちや数値でデータの特徴を捉える、データの関連性（連動性）を定量的に分析する処理方法について学ぶ。	[ハ]
	第4回	回帰分析（Ⅰ）：説明変数から目的変数を予測する線形回帰モデルの作成、モデルの評価、最小二乗法、平均二乗誤差、決定係数について理解する。	[録]
	第5回	回帰分析（Ⅱ）：線形回帰モデルの作成、モデルの評価の処理方法について、データセットの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	第6回	ロジスティック回帰（Ⅰ）：目的変数がカテゴリデータを予測するロジスティック回帰モデルの作成、モデルの評価、最尤推定法、分類の精度、ROC 曲線、AUC について理解する。	[録]
	第7回	ロジスティック回帰（Ⅱ）：ロジスティック回帰モデルの作成、モデルの評価の処理方法について、データセットの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	第8回	決定木分析（Ⅰ）：木構造による分類の条件分岐の表現、エントロピーによる分割条件の決定、交差検証法による評価について理解する。	[録]
	第9回	決定木分析（Ⅱ）：木構造による分類の条件分岐の表現、交差検証法による評価の処理方法について、データセットの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	第10回	クラスタ分析（Ⅰ）：類似したデータのグループ化、距離、クラスタの非類似度、デンドログラム、K-means 法、エルボー法について理解する。	[録]
	第11回	クラスタ分析（Ⅱ）：類似したデータのグループ化、距離、クラスタの非類似度、デンドログラム、K-means 法、エルボー法について、データセットの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	第12回	推薦システム（Ⅰ）：よく一緒に買われる商品（相関ルール）から推薦するアソシエーション分析（マーケットバスケット分析）について理解し、データセットの処理をとおして処理方法を学ぶ。	[録]
	第13回	推薦システム（Ⅱ）：顧客の過去の嗜好に類似する顧客や商品から推薦する協調フィルタリングについて理解し、データセットの処理をとおして処理方法を学ぶ。	[ハ]
	第14回	前処理（Ⅰ）：データを分析に適するように変換する処理、クレンジング、スケーリング、次元削減について理解する。	[録]
	第15回	前処理（Ⅱ）：データを分析に適するように変換する処理、クレンジング、スケーリング、次元削減について、データセットの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	試験	第1回から第15回までの内容の理解に関して、筆記試験を実施する。	[ハ]
成績評価	課題レポート（50%）、期末の筆記試験（50%）を基準として総合的に評価する。レポートは締切を厳守すること。		
教科書・教材	教科書は特に指定しない。講義資料を LMS で配布するので、各自授業前にダウンロードすること。		
参考図書	R による統計的学習入門, Gareth James 他著, 朝倉書店, 2018. R と Python で学ぶ [実践的] データサイエンス & 機械学習, 有賀友紀, 大橋俊介著, 技術評論社, 2019. 東京大学のデータサイエンティスト育成講座 Python で手を動かして学ぶデータ分析, 塚本邦尊, 山田典一, 大澤文孝著, マイナビ出版, 2019 .		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	ビッグデータ解析特論 Big Data Analysis		教員名	追川 修一	

概要	<p>現在、インターネットの発展にともなう経済や社会のデジタル化により、データの生成が爆発的に増大している。本講義では、そのような大量に生成されるビッグデータを対象としたデータ解析技術について、コンピュータの性能向上、汎用化の加速によりデータ処理および蓄積が容易になっている現状を踏まえ、基本となる機械学習技術に基づいた処理について解説する。特に自然言語のテキストからの知識獲得技術として、技術内容の提示だけでなく、データの収集方式とデータの処理方法について演習を交えた講義を行う。また、データ処理をささえる分散処理システムについて、ストレージの基礎から分散処理環境まで概説する。</p>		
目的・狙い	<p>インターネットの発展にともなう経済や社会のデジタル化により、大量に生成されるデータを加工、分析し、データから知識を獲得するためには、データ解析技術の修得が不可欠である。本講義では、大量に生成されるデータの多くを占める自然言語のテキストを解析対象とするための加工技術、およびデータ解析技術について基本となる機械学習技術についての知識を身に付け、Python プログラムによるデータの収集とデータの処理を通して具体的な動作を理解することを目的とする。また、データ処理をささえるシステムについての技術として、ストレージの基礎から分散処理環境までの概要について学習する。</p> <p>修得できる知識単位：</p> <p>(実装) データマイニング手法 (レベル 4)</p> <p>(システム) データベースの利用技術 (レベル 4)</p> <p>(共通技術) IT 基礎 (レベル 4)</p> <p>(共通技術) ナレッジマネジメント技術 (レベル 4)</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>PC の基本操作ができ、ファイルやフォルダの管理ができること。Python のプログラミングおよび Python のパッケージ管理ができること。ファイルやフォルダの管理について十分な知識が無い場合は「システムソフトウェア特論」、プログラミングの経験が無い場合は「Java プログラミング技法」、Python のプログラミングの経験が無い場合は「システムプログラミング特論」を履修することを強く推奨する。</p>		
到達目標	<p>上位到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データ解析を構成する、データの前処理、機械学習、テキスト解析の原理をアルゴリズムレベルで理解できる。 ・データ処理をささえる分散処理システムを理解できる。 <p>最低到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データ解析の基本となる、データの前処理、機械学習、テキスト解析、分散処理環境の概要が理解できる。 ・Python を用いた基本的なデータ収集および分析が行える。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	授業は、ハイフレックス型で実施するため、対面または遠隔で受講可能。 試験は予め決められた時間にハイフレックス型で実施する。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<p>講義への参加および学習内容の理解を確認するため、各講義後に内容のまとめを含む確認テストを受け、2 回の課題レポートを提出すること。レポートは締切を厳守すること。締切後の提出は認めない。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>授業計画を以下に示す。講義は毎回配布する資料を使用して行う。資料は事前に LMS にて配布する。各講義後に内容のまとめを含む確認テストを受けること。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	ビッグデータ解析序論：ビッグデータ解析の位置付けについて学び、科目選択の判断ができるように、授業の目的と全体概要、各トピックの概要について理解する。	[ハ]
	第2回	クラスタリング（Ⅰ）：類似したデータをグループ化する方法として、非類似度、K-means 法、エルボー法について理解し、データセットの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	第3回	クラスタリング（Ⅱ）：テキストを特徴量化する方法として Bag of Words, TF-IDF について理解し、収集したテキストデータの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	第4回	分類（Ⅰ）：データを分類する方法として、ロジスティック回帰および決定木、モデルの評価方法として ROC 曲線、AUC について理解する。	[ハ]
	第5回	分類（Ⅱ）：データを分類する方法として、ナイーブベイズ分類器、ランダムフォレスト、SVM、モデルの検証方法として交差検証法、グリッドサーチについて理解し、データセットの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	第6回	分類の応用（Ⅰ）：日本語テキストを特徴量化する方法として形態素解析について学び、収集したテキストデータの処理をとおして分類について学ぶ。	[ハ]
	第7回	分類の応用（Ⅱ）：画像 (MNIST)および音楽データに対する分類の適用について理解し、データセットの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	第8回	分類の応用（Ⅲ）：類似データから価格を予測、k 近傍法 (kNN), スケーリングについて理解し、データセットの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	第9回	インターネットからのデータ収集：インターネットからデータを収集する方法として、Web スクレイピングについて理解し、データセットの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	第10回	ニューラルネットワーク：データを分類する方法として、パーセプトロンおよびニューラルネットワークの学習について理解し、データセットの処理をとおして学ぶ。	[ハ]
	第11回	分散表現：意味を単語同士の関係としてとらえる方法である分散表現について理解する。	[ハ]
	第12回	ストレージの基礎（Ⅰ）：HDD および SSD の内部構造について理解する。	[ハ]
	第13回	ストレージの基礎（Ⅱ）：ストレージの RAID 構成およびファイルシステムについて理解する。	[ハ]
	第14回	分散ストレージ：分散システムの歴史および分散ファイルシステムについて理解する。	[ハ]
	第15回	分散処理：集中システムと分散システム、分散処理フレームワークについて理解する。また、分散システムの基礎となるオペレーティングシステムの機能の概要について理解する。	[ハ]
	試験	第1回から第15回までの内容の理解に関して、筆記試験を実施する。	[ハ]
成績評価	課題レポート（70%）、期末の筆記試験（30%）を基準として総合的に評価する。レポートは締切を厳守すること。		
教科書・教材	教科書は特に指定しない。講義資料を LMS で配布するので、各自授業前にダウンロードすること。		
参考図書	集合知プログラミング, Segaran 著, オライリー・ジャパン, 2008. 入門 自然言語処理, Bird 他著, オライリー・ジャパン, 2010. ビッグデータ解析の現在と未来 : Hadoop, NoSQL, 深層学習からオープンデータまで, 原隆浩著, 共立出版, 2017.		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	IT 系科目群	科目名 (英文表記)	クラウドインフラ構築特論 Building a Cloud Infrastructure			教員名	山崎 泰宏

概要	近年、ネットワークで結ばれたサーバクラスターがコモディティ化すると同時に、そうしたハードウェア資源を、大量に効率よく、かつ高速に管理する手法が求められている。本手法の体現として、クラウドコンピューティングの文脈では Infrastructure as a Service (IaaS) の考え方に注目が集まっている。本科目では、これをクラウドインフラと呼ぶ。ハードウェア資源をソフトウェアによって管理するその仕組みは、Web API を備えた分散システムであり、ハードウェア資源全体を仮想化し、管理を自動化するものである。この IaaS を実現するソフトウェアの構造の理解、設計と活用の演習を通じて基礎を理解し、クラウドインフラを活用することができるようになるものである。		
目的・狙い	本科目では、IaaS の仕組みや、ソフトウェアのアーキテクチャを理解し、基礎的な設計、及び活用の演習を通じて動作確認・応用できるようになることを目的とする。また、そうした基本的アーキテクチャを熟知した上で、資源をより高度な技術で管理する手法を理解・修得する。 修得できる知識単位: ・(システム) Web システムの構築技術 レベル 3 ・(システム) クラウドコンピューティングの基礎技術 レベル 4 ・(システム) クラウドコンピューティングの構築技術 レベル 4 ・(システム) クラウドコンピューティングの利用技術 レベル 4		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	SSH 等、コマンドラインを使ってサーバを操作したことがある。 ネットワーク特論を受講した、もしくは同等の知識を持っている。 Unix 互換 OS 操作の経験が無い学生は「システムソフトウェア特論」を履修することを強く推奨する。 Ruby、Python、Go、PHP、Java、JavaScript のいずれかのプログラミング言語を理解し、記述できる。		
到達目標	上位到達目標		
	・プログラミング言語を用いて、クラウド環境を活用できる ・システムの利用形態に合わせて適切にクラウドシステムを構築できる		
	最低到達目標		
	・クラウドインフラの仕組み、内部構造を理解できる ・十分な知識のある指導者のもとで、クラウドインフラの構築および運用管理ができる		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	クラウドインフラの仕組み、内部構造について講義形式で実施する。 個別にクラウドインフラの基礎を、設計、実装する。 グループでクラウドインフラを構築する。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	授業時間外でもサーバ室は利用可能である。利用する際は事務局へ連絡すること。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	演習を実施しながらクラウドの仕組み、内部構造について理解を深めていく。演習では実際にサーバを利用してクラウド環境を構築する。 本講義は 2 コマ連続で実施する。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	ガイダンス、クラウド管理の意義・必要性 クラウドコンピューティングの特徴（IaaS、PaaS、SaaS）、設計	[ハ]
	第2回	オープンソースのクラウド基盤ソフトウェア OpenStack などのクラウド環境構築ソフトウェアの紹介	[ハ]
	第3回	クラウドコンピューティングの活用方法 CI/CD、運用の自動化	[ハ]
	第4回	仮想化技術の使い方、仮想マシンのためのネットワーク管理の基礎知識	[ハ]
	第5回	Web API の基礎、IaaS における Web API の役割	[ハ]
	第6回	Web API を活用した実例 CI/CD、運用の自動化の実装	[ハ]
	第7回	クラウドコンピューティングの基本的構造と、クラウドインフラの設計の基礎	[ハ]
	第8回	クラウドインフラのソフトウェアを設計・開発する(1) Web API 及びコントローラ、DB アクセスなどの設計と開発	[ハ]
	第9回	クラウドインフラのソフトウェアを設計・開発する(2) キューネットワークとエージェントへの指示	[ハ]
	第10回	クラウドインフラのソフトウェアを設計・開発する(3) 仮想マシンやコンテナのライフサイクルコントロール	[ハ]
	第11回	クラウドインフラのソフトウェアを設計・開発する(4) マシンイメージ、ネットワーク	[ハ]
	第12回	クラウドインフラのソフトウェアを設計・開発する(5) セキュリティ	[ハ]
	第13回	クラウドインフラのソフトウェアを設計・開発する(6) ネットワークアプライアンス	[ハ]
	第14回	クラウドインフラのソフトウェアを設計・開発する(7) テスト	[ハ]
	第15回	クラウド、IaaS の今後	[ハ]
	試験	プレゼンテーション試験	[ハ]
成績評価	プレゼンテーション試験でのコードレビュー(20%) 演習課題の完了(80%)		
教科書・教材	オンライン配布		
参考図書	プログラミング言語を未修得であれば、事前に Ruby 言語の入門書を各自選出し、読了してくること。		

Ⅱ エンタープライズ系科目群

コミュニケーション技術特論

標準化と知財戦略

情報アーキテクチャ特論 2

情報アーキテクチャ特論 3

情報システム特論 2

情報ビジネス特別講義 1

情報ビジネス特別講義 3

サービスサイエンス特論

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	エンタープライズ系科目群	科目名 (英文表記)	コミュニケーション技術特論 Communication and Presentation			教員名	中鉢 欣秀

概要	現代のビジネスパーソンにとって、ロジカルシンキングは必須の能力である。業務に関係する文書を作成することはもちろん、プレゼンテーションなどの内容を構成するためにも必要である。本講義では、ビジネスパーソンにとって必要となる論理思考を、具体的なトレーニングを通して習得することを狙う。論理を整理して体系化するための論理思考を身に付けることを目指す。		
目的・狙い	<p>この授業の目的は大きく、ロジカルシンキングの手法について理解することと、トレーニングとグループワークを通してそれらの手法を使えるようになることの2点である。</p> <p>ロジカルシンキングについては、まず、情報を論理的に整理する方法である MECE (Mutually Exclusive and Collectively Exhaustive) について説明する。次に、整理した情報にもとづき相手を納得させることができる論理を So What? / Why So? の考え方で構築するための方法について学ぶ。</p> <p>トレーニングは、MECE と So What? / Why So? の考え方を身につけるための課題に取り組む。トレーニングにより、ロジカルシンキングの方法を深く理解することを狙う。また、グループワークでは、グループ内でのコミュニケーションを通して、グループで合意され、他人に対して説得力のある論理を構築できるようになるための演習を行う。</p> <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none">- (支援活動) 人材育成・教育・研修 (レベル4)- 創造力 (レベル4)- 実行・実践力 (レベル4)- コミュニケーション力 (レベル4)		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	特になし。		
到達目標	上位到達目標		
	MECE を使いこなし、様々な情報を論理的なアーキテクチャで表現できる。 So What? /Why So? を使いこなし、論理的な思考に基づくコミュニケーションができる。		
	最低到達目標		
	MECE について理解し、他人に説明することができる。 So What? /Why So? について理解し、他人に説明することができる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	演習
	録画視聴型	○	ガイダンス、講義
授業外の学習	授業で示すトレーニング課題に取り組む。教科書・参考図書について学習する。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	次に示す計画に従って授業を行うが、履修者の理解度などを勘案し、授業計画を変更する場合もある。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	ガイダンス ・授業の狙い、履修にあたっての注意事項の説明など ・受講者の自己紹介	[ハ]
	第2回	ロジカルコミュニケーション ・ロジカルコミュニケーションとは ・全体を整理する方法としての MECE ・MECE グルーピング	[録]
	第3回	集中トレーニング例題解説 (1-1、1-2) ・MECE フレームワークのトレーニング ・MECE グルーピングのトレーニング	[ハ]
	第4回	So What?/Why So? ・So What?/Why So で話の飛びをなくすテクニック ・2 種類の So What?/Why So? = 観察と洞察 ・「洞察」の土台は「観察」	[録]
	第5回	集中トレーニング例題解説 (1-2 続き、2-1) ・MECE グルーピングのトレーニング ・So What?/Why So?に強くなろう	[ハ]
	第6回	ロジックツリー1 ・ロジックツリーによる論理の構造化 ・論理の基本パターン ・並列型で状況・方法を整理する	[録]
	第7回	集中トレーニング例題解説 (2-2、2-3) ・So What?/Why So?に強くなろう	[ハ]
	第8回	ロジックツリー2 ・解説型で状況・方法を整理する ・ロジックツリーのサイズ	[録]
	第9回	集中トレーニング例題解説 (2-3 続き、3-1、3-2) ・論理パターンの基本をマスターしよう ・非論理的なものを見抜く力をつけよう	[ハ]
	第10回	論理パターンの組み合わせ・ロジカルライティング ・1 つの課題に応える場合 ・2 つの課題に応える場合の組み合わせ ・論理構造を文書にする (ロジカルライティング)	[録]
	第11回	集中トレーニング例題解説 (4-1、4-2) ・情報を論理パターンでわかりやすく構成しよう ・図表を使って論理的に説明しよう	[ハ]
	第12回	グループワーク1 ・ロジカルシンキングに関するグループワークを行う	[ハ]
	第13回	グループワーク2 ・ロジカルシンキングに関するグループワークを行う	[ハ]
	第14回	グループワーク3 ・ロジカルシンキングに関するグループワークを行う	[ハ]
	第15回	プレゼンテーション ・グループワークの成果をプレゼンテーションする	[ハ]
	試験	レポート試験	
成績評価	次の観点から総合的に評価する。 ・授業で取り上げたロジカルシンキングに関する理解度 ・その他、授業に対する貢献度等 評価の対象となる成果物等は、 ・グループによるプレゼンテーション ・個人レポート（最終試験として実施）とする。 評価基準は概ね、評価5は履修者の10%未満、評価4は20%程度、評価3は40%程度となるよう設定する。		
教科書・教材	講義スライドは manaba でダウンロードできる。また、下記の教科書を使用する。 ・照屋他、「ロジカル・シンキング」、東洋経済新報社 ・照屋、「ロジカル・ライティング」、東洋経済新報社		
参考図書	授業内で随時紹介する。		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	エンタープライズ系科目群	科目名 (英文表記)	情報アーキテクチャ特論 2 Business Analysis			教員名	庄司 敏浩

概要	<p>企業活動には常に変化することが求められる。適切な変化を遂げられない企業は存続することはできない。環境変化及び市場や顧客のニーズに基づいて適切な活動を持続するために必要なソリューションを導くための活動がビジネスアナリシスである。IIBA(International Institute of Business Analysis TM)が策定した、世界で最も普及しているビジネスアナリシス体系である BABOK ガイド(A Guide to the Business Analysis Body of Knowledge?)に基づいたビジネスアナリスを理解するとともに、ビジネス・アナリストとしての基本スキルを身に付ける。</p>		
目的・狙い	<p>BABOK ガイド(A Guide to the Business Analysis Body of Knowledge)に基づいたビジネスアナリスを学ぶ。また、ここに定義されている六つの知識エリアに含まれるタスクを遂行するために必要な知識とスキルを身に付ける。</p> <p>修得できる知識単位:</p> <p>(戦略) 市場機会の評価と選定 (レベル 4)</p> <p>(戦略) システム戦略立案手法 (レベル 4)</p> <p>(戦略) コンサルティング手法 (レベル 4)</p> <p>(企画) システム企画立案手法 (レベル 3)</p> <p>(企画) 要求分析手法 (レベル 4)</p> <p>(企画) セールス事務管理手法 (レベル 4)</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	企業でのビジネス経験を有していることが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	<p>CIO としての役割・責任を果たすことができるレベル。</p> <p>IIBA (International Institute of Business Analysis TM)が認定する専門職の資格である CBAP (Certified Business Analysis Professional)が得られるレベル。</p> <p>(90 点以上の成績)</p>		
	最低到達目標		
	<p>ビジネスアナリシスの専門性を理解し、ビジネス・アナリストのタスクのうちいくつかを実践できるレベル。</p> <p>IIBA (International Institute of Business Analysis TM)が認定する専門職の資格である ECBATM(Entry Certificate in Business AnalysisTM)が得られるレベル。(60 点以上の成績)</p>		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	BABOK ガイドの内容に沿って講義する。
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	○	BABOK ガイドの内容に沿って講義する。
授業外の学習	<p>1000 字程度のレポートを何回か出す。レポートのための調査・執筆に時間をかけること。</p> <p>期日までに必ず提出すること。提出されたレポートはこの講義の履修者に公開する。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>対面型の授業では、グループでの演習やディスカッションを行う。</p> <p>15 回の講義後に筆記試験を行う。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
授業の計画	第1回	ビジネスアナリシスが必要な背景とビジネスアナリシスの主要コンセプト	[対]
	第2回	ビジネスアナリシスの計画とモニタリング (1) ・知識エリアとタスクの説明	[録]
	第3回	ビジネスアナリシスの計画とモニタリング (2) ・タスクの実践と主要テクニックの活用	[対]
	第4回	戦略アナリシス(1) ・知識エリアとタスクの説明	[録]
	第5回	戦略アナリシス(2) ・タスクの実践と主要テクニックの活用	[対]
	第6回	引き出しとコラボレーション(1) ・知識エリアとタスクの説明	[録]
	第7回	引き出しとコラボレーション(2) ・タスクの実践と主要テクニックの活用	[対]
	第8回	要求アナリシスとデザイン定義(1) ・知識エリアとタスクの説明	[録]
	第9回	要求アナリシスとデザイン定義(2) ・タスクの実践と主要テクニックの活用	[対]
	第10回	ソリューション評価(1) ・知識エリアとタスクの説明	[録]
	第11回	ソリューション評価(2) ・タスクの実践と主要テクニックの活用	[対]
	第12回	要求のライフサイクルマネジメント(1) ・知識エリアとタスクの説明	[録]
	第13回	要求のライフサイクルマネジメント(2) ・タスクの実践と主要テクニックの活用	[対]
	第14回	基礎コンピテンシー(1) ・ビジネス・アナリストに必要な基礎コンピテンシーの説明	[録]
	第15回	基礎コンピテンシー(2) ・ビジネス・アナリストに必要な基礎コンピテンシーの実践	[八]
	試験	第15回の講義終了後に試験を行う。試験を同等のレポート提出とする場合もある。	[対]
成績評価	最終試験 50% レポート 30% 授業中の演習やディスカッションの内容 20%		
教科書・教材	ビジネスアナリシス知識体系ガイド Version3.0 書籍:9,900 円, PDF 版;7,150 円 <IIBA 日本支部 Bookstore (http://store.iiba-japan.org/) にて購入可能>		
参考図書	ビジネスアナリシス知識体系ガイド アジャイル拡張版 v2 書籍 : 4,950 円 <アマゾンにて購入可能> PDF 版 : 3,525 円 <IIBA 日本支部 Bookstore (http://store.iiba-japan.org/) にて購入可能>		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	エンタープライズ系科目群	科目名 (英文表記)	情報アーキテクチャ特論 3 Information System Modeling			教員名	中鉢 欣秀

概要	<p>この授業では情報システムにおける「概念レベルのモデリング」について学ぶ。モデリングとは、情報システムのアーキテクチャを論理的・体系的に記述するための技術である。概念レベルのモデリングは、実装のための個別具体的な技術に依拠せず、システムの全体像を総合的に分析し、記述するものである。これは、情報システム開発における上流工程から、その先の、いわゆる超上流と呼ばれるビジネス領域まで幅広く適用できる技術である。</p> <p>この手法を身に付けるためには、モデル化対象領域の分析及び分析結果として得られる要素の総合、帰納的手法と演繹的手法の組み合わせ、抽象度や粒度の調整など、高度に知的な頭脳作業としての概念操作・概念構築の能力を涵養しなくてはならない。本授業では、まず、モデルを記述するための表記法について取り上げる。次に、具体的に情報システムのアーキテクチャを記述する演習を行う。これらを繰り返すことでモデリング能力の向上を図る。</p>		
目的・狙い	<p>オブジェクト指向モデリングの手法を通して、下記の知識項目を体系的に学ぶことを目的とする。モデル記述言語として UML を取り上げ、ビジネスレベルのモデルの定義、情報システムのアーキテクチャ記述、ソフトウェアの設計などをする方法に重点を置く。UML のダイアグラムのうち、アクティビティ図、シーケンス図、ステートマシン図、ユースケース図、クラス図等を解説する。シナリオ法によるモデリングも取り上げる。</p> <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> - (企画) 要求分析手法 (レベル4) - (実装) アーキテクチャ設計手法 (レベル4) - (開発) システムアーキテクティング技術 (レベル4) 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	情報システムの構築・運用等に関連する業務経験があることが望ましい		
到達目標	上位到達目標		
	概念レベルのモデリングに関する深い理解を得て、モデリングを実施できる		
	最低到達目標		
	UML によるモデルの表記法とモデリングプロセスについて理解する		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	演習
	録画視聴型	○	ガイダンス、講義
授業外の学習	録画教材の視聴と、授業中に指定した課題に取り組む。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	次に示す計画に従って授業を行うが、履修者の理解度などを勘案し、授業計画を変更する場合もある。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	ガイダンス・モデリング哲学 ・情報システムのモデリングとは ・モデリング哲学	[録]
	第2回	情報と処理の分析：講義 ・情報と処理に着目したモデリング ・オブジェクト指向モデリング ・UML とは	[録]
	第3回	情報と処理の分析：演習 ・シナリオとアクティビティ ・アクションと状態遷移	[ハ]
	第4回	モデルの表記法(1)：アクティビティ図 ・アクティビティ図	[録]
	第5回	モデリング演習(1)：アクティビティ図の演習 ・アクティビティ図に関する演習	[ハ]
	第6回	モデルの表記法(2)：シーケンス図 ・シーケンス図	[録]
	第7回	モデリング演習(2)：シーケンス図の演習 ・シーケンス図に関する演習	[ハ]
	第8回	モデルの表記法(3)：ステートマシン図 ・ステートマシン図	[録]
	第9回	モデリング演習(3)：ステートマシン図の演習 ・ステートマシン図に関する演習	[ハ]
	第10回	モデルの表記法(4)：ユースケース図 ・ユースケース図	[録]
	第11回	モデリング演習(4)：ユースケース図の演習 ・ユースケース図に関する演習	[ハ]
	第12回	モデルの表記法(5)：ロバストネス図 ・ロバストネス図	[録]
	第13回	モデリング演習(5)：ロバストネス図の演習 ・ロバストネス図に関する演習	[ハ]
	第14回	モデルの表記法(6)：構造物図（クラス図など） ・構造物図（クラス図など）	[録]
	第15回	モデリング演習(6)：構造物図（クラス図など）の演習 ・構造物図（クラス図など）に関する演習	[ハ]
	試験	レポート試験	
成績評価	<p>次の観点から総合的に評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業で取り上げたモデリングに関する理解度 ・UML によるモデルの記述に関する理解度 ・その他、授業に対する貢献度等 <p>評価の対象となる成果物等は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・UML によるモデリング課題 ・個人レポート（最終試験として実施）とする。 <p>評価基準は概ね、評価 5 は履修者の 10%未満、評価 4 は 20%程度、評価 3 は 40%程度となるよう設定する。</p>		
教科書・教材	UML のモデリングツールを利用する。		
参考図書	授業内で随時紹介する。		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	エンタープライズ系科目群	科目名 (英文表記)	情報システム特論 2 Information Systems and Business Process		教員名	亀井省吾	

概要	<p>将来、CXO、マネジメントとして自社のしごとの仕方を変えていこうする人、コンサルタントとしてのお客様（企業）に BPR(Business Process Reengineering) を提案しようとする人が必要とする思考方法、発想法、考え方をスキルを学ぶことを目的とする。</p> <p>各分野での現状の問題に対する事業開発・事業改革の提案・設計を行う。ビジネス環境の変化に伴い、ステークホルダーのニーズを満たすために新しい事業（仕事）のやり方が必要になる。テクノロジー(IT)の進歩が破壊的技術として今までできなかったことを可能にしている。それを活用した変化しつつあるビジネス環境に合った新しい事業設計を行い、現在の仕事のやり方のどこを変えるべきかを特定する。変えるべきことをマネジメントに説得するための論理を構成する。特定のマネジメントを対象に説得を目的としたプレゼンテーションを行う。</p> <p>与えられた事例に対して、チームで検討し、結果をプレゼンテーションする。3つの事例を対象にする。1チームは3～5名で構成する。初回にチーム分けをするので履修者は必ず参加すること。初回のチーム分け完了以降での脱退（履修放棄）及び履修追加は認めない。</p>		
目的・狙い	<p>3～5名のチームで与えられた事例（ケース）を多角的に検討する。ケースに書かれた内容を前提とするが、不足している情報はチームで独自に収集する。仮説・検証の考え方が求められる。自分の考え方と他メンバーとの考え方に違いがあった場合に、なぜ自分は他メンバーと違う発想をしたかについて自省することが教育の基本になる。他メンバーがどのように考えているかを聞き出すケーパビリティが重要である。チームとしてひとつの結論に至る必要があるが、チームメンバー全員がその結論に至った理由を同じように説明できることが求められる。良いチーム成果を出すことだけが教育目的ではない。チームメンバー全員が誰でもチーム成果を説明でき、質問に答えられることが要請される。チーム活動終了時、各メンバーは他メンバーに対してアドバイスをを行う。チーム活動はグループウェアを用い、すべてのコミュニケーションがチーム全員にわかるようにする。</p> <p>複数のチームが同じケースに対して異なった結論を出している場合は、その違いが生じた理由についてクラス全体で議論する。チームが検討した内容で触れるべきなのに触れていない事柄について教員が指摘し、なぜ検討しなかったかをクラス全体で議論する。チームとして最も良いと思われる新しい事業（仕事）のやり方を提言する。特定のマネジメントを対象に、説得を目的としたプレゼンテーションを実施する。なぜその提案が正しいかを論理的に説明し説得力があるかどうか極めて重要である。</p> <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> (戦略) 市場機会の評価と選定 (レベル 4) (戦略) マーケティング (レベル 4) (戦略) 製品・サービス戦略 (レベル 4) (戦略) 販売戦略 (レベル 4) (戦略) システム戦略立案手法 (レベル 3) (戦略) コンサルティング手法 (レベル 4) (企画) システム企画立案手法 (レベル 3) (企画) 要求分析手法 (レベル 3) 		
履修条件 (履修数の上限、要求する前提知識等)	企業での仕事の経験、ビジネス経験があるのが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	ビジネスを分析し、あるべき姿としての事業アーキテクチャを独力で設計できる。		
	最低到達目標		
	事業アーキテクチャを設計するタスクのチームメンバーとして、チームに貢献できる。		
授業実施形態 (単一または複数から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	遠隔での出席可。グループワーク (3～4 名程度のグループによる協働作業)、グループ討議、クラス討議を行う。学生による授業参加を特に期待する。
	録画視聴型	○	第 15 回の授業は録画のみ。授業で指定された視聴確認で出席扱いとする。
授業外の学習	与えられたケースについて、情報収集・分析、プレゼンテーションの準備など、チーム活動を行う上で必要な事前に行うべき個人活動を行う。1 ケースについて 8 時間以上の授業外活動が必要である。個人の活動内容と活動時間はグループウェア上に記録を残す。		
授業の進め方 (グループワーク方式など、進め方の特徴)	当科目はケース毎に、イントロダクション講義、チーム討議、発表・クラス討議、解題講義から構成される。授業計画を以下に示す。学生の興味、履修者数等から、内容及び順序は適宜調整する可能性がある。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	学生が科目選択の判断ができるように、授業の目的と概要を説明する。	[ハ]
	第2回	ケース1の配布とイントロダクション講義（オープンイノベーション理論などケース1に関するインプット講義）を実施した後、チームビルディングを行う。	[ハ]
	第3回	ケース1についてチーム討議を実施する。	[ハ]
	第4回	ケース1についてゲスト講義を実施する。	[ハ]
	第5回	ケース1について発表・クラス討議を実施する。	[ハ]
	第6回	ケース1について解題講義を実施した後、ケース2の配布とイントロダクション講義（CSV理論などケース2に関するインプット講義）、チームビルディングを行う。	[ハ]
	第7回	ケース2についてチーム討議を実施する。	[ハ]
	第8回	ケース2についてチーム討議を実施する。	[ハ]
	第9回	ケース2について発表・クラス討議を実施する。	[ハ]
	第10回	ケース2について解題講義を実施した後、ケース3の配布とイントロダクション講義（プラットフォーム理論などケース3に関するインプット講義）、チームビルディングを行う。	[ハ]
	第11回	ケース3についてチーム討議を実施する。	[ハ]
	第12回	ケース3についてチーム討議を実施する。	[ハ]
	第13回	ケース3について発表・クラス討議を実施する。	[ハ]
	第14回	ケース3について解題講義を実施する。	[ハ]
	第15回	総まとめ講義を実施する。	[録]
	試験	実施しない。	
成績評価	ケース1のチーム報告（チームとして評価するが、個人の役割・貢献を加味することがある）（15%） ケース2のチーム報告（チームとして評価するが、個人の役割・貢献を加味することがある）（15%） ケース3のチーム報告（チームとして評価するが、個人の役割・貢献を加味することがある）（15%） 個人活動内容（25%） 他メンバーへのアドバイス（15%） クラス議論での参画度合（15%）		
教科書・教材	教科書は特に指定しない。ケース資料を配布する。		
参考図書	必要に応じて指示する。		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	エンタープライズ系科目群	科目名 (英文表記)	情報ビジネス特別講義 1 Business Law on Information			教員名	六川 浩明

概要	<p>本授業では、情報アーキテクトにとって特に重要な法律であると考えられる、個人データ保護、プライバシー、情報法、著作権法、会社法、金融商品取引法等の分野についての重要な基礎的知識について授業を行う。</p> <p>2003 年に成立した個人情報保護法は、2017 年に大幅に改正された。2013 年に成立した番号法には我が国で初めて PIA 条項が設けられた。</p> <p>1995 年から適用された EU データ保護指令（Data Protection Directive 95）に代わり 2018 年 5 月 25 日から EU「一般データ保護規則（General Data Protection Regulation: GDPR）が適用されている。これは欧州経済領域（European Economic Area：EEA）、EU 加盟国 28 カ国、ノルウェー、アイスランド、リヒテンシュタイン）と個人データをやり取りする日本のほとんどの企業や機関・団体が適用対象となり、同規則への違反行為には高額な制裁金が科されるリスクもある。</p> <p>本授業では、国内外の最新の立法動向を注視しつつ、ケースをとりあげるなどして、参加型の授業を行い、授業参加者の法的考え方の醸成に取り組む。</p>		
目的・狙い	<p>当科目では、情報アーキテクトにとって特に学ぶべき以下の事項・法令の理解・修得を目的とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人データ保護 ・プライバシー ・情報法 ・著作権法 ・会社法 ・金融商品取引法 <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企業活動（レベル 4） ・法規・基準・標準（レベル 4） 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	情報セキュリティ関連の授業を受講済みあるいは併行して受講することが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	法的問題を含む具体的事例が提示されたとき、具体的な法令等を適用して事例の解決の方向性を示すようになること。		
	最低到達目標		
	法的問題を含む具体的事例が提示されたとき、それに適用され得る具体的法令等を指摘できるようになること。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	本授業は、教員と受講生の双方向的なケースメソッド方式で行う。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	上記概要に記載したとおり。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	個人情報保護法制の変遷。各行政官庁の個人情報保護ガイドライン、JIS 等の説明。 プライバシー、名誉、個人情報、個人データの区分	[ハ]
	第2回	同上	[ハ]
	第3回	海外諸国における個人データ保護に関する法制度動向（欧州における GDPR, 米国、 中国、アジア）	[ハ]
	第4回	同上	[ハ]
	第5回	裁判例の紹介（個人情報漏えい、名誉毀損、プライバシー侵害）	[ハ]
	第6回	同上	[ハ]
	第7回	不正競争防止法	[ハ]
	第8回	著作権法、デジタル著作物の保護	[ハ]
	第9回	同上	[ハ]
	第10回	不正アクセス禁止法、特定商取引法、電気通信事業法	[ハ]
	第11回	企業での役員及び従業員の立場からの情報管理対策（取引先との秘密保持契約、従 業員との秘密保持規定、情報漏洩を巡る裁判例）	[ハ]
	第12回	同上	[ハ]
	第13回	ネット空間での風評被害対策と裁判例の紹介（発信者情報開示請求、削除仮処分の 申立て、本訴請求等） 有 対面	[ハ]
	第14回	同上	[ハ]
	第15回	総合	[対]
	試験	最終試験	[対]
成績評価	最終試験 60%、提出課題 20%、授業時の発言 20%		
教科書・教材	3Q 開始前に指定する。		
参考図書	小向太郎著『情報法入門 第4版』（NTT 出版、2018 年）2800 円 穴戸常寿編著『新・判例ハンドブック 情報法』（日本評論社、2018 年）1600 円 関述之・小川直人編著『インターネット関係 仮処分の実務』（金融財政事情研究会、2018 年）3800 円 瀬戸洋一著『実践的プライバシーリスク評価技法』（近代科学社、2014 年）3200 円 独立行政法人情報処理推進機構(IPA)著『情報セキュリティ読本 五訂版』（実教出版、2018 年）600 円 一般財団法人日本情報経済社会推進協会編『JISQ15001:2017 対応 個人情報保護マネジメントシステム導入・実践 ガイドブック』（日本規格協会、2018 年）4500 円 吹田智章著『暗号技術の教科書』（ラトルズ、2018 年）1800 円 渡邊涼介著『企業における 個人情報・プライバシー情報の利活用と管理』（青林書院、2018 年）4300 円		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	エンタープライズ系科目群	科目名 (英文表記)	情報ビジネス特別講義 3 IT Strategy & Marketing			教員名	川名 周

概要	<p>企業活動でのIT戦略及びマーケティングを効果的に活用していくマネジメント力が強く求められている。</p> <p>当科目では、IT戦略、マーケティング等を体系的、実践的に学び、どのようにマネジメントするかを理解する。具体的には、STP、4Pといった基本概念から始まり、競争戦略、商品開発、マーケティングリサーチ、マーケティングコミュニケーション等に触れていく。後半には、近年発達するデジタルマーケティングも考察する。特に実務での事例をベースに体系的に網羅された内容と演習によって、IT戦略、マーケティングのマネジメント（幹部）、IT担当役員（CIO）、事業担当役員、起業家としての役割を実践できる人材を養成する。</p>		
目的・狙い	<p>マーケティングの基礎から実務、そして、最新トピックスまで学ぶ。</p> <p>マーケティング実務に関わったことが無い者にも、講義と演習を通して、体得型の理解を進める。ITストラテジスト、プロジェクトマネージャーとして、企業内で対面・関係するマーケットと、共通言語で話せるようになる。</p> <p>修得できる知識単位:</p> <p>(戦略) 市場機会の評価と選定 レベル4</p> <p>(戦略) マーケティング レベル4</p> <p>(戦略) 製品・サービス戦略(システム) レベル4</p> <p>(戦略) コンサルティング手法 レベル4</p> <p>(戦略) 業務動向把握手法 レベル4</p> <p>(企画) セールス事務管理手法 レベル2</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>マーケティング実務経験の有無は問わない。</p> <p>ただし、マーケティングコミュニケーションや広告に触れるので、日本語の読み書きに堪能であること。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	「マーケティング」とは何かの感覚やセンスが身に付く。実務でより一つ上のマーケティングにチャレンジできる。情報アーキテクチャを進める上で、ITストラテジストとしてマーケティング要素を武器として加えられ、より成功確率の高い事業を行える。		
	最低到達目標		
	マーケティングの概念理解、マーケティング・マネジメントの基礎概念理解。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	最終日のグループワークプレゼンテーション、及び試験に関しては、出席を望む。
	ハイフレックス型	○	遠隔での出席可。グループワーク(4?5名程度のグループによる協働作業)、クラス討議、試験を行う。学生による授業参加を特に期待する。
	録画視聴型	○	遠隔及び録画での出席可。授業で指定された視聴確認で出席扱いとする。
授業外の学習	<p>個人ワーク宿題時には、MANABA上にレポートや自由記述アンケートを提出。</p> <p>グループワーク時には、プレゼンテーションまでの期間、MANABA-プロジェクト機能を使い、オンライン、オフライン討議を行ない、グループ全員で最終プレゼンテーションを仕上げていく。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>本科目は、講師(ゲスト講師)よりの講義、グループワーク、クラスディスカッション、受講生によるプレゼンテーションから構成される。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	オリエンテーション：講義目的及び15回講義の進行についての概略。 マーケティングとは：その歴史／マーケティングの定義／マーケティングマネジメントとは <マーケティング>	[録]
	第2回	IT戦略とマーケティングの関係：「CMOとCIO」 マーケターとは（1）：プロフェッショナルマーケターのドキュメント番組を使っての討議 <マーケティング>	[録]
	第3回	マーケティングリサーチ：その種類と実際 <業務動向把握手法> <市場機会の評価と選定>	[録]
	第4回	ビジネスケース（1）：商品開発と市場導入 <製品・サービス戦略> マーケターとは（2）：プロフェッショナルマーケターのドキュメント番組を使っての討議 <マーケティング>	[ハ]
	第5回	マーケティング基本戦略(1)：3C,SWOT,STP,4P <業務動向把握手法> <市場機会の評価と選定> <コンサルティング手法>	[ハ]
	第6回	マーケティング基本戦略(2)：3C,SWOT,STP,4P <業務動向把握手法> <市場機会の評価と選定> <コンサルティング手法>	[ハ]
	第7回	個人課題：オリエン <業務動向把握手法> <市場機会の評価と選定> <コンサルティング手法> 競争地位戦略：競争ポジションによる戦略定石 <コンサルティング手法>	[録]
	第8回	マーケティングコミュニケーション戦略（1）：競争地位によるメッセージ戦略	[ハ]
	第9回	個人課題：プレゼンと講評 <業務動向把握手法> <市場機会の評価と選定> <コンサルティング手法>	[ハ]
	第10回	エンゲージメント：その概念、エンゲージメント型マーケティング、トラッドマーケティングコミュニケーションとデジタルマーケティングコミュニケーションの融合 <マーケティング> マーケティングコミュニケーション戦略（2）：エンゲージメント型メッセージ戦略 <マーケティング>	[ハ]
	第11回	グループ演習（1）：オリエンテーション <マーケティング> デジタルマーケティング（1）：ターゲティング広告等運用型インターネット広告の仕組み <マーケティング>	[録]
	第12回	デジタルマーケティング（2）：クッキー規制等プライバシー倫理とその方向性 <マーケティング> グループ演習（2）：グループワーク	[ハ]
	第13回	マーケティングミックスモデリング：科学（ビッグデータ）による4P分配。 <マーケティング> <コンサルティング手法>	[録]
	第14回	グループ演習（3）：グループワーク	[ハ]
	第15回	グループ演習（4）：プレゼンテーションと講評 <市場機会の評価と選定> <マーケティング> <コンサルティング手法>	[対]
	試験	これまでの講義を振り返り、総括する。第1回から第15回までの内容の理解に関する筆記試験を行う。	[対]
成績評価	毎回のワークシート（30点）／個人レポート(10点)／グループワーク参加貢献度（30点）／最終試験（30点）		
教科書・教材	教材を適宜 Manaba 上で配布する。		
参考図書	「コトラー&ケラーのマーケティング・マネジメント 第12版」 Philip Kotler /Kevin Lane Keller 丸善出版 2014年 「自分ごとだと人は動く」 博報堂 DY グループ エンゲージメント研究会著 ダイアモンド社 2009年 「本当のブランド理念について語ろう」 ジム・ステンゲル著 CCC メディアハウス 2013年		

Ⅲ システム開発系科目群

ソフトウェア工学特論
フレームワーク開発特論
セキュアプログラミング特論
クラウドサーバ構築特論
情報セキュリティ特別講義 2
アジャイル開発手法特論
コラボレイティブ開発特論

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	システム開発系科目群	科目名 (英文表記)	ソフトウェア工学特論 Software Engineering			教員名	追川 修一

概要	高品質なソフトウェアを効率的に開発する手法や技法について体系的に学習する。まず主要なソフトウェア開発プロセスとして規範的プロセスとアジャイルプロセスをとりあげる。続いて開発プロセスの理解を踏まえ、ソフトウェアライフサイクルの主要なアクティビティにおいて必要とされる基本的な知識について学習する。主要な項目についてグループで議論を行うことで、理解を深める。以上の学習を通じて、ソフトウェア工学の重要な概念を体系的に把握し、ソフトウェア開発のリーダーとしての素養を習得することを目指す。		
目的・狙い	高品質なソフトウェアを効率的に開発するためには、開発課題に適したソフトウェアプロセスを設計し、開発の各アクティビティを確実に遂行するための技術体系の修得が不可欠である。本講義では様々な種類のソフトウェア開発に適用できるソフトウェア工学に関する基礎知識を体系的に学習することを目的とする。ソフトウェア開発は、開発対象の特性や規模、開発組織の影響を避けられないものの、どのような開発でも基盤となる普遍性の高い技術を獲得することを目指す。 修得できる知識単位: (企画) 要求分析手法 (レベル4) (システム) ソフトウェアの構築技術 (レベル4) (開発) システムアーキテクティング技術 (レベル4) (開発) システム開発管理技術 (レベル4)		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	ソフトウェアの工学的な開発方法、品質、生産性に関心をもっていること。 プログラミングの知識やソフトウェア開発の経験は特に必要としない。		
到達目標	上位到達目標		
	・ソフトウェア工学の考え方を主要なソフトウェア開発に適用できる。 ・開発課題に適したソフトウェアプロセスを適用できる。		
	最低到達目標		
	・主要なソフトウェアプロセスを理解できる。 ・ソフトウェアプロセスを構成する各アクティビティを理解できる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	授業は、ハイフレックス型で実施するため、対面または遠隔で受講可能。 グループでの議論を行う回もハイフレックス型で実施する。 試験は予め決められた時間にハイフレックス型で実施する。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	講義への参加および学習内容の理解を確認するため、各講義後に内容のまとめを含む確認テストを受け、2回の課題レポートを提出すること。レポートは締切を厳守すること。締切後の提出は認めない。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	授業計画を以下に示す。講義は毎回配布する資料を使用して行う。資料は事前に LMS にて配布する。各講義後に内容のまとめを含む確認テストを受けること。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	大規模ソフトウェア開発の課題：ソフトウェアの役割の進化、ソフトウェア工学の誕生の背景を理解し、大規模ソフトウェア開発におけるソフトウェア工学の重要性を学ぶ。	[ハ]
	第2回	ソフトウェアの開発プロセス：ソフトウェアプロセス、プロセスフレームワーク、プロセスを構成する各アクティビティの概要を学ぶ。	[ハ]
	第3回	規範的なプロセスモデル：規範的なプロセスモデルとして、ウォーターフォールモデル、進化型プロセスモデル、統一プロセスを学ぶ。	[ハ]
	第4回	アジャイル型プロセスモデル（Ⅰ）：アジャイルソフトウェア開発の誕生の背景を理解し、プロセスモデルとして、エクストリームプログラミングを学ぶ。	[ハ]
	第5回	アジャイル型プロセスモデル（Ⅱ）：アジャイル型プロセスモデルとして最も広く用いられている、スクラムについて学ぶ。	[ハ]
	第6回	プロセスモデル設計演習：規範的およびアジャイル型のプロセスモデルについて、グループで議論を行い、理解を深める。グループでの議論の結果について発表し、個々の理解をレポートにまとめる。	[ハ]
	第7回	要求分析：要求分析の概要として、要求獲得、要求分析、要求仕様化、問題解決、要求の妥当性確認について学ぶ。	[ハ]
	第8回	構造化分析：構造化分析として、データフロー図を用いた分析、実態関連図を用いたデータモデリングを学ぶ。	[ハ]
	第9回	オブジェクト指向分析：オブジェクト指向の基本概念、オブジェクト指向開発方法論、オブジェクト指向分析の手順について学ぶ。	[ハ]
	第10回	アーキテクチャ設計：ソフトウェア設計の基本概念、設計モデル、データ設計、アーキテクチャ設計について学ぶ。	[ハ]
	第11回	モジュール設計：モジュール設計とは何かを理解し、モジュール分割、モジュール分割の基準、構造化設計について学ぶ。	[ハ]
	第12回	ソフトウェアテスト：ソフトウェアテストとは何かについて学び、ソフトウェアの品質と合わせてテスト戦略を理解する。	[ハ]
	第13回	ソフトウェアテスト手法：テスト手法として、単体テスト、結合テスト、機能テスト、システムテスト、ホワイトボックステストとブラックボックステストについて学ぶ。	[ハ]
	第14回	ソフトウェアプロセス設計演習：PBL におけるソフトウェアプロセスについてグループで議論を行い、理解を深める。グループでの議論の結果について発表し、個々の理解をレポートにまとめる。	[ハ]
	第15回	ソフトウェアの進化と再利用技術：ソフトウェア進化のプロセスについて理解し、ソフトウェアの進化におけるリファクタリングの役割、リファクタリングの方法について学ぶ。	[ハ]
	試験	第1回から第15回までの内容の理解に関して、筆記試験を実施する。	[ハ]
成績評価	演習および課題レポート（50%）、期末の筆記試験（50%）を基準として総合的に評価する。		
教科書・教材	教科書は特に指定しない。講義資料をLMSで配布するので、各自授業前にダウンロードすること。		
参考図書	<ul style="list-style-type: none"> ・実践ソフトウェアエンジニアリング(第9版)、R. S. Pressman, B. R. Maxim 著、オーム社、2021年。 ・Software Engineering 10th ed., Ian Sommerville, Pearson Education, 2016. ・ソフトウェア工学の基礎、玉井 哲雄 著、岩波書店、2004年。 ・アジャイルソフトウェア開発の奥義、R. C. Martin 著、ソフトバンククリエイティブ、2008年。 		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	システム開発系科目群	科目名 (英文表記)	フレームワーク開発特論 Framework Development			教員名	安川 要平

概要	<p>実用的な Web アプリケーション開発においては、利用者が求めるシステムを探索的に学び、迅速に開発することが求められます。素早く開発する方法の1つにフレームワークを使った開発がありますが、本講義では、日本や米国の上場企業などで実際に使われている Web アプリケーションフレームワーク『Ruby on Rails』を用いて、SNS (Social Networking Service) を作りながら Web アプリケーションの基本的な開発スキルを習得します。</p> <p>本講義の進め方、演習課題の例、採点基準など: https://note.com/yasslab/n/nb3710ebaf686 本講義の受講者の声 (一部抜粋): https://speakerdeck.com/yasslab/why-rails-tutorial-works-online?slide=17 本講義では下記の教材を使いますが、受講者は本講義のために教材を購入する必要はありません。</p> <p>使用教材: Ruby on Rails チュートリアル - プロダクト開発の0→1を学ぼう https://railstutorial.jp/ 動画教材: Ruby on Rails チュートリアル解説動画 (計 38 時間) https://railstutorial.jp/screencast 補足教材: 『コマンドライン編』『テキストエディタ編』『HTML 編』など https://railstutorial.jp/path</p> <p>なお、本講義ではセキュリティを意識したバックエンド開発の基本が学べますが、実際の開発現場では、本講義で学ぶ基本に加えてフロントエンド開発やモバイルアプリ開発、インフラ構築などが必要になることもあります。さらに深く学び続けてみたい方は、本講義で学習後、下記『読み物ガイド』を参考に進めてみてください。</p> <p>読み物ガイド: https://railstutorial.jp/reading_guide</p>		
目的・狙い	<p>本講義ではオブジェクト指向のプログラミング言語である Ruby と、その代表的なフレームワーク『Ruby on Rails』を用いて、以下に記述する Web アプリケーションを開発するためのスキルセットと知識単位を、手を動かしながら実践的かつ体系的に学びます。</p> <p>修得できるスキルセット:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フレームワークの特徴を活かした Web アプリケーションの開発 ・クラウド IDE (AWS Cloud9) を使った開発 ・テストの書き方と、テストを使った開発手法 ・Git/GitHub を使ったソースコードのバージョン管理 ・Heroku や AWS を使った本番環境サーバーの運用 ・オブジェクト指向プログラミングの実践 ・DRY (Don't Repeat Yourself) の考え方と実践 <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> - (実装) アーキテクチャ設計手法 (レベル4) - (システム) ソフトウェアの構築技術 (レベル4) - (システム) Web システムの構築技術 (レベル4) - (システム) データベースの利用技術 (レベル4) - (システム) プラットフォームの利用技術 (レベル4) - (システム) クラウドコンピューティングの利用技術 (レベル4) <ul style="list-style-type: none"> ・Bootstrap を使ったレイアウトとデザイン ・Migration や ORM を用いたデータベース設計と実装 ・MVC アーキテクチャと、ユーザー登録の流れ ・Session や Cookie を使ったユーザーログインの仕組み ・暗号化やハッシュ化の特徴と、セキュリティを意識したデータの取り扱い方 ・RESTful アーキテクチャに沿った、HTTP リクエストと CRUD 処理の関係性 ・他、多対多のモデル設計、簡単な JavaScript の組み込み方、SQL チューニングなど 		
履修条件 (履修数の上限、要求する前提知識等)	<p>1. UNIX コマンドに関する基本的な知識 2. HTML や CSS、JavaScript に関する基本的な知識</p> <p>UNIX コマンドなどの前提知識の詳細については下記ページをご参照ください。 https://railstutorial.jp/path</p> <p>なお、本講義内で Ruby を題材としたオブジェクト指向プログラミングも説明するため、Ruby の知識は不要です。</p> <p>毎回の講義後に演習課題を出題します。演習課題にはプログラミング (実習) も含まれるため、受講前もしくは初回講義中に開発環境を整えておくこととスムーズです。本講義では演習課題や実習に関連する質疑応答 (課題解説やエラー対処など) を重視するため、受講生の主体的に学ぶ力が求められます。</p> <p>プログラミングに苦手意識がある方や開発に自信が無い方のための補足教材や、エラーで躓いた方のための質疑応答時間も用意しているので、独学で難しかった方はぜひこの機会にチャレンジしてみてください。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	フレームワークを活用した Web アプリケーション開発を自分で行えるようになること。		
	最低到達目標		
	フレームワークを活用した Web アプリケーション開発の全体像を理解すること。		
授業実施形態 (単一または複数から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	<p>本講義の期間中は、有償の Web テキストや講義動画 (解説動画)、および補足教材を受講生向けに限定公開します。初回講義日までに講義動画 (解説動画) などの全教材をお渡しするので、下記「授業の内容」のスケジュールに沿って各章を進めください。</p> <p>講義動画 (解説動画) は収録済みのため、講義時間中は実習 (プログラミング) に関連する質疑応答や、受講者が躓いている部分のサポート (エラーの対処など)、および受講者が提出した演習課題の解説に割り当てていきます。</p> <p>詳しくは下記の note 記事をご参照ください。 https://note.com/yasslab/n/nb3710ebaf686</p>
	録画視聴型	○	<p>本講義の期間中は、有償の Web テキストや講義動画 (解説動画)、および補足教材を受講生向けに限定公開します。初回講義日までに講義動画 (解説動画) などの全教材をお渡しするので、下記「授業の内容」のスケジュールに沿って各章を進めください。</p> <p>講義動画 (解説動画) は収録済みのため、講義時間中は実習 (プログラミング) に関連する質疑応答や、受講者が躓いている部分のサポート (エラーの対処など)、および受講者が提出した演習課題の解説に割り当てていきます。</p> <p>詳しくは下記の note 記事をご参照ください。 https://note.com/yasslab/n/nb3710ebaf686</p>
授業外の学習	<p>講義動画 (解説動画) を使って事前に学習しておく、当日の質疑応答の時間を効率的に使えます。各講義日に提出する演習課題は各章の内容を反映しているため、復習としても役立ちます。講義動画 (解説動画) と演習課題は事前に用意しておくので、演習課題を提出したら次章以降の内容に取り組んでいただくことも可能です。</p>		
授業の進め方 (グループワーク方式など、進め方の特徴)	<p>使用教材『Ruby on Rails チュートリアル (全 14 章)』のうち、省略可能な 9 章・11 章・12 章を除いた 11 章分を講義で取り扱います。省略した 3 章分は発展課題として出題するので、余裕があればぜひチャレンジしてみてください。なお、省略する 9 章・11 章・12 章で修得できる内容は次の通りです。</p> <p>修得できるスキルセット:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Cookie を用いたログイン状態の保持と、セキュリティを意識した実装 ・サーバーからメールを送る仕組みと、メール送付を使ったより安全なユーザー登録 ・サーバーからメールを送る仕組みと、メール送付を使ったパスワード再設定の実装 <p>より詳細な内容についてはシラバス下部にある『教材・教科書』および『参考図書』を参照してください。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第 1 回	ガイダンス、第 1 章 ゼロからデプロイまで ・本授業の目的・目標、開発環境 (Cloud9 など) の準備、Git/Heroku のセットアップ ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[ハ]
	第 2 回	第 2 章 Toy アプリケーション ・Rails の設計思想と使いどころ、Rails を使ったリソース設計と実装デモ ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 3 回	第 3 章 ほぼ静的なページの作成 ・テストの書き方、テスト駆動開発、簡単な静的ページと動的ページの作成 ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 4 回	第 4 章 Rails 風味の Ruby ・Ruby の設計思想、オブジェクト指向の基本、典型的なデータ構造とクラスの実装 ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 5 回	第 5 章 レイアウトを作成する ・CSS フレームワーク『Bootstrap』を使ったデザインとレイアウト、拡張言語とアセット提供の概要 ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 6 回	第 6 章 ユーザーのモデルを作成する ・Active Record を使ったモデルの実装、バリデーション、セキュアなパスワード ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 7 回	第 7 章 ユーザー登録 ・Rails のデバッグ方法、MVC アーキテクチャをも用いたユーザー登録フォームの実装 ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 8 回	第 8 章 基本的なログイン機構 ・セッションを使ったログイン/ログアウトの実装、フラッシュ、短絡評価、テスト用データの作成 ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 9 回	第 1 0 章 ユーザーの更新・表示・削除 (前半) ・RESTful なリソース設計と実装 (前半)、Friendly Forwarding、セキュリティモデルの構築 ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 10 回	第 1 0 章 ユーザーの更新・表示・削除 (後半) ・RESTful なリソースと実装 (後半)、Rake によるサンプルデータの生成、ページネーション ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 11 回	第 1 3 章 ユーザーのマイクロポスト (前半) ・Micropost のモデリング、Micropost の MVC 設計と実装、モデル同士の関連付け ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 12 回	第 1 3 章 ユーザーのマイクロポスト (後半) ・Micropost のセキュリティモデルの構築、Rails の標準機能 (Active Storage) を使った画像投稿の実装デモ ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 13 回	第 1 4 章 ユーザーをフォローする (前半) ・多対多のモデリングと設計と実装、Follow/Unfollow ボタンの実装とテスト、パーシャル機能の応用 ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 14 回	第 1 4 章 ユーザーをフォローする (後半) ・JavaScript を使った Follow/Unfollow ボタンのデータ更新、ステータスフィードの実装、応用トピックの紹介 ・講義は事前にお渡しする解説動画で進めてください。講義中は受講生が困っていること (エラーや疑問など) のサポートと、受講生が提出した演習課題の解説を中心に進めていきます。	[録]
	第 15 回	これまでのまとめ、今回取り扱わなかった範囲の紹介、および実技試験・レポートに関する質疑応答などを行います。	[録]
成績評価	試験	これまでの授業の理解度を測る実技試験を行います。 ・試験は授業時間中の前半を使って実施し、後半は試験問題の解説に使います。 ・レポート提出希望者は、当日の授業終了時刻までにレポートを提出してください。	[ハ]
		毎回出題する演習課題と、最終日の実技試験で評価します。ただし、既に十分な開発経験があり、レポートでの評価を事前に (第 14 回の講義終了時点までに) 希望した受講生については、上位到達目標 (フレームワークを活用した Web アプリケーション開発を自分で行えるようになること) の達成をレポートで示すことを認めています。 レポートでの評価を希望する場合は、以下に示す拡張機能もしくは新規 Web アプリケーションを開発し、所定のフォームからレポートを提出してください。 ・レポート: サンプルアプリケーションの拡張機能の実装、または Rails を使った新規 Web アプリケーションの開発 (拡張機能の実装例: https://railstutorial.jp/reading_guide#exercise) 配点: 上位到達目標に関する演習課題を 60%、実技試験を 40% として、総合的に評価します。演習課題のウェイトが比較的大きいので、演習課題の提出し忘れにご注意ください。	
教科書・教材		本講義では有償の下記教材を使いますが、本講義の受講生が個別に購入する必要はありません。 使用教材: Ruby on Rails チュートリアル - プロダクト開発の 0→1 を学ぼう https://railstutorial.jp/ 動画教材: Ruby on Rails チュートリアル解説動画 (計 38 時間) https://railstutorial.jp/screencast 補足教材: 『コマンドライン編』『テキストエディタ編』『HTML 編』など https://railstutorial.jp/path 本講義の進め方や演習課題の例、採点基準などについては下記の note 記事をご参照ください。 https://note.com/yasslab/n/nb3710ebaf686	
		各章が終わった時点のサンプルコード集『Sample Apps』: https://github.com/yasslab/sample_apps 各機能の詳細を説明するリファレンス集『Rails ガイド』: https://railsguides.jp/ なお、本講義ではセキュリティを意識したバックエンド開発の基本が学べますが、実際の開発現場では、本講義で学ぶ基本に加えてフロントエンド開発やモバイルアプリ開発、インフラ構築などが必要になることもあります。さらに深く学び続けてみたい方は、本講義で学習後、下記『読み物ガイド』を参考に進めてみてください。 読み物ガイド: https://railstutorial.jp/reading_guide	
参考図書			

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	システム開発系科目群	科目名 (英文表記)	セキュアプログラミング特論 Secure Programming		教員名	黄 緒平	

概要	インターネットが日常生活や企業での業務等に欠かせない社会基盤となり、多数のソフトウェアがネットワーク経由で多くのユーザに利用されるようになった現在では、脆弱性を持つ情報システムに対する攻撃が年々深刻化している。本講義では、脆弱性を含まない安全なソフトウェアを開発するための技術及びノウハウを解説する。具体的には、C言語で開発されたソフトウェアについて、文字列操作、動的メモリ管理、ファイル入出力等まつわる脆弱性の具体例を示し、静的解析ツール、動的解析ツール、アドレス空間配置のランダム化等を活用した脅威の緩和策を示す。		
目的・狙い	<p>当科目では以下の項目を目的とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バッファオーバーフローのメカニズムを理解し、緩和策を把握する ・C言語の文字列の取り扱い時の典型的なエラーを理解する ・整数型の仕様及び型変換の仕様を理解し、整数演算に関する典型的なエラーを把握する ・書式付き入出力の仕様を理解し、書式付き入出力関数の誤用がメモリ内容の漏洩及び改ざんに繋がることを理解する ・メモリの動的管理のメカニズムを理解し、メモリ管理にまつわるエラーを把握する ・ファイル入出力に関する TOCTOU 競合状態を理解し、対抗策を把握する ・Common Weakness Enumeration (CWE) データベースを活用して脆弱性の事例を調査する能力を修得する ・静的解析ツールを活用して、ソースコード中の欠陥を調査する能力を身につける ・チームメンバーとの協同作業を通じてセキュア開発についての実践スキルを磨く <p>修得できる知識単位：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(システム) ソフトウェアの基礎技術 (レベル4) ・(システム) ソフトウェアの構築技術 (レベル4) ・(システム) Web システムの基礎技術 (レベル4) ・(非機能要件) セキュリティの構築技術 (レベル4) ・(非機能要件) セキュリティの利用技術 (レベル4) ・(非機能要件) セーフティ (分析、設計) (レベル4) 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>以下の科目を修了しているかあるいは修了と同等の技量を持つこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・システムソフトウェア特論 ・情報セキュリティ特論 <p>C言語によるプログラミング経験があることが望ましいが必須ではない(必要に応じてポイント等の概念を復習しつつ講義を進める)。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・脆弱性を持つオープンソースソフトウェアの事例を調査し、調査結果を後進の技術者に対して自分自身の言葉で説明できる。 ・脆弱性を持つコードが与えられた場合に、コーディング・運用の場面において現実的な脅威の緩和策を複数提案できる。 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・バッファオーバーフローとはどのようなものかを理解し、バッファオーバーフローの脆弱性が存在するソースコードが与えられた場合にその原因箇所を独力で調査し、指摘することができる。 ・単独で静的解析ツールを活用してソースコードのセキュリティに関する検査が実施できる。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	<p>実習・演習の進捗等により予定を変更する場合がある。</p> <p>演習のプレゼンテーションや調査結果の説明等を行っていただく。</p> <p>ハンズオンを中心とした演習を各自で行っていただく。</p> <p>ハンズオン、ドリル、CTF(Capture The Flag)といった形式を採り入れ、より現実味のあるテーマの課題をグループで協力して解いていただく。</p>
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・個人別課題では、静的解析ツールを活用したソースコード検査を実施し、検査結果レポートを提出すること。 ・グループ別課題において、チームメンバーとして各自の分担タスクを実施すること。 		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>本講義では、C言語によるセキュアプログラミングの知識を習得し、チームによる課題解決活動を通じて実践経験を積む。対象環境はLinuxとする。サンプルコードの提示のために主にC言語を利用する。一部アセンブラ言語を使用。グループワークでは、5名程度のチームに分かれて、静的解析ツール又は動的解析ツール等のセキュアプログラミングに関連するツール等の調査を実施する(調査対象のツール等は各チームで決定する)。授業外活動時間及び授業時間中のグループワーク時間を利用してチーム活動を実施する。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	この科目における学習内容と講義の進め方についての概説と情報セキュリティの基礎となる考え方の紹介を行う。	[ハ]
	第2回	情報システムに対する脅威の変遷と最新の傾向を学習する。	[ハ]
	第3回	ネットワーク、オペレーティングシステム、プログラミング、認証等の要素技術を情報セキュリティの視点から再確認する。	[ハ]
	第4回	第3回に続いて要素技術の再確認を行い、情報システムの調査を題材としたハンズオンを実施する。	[ハ]
	第5回	ネットワーク上のデータを解析する手法について学習する。	[ハ]
	第6回	【グループワーク】ネットワーク解析に関する課題に対する調査を実施する。	[ハ]
	第7回	ネット上の公開情報をもとに調査・収集を行うオープンソースインテリジェンスについて学習する。	[ハ]
	第8回	ウイルスや攻撃ツール等の「マルウェア」の解析で使われる技術や求められる環境等について学習する。	[ハ]
	第9回	システムの調査・解析の手法や環境について説明することで、デジタルフォレンジックスにおいて使われる技術について学習する。	[ハ]
	第10回	第8,9回で学習したシステム解析やマルウェア解析において使われる手法や技術のいくつかを取り上げて、ハンズオンを実施する。	[ハ]
	第11回	情報セキュリティに関する実際の事件や事案を取り上げ、報道のされ方や関係する法令、その後の取り組み等の視点から学習する。	[ハ]
	第12回	【グループワーク】これまで学習した分析手法を体感することを目的とした演習を実施する。初回は提?された課題を解くことで教材データへの理解を深める。	[ハ]
	第13回	【グループワーク】第12回で扱った教材データから状況を想定してとるべき対処を検討する。	[ハ]
	第14回	【グループワーク】第12,13回の分析や検討の結果をもとに、原因や対策、実際の事案等について調査する。	[ハ]
	第15回	【グループワーク】第12,13,14回の内容についてプレゼンテーションを行う。	[ハ]
	試験	第15回の講義終了後に試験を行う。試験を同等のレポート提出とする場合もある。	[対]
成績評価	筆記試験 40%、課題 60%で評価する。課題は個人別課題（静的解析ツールを活用したソースコード検査）及びグループ別課題（チームが選定したツールについての調査及び発表）の2件である。		
教科書・教材	講義資料はLMSで提供する。		
参考図書	[1] Robert C. Seacord 著、『C/C++セキュアコーディング 第2版』（KADOKAWA/アスキー・メディアワークス、2014年） [2] Robert C. Seacord 著、JPCERT コーディネーションセンター久保正樹、戸田洋三訳『CERT C セキュアコーディングスタンダード』（株式会社アスキー・メディアワークス、2009年）		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	システム開発系科目群	科目名 (英文表記)	クラウドサーバ構築特論 Cloud Server Construction			教員名	飛田 博章

概要	<p>本授業では、Amazon Web Services (AWS) を活用したクラウドサーバ構築のための知識及びスキルを修得することを目的とする。クラウドを使ったシステム設計の典型的な問題とそれに対応する解決策・設計方法について、AWS サービスを使った演習を通して学修する。</p> <p>授業の進め方として、まずクラウドに関する一般的な知識や基本的な AWS サービスを修得し、クラウド環境の設計・構築方法についての概要を講義する。また、負荷分散や耐障害性の対策などクラウドの特徴を活かしたサーバ/インフラの構築方法の演習も行う。後半では、グループに分かれグループごとにテーマを設定し AWS サービスによる解決を目指す。</p>		
目的・狙い	<p>本授業の狙いは以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラウド環境の構築に関する基礎知識と実践スキルの獲得 ・アプリケーションをクラウド環境に配備するスキルの獲得 ・クラウド環境における運用保守についてのスキルの獲得 ・クラウドデザインパターンについての知識の獲得と実践経験 <p>修得できる知識単位:</p> <p>(システム) Web システムの構築技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) Web システムの利用技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) プラットフォームの構築技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) ハードウェアの利用技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) クラウドコンピューティングの基礎技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) クラウドコンピューティングの構築技術 (レベル 4)</p> <p>(システム) クラウドコンピューティングの利用技術 (レベル 4)</p> <p>(非機能要件) 非機能要件(可用性、性能・拡張性) (レベル 4)</p> <p>(非機能要件) セーフティ(分析、設計) (レベル 4)</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>SSH 等、コマンドラインを使ってサーバを操作できる。</p> <p>ネットワーク特論を受講した、若しくは同等の知識を持っている。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・クラウドデザインパターンを適用することで効率よくクラウドサーバを設計・構築できる。 ・クラウド環境上で発生する諸課題についてクラウドの特徴を活かした方策で解決できる。 		
	最低到達目標		
	・クラウドの特徴を活かしたシステムを独力で構築することができる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	授業外でも演習の続きができるように環境を整えるため、もし演習時間内に終わらなければ自宅等で続きを行うこと。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	まず授業の前半にて演習内容に関する説明をする。その後、授業の後半ではハンズオン形式で演習を実施する。第 12 回目以降の授業は全て演習とし、各自で負荷分散や耐障害性を考慮した AWS による Web サイトを構築する。このとき実際に負荷や障害を発生させるなどして安定性の検証等を行う。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
授業の計画	第 1 回	授業のガイダンスを行う。授業の目的と 15 回の授業内容に関して説明する。	[対]
	第 2 回	クラウド環境の構築と基本機能の説明を行う。主に、EC2 関連の内容を扱う。	[八]
	第 3 回	第 2 回の内容をもとに、基本機能の演習を行う。演習内容をもとにレポートを課す。	[対]
	第 4 回	引き続き基本機能の説明を行う。主に、DNS、S3、CloudFront に関する内容を扱う。	[八]
	第 5 回	第 4 回の内容をもとに、基本機能の演習を行う。演習内容をもとにレポートを課す。	[対]
	第 6 回	SDK によるアプリケーション開発の手法を学ぶ。	[八]
	第 7 回	第 6 回の内容をもとに、演習を行う。演習内容をもとにレポートを課す。	[対]
	第 8 回	サーバーレスに関して概要と実装方法を説明する。	[八]
	第 9 回	第 8 回の内容をもとに、演習を行う。演習内容をもとにレポートを課す。 また、グループ分けを行う。	[対]
	第 10 回	グループワークの進め方について説明する。また、グループワークの目標を設定する。	[八]
	第 11 回	グループワークを進め、進捗の発表する。	[対]
	第 12 回	過去のグループワークについて内容を紹介する。	[対]
	第 13 回	グループワークを進め、進捗の発表する。	[対]
	第 14 回	グループワークのまとめ方と、発表方法について説明する。	[対]
	第 15 回	グループワークの成果を発表する。	[対]
	試験	グループワークと個人の役割に関して振り返りを行う。	[対]
成績評価	第 2 回、第 4 回、第 6 回、第 8 回の演習成果：40 点（各 10 点） 第 11 回～15 回の演習成果及び最終プレゼンテーション：40 点 振り返り：20 点 で評価する。		
教科書・教材	玉川他著、Amazon Web Services クラウドデザインパターン設計ガイド 改訂版、日経 BP 社、2015 大澤文孝著、Amazon Web Services クラウドデザインパターン実装ガイド 改訂版、日経 BP 社、2015		
参考図書	NRI ネットコム株式会社他著、Amazon Web Services パターン別構築・運用ガイド、SB クリエイティブ、2015 日経 SYSTEMS 編、Amazon Web Services 徹底活用ガイド、日経 BP 社、2015 玉川他著、Amazon Web Services 基礎からのネットワーク&サーバー構築、日経 BP 社、2014 日経 SYSTEMS 編、IT アーキテクトのためのクラウド設計・構築 実践ガイド、日経 BP 社、2012		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	システム開発系科目群	科目名 (英文表記)	情報セキュリティ特別講義 2 Secure Design Methodology			教員名	奥原 雅之

概要	<p>当科目は、セキュリティ機能を考慮したソフトウェア及びシステム開発を行うための国際標準規格 ISO/IEC15408 を基本とした情報セキュリティ機能の実装及び保証（セキュアシステムの設計手法）に関する実践技術を修得する。また、ISO/IEC 15408 の歴史的背景及びフレームワーク（制度）、IT セキュリティ評価及び認証制度も理解する。セキュアシステムの設計は形式言語の構造を持ち、国際標準規格 ISO/IEC15408 は専門用語を多用するため、専門用語の理解をし、実践技術を修得するため、ケーススタディ型の授業とする。</p>		
目的・狙い	<p>当科目は、情報セキュリティ保証及び機能実装に関する実践技術の修得を目指す。ベンダー側の開発者としてはセキュアシステムの設計手法を、調達者側の技術者としてはセキュアシステムの調達基準を設定できるスキルを修得することが当科目の目的である。具体的には、セキュアシステムの構築を目的としたセキュリティ設計仕様書（ST: Security Target）とセキュリティ機能の保証に関する技術を獲得する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報セキュリティ保証の必要性を理解する。 ・国際標準規格 ISO/IEC 15408 の歴史、認証フレームワークを理解する。 ・セキュリティ設計仕様の ST の開発スキルを修得する。 <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（支援活動） リスクマネジメント手法（レベル4） ・（支援活動） IT ガバナンス（レベル4） ・（支援活動） 資産管理手法（レベル4） ・（支援活動） 事業継続計画（レベル2） ・（支援活動） システム監査手法（レベル4） ・（支援活動） 情報セキュリティ（レベル4） 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	情報セキュリティ特論の単位を取得しているか、同等の知識・スキルを有すること。		
到達目標	上位到達目標		
	IT スキル標準（レベル4+相当）		
	<ul style="list-style-type: none"> ・上位技術者の指示のもと、評価保証レベル（EAL）3 相当の ST を設計できるレベル ・情報処理技術者試験合格レベル（情報セキュリティスペシャリスト） 		
	最低到達目標		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	IT スキル標準（レベル2+相当）		
	<ul style="list-style-type: none"> ・上位技術者の指示のもとに、脅威、脆弱性を考慮したセキュリティ設計ができるレベル ・ST、プロテクションプロファイルが読み取れるレベル ・EAL2 相当の ST を設計できるレベル ・情報処理技術者試験合格レベル（応用情報技術者） 		
	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	演習がある回は対面型による実施とする。
	ハイフレックス型	○	講義のみの回はハイフレックスとする。受講後に受講確認テストを受けること。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の前に、配布資料で授業の内容を確認すること。 ・授業で指示された課題に取り組み、期限までに提出すること。 		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	当科目は講義及びケーススタディから構成される。授業計画を以下に示す。学生の興味次第で、内容の深淺、順序等は適宜調整する可能性がある。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	〈概要〉 学生が講義選択の判断ができるように授業の目的と15回の授業内容を解説する。また、合わせて講義全体を理解するために必要な基礎的な概念について解説する。	[ハ]
	第2回	〈ISO/IEC 15408 1〉 セキュリティ評価基準であるISO/IEC 15408の概要と意義について解説する。	[ハ]
	第3回	〈ISO/IEC 15408 2〉 ISO/IEC 15408の機能要件の読み方を学ぶ。個人演習あり。	[対]
	第4回	〈ISO/IEC 15408 3〉 ISO/IEC 15408に基づくセキュリティ評価認証制度について解説する。	[ハ]
	第5回	〈課題発表〉 個人演習の課題発表とディスカッションを行う。	[対]
	第6回	〈ST設計1〉 STの構成、STの作成手順、TOE定義について扱う。	[ハ]
	第7回	〈ST設計演習1〉 STの1章(ST概説)、2章(適合主張)について作成演習を行う。(グループ演習)	[対]
	第8回	〈ST設計2〉 セキュリティ課題定義、セキュリティ対策方針について解説する。	[ハ]
	第9回	〈ST設計演習2〉 STの3章(セキュリティ課題定義)、4章(セキュリティ対策方針)について作成演習を行う。(グループ演習)	[対]
	第10回	〈ST設計3〉 拡張コンポーネント定義、セキュリティ機能要件について解説する。	[ハ]
	第11回	〈ST設計演習3〉 STの5章(拡張コンポーネント定義)、6章(セキュリティ機能要件)について作成演習を行う。(グループ演習)	[対]
	第12回	〈ST設計4〉 TOE要約仕様について解説する。	[ハ]
	第13回	〈ST設計演習4〉 STの7章(TOE要約仕様)について作成演習を行う。(グループ演習)	[対]
	第14回	〈STの評価・確認〉 STの評価・確認について解説する。	[ハ]
	第15回	〈総括〉 各グループで作成したSTの発表、ディスカッションを行う。	[対]
	試験	第1回から第15回の内容の理解に関する試験を行う。	[対]
成績評価	課題(演習)50%、試験(筆記)50%を基準として総合的に評価する。演習課題の提出は締切を厳守すること。		
教科書・教材	教材はLMS上にオンラインで配布する。また、必要に応じてインターネットに公開されている副教材を利用する。副教材の入手方法は授業において案内する。		
参考図書	情報技術セキュリティ評価のためのコモンクライテリア バージョン3.1 リリース5 独立行政法人情報処理推進機構のWebサイトから入手できる。		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	システム開発系科目群	科目名 (英文表記)	アジャイル開発手法特論 Agile Software Development			教員名	細澤 あゆみ

概要	<p>近年のビジネス環境の変化の早さは、重厚長大な長期計画を陳腐化させ、ビジネスモデルやプロジェクト計画の有効期間を縮める一方である。このような状況に対応する必要から、変化する要求に対応しながらビジネスに柔軟に沿うことで価値を生み出す、アジャイルソフトウェア開発手法が脚光を浴びている。</p> <p>また集合知や実践知という考え方から、学習し成長する自己組織的なチームによる効果的なソフトウェア開発が求められている。</p> <p>この授業では、アジャイル開発のコアとなるアジャイルなチーム、価値の高いソフトウェアプロダクト、継続的に価値を提供する手法について、アジャイル開発手法の一つであるスクラムを中心に学ぶ。</p>		
目的・狙い	<p>この授業では、講義及び演習を通して以下のことについて学び、現実的で詳細な短期予測に基づいたソフトウェア開発手法を学ぶことを目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.アジャイルソフトウェア開発の概要とその背景 2.スクラムとエクストリームプログラミング 3.アジャイルなチームとマインドセット 4.アジャイルなプロジェクトの立ち上げ・見積もり・遂行 <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> - (企画) 要求分析手法 (レベル4) - (実装) ソフトウェアエンジニアリング手法 (レベル4) - (開発) システム開発管理技術 (レベル4) 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	前提として何かしらのソフトウェア開発プロジェクトに参画した経験があることが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	アジャイルソフトウェア開発の背景や用語、スクラムの概要と全体像を理解し、アジャイル開発の実践を始めることができる。		
	最低到達目標		
	アジャイルソフトウェア開発やスクラムの用語や仕組みを知ることができる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<p>演習に必要な知識について、あらかじめインターネットや書籍等で調査しておくこと。</p> <p>また、演習中にわからなかったことについても調べておくこと。</p> <p>ほぼ毎回、授業の終わりに課題を提示するため、決められた期限内に提出すること。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>この授業は 2 コマ連続で実施するもので、講義及び講義を踏まえた個人及びグループでの演習やディスカッションも行う。途中 4 回のミニテストを実施し、テストの次回の授業では解答の発表と解説を行う。</p> <p>授業計画は以下の通りで、連続した回は内容的にも連続した授業として実施する。授業の構成は理解度や演習の進捗により変更する可能性もある。変更がある場合は授業中に説明する。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
授業の計画	第1回	【アジャイルソフトウェア開発概要】 授業の全体像と進め方の説明を行う。アジャイル開発手法の概要とチーム開発について学習する。	[対]
	第2回	【アジャイルソフトウェア開発概要】 つづき	[対]
	第3回	【スクラムのコアコンセプトと定義】 アジャイルソフトウェア開発手法の1つであるスクラムについて学習する。スクラムのコアコンセプト及び定義について学習する。	[対]
	第4回	【スクラムのコアコンセプトと定義】 つづき	[対]
	第5回	【プロダクトコンセプト・プロダクトバックログの作り方】 アジャイル開発で用いられるプロダクトコンセプトや、プロダクトバックログの作り方など、プロダクトオーナーの仕事について学習する。	[対]
	第6回	【プロダクトコンセプト・プロダクトバックログの作り方】 つづき	[対]
	第7回	【計画づくりと見積もり】 アジャイル開発で用いられる計画のためのさまざまな技法や、スクラムのプランニングについて学習する。	[対]
	第8回	【計画づくりと見積もり】 つづき	[対]
	第9回	【スプリントの実施】 アジャイル開発全般でいうところの反復(イテレーション)、スクラムでいうところのスプリントについて、どのように計画し実施するかについて学習する。	[対]
	第10回	【スプリントの実施】 つづき	[対]
	第11回	【技術的プラクティスやツール】 アジャイル開発を促進するための技術プラクティスや様々なツールについて学習する。	[対]
	第12回	【技術的プラクティスやツール】 つづき	[対]
	第13回	【スプリントレビューとレトロスペクティブ】 スクラムのイベントであるスプリント及びレトロスペクティブの仕組みと継続的な改善について学習する。	[対]
	第14回	【スプリントレビューとレトロスペクティブ】 つづき	[対]
	第15回	【アジャイルソフトウェア開発まとめ】 全体像を再度見直し、これまでに学習した事項について振り返り学習する。	[対]
	試験	第1回から第15回までの授業の内容について試験を行う。	[対]
成績評価	次のポイントで評価する(合計100点満点)。 ・ミニテスト 各10点×4回=40点 ・テスト(第16回) 60点 なお、出席が全体の2/3以上(最終試験を除く全15回のうち10回以上)を満たさない場合、または最終試験を受験しなかった場合は、例外なく評価対象としない。		
教科書・教材	Ken Schwaber, Jeff Sutherland『スクラムガイド』(2020年11月) 西村直人、永瀬美穂、吉羽龍太郎(著)、『SCRUM BOOT CAMP THE BOOK』(翔泳社、2013年)		
参考図書	ジェフ・サザーランド『スクラム 仕事が4倍速くなる“世界標準”のチーム戦術』(早川書房、2015年) スティーブ・マコネル『More Effective Agile』(日経BP、2020年) スティーブ・マコネル『ソフトウェア見積もり』(日経BPソフトプレス、2006年) Jonathan Rasmusson『アジャイルサムライ』(オーム社、2013年) Mike Cohn『アジャイルな見積りと計画づくり』(毎日コミュニケーションズ、2009年) Dean Leffingwell『アジャイルソフトウェア要求』(翔泳社、2014年) Jeff Patton『ユースタートリーマッピング』(オライリージャパン、2015年) Esther Derby, Diana Larsen『アジャイル レトロスペクティブズ』(オーム社、2007年) 森一樹『アジャイルなチームをつくるふりかえりガイドブック』(翔泳社、2021年) Zuzana Sochova『SCRUM MASTER THE BOOK』(翔泳社、2020年) Kent Beck, Cynthia Andres『エクストリーム・プログラミング』(オーム社、2015年)		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	システム開発系科目群	科目名 (英文表記)	コラボレイティブ開発特論 Collaborative Development			教員名	中鉢 欣秀

概要	本授業ではチームによるソフトウェア開発をコラボレイティブに行うためのスキルセットに焦点をあてる。チームでの演習として「mini-PBL」を実施し、ソフトウェアの協同開発作業を円滑かつ迅速に行うための方法について学ぶ。ソフトウェア開発手法として注目されるアジャイル開発手法を参考に、開発プロジェクトを行う。加えて、モダンなソフトウェア開発者は、クラウド技術や仮想環境といった高度な開発環境に精通しなくてはならない。開発チームが協調的・自律的に振る舞うために必要となる方法論を体験的に学習する。		
目的・狙い	チームによるソフトウェア開発を円滑に行うための様々な技法について取り上げる。チームによるソフトウェア開発プロジェクトを円滑に実施するために不可欠な各種のツールを深く学び、実際にチーム開発に活用できるようにする。チーム開発を通し、プログラミング言語 Ruby と Ruby on Rails を用いた Web アプリケーション開発、ソースコード共有のための Git/GitHub、PaaS（Platform as a Service）を利用した Web アプリケーションの公開、仮想化技術を用いた開発環境、テスト自動化・継続的インテグレーション（CI/CD）等の技術知識を学ぶ。 修得できる知識単位: -（実装）アーキテクチャ設計手法（レベル3） -（実装）ソフトウェアエンジニアリング手法（レベル4） -（実装）プロジェクトマネジメント手法（レベル3） -（システム）プラットフォームの利用技術（レベル3） -（システム）クラウドコンピューティングの利用技術（レベル3）		
履修条件 （履修数の上限、 要求する前提知識 等）	・「フレームワーク開発特論」または「アジャイル開発手法特論」の単位を取得していることが望ましい。 ・Ruby 又は他のオブジェクト指向言語によるプログラミング経験があることが望ましい。 ・端末操作（CUI）による OS のオペレーション（shell コマンド）に関する知識。		
到達目標	上位到達目標		
	・コラボレイティブなソフトウェア開発手法に習熟する。 ・授業で取り上げる各種ツールの高度な使い方に習熟する。		
	最低到達目標		
	・コラボレイティブなソフトウェア開発手法を経験する。 ・授業で取り上げる各種ツールの基本的な使い方を身に付ける。		
授業実施形態 （単一または複数 から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	ガイダンス、各種ツールの解説・利用方法についてハンズオンを行う。
	ハイフレックス型	○	遠隔または対面によるチーム開発を行う。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	プログラミングや Shell による OS 操作などに不得手の者は授業外に学習を要する。授業時間外でのグループワークも必要である。		
授業の進め方 （グループワーク 方式など、進め方 の特徴）	次に示す計画に従って授業を行うが、履修者の理解度などを勘案し、授業計画を変更する場合もある。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	授業のガイダンスを行う。	[ハ]
	第2回	Git コマンドの利用方法について解説する Git/GitHub 演習の資料を用い、個人演習編を、端末によるデモを含めて説明する。	[ハ]
	第3回	Git/GitHub 演習の資料を用い、GitHub の利用方法について演習する。 前回に続き、Git/GitHub 演習の個人演習編の内容を解説する。	[ハ]
	第4回	冒頭、Git/GitHub 演習のチーム演習編を解説する。 その後、チームに分かれて課題を行う。	[ハ]
	第5回	冒頭、mini PBL の実施方法について説明する その後、Git/GitHub 演習のチーム演習編の続きを行う	[ハ]
	第6回	mini PBL の Sprint 0 を行う。 どのような技術を用いるか、なにを開発するか検討する。 チームとして何を学ぶか、学習目標を設定する。	[ハ]
	第7回	mini PBL の Sprint 0 における成果物のレビューを行う。 チームによる検討の結果を発表する。	[ハ]
	第8回	mini PBL の Sprint 1 を行う。 デモができるプロダクトを開発する。	[ハ]
	第9回	mini PBL の Sprint 1 におけるプロダクトのレビューを行う。 実際に動作するプロダクトのデモを行う。	[ハ]
	第10回	mini PBL の Sprint 2 を行う。 デモができるプロダクトを開発する。	[ハ]
	第11回	mini PBL の Sprint 2 におけるプロダクトのレビューを行う。 実際に動作するプロダクトのデモを行う。	[ハ]
	第12回	mini PBL の Sprint 3 を行う。 デモができるプロダクトを開発する。	[ハ]
	第13回	mini PBL の Sprint 3 におけるプロダクトのレビューを行う。 実際に動作するプロダクトのデモを行う。	[ハ]
	第14回	mini PBL の Sprint 4 を行う。 デモができるプロダクトを開発する。	[ハ]
	第15回	mini PBL の Sprint 4 におけるプロダクトのレビューを行う。 実際に動作するプロダクトのデモを行う。	[ハ]
	試験	【プレゼンテーション試験】 学習成果をチームで振り返り、プレゼンテーションを行う 【レポート試験】 個人によるレポートを提出する	[ハ]
成績評価	次の観点から総合的に評価する。 ・チームが設定した学習目標の達成度 ・個人による学びの振り返り ・その他、授業に対する貢献度等 評価の対象となる成果物等は、 ・プレゼンテーション（授業内で実施） ・個人レポート（最終課題として実施） とする。 評価基準は概ね、評価5は履修者の10%未満、評価4は20%程度、評価3は40%程度となるよう設定する。		
教科書・教材	・教員が作成したものを用いる（LMS にて公開） ・Git/GitHub 演習 https://blog.chubachi.net/github_practice/ ・Git、コマンドライン、テキストエディタについての基礎知識が足りない者は、次の教材を購入することを勧める。 https://railstutorial.jp/dev_basics		
参考図書	授業中に随時紹介する。		

IV マネジメント系科目群

プロジェクト管理特論 1
プロジェクト管理特論 2
プロジェクト管理特論 3
プロジェクト管理特別講義
情報システム特論 1
情報ビジネス特別講義 2
情報セキュリティ特別講義 1

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	マネジメント系科目群	科目名 (英文表記)	プロジェクト管理特論 1 Project Management 1		教員名	三好 きよみ	

概要	当科目では、プロジェクトマネジメントの国際標準 ISO21500、PMBOK ガイド 6 に基づいて、プロジェクトマネジメントの基本を学ぶ。関連する演習によって、プロジェクトマネジメントの基本知識や手法等を習得する。		
目的・狙い	当科目は、プロジェクトマネジメントの知識体系、プロジェクトマネジメント標準を修得することを目的とする。 具体的には、学習者は当科目から以下の知識・スキルを修得できる。 ・プロジェクトマネジメント標準 ・プロジェクトマネジメントの知識体系 ・プロジェクト活動に必要とされるヒューマンスキル 修得できる知識単位: ・（実装） 見積り手法（レベル3） ・（実装） プロジェクトマネジメント手法（レベル4） ・（支援活動） 品質マネジメント手法（レベル3） ・（支援活動） リスクマネジメント手法（レベル3） ・（支援活動） 資産管理手法（レベル3） ・（支援活動） 人材育成・教育・研修（レベル4） ・（保守・運用） システム保守・運用・評価（レベル3） ・（保守・運用） ファシリティ設計技術（レベル2）		
履修条件 （履修数の上限、 要求する前提知識 等）	特に履修条件は無いが、プロジェクトの経験（社会人は実際に経験したプロジェクト、学生は学生時代のイベント等）があるとよりよい。		
到達目標	上位到達目標		
	IT スキル標準（レベル4 相当） ・小規模プロジェクト（10 人月程度）をプロジェクト・マネジャーとして実行できるレベル ・大規模プロジェクトのプロジェクト・マネジャー補佐、あるいはサブプロジェクトのリーダーを担当できるレベル ・PMP（プロジェクトマネジメントプロフェッショナル）試験合格レベル		
	最低到達目標		
	IT スキル標準（レベル3 相当） ・プロジェクトでのプロジェクト・マネジャー補佐、あるいはサブプロジェクトのリーダーを担当できるレベル		
授業実施形態 （単一または複数 から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	原則毎回＜グループ演習＞を行う。
	録画視聴型	○	初回は、講義録画の視聴、遠隔受講も可能
授業外の学習	・授業の前に、配布資料で授業の内容を確認すること。 ・授業で指示された課題に取り組み、期限までに提出すること。 ・グループ課題の取り組みでは、授業時間外にグループメンバーが集まって、まとめていくことが重要である。この活動自体がプロジェクト活動であり、授業で得た知識を実践の場で活用する機会でもある。グループをまとめ、結論をまとめていく活動によって、プロジェクトマネジメントを体感し、実践に結び付けるためのポイントを習得する。		
授業の進め方 （グループワーク 方式など、進め方 の特徴）	当科目は、プロジェクトマネジメントの基本的な知識や手法に関する講義、及び演習を行う。受講生の興味次第で、内容の深淺、順序等は適宜調整する可能性がある。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	・授業の目的と15回の授業内容の解説、テキストの紹介 ・次回以降の講義のために、プロジェクト経験、資格の状況調査 1. 序論	[ハ]
	第2回	<グループ演習> 2. プロジェクトマネジメントとは	[ハ]
	第3回	3. プロジェクトを取り巻く環境	[録]
	第4回	<グループ演習> ・プロジェクト・マネジャーの役割 ・プロジェクト・マネジャーのヒューマンスキル ・プロジェクトで仕事をするということ	[ハ]
	第5回	4. プロジェクトの立上げ	[録]
	第6回	<グループ演習> 5. プロジェクトの計画 ・要求事項の収集、WBSの作成	[ハ]
	第7回	5. プロジェクトの計画	[録]
	第8回	<グループ演習> 5. プロジェクトの計画 ・スケジュール作成	[ハ]
	第9回	<グループ演習> 5. プロジェクトの計画 ・リスクマネジメント	[ハ]
	第10回	6. プロジェクトの実行と監視 ・品質、コミュニケーション、資源、調達	[録]
	第11回	<グループ演習> 6. プロジェクトの実施と監視 ・スコープ、スケジュール、コスト	[ハ]
	第12回	<グループ演習> 6. プロジェクトの実施と監視 ・スコープ管理～変更管理	[ハ]
	第13回	6. プロジェクトの実施と監視 ・課題管理～調達管理 7. プロジェクトの終結	[録]
	第14回	<グループ演習> ・資源マネジメント（チームの育成 チームのマネジメント） ・課題発生への対応	[ハ]
	第15回	<グループ演習> ・課題発生への対応	[ハ]
	試験	第1回から第15回までの内容の理解に関する筆記試験を行う	[ハ]
成績評価	課題（レポート、演習）60%、試験（筆記）40%を基準として総合的に評価する。レポート等の提出物は締切厳守。		
教科書・教材	資料はLMS上で配布する。		
参考図書	・PMI 著、『プロジェクトマネジメント知識体系ガイド（PMBOKガイド）第6版』、PMI、2018/1 ・PMI 著、『プロジェクト・マネジャー・コンピテンシー開発フレームワーク 第3版』、PMI、2019 ・PMI 日本支部著、『タレント・トライアングル（破壊的イノベーション時代に求められるプロジェクト・マネジャーの実践スキル）』、2018/10 また、講義時にも適宜指示する。		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	マネジメント系科目群	科目名 (英文表記)	プロジェクト管理特論 2 Project Management 2			教員名	上條 英樹

概要	当科目では、大規模アジャイルのマネジメントについて、実際の開発現場の実状を踏まえ実際に使われている複数の大規模アジャイル開発用のフレームワークの違いを明確にし、事例をもとに具体的な手法について習得する。		
目的・狙い	<p>当科目は、大規模アジャイル開発のマネジメントの知識体系を修得することを目的とする。</p> <p>具体的には、学習者は当科目から以下の知識・スキルを修得できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大規模アジャイル開発の実状 ・大規模アジャイル開発フレームワークの知識体系 ・大規模アジャイル開発プロジェクトの活動に必要なとされるマインドセット <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(実装) カスタマーサービス手法 (レベル 4) ・(実装) 見積り手法 (レベル 4) ・(実装) プロジェクトマネジメント手法 (レベル 4) ・(支援活動) 品質マネジメント手法 (レベル 4) ・(支援活動) リスクマネジメント手法 (レベル 4) ・(支援活動) 資産管理手法 (レベル 4) ・(開発) システム開発管理技術 (レベル 2) ・(保守・運用) IT サービスマネジメント業務管理技術 (レベル 2) ・(保守・運用) IT サービスオペレーション技術 (レベル 2) 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>情報システムの開発の経験があり、またプロジェクト管理について十分な知識があること。</p> <p>アジャイル開発に関する一般的な知識があること。</p> <p>SCRUM などのアジャイル開発フレームワークの知識があることが望ましい。</p>		
到達目標	<p>上位到達目標</p> <p>(ITSS レベル 4 相当)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中規模アジャイルプロジェクト (アジャイルチーム 4 チーム～7 チーム程度) のプロジェクトの立上げができプロジェクト全体を調整する役割となる CoE(センターオブエクセレンス)機能を実行できるレベル ・中規模アジャイルプロジェクト (アジャイルチーム 4 チーム～7 チーム程度) で複数アジャイルチームをシシク口させながら PO や SM を実行できるレベル。 		
	<p>最低到達目標</p> <p>(ITSS レベル 3 相当)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中規模アジャイルプロジェクト (アジャイルチーム 4 チーム～7 チーム程度) のプロジェクト全体を調整する役割となる CoE(センターオブエクセレンス)機能の補佐ができるレベル ・小規模アジャイルプロジェクト (アジャイルチーム 2 チーム～3 チーム程度) のプロジェクトの立上げができるレベル。 ・小規模アジャイルプロジェクト (アジャイルチーム 2 チーム～3 チーム程度) で複数アジャイルチームをシシク口させながら PO や SM を実行できるレベル。 ・大規模アジャイルフレームワーク の概要が理解できる。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	ビデオ学習の復習と演習を中心に行う。
	録画視聴型	○	録画講義で、基本知識を習得する。 録画講義は、事前に視聴し、その後の授業に支障がないようにしておく。
授業外の学習	<p>本講義は、事前に LMS に UP した講義資料と録画講義を使って、自分のペースで学習し充分理解しておくことが重要である。学習レベルの確認のために講義受講後 LMS で理解度テストを受講する。また、次回の対面講義までに質問事項などを準備して、対面講義に臨む。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>当科目では、大規模アジャイルのマネジメントについて、実際の開発現場の実状を踏まえ実際に使われている複数の大規模アジャイル開発用のフレームワークの違いを明確にし、世界シェア一番の SAFe? (Scaled Agile Framework) を事例をもとに具体的な手法について習得する。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	「ガイダンスと大規模開発の実状」：ガイダンス及び日本を中心とした大規模アジャイル開発の実状について解説する。	[ハ]
	第2回	「大規模アジャイルフレームワークについて」：トレンドな大規模アジャイルフレームワークの違いと特徴について解説する。	[録]
	第3回	「代表的な大規模アジャイルフレームワークについて」：代表的な大規模アジャイルフレームワークの概要を解説する。	[ハ]
	第4回	「経営と連動した開発」：経営による意思決定から開発と連動したリリース及び評価の仕組みについて解説する。	[録]
	第5回	「組織設計について」：大規模アジャイル開発時の組織設計について解説する。	[ハ]
	第6回	「バックログと見積について」：大規模アジャイル開発時のバックログの種類とその設計方法とポイントについて解説する。	[録]
	第7回	「プロジェクトからプロダクトへ」：プロジェクト型開発から継続開発のプロジェクト型開発へのトレンドをビジネス面と DevOps などの仕組みから解説する。	[ハ]
	第8回	「複数チームをシンクロさせる仕組みについて①」：複数チーム間でリズムを合わせながら開発する仕組みについて解説する。1回目	[録]
	第9回	「複数チームをシンクロさせる仕組みについて②」：複数チーム間でリズムを合わせながら開発する仕組みについて解説する。2回目	[ハ]
	第10回	「複数チームをシンクロさせる仕組みについて③」：複数チーム間でリズムを合わせながら開発する仕組みについて解説する。3回目	[録]
	第11回	「複数チームをシンクロさせる仕組みについて④」：複数チーム間でリズムを合わせながら開発する仕組みについて解説する。4回目	[ハ]
	第12回	「大規模アジャイル開発での要員教育について」：大規模アジャイル開発のステークホルダーへのトレーニングについて解説する。	[録]
	第13回	「アジャイル契約について」：アジャイル開発時の契約方法について解説する。	[ハ]
	第14回	「品質管理・プロジェクト評価方法について」：アジャイル開発時の品質管理の考え方やプロジェクトの評価方法について解説する。	[録]
	第15回	「ビジネスアジリティと大規模アジャイルフレームワークについて」：ビジネスアジリティを加速させるための大規模アジャイルフレームワークについて解説する。	[ハ]
	試験	第1回から第15回までの内容の理解に関する筆記試験を行う。	[対]
成績評価	課題（レポート、演習）50%、試験（筆記）50%を基準として総合的に評価する。レポート等の提出物は締切厳守		
教科書・教材	資料は LMS 上で配布する。		
参考図書	特になし		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	マネジメント系科目群	科目名 (英文表記)	プロジェクト管理特論 3 Project Management 3			教員名	三好 きよみ

概要	情報システムの信頼性向上において、様々な手法が使われる。また、信頼性確保のためには、ステークホルダー、プロジェクトメンバーの協力が必要である。当科目では、プロジェクトマネジメントで使用する、ワークブレイクダウンストラクチャ（WBS）、アーンドバリューマネジメント（EVM）等の手法、及び情報システムの取引、人間関係スキルとチーム・スキル、コンフリクト・マネジメント等について、講義と演習を通して学習する。		
目的・狙い	<p>当科目は、情報システムの信頼性向上のために必要なツールと技法、及び情報システムのモデル取引・契約書について、習得することを目的とする。</p> <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（実装） プロジェクトマネジメント手法（レベル4） ・（支援活動） 品質マネジメント手法（レベル4） ・（支援活動） リスクマネジメント手法（レベル4） ・（支援活動） 資産管理手法（レベル4） ・（支援活動） システム監査手法（レベル4） ・（支援活動） 人材育成・教育・研修（レベル4） ・（システム） ソフトウェアの利用技術（レベル2） 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>プロジェクト管理特論1を履修している、あるいは相当のプロジェクトマネジメントに関する知識・スキルを有すること。</p> <p>Excel（あるいは相当のソフトウェア）を使用できること。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	ITスキル標準（レベル4相当） プロジェクトマネジメントの手法を指導できるレベル 情報システムのモデル取引・契約書を実務に適用できるレベル PMP試験、情報処理技術者プロジェクトマネージャ試験合格レベル		
	最低到達目標		
	ITスキル標準（レベル3相当） プロジェクトマネジメントの手法を実務に適用できるレベル 情報システムのモデル取引・契約書を理解したレベル		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	<グループディスカッション> 個人演習を行い、その後グループディスカッションを行う
	録画視聴型	○	初回は、講義録画の視聴、遠隔受講も可能
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の前に、配布資料で授業の内容を確認すること。 ・授業で指示された課題に取り組み、期限までに提出すること。 		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	当科目は、プロジェクトマネジメントに関わる手法等に関する講義、及び演習を行う。受講生の興味次第で、内容の深淺、順序等は適宜調整する可能性がある。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	概要 ・科目選択の判断ができるように、授業の目的と15回の授業内容を解説する。	[ハ]
	第2回	・ワークブレイクダウンストラクチャ（WBS）基礎知識 WBSについての基礎的な知識の講義を視聴し、各自で練習問題を実施してWBSの基本を理解する。	[録]
	第3回	・WBS作成、発表 前の回で学んだWBSについての基本的な知識を使って、演習問題を実施する。 グループでディスカッションを行って、理解を深める。	[ハ]
	第4回	・スケジュール作成の基礎知識 （ガントチャート、ネットワークダイアグラム、クリティカルパス等） スケジュール作成についての基礎的な知識の講義を視聴し、各自で練習問題を実施してスケジュール作成の基本を理解する	[録]
	第5回	・スケジュール作成演習 前の回で学んだスケジュール作成についての基本的な知識を使って、演習問題を実施する。 グループでディスカッションを行って、理解を深める。	[ハ]
	第6回	・アーンドバリューマネジメント（EVM）の基礎知識 EVMについての基礎的な知識の講義を視聴し、各自で練習問題を実施してEVMの基本を理解する。	[録]
	第7回	・アーンドバリューマネジメント（EVM）EVM演習 前の回で学んだEVMについての基本的な知識を使って、演習問題を実施する。 グループでディスカッションを行って、理解を深める。	[ハ]
	第8回	・情報システム取引とトラブル事例 「情報システム・モデル取引・契約書」「情報システム・ソフトウェア取引トラブル事例集」を使った基礎的な知識の講義を視聴し、情報システム取引の基本を理解する。	[録]
	第9回	・情報システム取引とトラブル事例 前の回で学んだ情報システム取引についての基本的な知識を使って、各自のトラブル事例を振り返る。 グループでディスカッションを行って、トラブル事例を共有し、理解を深める。	[ハ]
	第10回	・人間関係スキルとチーム・スキル チームビルディング、コンフリクトマネジメント、リーダーシップ、動機づけについての基礎的な知識の講義を視聴し、各自で振り返りを行う。	[録]
	第11回	・人間関係スキルとチーム・スキル チームビルディング、コンフリクトマネジメント、リーダーシップ、動機づけに関する各自の振り返りをディスカッションを行って共有し、理解を深める。	[ハ]
	第12回	・見積もりの基礎知識 見積もりについての基礎的な知識の講義を視聴し、各自で練習問題を実施して見積もりの基本を理解する。	[録]
	第13回	・品質管理の基礎知識 品質管理についての基礎的な知識の講義を視聴し、各自で練習問題を実施して品質管理の基本を理解する。	[録]
	第14回	・プロジェクト経験におけるトラブル(含コンフリクト等)の事例発表 前半	[ハ]
	第15回	・プロジェクト経験におけるトラブル(含コンフリクト等)の事例発表 後半	[ハ]
	試験	・第1回から第15回までの内容の理解に関する筆記試験を行う	[ハ]
成績評価	成績評価 課題（レポート、演習）60%、試験（筆記）40%を基準として総合的に評価する。レポート等の提出物は締切厳守。		
教科書・教材	資料はLMS上で配布する。		
参考図書	・PMI 著、『プロジェクトマネジメント知識体系ガイド（PMBOKガイド）第6版』、PMI、2018/1 また、講義時にも適宜指示する。 ・経産省「情報システム・モデル取引・契約書」「情報システム・ソフトウェア取引トラブル事例集」 https://www.meti.go.jp/policy/it_policy/softseibi/		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	マネジメント系科目群	科目名 (英文表記)	プロジェクト管理特別講義 Project Management Practice			教員名	三好 きよみ

概要	当科目では、シミュレータを使って、実際のプロジェクトに近い臨場感で、プロジェクト計画から実践までをプロジェクト・マネジャーの立場で疑似体験する。それによって、プロジェクトマネジメントの重要性、プロジェクト・マネジャーの役割、問題発生時の判断のポイントについて学習する。グループでの演習を通して、コミュニケーション能力を養う。		
目的・狙い	<p>プロジェクトマネジメントの重要性、プロジェクト・マネジャーの役割、問題発生時の判断のポイントについて習得すること、および、グループでの演習を通して、コミュニケーション能力を養うことを目的とする。</p> <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(実装) 見積り手法 (レベル3) ・(実装) プロジェクトマネジメント手法 (レベル4) ・(支援活動) 品質マネジメント手法 (レベル3) ・(支援活動) リスクマネジメント手法 (レベル3) ・(支援活動) 資産管理手法 (レベル3) ・(支援活動) 人材育成・教育・研修 (レベル3) ・(支援活動) ファシリティマネジメント手法 (レベル4) ・(保守・運用) ファシリティ設計技術 (レベル4) 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	特に履修条件は無いが、プロジェクトマネジメントに興味を持って、自ら実践しようという意欲があることが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	プロジェクトに潜んでいる制約・リスク等への対処に正解は無い。個々のプロジェクトや場面によって様々であることを理解し、自ら適切に対処・判断できるレベル		
	最低到達目標		
	シミュレータによって、プロジェクト・マネジャーの立場で、プロジェクトを疑似体験することで、プロジェクトマネジメントの重要性、プロジェクト・マネジャーの役割、問題発生時の判断のポイントを理解したレベル		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	グループ演習を教室で実施 【シミュレータ演習】シミュレータを実際に稼働する (前半・後半 の2回)
	ハイフレックス型	○	グループ演習を教室で実施、遠隔受講も可能 【シミュレータ演習】シミュレータを使って計画等を登録する
	録画視聴型	○	初回は、講義録画の視聴、遠隔受講も可能
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の前に、配布資料で授業の内容を確認すること。 ・授業で指示された課題に取り組み、期限までに提出すること。 ・グループ演習の取り組みでは、授業時間外にグループメンバーが集まって、まとめていくことが重要である。この活動自体がプロジェクト活動であり、授業で得た知識を実践の場で活用する機会でもある。グループをまとめ、結論をまとめていく活動によって、プロジェクトマネジメントを体感し、実践に結び付けるためのポイントを習得する。 		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	当科目では、シミュレータを使ってグループ演習を行う。演習では、スケジュールの作成、要員のアサイン、コスト管理、課題対応、リスク対応等のプロジェクトマネジメントが疑似的に実践できる。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	・授業の目的と15回の授業内容を解説する。 ・シミュレータの概要を示す。 ・次回以降のために、プロジェクト経験等の調査。	[ハ]
	第2回	・プロジェクト・マネジャーの役割 ・人間関係とチームに関するスキル	[ハ]
	第3回	〈プロジェクトの基礎知識〉 シミュレータ実行のためのプロジェクトの基礎知識	[録]
	第4回	【シミュレータ演習（個人）】 各自でシミュレータのデモ版を実施し、操作を学ぶ	[ハ]
	第5回	〈スケジュール作成〉 ・スケジュール調整、クリティカルパス	[録]
	第6回	【シミュレータ演習 準備1（グループ）】 シミュレータの目的と制約を示し、操作を学ぶ。 シミュレータ上でプロジェクト計画を作成する。	[ハ]
	第7回	【シミュレータ演習 準備2（グループ）】 シミュレータ上でプロジェクト計画を作成する。	[ハ]
	第8回	【シミュレータ演習 前半実施（グループ）】 シミュレータの設定を確認し、シミュレータ演習の前半を行う。	[対]
	第9回	〈前半の振り返り（グループ）〉 シミュレータ演習前半の結果のまとめを行い、各種指標を分析する。	[ハ]
	第10回	〈コスト、品質の考え方〉 コストマネジメント、品質マネジメント	[録]
	第11回	【シミュレータ演習 後半準備（グループ）】 シミュレータ演習前半の結果のまとめを行い、各種指標を解析する。 要員計画、品質管理、要員、コミュニケーション等の見直しを行い、後半の戦略策定を行う。	[ハ]
	第12回	【シミュレータ演習 後半実施（グループ）】 シミュレータ演習の後半を行う。 実行結果を分析するための資料を収集する。	[対]
	第13回	〈後半の振り返り（グループ）〉 シミュレータ演習後半を振り返り、全体の分析を行う。 シミュレータ演習分析結果の発表準備を行う。	[ハ]
	第14回	〈発表準備（グループ）〉 シミュレータ演習分析結果の発表準備を行う。 個人レポートの準備を行う。	[ハ]
	第15回	〈グループ発表〉 シミュレータ演習で学んだ内容をグループで発表する	[ハ]
	試験	第1回から第15回までの内容の理解に関する筆記試験を行う。	[ハ]
成績評価	課題（レポート、演習）60%、試験（筆記）40%を基準として総合的に評価する。レポート等の提出物は締切厳守。		
教科書・教材	資料はLMS上で配布する。		
参考図書	・PMI 著、『プロジェクトマネジメント知識体系ガイド（PMBOKガイド）第6版』、PMI、2018/1 また、講義時にも適宜指示する。		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	マネジメント系科目群	科目名 (英文表記)	情報システム特論 1 IT Service Management			教員名	嶋津 恵子

概要	ITサービスマネジメントは、ビジネス部門が必要とする適切なITサービスを安定的に提供するための管理活動全般を指すものである。ビジネスが多様化する中で、IT部門には、従来のシステムの開発・構築・運用という役割だけではなく、IT部門の視点からビジネスを理解しそのビジネスの発展に貢献することが求められている。この背景を受け、ITサービスマネジメントの視点が欠かせなくなっている。 これを実現する方法として、ITILとDevOpsが注目されている。 ITILは、ITサービスマネジメントにおけるベストプラクティスであり、DevOpsは、開発担当と運用担当が連携・協力し、フレキシブルかつスピーディーに実装する開発手法である。 本講義では、実践上の事例からITILとDevOpsの本質を学修する。 ITILは【アポロ13号の事例】を採用し、DevOpsは日本国内の企業の事例を採用する。			
目的・狙い	本講義の受講を通して、サービスマネジメントの基本的な考え方を理解することと、実践的な基本対応スキルを併せて習得する。ITILやDevOpsを体系的に学修したことのない履修生を対象としており、すでに資格等を有しているものにとっては、本講義の内容のほとんどが既知の知識と経験となる可能性が高い。 修得できる知識単位: (戦略) システム戦略立案手法 レベル4 (戦略) コンサルティング手法 レベル4 (戦略) 市場機会の評価と選定 レベル3 (企画) 要求分析手法 レベル4 (企画) システム企画立案手法 レベル4 (企画) 非機能要件設計手法 レベル4 (実装) アーキテクチャ設計手法 レベル4 (利活用) サービスの運用 レベル4 (支援活動) 品質マネジメント手法 レベル4 (支援活動) リスクマネジメント手法 レベル4 (保守・運用) システム保守・運用・評価 レベル4 (非機能要件) 非機能要件(可用性、性能・拡張性) レベル4 法規・基準・標準 レベル4			
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	特に前提知識は問わない。			
到達目標	上位到達目標			
	・サービスマネジメントの視点を持ってビジネスに取り組むことができる。 ・ITILやDevOpsを活用してIT部門のITサービスマネージャを務めることができる。			
	最低到達目標			
	・サービスマネジメントの基本的な内容を理解する。 ・ITILとDevOpsの基本的な内容を理解する。			
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点	
	対面型	—		
	ハイフレックス型	○	・発問とディスカッションを多用した講義形式 ・事例をもとにITサービスマネジメントの視点で解決を試みる	
	録画視聴型	—		
授業外の学習	・授業回ごとにmanabaに意見や質問の掲示用スレッドを用意する。学生間の活発な意見交換を期待する。 ・第4回、第8回の講義後にレポート課題を課す。			
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	・第2回から第10回までは指定する教科書の各回ごとに予定している章を読み進める方法で学修する。 ・それ以降は、日経BP社が発行する記事を用いて学修する。			
授業の計画	回数	内容		授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	オリエンテーション 講義履修の判断材料を提供する。シラバスの記載に従って講義内容を紹介し、昨年度の履修生の声を紹介する		[ハ]
	第2回	ITサービスマネジメントの価値と意義を「アポロ13」のストーリーで学ぶ。 教科書： 第1部 ITサービスマネジメント と アポロ13 Chapter 01 ITサービスマネジメントとは Chapter 02 「アポロ13」でITSMを学ぶ意義		[ハ]

	第3回	サービスストラテジを「アポロ13」のストーリーで学ぶ。 教科書： 第2部 サービスストラテジ Chapter 03 アポロ計画における戦略とは Chapter 04 アポロ計画における顧客とは Chapter 05 サービスという単位を考える	[ハ]
	第4回	「アポロ13」を鑑賞し、このプロジェクトにおける「サービスとは」を各自考察する。 【第一回レポート】	[ハ]
	第5回	サービスオペレーションを「アポロ13」のストーリーで学ぶ。 教科書： 第3部 サービスオペレーション Chapter 06 インシデント管理「ヒューストン、センターエンジンが停止した」 Chapter 07 サービスデスク「反応バルブを閉じろ、と伝えろ」	[ハ]
	第6回	サービスオペレーションの続きとサービスデザインを「アポロ13」のストーリーで学ぶ。 教科書： Chapter 08 問題管理「自分の字が読めないんだ。思ったより疲れているみたいだね」 第4部 サービスデザイン Chapter 09 サービスレベル管理「絶対に死なせません」	[ハ]
	第7回	サービスデザインの続きを「アポロ13」のストーリーで学ぶ。 教科書： Chapter 10 可用性管理「チャーリー・デュークが風疹にかかっている」 Chapter 11 キャパシティ管理「問題は電力だ。電力がすべて」	[ハ]
	第8回	サービスデザインのさらなる続きとサービストランジションを「アポロ13」のストーリーで学ぶ。 教科書： Chapter 12 IT サービス継続性管理「トラブルが発生した」 第5部 サービストランジション Chapter 13 構成管理「なんとかして、この四角をこの筒にはめ込むんだ」 【第二回レポート】	[ハ]
	第9回	継続的サービス改善を「アポロ13」のストーリーで学ぶ。 また 中間の課題を提示する。 教科書： Chapter 14 変更管理「この飛行計画は忘れよう」 Chapter 15 リリース管理「こちらヒューストン。打ち上げ準備完了です」	[ハ]
	第10回	継続的サービス改善を「アポロ13」のストーリーで学ぶ。 教科書： 第6部 継続的サービス改善 Chapter 16 継続的サービス改善「アポロ計画は改善のかたまり」	[ハ]
	第11回	DevOpsの本質 システムズエンジニアリングプロセス標準（ISO/IEC/IEEE15288）の基本を学修することで DevOps の本質を把握する。	[ハ]
	第12回	日経 BP 社発行の雑誌記事を参照し、DevOps の事例を学修する。	[ハ]
	第13回	日経 BP 社発行の雑誌記事を参照し、DevOps の事例を学修する。	[ハ]
	第14回	日経 BP 社発行の雑誌記事を参照し、DevOps の事例を学修する。	[ハ]
	第15回	全講義の総復習を行う。	[ハ]
	試験	最終試験を行う。	[ハ]
成績評価	次の3つのポイントで評価する(合計 100 点満点) ・レポート課題 20点 ・レポート課題 30点 ・最終試験 50点		
教科書・教材	『アポロ13』に学ぶITサービスマネジメント ～映画を観るだけで ITIL の実践方法がわかる! ～、谷誠之・久納 信之、技術評論社		
参考図書	必要に応じて講義中に指示する。		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	マネジメント系科目群	科目名 (英文表記)	情報ビジネス特別講義 2 Financial Account and Organization			教員名	小酒井 正和

概要	現在の企業環境を考えると、IT 従事者こそ、組織の戦略マネジメントと関連づけて、会計情報をどう活用するか、組織制度をどのように構築するかといったセンスを身につけておく必要がある。そうすることによって、IT 従事者自らがビジネス戦略へ大きな影響力を持つべきである。本講義では、組織の戦略をマネジメントする手法として、管理会計の手法を概観することによって、経営戦略の実行システムの構築やインタングブルズ（無形の資産）のマネジメントについて学ぶ。また、新型コロナウイルス感染症の流行次第では、対面授業を減らし、遠隔及び録画授業を多めにする等の工夫を行う。		
目的・狙い	<p>本講義の目的は、管理会計の側面から、IT 従事者に必要となる会計、人的資源、組織の管理に関する知識を修得し、活用するための具体的な手法を理解することである。本講義では、マネジャーとして IT に関わる人材を想定した会計データの取り扱いスキルを習得するとともに、会計データによる意思決定と業績評価の二側面からの知識習得を目指す。最終的には、BSC（バランスト・スコアカード）と結びつけた IT 投資マネジメント能力の習得を目指す。</p> <p>IT 従事者に普段の業務では慣れない会計・財務というジャンルについて、マネジメントのための情報として捉えた活用方法について総論として学習することを方針とする。具体的に、学習者はこの講義を通じて以下の知識や能力を習得できる。</p> <p>修得できる知識単位: (レベル4)</p> <ul style="list-style-type: none"> - (戦略) 市場機会の評価と選定 - (戦略) マーケティング - (戦略) システム戦略立案手法 - (企画) システム企画立案手法 - 企業活動 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	特に履修のための条件はないが、シニアマネジャーとして IT をマネジメントする視座を得たいと考える人が履修することが望ましい。あくまで簿記の授業ではなく、会計データの読み方を含めた組織づくりの知識を習得する授業であること心得ておくこと。		
到達目標	<p>上位到達目標</p> <p>BSC の構築に必要な戦略マップ及びスコアカードの作成ができる。</p> <p>BSC に関連づけた戦略的な IT 投資のポートフォリオを構築できる。</p> <p>最低到達目標</p> <p>組織に対する業績評価の仕組みを説明でき、適切な業績評価指標の設定ができる。</p> <p>会計データを用いた意思決定支援情報の作成と判断ができる。</p>		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	遠隔および録画での出席可。遠隔での出席の場合、授業で指定された受講確認で出席扱いとする。Excel などの表計算ソフトを使った演習を行う。学習効果・効率の観点から、できるだけ録画での出席ではないほうがよいと思います。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	積み重ねが必要な授業内容でもあるため、授業外での学習として、授業前に予習を行うことを前提とします。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	講義では、まず基礎的な会計的、コスト的な考え方を習得し、そのあとで所定の課題については、授業ごとに提出する。なお、会計に関わる基礎部分から学習を始めることを前提としているので、それを納得の上、学習プランを立てていただきたい。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	管理会計の現代的意義（第1章）・経営戦略とマネジメント・コントロール（第2章） 経営戦略と組織の設計との関係について学び、管理会計の手法がどのように役立てられることになるかの仕組みを理解する。	[ハ]
	第2回	中期経営計画と利益計画（第3章） 戦略と一貫性のある中期経営計画の立案の方法と、そこから単年度の予算編成に繋げるための利益計画の方法について理解する。	[ハ]
	第3回	予算管理（第4章） 予算の意義や役割について学び、戦略を反映した予算のあり方について理解する。	[ハ]
	第4回	経営意思決定支援の管理会計（第5章） 資本予算の編成などで用いられる経済性評価の方法について学び、投資評価のための経済性計算のための技能を修得する。	[ハ]
	第5回	コストマネジメント（第6章）・ABCによる製品戦略、原価低減、予算管理（第11章） ABC/ABM（活動基準原価計算/活動基準管理）などの原価管理の手法について学び、コストデータや業務データの活用方法について理解する。	[ハ]
	第6回	原価企画（第7章） 製造業およびサービス業で活用されるコストダウンのための活動である原価企画について学び、低コストかつ高品質の製品・サービスの実現方法について理解する。	[ハ]
	第7回	経営分析Ⅰ（第9章） 経営分析の方法として、主に収益性指標の計算方法について学び、指標の読み方について理解する。	[ハ]
	第8回	経営分析Ⅱ（第9章） 経営分析の方法として、収益性指標だけでなく、資本効率性、財務の安全性などに関連する指標の計算方法について学び、指標の読み方について理解する。	[ハ]
	第9回	事業部制管理会計（第8章） ROI や EVE などの業績評価指標の意義について学び、指標の読み方や活用方法について理解する。	[ハ]
	第10回	バランスト・スコアカード（第12章） 戦略実行のためのマネジメントシステムである BSC（バランスト・スコアカード）の本質的な意義を学び、マネジメントコントロールについて深く理解する。	[ハ]
	第11回	統合報告と管理会計（第15章） 近年、注目されている統合報告書（IR）の意義について学び、インタンジブルズ（無形の資産）のマネジメントの重要性について理解する。	[ハ]
	第12回	インタンジブルズマネジメント（第14章） 企業価値を向上させる源泉であるインタンジブルズ（無形の資産）の意義について学び、インタンジブルズの複合的活用について理解する。	[ハ]
	第13回	レピュテーション・マネジメント（第13章） インタンジブルズの1つであるコーポレート・レピュテーション（企業の評判）とブランドの違いについて学び、レピュテーションマネジメントのための BSC の活用方法について理解する。	[ハ]
	第14回	顧客管理会計・人的管理会計 インタンジブルズである顧客資産および人的資産の意義について学び、顧客資産の管理および人的資産の管理のための BSC の活用方法について理解する。	[ハ]
	第15回	IT 管理会計 インタンジブルズの1つである情報資産の意義を学び、戦略志向の IT 投資マネジメントについて理解する。	[ハ]
	試験	範囲は講義全体として、①計算問題、②意思決定問題、③論述問題のいずれか2つを課す。	[ハ]
成績評価	課題：75点 授業内にて行う演習の内容によって評価を行う（演習15回×最高5点）。 知識習得：25点 最終的に行う試験は25点満点とする。なお、時間的制約などから試験を同等のレポート提出とする場合もある。		
教科書・教材	櫻井通晴、伊藤和憲編著（2017）『ケース管理会計』中央経済社（全章を網羅することはできませんのであらかじめご了承ください） 授業で使用するデータ教材については、授業ごとにダウンロードできるようにしておく。		
参考図書	なし		

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	マネジメント系科目群	科目名 (英文表記)	情報セキュリティ特別講義 1 Risk Management			教員名	奥原 雅之

概要	<p>当科目は、国際標準規格 ISO/IEC 27001 を基本に、リスクマネジメント技法の修得、組織での情報セキュリティマネジメントシステム（ISMS: Information Security Management System）体制を確立する手法、ISMS 適合性評価制度を講義とケーススタディから実践的に学ぶ。ケーススタディでは、会社組織でのセキュリティポリシーの設定から、リスク分析、管理策の適用等の手順を実際に行う。また、マネジメント規格の中核アプローチである PDCA モデル、ISMS を構築する上で中核作業であるリスクマネジメント手法を学ぶ。</p>		
目的・狙い	<p>当科目は、組織での内部統制を確立するため ISMS を構築するための基本と実践スキルの取得を目的とする。具体的には、以下の知識・スキルを修得する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報セキュリティポリシーの必要性、重要性を理解し、ポリシーの作成スキルを修得する。 ・リスク分析・管理を理解し、リスクマネジメントスキルを修得する。 ・ISO/IEC 27001 による ISMS 適合性制度を理解する。 <p>修得できる知識単位:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（戦略）コンサルティング手法（レベル4） ・（企画）非機能要件設計手法（レベル4） ・（実装）アーキテクチャ設計手法（レベル4） ・（支援活動）リスクマネジメント手法（レベル4） ・（支援活動）事業継続計画（レベル4） ・（支援活動）情報セキュリティ（レベル4） ・（非機能要件）セキュリティの構築技術（レベル4） ・（非機能要件）セキュリティの利用技術（レベル4） 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	情報セキュリティ特論の単位を取得しているか、同等の知識・スキルを有すること。		
到達目標	上位到達目標		
	IT スキル標準（レベル4 相当） <ul style="list-style-type: none"> ・情報資産、脅威等が複雑で、ある程度の適用範囲が広い組織の ISMS 構築プロジェクトのプロジェクトマネージャが担当できるレベル ・ISMS 審査員資格合格レベル 		
	最低到達目標		
	IT スキル標準（レベル3 相当） <ul style="list-style-type: none"> ・適用範囲の限定された組織での ISMS 構築プロジェクトの一員として活動できるレベル ・情報処理技術者試験合格レベル（情報セキュリティスペシャリスト、応用情報技術者）、セキュリティプロフェッショナル認定資格制度（CISSP）認定資格合格レベル 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	グループ演習および最終試験は対面型とする。
	ハイフレックス型	○	講義のみの回、および個人演習の回はハイフレックス型とする。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の前に、配布資料で授業の内容を確認すること。特にケーススタディは事前の理解が必要であり、理解が不足するとグループ作業に影響が及ぶ。 ・授業で指示された課題に取り組み、期限までに提出すること。 		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	当科目は講義及びケーススタディから構成される。授業計画を以下に示す。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	〈概要〉 学生が講義選択の判断ができるように授業の目的と15回の授業内容を解説する。また、合わせて講義全体を理解するために必要な基礎的な概念について解説する。	[ハ]
	第2回	〈ISMS 1〉 ISMS の構築の有効性を理解する。情報漏洩が発生した場合の損失額の算出等も学ぶ。 個人演習あり。 ISMS に関する国際標準 ISO/IEC27001 の開発の経緯、フレームワーク等も学ぶ。	[ハ]
	第3回	〈ISMS 2〉 ISMS 適合性評価制度、ISMS 基本ポリシー等の基礎知識を学ぶ。個人演習あり。	[ハ]
	第4回	〈ISMS 3〉 ISMS での情報セキュリティポリシーの必要性、ポリシー文書の構成を扱う。個人演習あり。	[ハ]
	第5回	〈グループ演習 1〉 情報資産の資産の特定プロセスについて、解説と演習を行う。	[対]
	第6回	〈グループ演習 2〉 情報資産価値の算定プロセスについて、解説と演習を行う。	[対]
	第7回	〈グループ演習 3〉 脅威と脆弱性の識別プロセスについて、解説と演習を行う。	[対]
	第8回	〈グループ演習 4〉 リスク値の算出プロセスについて、解説と演習を行う。	[対]
	第9回	〈グループ演習 5〉 リスクの評価プロセスについて、解説と演習を行う。	[対]
	第10回	〈グループ演習 6〉 管理策の選定プロセスについて、解説と演習を行う。	[対]
	第11回	〈グループ演習 7〉 管理策の実装プロセスについて、解説と演習を行う。	[対]
	第12回	〈グループ演習 8〉 内部監査計画の策定プロセスについて、解説と演習を行う。	[対]
	第13回	〈グループ演習 9〉 内部監査計画の実施プロセスについて、解説と演習を行う。	[対]
	第14回	〈グループ演習 10〉 内部監査計画の報告プロセスについて、解説と演習を行う。	[対]
	第15回	〈総括〉 模擬監査の発表、ディスカッションを行う。	[対]
	試験	第1回から第15回の内容の理解に関する試験を行う。	[対]
成績評価	課題（個人・グループ課題の評価の合計）50%、試験（筆記）50%を基準に総合的に評価する。提出期限を超えて提出された課題は不受理または減点の対象となる。		
教科書・教材	授業教材は LMS 上にオンラインで配布する。 また、副教材として「ISMS ユーザーズガイド」を使用する。入手方法は授業内で説明する。		
参考図書	1.日本規格協会「対訳 ISO/IEC 27001:2013(JIS Q 27001:2014)情報セキュリティマネジメントの国際規格: ポケット版 (ISO/IEC27000:2018 収録版)」 (ISBN-13:978-4542402850) 2.日本規格協会「ISO/IEC 27002:2013(JIS Q 27002:2014)情報セキュリティ管理策の実践のための規範 解説と活用ガイド (Management System ISO SERIES)」 (ISBN-13:978-4542701779) 3.JIS Q 27001:2014 情報技術-セキュリティ技術-情報セキュリティマネジメントシステム-要求事項 4.JIS Q 27002:2014 情報技術-セキュリティ技術-情報セキュリティ管理策の実践のための規範 JIS 規格（上記 3 および 4）は日本産業標準調査会の Web サイトで閲覧することができる。		

V 情報システム学特別演習

情報システム学特別演習 1

情報システム学特別演習 2

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	必修	単位	6	学期	1Q、2Q
科目群	情報システム学特別演習	科目名 (英文表記)	情報システム学特別演習 1 Advanced Exercises: Information Systems 1			教員名	コース全教員

概 要	情報アーキテクチャコースの教員指導によるプロジェクトを実行する。各プロジェクトは PBL (Project Based Learning) 型であり、学生が主体的に活動することで、コンピテンシー（業務遂行能力）を修得する。各プロジェクトの内容は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照のこと。
目的・狙い	<p>あらかじめ持っていた知識・スキル及び 1 年次に修得した知識・スキルを応用し、企業・組織での実際の業務を遂行できる高度 IT 専門職人材を育成する。プロジェクト活動によって、高度 IT 専門職人材に期待されるコンピテンシーを獲得する。</p> <p>修得できるコンピテンシー:</p> <p>(B1) コミュニケーション力 (レベル 4) システム提案・ネゴシエーション・説得、ドキュメンテーション (B2) 継続的学修と研究の能力 (レベル 4) 革新的概念・発想、ニーズ・社会的・マーケット的視点、問題解決 (B3) チーム活動 (レベル 4) リーダーシップ・マネジメント、ファシリテーション・調整</p>
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 22 単位以上 (前年度の 10 月入学者は 12 単位以上) を修得していること。 ・ プロジェクト配属ルール及び履修条件の詳細は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照すること。
到達目標	上位到達目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「PBL プロジェクト説明書」に記載されたプロジェクトごとの評価基準で概ね 80 点以上の評価を受ける。 ・ これは指導的立場で業務を遂行できるレベルである (高度情報処理技術者試験に合格するレベルであり、ITSS レベル 4 に該当する)。
	最低到達目標
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「PBL プロジェクト説明書」に記載されたプロジェクトごとの評価基準で概ね 60 点以上の評価を受ける。 ・ これは単独で業務を遂行できるレベルである (応用情報処理技術者試験に合格するレベルであり、ITSS レベル 3 に該当する)。
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
授業外の学習	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
授業の進め方 (グループワーク方 式など、進め方の 特徴)	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ プロジェクトにおける活動及び成果の量及び質による評価 (100 点満点)、コンピテンシー獲得度の評価 (100 点満点) を行い総合的に評価する。 ・ 成績は主担当と副担当による評価案を作成し、コース委員会での審議を経て確定する。 ・ 各プロジェクトの評価基準は「PBL プロジェクト説明書」を参照。
教科書・教材	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
参考図書	「PBL プロジェクト説明書」を参照。

コース名	情報アーキテクチャコース	必修・選択	必修	単位	6	学期	3Q、4Q
科目群	情報システム学特別演習	科目名	情報システム学特別演習 2			教員名	コース全教員
		(英文表記)	Advanced Exercises: Information Systems 2				

概 要	情報アーキテクチャコースの教員指導によるプロジェクトを実行する。各プロジェクトは PBL (Project Based Learning) 型であり、学生が主体的に活動することで、コンピテンシー（業務遂行能力）を修得する。各プロジェクトの内容は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照のこと。
目的・狙い	<p>あらかじめ持っていた知識・スキル及び 1 年次に修得した知識・スキルを応用し、企業・組織での実際の業務を遂行できる高度 IT 専門職人材を育成する。プロジェクト活動によって、高度 IT 専門職人材に期待されるコンピテンシーを獲得する。また、前期の PBL 活動で得たコンピテンシーをさらに活用し、次のステップを目指す。</p> <p>修得できるコンピテンシー:</p> <p>(B1) コミュニケーション力 (レベル 4) システム提案・ネゴシエーション・説得、ドキュメンテーション (B2) 継続的学修と研究の能力 (レベル 4) 革新的概念・発想、ニーズ・社会的・マーケット的視点、問題解決 (B3) チーム活動 (レベル 4) リーダーシップ・マネジメント、ファシリテーション・調整</p>
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<ul style="list-style-type: none"> ・情報システム学特別演習 1 の単位を取得していること。 ・原則として前期に所属したプロジェクトを継続すること。 ・プロジェクト配属ルール及び履修条件の詳細は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照すること。
到達目標	上位到達目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・「PBL プロジェクト説明書」に記載されたプロジェクトごとの評価基準で概ね 80 点以上の評価を受ける。 ・これは指導的立場で業務を遂行できるレベルである（高度情報処理技術者試験に合格するレベルであり、ITSS レベル 4 に該当する）。
	最低到達目標
	<ul style="list-style-type: none"> ・「PBL プロジェクト説明書」に記載されたプロジェクトごとの評価基準で概ね 60 点以上の評価を受ける。 ・これは単独で業務を遂行できるレベルである（応用情報処理技術者試験に合格するレベルであり、ITSS レベル 3 に該当する）。
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
授業外の学習	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
授業の進め方 (グループワーク方 式など、進め方の 特徴)	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトにおける活動及び成果の量及び質による評価（100 点満点）、コンピテンシー獲得度の評価（100 点満点）を行い総合的に評価する。 ・成績は主担当と副担当による評価案を作成し、コース委員会での審議を経て確定する。 ・各プロジェクトの評価基準は「PBL プロジェクト説明書」を参照。
教科書・教材	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
参考図書	「PBL プロジェクト説明書」を参照。

創造技術コース

I 創造技術基礎科目群

グローバルコミュニケーション特論

人間中心デザイン特論

デザインマネジメント特論

インテリジェントシステム特論

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	創造技術基礎科目群	科目名 (英文表記)	グローバルコミュニケーション特論 Global Communications			教員名	前田 充浩

概要	<p>本講義の目的は明確である。受講者に、国際場裡でこれから世界を相手に闘って、勝てるようになって欲しい。ビジネスでも、外交でも、政治でも、国際場裡で自国民が外国人に負けまくっている状態では国家の発展はない。そのため、国際場裡での闘いにおいて「勝てる」ようになるために必要な能力として、第1に、現下の国際情勢に関する鋭敏な理解力、第2に、今後の世界の動向を俯瞰する文明的視座の理解力、第3にディベート能力、すなわち世界で外国のライバルを相手に議論で「勝つ」能力を付与する。</p> <p>第1の内容（国際情勢）について。</p> <p>世界は目下、大変な激動の只中にあり、今後の展望を正確に見通せる人は少ない。このような激動期には、現在国際社会で発生している事象の奥の奥の奥に関する正しい見通しを持った人間が、ビジネスにおいても圧倒的に勝利する。本講義では、国際関係論のリアリズムの見解（国際社会には政府も警察もいないので、全ての大国は、自分の国さえよければ他の国はどうでもよい、と考え、日々ライバル国を陥れる権謀術数を展開している、と考えるもの。）に立脚して国際情勢を見通す訓練を行う。徹底したリアリズムの見解は、受講者には馴染みの薄いものかもしれない。しかしながら人類は、2016年から2020年の間、トランプ政権に掻き回される世界を目の当たりにした。「アメリカさえよければ他国はどうなっても良い。」という発想は、リアリズムの真骨頂である。その後が、バイデン政権下のこの大混乱である。アメリカによる数々の中国包囲網と中国側の対抗は、苛烈を極めていく。ウクライナをめぐる、ロシアと西欧も大変なことになるであろう。一方で、RCEPは発効し、CPTPPも加盟国を拡大する動きを見ている。このような中、日本の進むべき道を正確に見通すためには、明確な視座を持つことが必要である。その明確な視座が、（国際関係に関する）リアリズムの視座である。今日の世界はまさにリアリズムのぶつかり合いなのであり、この基本的な構造に変化はない。このような中で、「みんな仲良しがいいんだもの」、「人を悪くおもっちゃだめだよ」とか言っていると、自国だけ餌食になって、周りの国々は「馬鹿なやつもいたもんだ。」、「頂きます!」、と言って喜び、それで終わりである。</p> <p>第2の内容（文明的視座）について。</p> <p>今日は、言うまでもなくAI、ビッグデータ、ブロックチェーン、ロボティクス等に代表されるITの発達（DX）により社会のあらゆる面が劇的に変化する等による文明的な大きな変化の時代である。この変化を捉える枠組みについては、Industrie4.0（Cyber Physical System）（ドイツ政府）、Society5.0（超スマート社会）（日本政府）等、いくつかのモデルが提示されている。本講義では、情報社会学近代化モデルに基づき分析を進める。なお講義は、日本を代表する社会学者であり情報社会学の創始者である公文俊平本人の許可、指導の下に、公文俊平作成の資料を用いて行う。</p> <p>第3の内容（ディベート）について。</p> <p>国際社会は、日々戦争（喧嘩）を行う場である。その戦争（喧嘩）では、物理的な兵器が用いられることは稀であり（物理的な兵器を使うと、人が死ぬ）、日々用いられるのはディベートである。すなわち、ディベートとは、兵器なのである。ディベートが強い、ということは、兵器が強力だ、ということで、それによって国益、個人的な利益を大きく増大させることができる一方、弱いとボロボロ、他国のいいようにやられまくるのである。国際場裡で仕事をする以上、強いディベート力は必須である。警察のいない国際社会では、真実、とは、「ディベートの勝者の言っていること」なのである。ディベートの敗者の言うことは「負け犬の遠吠え」であり、何を言おうと、それは真実とは認められない。これが国際社会の実態なのである。講義では、AIITフォーミュラの『競技ディベート』、すなわちスポーツとしてのディベートを通じて、強いディベート力を獲得していただく。フィギュアスケートがルールにより厳密な採点ができるように、『競技ディベート』もスポーツである以上、採点方式が確立しており、勝敗が明確につくのである。</p>
目的・狙い	<p>本講義の目的は、受講者に、ビジネス上のライバルに一步先んじて有利な状態を作り上げるために必要な、現下の国際関係を見通す「知見」、情報通信革命、デジタル化等が牽引する近代文明の情報化局面を見通す「知見」、及び「ディベート力」を付与することである。</p> <p>現下の国際関係を見通す「知見」については、国際関係論、特に世界システム論のグローバリゼーション論に立脚し、特に現下の世界システムの中核的な構造となっている冷戦構造について知見を深めていく。冷戦とは、そもそもは1946年から1989年の間、米国陣営とソビエト連邦陣営の間で行われた、「知の体系」（思想）間の競争である。このやり方はその後も「新興国封じ込め」のために用いられることとなり、1989年から1997年にかけて日本を相手に実施され（このこと、知ってましたか？日本人が知らない間に仕掛けられ、かつ日本はそれに敗北していたのです。）、また今日では、言うまでもなく、米国とその同盟・協調国と中国との間で激しい冷戦が展開されている。バイデン政権は、これを「民主主義体制国家」と「専制国家」との冷戦であると明確に位置付けている。しかも、冷戦で終わらず、実際の軍事的戦争の可能性も高まりつつある。</p> <p>近代文明の情報化局面については、日本人が生んだ（数少ない）世界的な社会科学である公文俊平の情報社会学近代化モデルを、本人の指揮の下に講義する。それによると、近代文明は、国家化局面、産業化局面を経て、20世紀後半から情報化局面に入り、目下は国家化、産業化、情報化の重畳によって世界が動いている（何のことやら、とお思いの方、講義でじっくり！）。</p> <p>なお、情報社会学近代化モデルに基づいて世界、特に発展途上国における情報社会構築を専門に研究する応用情報社会学が2021年に設立され、AIITはその世界学会の事務局を務めている。</p> <p>さらにディベート！</p> <p>過去も、現在も、日本人は「ディベート力」が弱いために、外国人との交渉等においてどれだけぼろぼろにやられて国家も会社も個人も大損させられていることか！逆に、ディベート力が強いために、不当においしい思いをしまくってきている国もあるのである（どこだと思いませんか？分かりますよね。）。国民が強い「ディベート力」を持つことは、大きな軍事力を保有することと比べて勝るとも劣らない安全保障、国益上の問題でもある。「でも日本人は性格的にディベートは不向きなのは。」、「ディベートって、相手をやっつけることでしょ。そういうことをやっている、人間性が悪くなりそうで、嫌だ。」と考えるのは間違いである。ディベートは、ルールが決められたスポーツなのである。海外では、ディベートのことを「言葉のボクシング」と呼ぶ。その通りである。ならばそのスポーツに習熟すればよいではないか。</p> <p>受講者は、この機会に、是非徹底的に強い「ディベート力」を身につけていただきたい。この能力は「一生もの」である。もう、外国人に負けまくって、泣き寝入りをする人生とは決別しよう。</p>

履修条件 (履修数の上限、要求する前提知識等)	21 世紀の国際社会において、他国との競争に勝ち抜き、何らかの分野で成功したい、という強い意志を持つこと。		
到達目標	上位到達目標		
	国際関係論、情報社会学（応用情報社会学）等を背景にしたグローバリゼーションに関する深い理解を持ち、かつ勝率の高いディベート能力を獲得すること。		
	最低到達目標		
	国際関係論、情報社会学（応用情報社会学）等を背景にしたグローバリゼーションに関する理解を持ち、かつ相応のディベート能力を獲得すること。		
授業実施形態 (単一または複数から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	第 1 部、第 2 部においては、「講義時点における」国際情勢を巡る議論が白熱である。国際情勢の分析に正解も間違いもない。ぜひ、積極的な発言を期待する。それがあなたを大きく、強くする。第 3 部のディベートは、思う存分「スポーツ」を楽しんでいただきたい。
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	毎回、授業で説明した内容に関連する課題を指示するので、その課題に関するレポートを作成し、次回講義までに提出すること。		
授業の進め方 (グループワーク方式など、進め方の特徴)	<p>第 1 部（講義）において、現下の国際情勢を適切に理解するために、グローバリゼーションに関する世界システム論を中心とする国際関係論を理解する。</p> <p>第 2 部（講義）において、今後の世界の文明史的な動きを理解するために、AI 等 IT 技術の爆発的な発展の社会への影響（holistic DX）等に関する情報社会学近代化モデル及びそれに基づく応用情報社会学を学ぶ。</p> <p>第 3 部（実践）において、実践を通じて、「競技ディベート」の手法を学ぶ。</p>		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
	第 1 回	リアリズムの国際関係論の視座を理解する。（講義）	[対]
	第 2 回	世界システム論の枠組み及び第 3 新近代論の考え方を理解する。（講義）	[対]
	第 3 回	冷戦、というグローバル・ガバナンス（地球社会の秩序の維持）の仕組みを理解する。（講義）	[対]
	第 4 回	東西冷戦（1946～1989）を例に取り、冷戦の具体的な進め方を理解する。（講義）	[対]
	第 5 回	米国等が日本に対して仕掛け、勝利した米日冷戦（20 世紀第 4 四半期）を例に取り、その冷戦の構造と経緯を理解する。（講義）	[対]
	第 6 回	米日冷戦における、日本側のイデオロギーである開発主義を理解する。（講義）	[対]
	第 7 回	米日冷戦の進展と、日本が完敗する経緯を理解する。（講義）	[対]
	第 8 回	東西冷戦、米日冷戦の例を参考に、今日の米中冷戦の構造を理解し、行く末を見通す。（講義）	[対]
	第 9 回	情報社会学近代化モデルを理解する。（講義）	[対]
	第 10 回	情報社会学近代化モデルを発展させた、応用情報社会学を理解する。（講義）	[対]
	第 11 回	『競技ディベート』のルールを理解する。	[対]
	第 12 回	成績に反映されない、ディベート「模擬」試合を実施する。	[対]
	第 13 回	成績に反映される、ディベート試合（第 1 回）を実施する。	[対]
	第 14 回	成績に反映される、ディベート試合（第 2 回）を実施する。	[対]
	第 15 回	成績に反映される、ディベート試合（第 3 回）を実施する。	[対]
	試験	筆記試験を行う。	[対]
成績評価	筆記試験 50%、ディベートの実践 50%		
教科書・教材	<p>前田充浩『国益奪還』、アスキー新書、2007</p> <p>公文俊平＋前田充浩『応用情報社会学』、世界応用情報社会学会出版部、2021</p> <p>前田充浩『金融植民地を奪取せよ』、プレジデント社、2010</p> <p>公文俊平『文明の進化と情報化－IT 革命の世界史的意味』、NTT 出版、2001</p> <p>公文俊平『情報社会学序説－ラストモダンの時代を生きる』、NTT 出版、2004</p> <p>公文俊平『情報社会のいま－あたらしい住民たちへ』、NTT 出版、2011</p> <p>イマニエル・ウォーラステイン『近代世界システム 1・2』川北稔訳、岩波書店、1981</p>		
参考図書	<p>アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『帝国』、水嶋一憲訳、以文社、2003</p> <p>アンドレ・グンター・フランク『リオリエントーアジア時代のグローバル・エコノミー』山下範久訳、藤原書店、2000</p>		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	創造技術基礎科目群	科目名 (英文表記)	人間中心デザイン特論 Human Centered Design			教員名	伊藤 潤

概要	<p>ICTの発展で人、製品、サービスがデジタルでつながるようになり、既存ビジネスを創造的に破壊するような新しいサービスビジネスが次々と登場している。MaaS (Mobility as a Service) に代表されるように、様々なモノが XaaS (X as a Service) 化しており、製品を選んで（購入して）もらうことだけでなく、顧客に選び続けてもらうことが重要になっている。顧客にとって魅力的で使いやすいということに加え、高いレベルの体験価値を提供できるかがビジネスの成否を左右するようになってきた。</p> <p>製品やサービスのデザインに携わる者が当然備えておくべきマインドセットが人間中心デザインである。人間中心デザインの基本となるのは「人間中心設計」(HCD, Human-Centred Design) ならびに「UX デザイン」(User eXperience Design) である。エンジニアの行う「設計」が人工物内要素重視設計であるのに対し、人間中心デザインは人工物外要素重視設計に時間軸に関する視点を加えたものであり、建築家やインダストリアルデザイナーの暗黙知を形式知化したものとも言えよう。また、このデザイナーの暗黙知の上流工程のみをノンデザイナー向けにパッケージしたものが「デザイン思考」である。</p> <p>Henri Bergson (*1859－1941) は人間はホモ・ファベル (Homo faber, 「作る人」) とした (『創造的進化』(1907)) が、そうではなく人間はホモ・ルーデンス (Homo ludens, 「遊ぶ人」) である、と Johan Huizinga (*1872－1945) が喝破したのは 1938 年のことである。従来の設計ではムリ・ムラ・ムダを排することに努め、効率化を図って来たが、むしろムリ・ムラ・ムダの効用をいかに高めるかが人間中心デザインの肝である。</p> <p>本科目では人間中心デザインの考え方と代表的なツールを学び、実践的な課題を通して習得する。</p>		
目的・狙い	<p>本科目の目的は、製品やサービスをデザインする際に、人間中心デザインの考え方を活かして、開発プロセスの設定と適切な手法の選択ができるようになることである。</p> <p>デザインプロセスの各段階において必要な活動や有用な手法が整備されつつあり、良書も多く出版されている。ただし、その方法論は実践を通して習得する必要がある。そのための演習の場を提供し、以下の知識・能力を獲得することを狙いとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間中心設計の概念とプロセス ・デザイン機会を得るためのビジョン構想の方法 ・体験価値に着目したカスタマリサーチの方法 ・顧客の体験価値を高めるためのデザイン開発方法 ・ユーザビリティ評価の実践的な方法 ・デザインドリブンなサービスイノベーションに取り組むための着眼点 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>前提知識は特に必要としないが、むしろ学習棄却 (unlearning) すなわち学びほぐしが必要となる可能性がある。履修に関しては、基本的にグループワークによる PBL を毎回行うため、授業時間内の参加が望ましい。その名の通り人間を対象とする授業であるため、単なる画面上の UI にしか興味が無い向きにはミスマッチが起こる可能性がある。</p>		
到達目標	<p>上位到達目標</p> <p>人間中心設計・UX デザイン等の考え方を理解し、目的に応じたデザイン開発プロジェクトを企画することができ、適切な方法を選択・実践できる。</p> <p>最低到達目標</p> <p>ものづくりアーキテクトとして最低限必要なデザインリテラシーを身につける。</p>		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<p>反転授業に近い形式とし、授業外に読むべきオンラインテキスト等を適宜指示する。</p> <p>グループワークで PBL を行うため、各グループでの授業外の自主的な作業が求められる。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>授業の前半には講義による知識の伝達を行うが、必要最低限とし、後半の PBL によって実践的に習得することを主眼とする。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	オリエンテーション 講義の概要と人間中心デザイン周辺の諸概念の関係性、ISO の人間中心設計のプロセス等を学ぶ。	[ハ]
	第2回	情報の伝達 人間に情報を伝達するために必要な、認知科学の基礎的な知識、アフォーダンスの誤解とシグニファイアについて理解する。	[ハ]
	第3回	ビジョン構想1 / PBL① 1 ビジョンを描き、バックキャストするというデザインの基本的な考え方を学び、ビジョンを構想するための手法として発想法とその整理の仕方を学ぶ。	[ハ]
	第4回	未来洞察とイノベーション / PBL① 2 トレンドから未来の価値観やシナリオを描く未来洞察の手法を理解し、ビジョンを構想する方法を学ぶ。	[ハ]
	第5回	リサーチ / PBL① 3 現場における人間行動をつぶさに観察し、インサイトを得る方法を学ぶ。	[ハ]
	第6回	ユーザビリティ評価 / PBL① 4 ユーザビリティ評価の個人演習を行う。	[ハ]
	第7回	コンセプトとコピー / PBL① 発表 ビジョンの文章化とそれを伝える言葉を考える。	[ハ]
	第8回	ビジョン構想2 / PBL② 1 固定観念を打破して革新的な方向性を導くまでのデザイン方法論を学ぶ。	[ハ]
	第9回	ビジョンの洗練 / PBL② 2 因果関係や資源統合の現状から問題の核?を探り、より価値の高いデザインビジョンを?案するまでの方法論を学ぶ。	[ハ]
	第10回	サービスデザインと UX デザイン / PBL② 3 XaaS に代表されるサービスデザインの考え方と時間軸を持った UX デザインの全体像を理解する。	[ハ]
	第11回	UX デザイン 1 / PBL② 4 顧客コンテキストを共感的に理解し、望ましい体験コンセプトを検討する方法を学ぶ。	[ハ]
	第12回	UX デザイン 2 / PBL② 5 課題を解決するシナリオをアイデア発想して可視化し、デザインコンセプトを考案する方法を学ぶ。	[ハ]
	第13回	UX デザイン 3 / PBL② 6 立案したデザインコンセプトを洗練させる。	[ハ]
	第14回	UX デザイン 4 / PBL② 7 実現する顧客コンテキストをストーリーやプロトタイプで可視化し関係者の理解を得る方法を学ぶ。	[対]
	第15回	まとめ / PBL② 発表 所定のテーマに対し、第14回で学んだことをグループで演習し発表する。 また PBL の個人提案を発表する。	[対]
	試験	理解度テスト（最終試験）	[ハ]
成績評価	次の3つのポイントで評価する（合計100点満点）。 1. 毎回の宿題 30点（各2点×15回） 2. PBL 発表 40点（各20点×2回） 3. 最終試験 30点		
教科書・教材	講義資料はLMS等で配布する。		
参考図書	<ul style="list-style-type: none"> ・山崎和彦, 松原幸行, 竹内公啓, 黒須正明, 八木大彦『人間中心設計入門』近代科学社, 2016. ・安藤昌也『UX デザインの教科書』丸善出版, 2016. ・佐宗邦威『世界のトップデザインスクールが教えるデザイン思考の授業』日経 BP, 2020. ・前野隆司, 保井俊之, 白坂成功, 富田欣和, 石橋金徳, 岩田徹, 八木田寛之『システム×デザイン思考で世界を変える 慶應 SDM「イノベーションのつくり方」』日経 BP, 2014. ・R. ベルガンティ（佐藤典司監訳, 岩谷昌樹, 八重樫文, 立命館大学経営学部 DML 訳）『デザイン・ドリブン・イノベーション』同友館, 2012. ・D. A. ノーマン『誰のためのデザイン? 増補・改訂版 認知科学者のデザイン原論』新曜社, 2015. ・山岡俊樹『サービスデザイン: フレームワークと事例で学ぶサービス構築』共立出版, 2016. ・M. スティックドーン, J. シュナイダー（郷司陽子訳）『THIS IS SERVICE DESIGN THINKING.』ビー・エヌ・エヌ新社, 2013. 		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	創造技術基礎科目群	科目名 (英文表記)	デザインマネジメント特論 Design Management			教員名	高嶋 晋治

概要	<p>近年、デザインの概念や手法論は様々な分野への拡大が著しいが、デザインの言葉自体の定義も含めて、その解釈は様々である。本講義は、インダストリアルデザイン分野を中心に、デザインの意味とデザインマネジメントの大きく二つの視点から考察するものである。一つ目は、良いデザイン/魅力的なデザイン/売れるデザインを生み出し保証する開発プロセス/戦略、そのための資源としての組織/人材というような狭義のデザインマネジメントである。二つ目は、商品の企画から最終的に製品がユーザーに使用されて生まれる UX までを一貫してコントロールすることや、デザインをブランド構築やコーポレートアイデンティティ構築にかかわる重要な経営資源としてどう活かすかというような広義のデザインマネジメントの視点である。</p> <p>それぞれに多くの事例を研究学習し、デザインマネジメントに関する基本的な知識と考え方を身に付けることで、デザイナーやデザイン部門のマネジメントを推進していくための能力と思考方法を獲得することを目指す。</p>		
目的・狙い	<p>本講義は大きく 4 パートによって構成される。</p> <p>1) インダストリアルデザインに関する基本的な概念や体系的な基礎知識を習得する。過去のイノベティブなデザイン事例をもとに、歴史的なデザインの意味の変化を社会的/産業構造的な背景も考察しつつ学ぶ</p> <p>2) その上で現在の様々な企業が実践してきた良いデザインを生み出すための開発プロセスや組織、人材開発などを紹介し、その運営手法やデザインの考え方の違いを考察する。</p> <p>3) 一方、企業経営の視点からは、デザインが企業経営や発展に大きな役割を果たしてきた事例研究を行う。</p> <p>4) それらから、今後のデザインの方向性や役割の変化について考察する。</p> <p>これらの講義を通じて、デザイン概念に対する基本的な知識と考え方を構築し、より高度なデザインマネジメントの一助となることを目的とする。</p> <p>具体的には、学習者はこの講義を通じて以下の知識と能力の獲得を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インダストリアルデザインの基本的概念と歴史的知識 ・様々なイノベティブデザイン事例とその背景などの知識と考察 ・基本的なデザイン開発プロセスとデザイン戦略、デザイン組織の形態、企業経営との関連性及びその事例 ・今後のデザイン方向性を自ら考察し、マネジメントできる能力 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	特に前提条件はないが、デザイン全般に興味や関心を持ち、デザインを社会的な観点で意義付けようとする学習姿勢を持っていることが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	自ら社会や企業との関連で将来のデザインの方向性を考察し、デザイン業務全般に関する有効なマネジメント提案ができる知識と能力の獲得		
	最低到達目標		
	デザインに関する全般的な基礎知識を持ち、デザイン関連のマネジメントのサポートができる能力		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	スライドによる講義と双方向での質疑 13,14 回のグループ演習回を除く各回に課題レポートが出題される(13 回予定) 1,2 回のグループ演習は討議を基にしたレポート提出、3,4 回の連続グループ演習はグループ毎の発表と質疑応答を行う
	ハイフレックス型	○	スライドによる講義と双方向での質疑
	録画視聴型	○	課題レポート提出によって出席とみなす
授業外の学習	<p>様々な企業及びその製品デザインなどを強い興味と関心を持って学習しておくことが求められる。</p> <p>各回に授業に関連したレポート課題が出題される。グループ演習においては、各自が演習課題に関する調査やまとめを行うことが求められる。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>講義は毎回配布する資料を利用して行う。資料は授業の構成に従い第 1 回から第 15 回まで連続したものである。講義内容を基にしたグループディスカッションとプレゼンを 4 回行い各自の考察を深める。13,14 回を除く各回にその講義内容に関連したレポートが個人提出課題として課される。最終回においてデザインマネジメントの講義内容に関する小論文試験を行う。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	全体概要: 講義全体の構成の概説。初回としてデザイン概念とその概念の広がりや学習し個人のデザイン概念の認識の違いなどを確認する。	[対]
	第2回	デザインの歴史的変遷 1:(産業革命~アメリカ流線型時代まで) 現在のデザイン概念を構築してきた近代から現代のデザインの流れをその時代背景などを含めて学ぶ。近代デザインの萌芽からアメリカの流線型時代までを概観し、これらを通してモダンデザインの基本的理念の構成を学習する。	[録]
	第3回	デザインの歴史的変遷 2:(モダン建築~現代プロダクト) 現代のモダンデザインを中心にその概念を構築してきた著名な建築、プロダクトデザインおよびその他の現代デザインの流れを学ぶ。	[録]
	第4回	日本のデザインの特徴と競争力: デザインから見た日本文化の特徴とそれらを体現する代表的な日本のプロダクトデザインを紹介、またデザイン政策面などの各国との比較などを通して日本のデザインについて学ぶ。	[録]
	第5回	グループ討議 1: 第1回から第4回までの講義に関するテーマでグループ討議を行い、各自のレポートとしてまとめる。	[対]
	第6回	ビジネスとしてのデザイン: ビジネスという視点から見たデザインの実態について概観する。また企業のデザインに対する意識、フリーランスデザインの役割の変化、今後について学ぶ	[録]
	第7回	開発プロセスとデザインの役割/デザイン組織: インハウスデザイナーを持つ代表的産業分野である自動車とエレクトロニクスを例として、開発プロセスとデザインの役割を理解する。またデザイン組織の構成や変化について学ぶ。	[録]
	第8回	知財としてのデザイン、これからのデザイン: 知財戦略の一環としてのデザインと関連する法律の基礎知識を学ぶ。また産業構造の変化を見据えて、これからのデザインの方向性について考察する。	[録]
	第9回	グループ討議 2: 課題をもとにグループ討議の2回目を行い、各自のレポートをまとめる。	[対]
	第10回	企業経営とデザイン: デザインが経営で果たす役割やマーケティングとデザインの関係性について考え、基礎的なマーケティングの知識、コーポレートデザイン、ブランドデザインについても学ぶ。	[録]
	第11回	イノベーションデザイン事例研究 1: 日本を中心に、20世紀後半、電機、自動車産業のプロダクトデザインでイノベーションを起こしてきた企業とそのデザインの研究。 (YAMAHA、SONY、HONDA、無印良品など)	[録]
	第12回	イノベーションデザイン事例研究 2: 現在のハードからソフト、システムなどのデザインにより成功した企業の紹介と研究。 (JR九州、MAZDA、APPLE など)	[録]
	第13回	グループ演習 3: 第9?11回の講義に関するテーマでグループ討議を行い、その理解を深める。	[対]
	第14回	グループ演習 4:プレゼンテーション 3 第13回のグループ討議のまとめと各グループのプレゼンテーションを実施し相互の議論と講評を行うことで理解を深める。	[対]
	第15回	デザイン開発の失敗事例: 自動車デザインの歴史でデザイン面からエポックメイキング的な役割を果たした事例を学ぶ。教員自身の商品開発の失敗事例を通して実際の商品デザイン開発の困難を考察する。講義全体を通しての質疑応答やディスカッションを行う。	[ハ]
	試験	試験: 講義内容を踏まえ、デザインマネジメントに関する小論文テストを行う。	[対]
成績評価	以下の三つのポイントで評価する(合計 100 点)。評価は 10 回以上の授業出席が前提となる。 ・ 13、14 回のグループ演習を除く各回講義の課題レポート:40 点 ・ チーム単位でのグループ演習発表(グループ演習 3、4):10 点(グループ得点+個人役割、貢献など) ・ 最終小論文試験:50 点		
教科書・教材	教員が授業の際に準備、配布する講義資料を使用する。		
参考図書	必要に応じ、授業の際に適宜紹介する。		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	創造技術基礎科目群	科目名 (英文表記)	インテリジェントシステム特論 Intelligent systems			教員名	林 久志

概要	インテリジェントシステムを実装するためのコアとなる技術として、人工知能（AI）が注目されている。特に実世界で動作するインテリジェントシステム（≒エージェント≒AI）の知能は、「認識」、「思考」、「行動」に3つに分けることができる。本講義では、これらの3つの知能のうち最も基礎的であり、かつ、中核にある「思考」に関連するトピックを紹介する。特に、現在の状況をセンサなどで認識した後に、どのように行動したらよいのか考えるための「推論」や、ネットワークで接続された複数のインテリジェントシステム（≒エージェント）間の「協調」に関するトピックを紹介する。		
目的・狙い	<p>人工知能分野の基礎を中心に学ぶ。本講義により、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 論理学 2. 探索 3. 論理プログラミング 4. プランニング 5. エージェントアーキテクチャ <p>の基礎を学ぶことができる。</p> <p>なお、本講義で扱う推論は主に「探索」と「記号推論」であるが、推論のうち、ニューラルネットワーク、強化学習、深層学習、深層強化学習、ゲーム木探索に関しては、「機械学習特論」で取り扱う予定である。また、「協調」（分散人工知能）のうち、生物をヒントに考案された遺伝的アルゴリズムや群知能を用いた最適化や環境への適応技術については、「AIデザイン特論」で取り扱う予定である。</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	コンピュータの基本的な操作ができること。特定のプログラミング言語の知識は前提としないが、基本的な手続き型言語のプログラムは理解できること。基本的な数学を理解できること。		
到達目標	上位到達目標		
	「探索」や「記号推論」や「エージェントモデル」の技術を用いてインテリジェントシステムをモデリング・デザインできるようになること。		
	最低到達目標		
	「探索」や「記号推論」や「エージェントモデル」の各技術の概要を理解できるようになること。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	初回と演習日はリアルタイムで実施する。
	録画視聴型	○	座学は、原則、動画配信とする。 質疑応答は Manaba の掲示板上で行う。
授業外の学習	レポート作成と配布資料の復習		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	講義を基本とし、適宜、演習を行う。また、グループワークによるモデリングを体験する。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第 1 回	イントロダクション： 人工知能の概論を学ぶ。	[ハ]
	第 2 回	論理学： 命題論理と述語論理を学ぶ。	[録]
	第 3 回	探索 1： 深さ優先探索、幅優先探索などの探索アルゴリズムを学ぶ。	[録]
	第 4 回	論理型プログラミング 1： 論理型プログラミング言語 Prolog を学ぶ。	[録]
	第 5 回	論理型プログラミング 2： 論理型プログラミング言語 Prolog を学ぶ。	[録]
	第 6 回	論理型プログラミング 3： 演習： 論理型プログラミング言語 Prolog の演習を行う。	[ハ]
	第 7 回	論理型プログラミング 4： 演習： 論理型プログラミング言語 Prolog の演習を行う。	[ハ]
	第 8 回	探索 2： ヒューリスティクス探索（山登り法、最良優先探索、A*など）を学ぶ。	[録]
	第 9 回	プランニング 1： 古典的プランニングを学ぶ。	[録]
	第 10 回	プランニング 2： 階層タスクネットワーク（HTN）プランニングを学ぶ。	[録]
	第 11 回	プランニング 3： 演習： プランニングのモデリングをグループワークで行う。	[ハ]
	第 12 回	プランニング 4： 近代的プランニングを学ぶ	[録]
	第 13 回	実世界で動作するロボットアーキテクチャと推論： 階層アーキテクチャ、反射と熟考の両立について学ぶ。	[録]
	第 14 回	プランニング 5： 演習： グループワークの発表会を実施する	[ハ]
	第 15 回	総括： 本講義を総括し、その他のトピック（黑板モデル、契約ネットプロトコル、集中型と分散型などのマルチエージェントモデルなど）を紹介する。	[ハ]
	試験	グループワークおよびレポート課題を試験とみなす。	
成績評価	・ レポート課題（プログラミング）： 50 点 ・ レポート課題（グループワーク）： 50 点		
教科書・教材	講義で利用するスライドを配布する。		
参考図書	Stuart Russell, Peter Norvig 著『Artificial Intelligence: A Modern Approach, Fourth Edition』（PEARSON、2020 年） （注）上記書籍の第 2 版までは日本語訳あり Patrik Haslum, Nir Lipovetzky, Daniele Magazzeni 著『An Introduction to the Planning Domain Definition Language』（Morgan & Claypool Publishers、2019 年） 三宅陽一郎 著『人工知能の作り方』（技術評論社、2017 年） Malik Ghallab, Dana Nau, Paolo Traverso 著『Automated Planning and Acting』（Cambridge University Press、2016 年） William F. Clocksin, Christopher S. Mellish 著『Programming in Prolog: Using the ISO Standard』（Springer、2013 年） Malik Ghallab, Dana Nau, Paolo Traverso 著『Automated Planning: Theory and Practice』（Morgan Kaufmann、2004 年）		

Ⅱ プロダクト・イノベーション科目群

設計工学特論

プロトタイピング工学特論

システムインテグレーション特論

サービス工学特論

品質工学特論

信頼性工学特論

創造設計特論

チーム設計・試作特別演習

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	プロダクト・イノベーション科目群	科目名 (英文表記)	設計工学特論 Design Engineering			教員名	伊藤 潤

概要	設計においては、常に留意すべき着目点がある。また、設計を効率的に間違いなく進めるために、それぞれの設計ステージで発生する課題に対処する具体的な手法も有効である。これら着眼点とプロセス手法の観点から、良い設計をするための方法論を示す。 本科目では、設計する上で根本となる概念について解説し、続いて具体的な手順すなわち技法や手法に落とし込む形で説明することの方針とする。 毎回の授業では、授業内容に該当する問題解決手法を示し、その手法について簡単な演習を実施する。演習を通じて設計プロセスで生ずる問題の特徴や、システマティックな解決のあり方を説明する。			
目的・狙い	本科目は製品の機能設計を中心に、製品企画、概念設計、詳細設計、試作に至る設計プロセスにおいて必要な設計方法を体系的に習得できる。具体的には、学習者はこの講義を通じて以下の知識・能力を習得できる。 <ul style="list-style-type: none">・製品の企画から設計、試作までの一連の具体的なプロセス・製品設計をする上で必要な着眼点・製品の機能的な観点における概念設計から試作までの方法・設計上の様々な視点としての作りやすさを考慮した設計、環境を考慮した設計等、設計での留意点に関する知識・設計開発プロセスでの問題解決方法である、発想法、品質機能展開、最適化手法など、システマティックな手法に関する知識と現実の問題に適用する能力			
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	特になし。MS Office（Word、Excel、PowerPoint）の使用経験があることが望ましい。			
到達目標	上位到達目標			
	製品の設計プロセス全体を捉えながら、企画や設計の初期段階において不備のない考慮をしたり、後段のプロセスを考慮した設計ができるようになる。			
	設計プロセスでの問題解決手法を自らの課題に応用し、効率的に運用できるようになる。			
	最低到達目標			
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点	
	対面型	○		
	ハイフレックス型	○		
	録画視聴型	○		
授業外の学習	授業中に完了できなかった演習課題の実施。演習課題は第 5 回と第 11 回の講義後の指定した期日までに提出する。			
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	・前半は機能設計を中心とした、企画から設計・試作に至る各プロセスにおける代表的な方法を演習を通して学ぶ。 ・後半は紙でヘリコプター（以下「紙コプター」）を制作し、飛行実験で得られたデータに基づき、統計的な方法を用いて設計を最適化する方法を演習を通して学ぶ。			
授業の計画	回数	内容		授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	設計とその目的 授業概要を説明し、設計におけるコンテンツ知識とプロセス知識の違いを学ぶ。		[対]
	第 2 回	企画から設計への橋渡し 顧客要求を設計変数にマッピングする一方法として品質機能展開（Quality Function Deployment）を学び、顧客の要求を要求品質にまとめ、品質特性との対応関係を品質表として作成する演習を行う。		[ハ]
	第 3 回	作りやすさ／製造性設計・組立性設計 Design for X（DfX）について学ぶ。とりわけ、3D プリンタの登場によって変わってきた組立性設計（Design for Assembly）や製造性設計（Design for Manufacture）について詳しく学ぶ。		[対]

	第 4 回	人間工学とタスク分析 人間工学の基礎的な知識として、人間工学の定義と歴史、代表的な認知・心理のモデル、立体寸法、人間中心設計の概念などを学び、タスク分析の方法を演習する。	[ハ]
	第 5 回	製品ライフサイクルデザイン 地球環境問題の動向と環境デザインの概要を学び、Life Cycle Assessment (LCA) の計算方法を演習する。	[対]
	第 6 回	公理的設計 よい設計の評価尺度の一例として公理的設計を学び、レクサット評価法を演習する。	[ハ]
	第 7 回	設計のプロセスと企画 プロダクトライフサイクル、製品開発プロセス、企画工程について学び、デザインコンセプトの決定に役立つコンジョイント分析を演習する。	[ハ]
	第 8 回	解決策の探求（発想法） 製品開発プロセスにおける発想の役割と重要性を学び、問題を抽象化して捉えて広く解決策を探る発想法のひとつであるメタコンセプト法を演習する。	[ハ]
	第 9 回	価値向上の方法 製品やサービスの価値を向上させる価値工学（Value Engineering）を学び、製品（モノ）とサービスの相互補完により顧客の要求に応えようとする場合に役立つ因果ループ図を演習する。	[対]
	第 10 回	入力必須構造設計（レイアウトとモジュール） 製品アーキテクチャやモジュール構造などの実現手段や方法を最適化することの重要性を学び、製品や作業の構造を可視化し分析する方法のひとつとして Design Structure Matrix を演習する。	[対]
	第 11 回	ヒューマンエラーと安全設計 臨床現場における医療機器使用時のヒューマンエラーの事例から、フールプルーフ設計（foolproof design）やフェイルセーフ設計（fail-safe design）などの安全設計について学ぶ。	[対]
	第 12 回	試作法 試作の目的と種類を学び、紙コプターを試作し飛行実験を行う。	[対]
	第 13 回	統計分析 紙コプターの飛行実験のデータを用いて、設計仕様の水準間に統計的な差があるかどうかを分析する分散分析の?法を学ぶ。	[対]
	第 14 回	推定 設計仕様から動作結果を推定するモデルを作成し、設計仕様を最適化する方法を学ぶ。紙コプターの飛行実験のデータに対し、重回帰分析を用いて各種の翼の長さから飛行時間を予測するモデルをつくり、ソルバーを用いて所定の飛行時間を得るために最適な設計仕様を推定する。	[対]
	第 15 回	問題要因の分析とリスク管理 製品開発における各種の問題と要因を整理・分析する方法を学び、特性要因図や故障モード影響解析（Failure Mode and Effects Analysis）を演習する。	[対]
	試験	理解度テスト（最終試験）	[ハ]
成績評価	次の 2 つのポイントで評価する（合計 100 点満点）。 レポート課題 20（第 5 回）+24（第 11 回）=44 点 第 5 回と第 11 回の講義後課題を課す。個人で作成し 1 週間以内に提出する。 最終試験 56 点 第 15 回の講義終了後に試験を行う。		
教科書・教材	講義資料は LMS 等で配布する。		
参考図書	<ul style="list-style-type: none"> ・石井浩介, 飯野謙次『価値づくり設計（1 版）』養賢堂, 2008. ・大富浩一『初歩から学ぶ設計手法—多彩なツールにふり回されないための戦略的設計開発の考え方』工業調査会, 2007. ・中沢弘『ものづくりの切り札 中沢メソッド』日科技連出版社, 2011. ・中沢弘『開発設計工学 - 独創的な商品開発のための工学的手法』工業調査会, 2001. 		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	プロダクト・イノベーション科目群	科目名 (英文表記)	プロトタイピング工学特論 Prototyping			教員名	近藤 嘉男 内山 純

概要	創造技術におけるプロトタイピングは計画されたプロダクトの持つ性質を早期に表現する手法及びその過程であり、機能だけでなく感性的なものまで含まれる。 本講義では、"ものづくりアーキテクト"として求められるプロトタイピングの知識とその運用力を習得する。講義とチーム、個人ワークを組み合わせる学び、3DCAD スキルの修得、ラピッドプロトタイピングの活用を通してイノベティブなアイデアや商品・サービス創出におけるプロトタイピングの有効性について理解する。		
目的・狙い	「ものづくりアーキテクト」は、プロトタイピングを十分理解した上で運用、活用することが求められ、デザインエンジニア、プロダクトデザイナーを目指す者にとって必須の知識・スキルである。 前半は、基礎となる 3DCAD モデリングと設計手法を学修し、設計課題に取り組むことで理解を深め、3DCAD 運用力を身につける。 後半は、プロトタイピングのプロセスと制作手法を学修し、課題におけるプロトタイプ制作によりその有効性を理解する。 また、課題制作により、パラメトリックなモデリング、トップダウン、ボトムアップを意識したプロトタイピングの活用がイノベティブなアイデアや商品・サービス創出において有意義であることを知り、3DCAD を活用した意匠－メカ設計連携についての有効性についても理解する。 課題制作、発表を通して以下の能力の向上を目指す。 ・プロトタイピングの意義、プロセスと制作手法 ・3DCAD モデリングと設計手法 ・ラピッドプロトタイピング		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	・3DCAD 未経験者も受講可能だが、東京夢工房(学内)、自宅など自習時間を意欲的に確保すること。 ・3DCAD 経験者は使用環境があれば使用ソフトは問わないが、教室端末では Fusion360、Solidworks、RhinoCeros などが使用可能 ・8 回までに設備講習を受講し、東京夢工房を積極的に活用すること。 ※東京夢工房(学内)で Fusion360、Solidworks 2018、RhinoCeros などが使用ができるので積極的に利用すること。		
到達目標	上位到達目標		
	3DCAD を活用したプロトタイピングのプロセスとその有効性を理解した上で運用ができる。		
	最低到達目標		
	3DCAD による基本的なモデリング技術を修得し、それを活用したプロトタイピングのプロセスとその有効性を理解できる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	講義およびワークショップ、プレゼンテーション
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	○	録画視聴型の回も、対面授業を実施する。 デザインツール使用環境がない履修者は教室での受講を推奨する。 各回で指定される LMS による課題提出で出席扱いとする。
授業外の学習	課題の制作については予習・復習時間を主とする。3DCAD の学修は参考書、チュートリアルによる自習を基本とする。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	講義は投影資料、LMS 資料を使用して行い、第 1 回から第 15 回まで連続したものである。 理解を深めるため教室端末による演習、ラピッドプロトタイプ制作を行う、最終的に各自課題を設定、3D プリントなどで実際にプロトタイプを制作し発表をすることで理解を深める。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
授業の計画	第 1 回	プロトタイピング工学について、3D CAD の基本： 学修内容を解説し講義選択の判断を促す。 演習、課題についての説明 3D CAD についての理解（ファイル操作、画面操作）	[対]
	第 2 回	3DCAD モデリング 1： スケッチ（スケッチ面、基準、拘束） 基本的なモデリング手法の理解（押し出し、回転）パラメトリックなモデリング（寸法、履歴） ・ 課題 1	[録]
	第 3 回	設計演習 1： 基本的なモデリング手法の修得 パラメータ修正、履歴操作	[対]
	第 4 回	3DCAD モデリング 2： いろいろな作成方法、3D 形状の操作（結合、修正） パラメトリックなモデリング（スケッチ変更、履歴変更） ・ 課題 2	[録]
	第 5 回	設計演習 2： いろいろなモデリング手法の修得 パラメータ修正、履歴操作	[対]
	第 6 回	3DCAD モデリング 3： サーフェースモデリング手法の理解 ソリッド化、意匠－メカ設計連携 ・ 課題 3	[録]
	第 7 回	設計演習 3： サーフェースモデリング手法の修得、ソリッド化、意匠－メカ設計連携	[対]
	第 8 回	3DCAD モデリング 4： フォームモデリング手法の理解 フォーム編集、ソリッド化、ソリッドモデリングとの連携 ・ 課題 4	[録]
	第 9 回	設計演習 4： フォームモデリングの修得 いろいろな修正の方法とノウハウ	[対]
	第 10 回	ラピッドプロトタイピング： ラピッドプロトタイピングの意義、手法 3D プリント	[対]
	第 11 回	設計演習： プロトタイプ制作手法の解説（3D プリント） ・ 最終テーマ立案（課題 5）	[対]
	第 12 回	制作演習： 最終発表に向けた課題演習、個別対応、3D プリント	[対]
	第 13 回	制作演習： 最終発表に向けた課題演習、個別対応、3D プリント ・ 中間報告（課題 6）	[対]
	第 14 回	制作演習？ 最終発表に向けた課題演習、個別対応、3D プリント	[対]
	第 15 回	デザインレビュー： 最終課題の成果発表	[対]
	試験	レポート試験： 課題表資料を再構成し LMS にて提出(pdf 横) ・ 最終課題（発表含む）	
成績評価	課題、最終発表、レポートのポイントで評価する。(合計 100 点満点) ・ 課題 1～6 (各 10 点、計 60 点) : 全て提出が条件 ・ 最終課題発表、及びレポート試験(40 点) : 口頭発表 + 発表内容資料の完成度 (発表資料を再構成しレポート試験として pdf (横) による LMS を使用した提出)		
教科書・教材	講義資料は LMS にアップ、又は適宜配布する。		
参考図書	三谷 大暁 他著 『Fusion 360 操作ガイド 次世代クラウドベース 3DCAD ベーシック編』（カットシステム、2021 年） 三谷 大暁 他著 『Fusion 360 操作ガイド 次世代クラウドベース 3DCAD アドバンス編』（カットシステム、2021 年） 三谷 大暁 他著 『Fusion 360 操作ガイド 次世代クラウドベース 3DCAD スーパーアドバンス編』（カットシステム、2021 年） (株)アドライズ 『よく分かる 3 次元 CAD システム SOLIDWORKS 入門 -2017/2018/2019 対応-』（日刊工業新聞社、2019 年） (株)マインズ 『はじめての 3D CAD SOLIDWORKS 入門』（電気書院、2020 年）		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	プロダクト・イノベーション科目群	科目名 (英文表記)	品質工学特論 Quality Engineering			教員名	越水 重臣

概要	本講義では、品質工学の中核的手法である「パラメータ設計法」「機能性評価」「MT システム」について学習する。パラメータ設計は、開発者の名前をとって「タグチメソッド」と呼ばれたり、その目的から「ロバストデザインメソッド」と呼ばれたりもする。その内容は、市場での品質トラブルを未然防止するための設計手法である。機能性評価は、品質ではなく機能を評価するための手法であり、開発設計を効率化することを目的とする。そして、MT（マハラノビス・タグチ）システムは、予測や診断、判別のためのパターン認識の手法であり、現在、様々な分野において実用化が進んでいる。			
目的・狙い	本講義では、品質工学の手法に関する知識を習得するとともに、その手法を実務に応用できるようになることを目的とする。学習者はこの講義を通じて以下の知識や能力を習得できる。 1.パラメータ設計を理解し、実務課題に対して実験計画の立案ができる。 2.機能性評価の方法を理解し、実験データの解析ができる。 3.MT システムを使ったパターン認識のプロセスを理解し、応用事例を考えることができる。			
履修条件 （履修数の上限、 要求する前提知識 等）	統計に関する知識があることが望ましい。			
到達目標	上位到達目標			
	機能性評価によるデータ解析ができる。 機能性評価とパラメータ設計を組み合わせた動特性のパラメータ設計について実験計画が立案できる。 MT システムを使った応用事例が作れる。			
	最低到達目標			
	品質工学には独特の用語がある。「信号因子」「計測特性」「制御因子」「ノイズ因子」の内容を説明できる。 実験データから「SN 比」と「感度」が計算できる。直交表を使った最適化のためのデータ解析ができる。 ロバストデザインと従来の設計法の違いを説明できる。 マハラノビス距離による判別のしくみが説明できる。			
授業実施形態 （単一または複数 から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点	
	対面型	—		
	ハイフレックス型	○	個人ワークやグループワークなど演習を中心とする講義はハイフレックス型で実施する。ただし、Web 会議システムを利用した遠隔授業のみとなることもある。	
	録画視聴型	○	知識の伝達を主目的とする講義はビデオに録画されている。講義ビデオを視聴して、クイズに回答したりレポートを提出したりする。	
授業外の学習	LMS にアップロードされた講義資料をダウンロードして予習すること。 前回の講義内容をよく復習してから講義に臨むこと。			
授業の進め方 （グループワーク 方式など、進め方 の特徴）	講義は毎回配布する資料を使用して行う。毎回の授業内で演習を実施する。重要ポイントに関する演習はその提出を求める。			
授業の計画	回数	内容		授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	講義概要、パラメータ設計の概要 講義の目的と全 15 回の学習内容の概説する。また、第 1 回目の内容として、品質工学の体系とパラメータ設計の目指すところを解説する。		[ハ]
	第 2 回	品質工学におけるシステムのとらえ方 品質工学では、システムに関するパラメータを「信号因子」「計測特性」「制御因子」「ノイズ因子」の 4 つに分類し、システムダイアグラムを完成させる。ここでは、システムダイアグラムについて理解する。		[ハ]
	第 3 回	SN 比と感度による評価 品質工学のパラメータ設計では、得られた実験データを「SN 比」と「感度」と呼ばれる指標に変換して評価を行う。ここでは、SN 比と感度の意味とその計算方法について理解する。		[ハ]
	第 4 回	実験計画法入門（直交表を用いた最適化実験） 品質工学のパラメータ設計では、パラメータの水準を最適化するのに「直交表」を利用する。ここでは、統計手法である直交表を用いたデータ解析法を学ぶ。		[録]

	第 5 回	パラメータ設計の事例 静特性のパラメータ設計の事例を紹介する。事例を通じて、実験計画とデータ解析、最適条件の決定と確認実験のやり方といったパラメータ設計の一連の流れを学ぶ。	[ハ]
	第 6 回	MT（マハラノビス・タグチ）システム（1） 診断、予測、判定の手法である MT（マハラノビス・タグチ）システムについて学ぶ。ここでは、MT 法による判別の方法を理解する。MT 法におけるデータ解析を中心に解説する。	[ハ]
	第 7 回	MT（マハラノビス・タグチ）システム（2） MT 法の応用事例を解説する。MT 法の演習課題（個人演習）についても説明する。演習の成果については、第 14 回と第 15 回の講義内で発表してもらう。	[ハ]
	第 8 回	MT（マハラノビス・タグチ）システム（3） MT システムのうち、予測の手法である T 法を学ぶ。T 法におけるデータ解析を解説した後、適用事例について解説する。T 法の応用事例を考える演習も行う。	[録]
	第 9 回	動特性の SN 比による機能性評価 品質と機能の違いを解説する。次に品質工学の機能性評価の方法を学ぶ。動特性の SN 比と感度の計算方法について学ぶ。	[ハ]
	第 10 回	機能性評価の演習 実際の製品について、信号因子、ノイズ因子、計測特性を決めて機能性評価を行うための実験計画を立案する。演習を通じて機能性評価についての理解を深める。	[ハ]
	第 11 回	動特性のパラメータ設計 機能性評価から動特性のパラメータ設計への展開を解説する。さらに動特性のパラメータ設計の事例を紹介する。	[ハ]
	第 12 回	品質工学と他手法との連携 QFD（品質機能展開）－TRIZ（発明的問題解決の理論）－QE（品質工学）といった 3 つの手法を連携させた開発設計プロセスについて解説する。	[録]
	第 13 回	許容差設計 パラメータ設計でパラメータの設計値を決めたら、次の活動はパラメータの許容差を決定することである。直交表を使った応答解析により設計パラメータの許容差を決定する方法（許容差設計）について解説する。	[録]
	第 14 回	MT 法の演習課題に関する成果発表（1） 第 7 回の講義内で提示された演習課題に対して、受講生各人が実施した成果について発表して質疑応答を行う。	[ハ]
	第 15 回	MT 法の演習課題に関する成果発表（2） 第 7 回の講義内で提示された演習課題に対して、受講生各人が実施した成果について発表して質疑応答を行う。	[ハ]
	試験	最終試験を行う。 最終試験を同等のレポート試験とする場合もある。	その他
成績評価	以下の通り評価を行う（合計 100 点）。 講義内演習の評価 30 点 レポート課題 30 点 最終試験 40 点、最終試験を同等のレポート試験とする場合もある。		
教科書・教材	講義資料は LMS 等で配布する。		
参考図書	越水重臣、鈴木真人著、実践・品質工学（日刊工業新聞社） 田口玄一著、実験計画法（丸善） 立林和夫編著、入門 MT システム（日科技連） 田村希志臣著、よくわかる MT システム（日本規格協会）		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	プロダクト・イノベーション科目群	科目名 (英文表記)	信頼性工学特論 Reliability Engineering			教員名	越水 重臣

概要	製品や設備が与えられた使用環境や使用法で、決められた期間にわたり要求された機能を果たすかといった信頼性はリライアビリティと呼ばれ狭義の信頼性を指す。機能性だけではなく安全性も損なわないというのが広義の信頼性である。最近では製品の安全性に対する顧客や社会の目がますます厳しくなっており、製品安全の確保は企業にとって最重要の課題である。信頼性・安全性は企業のブランド構築に大きく寄与するものである。そこで本講義では、信頼性工学の基礎を学んだ後、実務に役立つ信頼性と安全性の設計手法を学ぶ。		
目的・狙い	本講義では、信頼性設計と安全性設計の手法を習得することを目指す。またグループ演習では、メンバーと協力して成果物を作成することを学ぶ。具体的には、学習者はこの講義を通じて以下の知識や手法を習得できる。 1.信頼性・安全性設計の方法（冗長設計、フールプルーフ、フェイルセーフ、フェイルソフトなど） 2.信頼性解析手法 FMEA 3.安全性解析手法 FTA 4.リスクアセスメント手法 R-Map 5.デザインレビュー DRBFM		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	数学の知識（指数・対数）を有していること。		
到達目標	上位到達目標		
	製品について FMEA、FTA、リスクアセスメント R-map を実施したうえで信頼性と安全性の向上のための設計対策が考案できる。		
	最低到達目標		
	冗長設計、フールプルーフ、フェイルセーフ、フェイルソフトといった信頼性設計の違いを具体事例で説明できる。簡単な製品について信頼解析手法 FMEA および安全性解析手法 FTA を実施することができる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	個人ワークやグループワークなど演習を中心とする講義はハイフレックス型で実施する。ただし、Web 会議システムを利用した遠隔授業のみとなることもある。
	録画視聴型	○	知識の伝達を主目的とする講義はビデオに録画されている。講義ビデオを視聴して、クイズに回答したりレポートを提出したりする。
授業外の学習	LMS にアップロードされた講義資料をダウンロードして予習すること。 前回の講義内容をよく復習してから講義に臨むこと。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	講義は毎回配布する資料を使用して行う。毎回の授業内で演習を実施する。重要ポイントに関する演習はその提出を求める。		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	講義ガイダンス、製品安全と信頼性・安全性設計 講義の目的と 15 回の学習内容を解説する。初回は、近年ますます重要になる製品安全を強調し、それを確保するための信頼性・安全性設計の重要性について解説する。	[ハ]
	第 2 回	信頼性とバスタブ曲線 信頼性の評価指標である信頼度、MTTF、MTBF、故障率などを解説した後、故障率曲線（バスタブ曲線）を学ぶ。	[録]
	第 3 回	保全性とアベイラビリティ 保全性の評価指標である保全度、アベイラビリティについて解説する。昨今、メンテナンスの重要性が増していることを理解した上で状態監視保全に関する調査を行う。	[録]
	第 4 回	信頼性データの解析（１） 信頼性工学で重要となる故障曲線（バスタブ曲線）を復習した後、ワイブル確率紙を用いた信頼性データの解析により故障タイプを判定するワイブル解析の方法を学ぶ。	[録]
	第 5 回	信頼性データの解析（２） 製品が出荷されて客先で稼働している期間は偶発故障期に該当する。ここでは、偶発故障期の信頼性データの特徴と信頼性試験による故障率および信頼度の推定方法を学ぶ。	[ハ]

	第 6 回	信頼性データの解析（３） 信頼性試験には、時間と数の壁が存在する。試験アイテム数を少なくし、試験時間を短縮するための方策として、中途打ち切り試験と加速試験を解説する。	[録]
	第 7 回	信頼性モデルと信頼性設計 製品システムを直列システムと並列システムからなる信頼性モデルとしてとらえる。そして、信頼性モデルにおける信頼度の計算方法と信頼性設計（冗長設計、フールプルーフ、フェイルセーフ、フェイルソフトなど）の設計思想を学ぶ。	[ハ]
	第 8 回	信頼性解析手法 FMEA FMEA(Failure Mode and Effects Analysis)と呼ばれる信頼性解析手法について、その実施方法を解説する。	[録]
	第 9 回	FMEA 演習（１） 実際の製品について FMEA を適用し、その結果を FMEA ワークシートにまとめるグループワークを行う。	[ハ]
	第 10 回	FMEA 演習（２） FMEA の演習結果について、グループごとに発表を行い、結果および考察をクラス全体で共有する。さらにデザインレビュー手法である DRBFM (Design Review Based on Failure Mode) を解説する。	[ハ]
	第 11 回	安全性解析手法 FTA FTA(Fault Tree Analysis) と呼ばれる安全性解析手法を解説する。フォールトツリー解析図（FT 図）の作成方法を中心に学ぶ。	[録]
	第 12 回	FTA 演習 実際に製品について、フォールトツリー解析図（FT 図）を作成し、トップ事象の発生確率を計算する定量的解析を実施する。また、トップ事象を引き起こすことに最も寄与しているクリティカルな要素・部品を特定する。	[録]
	第 13 回	リスクアセスメント（１） 国際安全規格における安全の定義を紹介した後、R-Map（リスクマップ）によるリスクアセスメントの実施手順を解説する。実際の製品について、R-Map によるリスク評価を実施する。	[ハ]
	第 14 回	リスクアセスメント（２） 前回の演習に引き続き、ある製品について 3 ステップメソッドに基づきリスク低減策（設計変更案）を考える。さらに簡易 DRBFM により設計変更案を評価する。	[ハ]
	第 15 回	安全性設計（本質安全設計） 製品事故を起こさないための安全性設計について考える。制御安全と本質安全の違いを理解する。ハザード（危険源）に対するリスク低減方法について考える。さらに、ハザードを除去することによって創造されるイノベティブな製品について考える。	[録]
	試験	最終試験を行う。 最終試験を同等のレポート試験とする場合もある。	その他
成績評価	以下の通り評価を行う（合計 100 点）。 講義内演習の評価 30 点 レポート課題 30 点 最終試験 40 点 尚、最終試験を同等のレポート試験とする場合もある。		
教科書・教材	講義資料は LMS 等で配布する。		
参考図書	鈴木和幸編著：信頼性データ解析（日科技連） 益田昭彦ほか著：新 FMEA 技法（日科技連） 益田昭彦ほか著：新 FTA 技法（日科技連） 松本浩二著：R-Map とリスクアセスメント基本編（日科技連）		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	プロダクト・イノベーション科目群	科目名 (英文表記)	創造設計特論 Conceptual Design Engineering			教員名	越水 重臣

概要	製品やサービスの設計は、企画→仕様の決定→概念設計→詳細設計の流れで行われる。本講義では、上流工程である概念設計で使える発想法や思考法を解説する。具体的には、技術コンセプトの創出に役立つ TRIZ（創造的問題解決の理論）、複雑なシステムの設計に役立つシステムシンキングといった思考法や発想支援技法を学ぶ。さらに、製品・サービスを普及させるためには、ビジネスモデルも必要となるため、ビジネスモデル構築のためのフレームワークも解説する。個人ワークやグループワークによる演習を通じてその理解を深める。			
目的・狙い	本講義では、思考法や発想法に関する知識を習得するとともに、その手法を用いて、問題解決に応用できるようになることを目的とする。学習者はこの講義を通じて以下の知識や能力を習得できる。 1.自由連想、垂直思考、水平思考、類比思考、強制思考といった発想法の特徴を理解し、使い分けができる。 2.創造的問題解決の理論 TRIZ の中核的な創造技法である①矛盾マトリクス（技術的矛盾）と発明原理 40、②物理的矛盾と分離原理、③技術進化のパターンを理解する。 3.コンテンポラリー TRIZ による問題記述の図式化（プロブレムフォーミュレーション）を理解する。 4.システムシンキングにおける因果ループ図の作成方法を理解する。 5. ビジネスモデルを構築するためのフレームワークについて、その使い方を理解する。			
履修条件 （履修数の上限、 要求する前提知識 等）	発想法・思考法に興味を持ち、日常業務の改善にそれらを活用したいという意欲を持つこと。			
到達目標	上位到達目標			
	問題定義において、根本原因あるいは根本矛盾の推定ができる。 PF（Problem Formulation）図、因果ループ図、ビジネスモデルキャンバスにより問題を多面的に把握でき、解決策のアイデア発想に結び付けることができる。 問題解決のアイデアを評価し、技術コンセプトの生成とその評価ができる。			
	最低到達目標			
	自由連想、垂直思考、水平思考、類比思考、強制思考といった発想法の特徴を理解している。 創造的問題解決の理論 TRIZ の中核的な創造技法である矛盾マトリクス（技術的矛盾）と発明原理の利用方法を理解している。 PF（Problem Formulation）図、因果ループ図、ビジネスモデルキャンバスの作成方法を理解している。			
授業実施形態 （単一または複数 から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点	
	対面型	—		
	ハイフレックス型	○	個人ワークやグループワークなど演習を中心とする講義はハイフレックス型で実施する。ただし、Web 会議システムを利用した遠隔授業のみとなることもある。	
	録画視聴型	○	知識の伝達を主目的とする講義はビデオに録画されている。講義ビデオを視聴して、クイズに回答したりレポートを提出したりする。	
授業外の学習	LMS にアップロードされた講義資料をダウンロードして予習すること。 前回の講義内容をよく復習してから講義に臨むこと。			
授業の進め方 （グループワーク 方式など、進め方 の特徴）	講義は毎回配布する資料を使用して行う。毎回の授業内で演習を実施する。重要ポイントに関する演習はその提出を求める。			
授業の計画	回数	内容		授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	講義ガイダンス、発想法の基本（1） 自由連想、類比発想、強制発想 発想法には 3 つのタイプ（自由連想、類比発想、強制発想）があることを解説する。 特に、自由連想（Brainstorming）と強制発想（Guided Brainstorming）について、 演習をまじえながら学ぶ。		[ハ]
	第 2 回	発想法の基本（2） 垂直思考と水平思考 ロジカルシンキングとも呼ばれる垂直思考法とラテラルシンキングあるいはイノベーションシンキングと呼ばれる水平思考について学ぶ。水平思考の代表である類比発想を使った演習に取り組む。		[ハ]
	第 3 回	創造的問題解決の理論 TRIZ（1） 創造的問題解決の理論である TRIZ の全体像を概説したあとで、技術的矛盾を解消するための創造技法である矛盾マトリクスと発明原理 40 を解説する。さらに、物理的矛盾を解消するための 4 つの分離原理についても解説する。		[録]

	第 4 回	創造的問題解決の理論 TRIZ (2) 技術システムの進化パターンは分野を超えて繰り返されるという技術システムの進化法則を解説する。さらに、TRIZ における理想性の向上と究極の理想解の考え方を紹介して次回の演習につなげる。	[録]
	第 5 回	【演習】TRIZ 理論を応用したイノベーション発想法 技術システムの進化法則に基づいた Forecasting 発想と究極の理想解からの Backcasting 発想を組み合わせることでイノベーション領域を見出し、次世代製品を考案する演習を行う。	[ハ]
	第 6 回	創造的問題解決の理論 TRIZ (3) TRIZ 自体もクラシカル TRIZ からコンテンポラリー TRIZ へと進化している。ここではコンテンポラリー TRIZ による問題解決プロセスを解説する。	[録]
	第 7 回	創造的問題解決の理論 TRIZ (4) コンテンポラリー TRIZ における問題状況の記述方法である PF(Problem Formulation) を解説する。多くの演習問題に取り組むことで PF というテクニックを習得する。	[録]
	第 8 回	【演習】コンテンポラリー TRIZ 演習 (1) ①システムアプローチ：演習課題の状況を様々な視点から観察する。 ②プロブレムフォーミュレーション (PF)：問題状況を図式化し、タスクを生成する。	[ハ]
	第 9 回	【演習】コンテンポラリー TRIZ 演習 (2) ③アイディエーション式プレスト：タスクに取り組み、解決アイデアを発想する。 ④コンセプトの評価：実現可能な解決策コンセプトを策定し、その評価を行う。	[ハ]
	第 10 回	【演習】コンテンポラリー TRIZ 演習 (3) ⑤ドキュメント化：所定の書式で演習の報告書を作成する。 ⑥演習成果の発表：グループに分かれて解決案コンセプトを発表しあう。	[ハ]
	第 11 回	システムシンキング (1) 問題の全体構造や要素間の関係性に着目する思考法であるシステムシンキングについて解説する。システムの全体像を因果ループ図により表現する方法を学ぶ。	[録]
	第 12 回	システムシンキング (2) 因果ループ図から問題解決するためのアイデア発想法を学ぶ。システムの典型的なパターンであるシステム原型についても解説する。	[録]
	第 13 回	ビジネスモデル発想法 (1) ビジネスモデルを構築するためのフレームワーク (ビジネスモデルキャンパス) について、その使い方を演習を交えながら学ぶ。システムシンキングで学んだ自己強化型ループをビジネスモデルキャンパスに組み込む方法を解説する。	[録]
	第 14 回	ビジネスモデル発想法 (2) ビジネスモデルキャンパスを補完するためのフレームワークとして、価値の交換を描画するピクト図解を解説する。演習を交えて学ぶ。	[録]
	第 15 回	ビジネスモデル発想法 (3) 自分自身が作成したビジネスモデルキャンパスを用いて、他者にビジネスモデルを説明する、ビジネスモデルを進化させるといった演習を行う。	[ハ]
	試験	最終試験を行う。 最終試験を同等のレポート試験とする場合もある。	その他
成績評価	以下の通り評価を行う (合計 100 点)。 講義内演習の評価 30 点 レポート課題 30 点 最終試験 40 点、最終試験を同等のレポート試験とする場合もある。		
教科書・教材	講義資料は LMS 等で配布する。		
参考図書	特に指定しない。講義内で適宜紹介する。		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	プロダクト・イノベーション科目群	科目名 (英文表記)	チーム設計・試作特別演習 Advanced Exercises: Team Design and Prototyping			教員名	伊藤 潤

概要	<p>製品の設計とプロトタイピングによる検証・評価は一巡のプロセスで済ませることが理想だが、実際には何度か繰り返しながら行うプロセスとなる。プロトタイピングの過程で不測の問題を生じたり、要求項目を変更せざるを得ない場合も生じたりする。このようにダイナミックに変化する状況のなかで、チームとして製品を作り上げる開発・設計を演習する。</p> <p>この授業は PBL 形式で実施し、提示された一つの課題を対象にチーム設計を進めていく。演習を通して、設計開発プロセスの問題やその解決法を体得する。</p> <p>【重要】</p> <p>この科目はチームで製品を試作する PBL 形式の演習授業である。欠席者が出るとチーム活動が成り立たなくなるため、途中で履修をやめる可能性がある場合や、10 回以上の出席が確実でない場合は、履修しないこと。また、チームを決定する第一週（第 1 回、第 2 回）の授業に出席しない場合は他の履修者の迷惑となるため、履修登録をしても残りの授業に参加できない（履修登録を抹消する）。履修するかどうか迷った場合は、第 1 回授業のオリエンテーションを聞いてから決めてもよい。</p>		
目的・狙い	<p>学修者はこの講義を通じて以下の知識・能力を向上させることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チーム編成とプロジェクト計画 ・提案製品の市場調査と商品企画 ・提案製品の基本設計、詳細設計 ・3D-CAD、ラピッドプロトタイピング等を活用した製品試作・評価 ・製品のドキュメンテーションとプレゼンテーション 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<ul style="list-style-type: none"> ・プロトタイピング工学特論、デザイン表現実習、デジタルデザイン実習、ET (Embedded Technology) 特別演習、プロダクトデザイン特別演習など、実習・演習を中心とした授業科目を少なくとも 1 つ受講済みであること。また、設計工学特論、人間中心デザイン特論を受講済みであることが望ましい。 ・創造技術専攻の設備講習を受講し、デザイナーズラボに押印のある設備講習カードを持っていることが望ましいが必須ではない。 ・コロナ禍で遠隔授業が中心となる場合には、実機の試作が困難となることから、特に 3D CAD のスキルが必要とされることが想定される。 		
到達目標	上位到達目標		
	チーム活動に積極的に参加し、チームメンバーの意思疎通を図り、成果物のレベル向上に貢献する。		
	最低到達目標		
	<p>一つの対象課題の製品企画から試作までの設計開発を進めることができる。</p> <p>設計チームのメンバーとして、担当の役割を遂行する。</p> <p>設計開発した製品を説明するドキュメント作成とプレゼンテーションを行う。</p>		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	チームでの進行状況に応じて、適宜担当部分の作業を進める。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	演習は PBL 形式で行われる。開発設計プロセスについては指導に基づいて進行する。必要に応じて資料を配布する。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
授業の計画	第 1 回	プロジェクト設定（チーム編成） 製品開発においてはチームメンバーのスキルや個性を考慮しながら実現可能な計画を進める必要がある。チームを組織し、メンバーの自己紹介を行って、チームの特長を把握する。	[対]
	第 2 回	プロジェクト設定（プロジェクト要件定義） プロジェクトのテーマ、目標、予想成果物、成果に盛り込む自慢できるポイント、スケジュール、体制図などをプロジェクト要件定義書としてまとめる。	[対]
	第 3 回	商品企画（商品構想と情報収集） チームの特長を考慮して、本授業内で試作する商品の企画を行う。既存製品の現状を調べた上で、従来にはない自慢できるポイントを盛り込んだ商品を構想する。	[対]
	第 4 回	商品企画（商品開発の目標設定） チームの特長を考慮して、本授業内で試作する商品の企画を行う。企画の背景、ターゲットユーザー、商品コンセプト、使用シーン、開発体制などの 5W2H を商品企画書としてまとめる。	[対]
	第 5 回	基本設計（商品イメージの具体化） 商品企画書に基づき、企画した商品をどう実現するのか商品イメージの具体化を行う。外観デザインや商品の操作方法、機能に対する操作方法、表示内容などをラフスケッチや図面で可視化する。	[対]
	第 6 回	基本設計（アイデアの可視化と評価） 構成、機能、入出力（操作と結果）などの外部仕様を設計し、商品企画書で定義した要求事項を満たすような最適な実現?法を決定し、基本設計書にまとめる。	[対]
	第 7 回	詳細設計（各種設計とレビュー、詳細デザインと評価） 外部仕様を内部的にどのように実現するのか、外部仕様では決定していない細かい寸法、形状、部品表（材質や数量）など詳細な仕様を検討し、メンバーでレビューする。	[対]
	第 8 回	詳細設計（詳細デザインと評価） 組み立て図、構成要素の詳細仕様、動作や機能の具体的な仕組み、操作・表示を含む詳細な外観デザインを設計して要求事項に合うかどうかを評価し、詳細設計書にまとめる。	[対]
	第 9 回	試作機の作成（試作） 基本機能を含む試作機全体の設計・試作を行う。電子工作、3D CAD などの工作設備を有効に活用する。試作は複数のバリエーションを持たせて制作する。	[対]
	第 10 回	試作機の作成（動作試験、評価・検証） 一次試作の動作確認を行い、修正箇所を検討する。検討においては、複数のバリエーションを比較する形で行う。	[対]
	第 11 回	試作機の改良（修正設計と再試作） 試作機の修正設計を行い、最終試作機を設計・試作する。	[対]
	第 12 回	試作機の改良（動作試験、再評価・再検証） 最終試作の動作試験を行い、仕様に照らし合わせて要求事項が満足されているかどうかを評価する。	[対]
	第 13 回	ドキュメンテーション（ドキュメント整理） これまでのプロジェクトの推移を一つの報告書にまとめる。チーム内で反省会を行い、成果物の評価、プロジェクトプロセスの評価を行う。	[対]
	第 14 回	ドキュメンテーション（レポート作成） 個?単位でのプロジェクトへの関わり方等に関して考察し、報告書にまとめる。	[対]
	第 15 回	プレゼンテーション（発表準備） 設計開発した試作機を紹介するプレゼンテーションの資料作成を行う。プレゼンテーションはチームで一つとし、すべてのメンバーが資料作成の一部を担当する。	[対]
	試験	グループ発表によるプレゼンテーション試験を行う。	[対]
成績評価	次の 4 つのポイントで総合的に評価する(合計 100 点満点)。 ・個人週報：20 点 毎週のチーム活動を週報として作成・提出する（8 週分）。 ・最終レポート：30 点 演習終了後に開発した試作品に関するレポートを個人で作成し提出する。 ・チーム開発ドキュメント：10 点 チームで提出するドキュメントを 1 回以上担当する。 ・プレゼンテーション試験：40 点 グループ発表によるプレゼンテーション試験を行う。プレゼンテーションはチーム単位で行うが誰もが必ず一部を担当する。		
教科書・教材	・講義資料は LMS で配布する。		
参考図書	特になし。		

Ⅲ インダストリアル・デザイン科目群

プロダクトデザイン特論

価値デザイン特論

コミュニケーションデザイン特論

工業デザイン材料特論

デジタルデザイン実習

デザイン表現実習

造形デザイン特別演習

プロダクトデザイン特別演習

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	インダストリアルデザイン科目群	科目名 (英文表記)	プロダクトデザイン特論 Product Design			教員名	内山 純

概要	<p>本講義では、プロダクトデザイナー、デザインエンジニアに求められるプロダクトデザインの知識とその運用力を修得する。課題の発表から解決手法について、講義とグループ、個人ワークを組み合わせることで学び、一連のプロダクトデザインプロセスを理解することによりデザイナーがもつ創造的な問題解決手法が広く企業や社会にも活用できることを知る。</p>		
目的・狙い	<p>プロダクトデザイン領域全般についてその背景、知識、手法を学修し、「豊かな暮らし」実現のためバックキャスト視点で課題を発見、提案する能力を身に付ける。</p> <p>前半は、プロダクトデザインの背景、社会、ビジネスとの関係、デザインプロセスについて学び、持続可能な社会実現のために必要な環境に配慮したエコデザインに注目し相互意見交換により理解を深める。</p> <p>後半は、ユーザ調査、コンセプト作成、視覚化のための手法、評価と科学研究、マーケティングについて学び、グループ討議によって各自のプロダクトデザイン提案を玉成、発表することにより、イノベーティブなアイデアや商品・サービス創出におけるデザイン手法、思考の有効性についても理解する。</p> <p>課題への取り組み、発表を通して主に以下の能力の向上を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企画提案力 ・プレゼンテーション力 ・非言語的視覚化力 ・機能と感性の統合力 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<ul style="list-style-type: none"> ・プロダクトデザイン経験者、プロダクトデザイナー、デザインエンジニアを目指している者 ・「プロトタイプ工学特論」、「造形デザイン特別演習」、「工業デザイン材料特論」と共に履修することが望ましい。 ・設備講習を受講していること 		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・プロダクトデザイン領域の知識を活かし、今日的な課題を抽出、コンセプトの立案、デザイン提案ができる。 ・プロダクトデザイン未経験者の指導によりデザイナーとしてプロジェクトを推進することができる。 		
	最低到達目標		
	プロダクトデザイン領域のキーワード理解し議論に参加できる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	講義およびワークショップ、プレゼンテーション
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	○	録画視聴型の回も、対面授業を実施する。 デザインツール使用環境がない履修者は教室での受講を推奨する。 各回で指定される LMS による課題提出およびチームスレッド内での意見交換で出席扱いとする。
授業外の学習	<p>課題制作は予習・復習時間を主とし、東京夢工房などを利用したラピッドプロトタイプング、デジタルツールの積極的な活用を期待する。</p> <p>プロダクトデザイン未経験者は担当教員と相談しデザイン表現力を習得しながら課題に取り組む。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>講義、ワークショップは、第1回から第15回まで連続したものである。</p> <p>プロダクトデザイン提案課題は各自のデザインスキルレベルに応じ担当教員と相談しながら個別に設定する。</p> <p>各自の設定課題に応じて、調査、探求を行いワークショップ、プレゼンテーションに望む。</p> <p>専門知識、スキルが異なるメンバーの特性を活かし、相互学修による能力の向上を目指す。</p>		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	<p>プロダクトデザインとは：対象、目的、専門性、役割、能力</p> <p>授業計画、学修内容を解説し講義選択の判断を促す。</p> <p>プロダクトデザイン提案課題についての説明</p> <p>ウォーミングアップ、チーム分けのためのアンケート</p> <p>スキルチェックの提出 (LMS)</p> <p>課題①：「豊かな暮らし」のイメージを収集</p>	[対]
	第2回	<p>チーム編成：多様な視点、価値観の共有</p> <p>「豊かな暮らし」についてのイメージ共有 (課題①発表)</p> <p>デザインコンセプト作成について：</p> <p>プロセスと手法、提案型、問題解決型</p>	[対]
	第3回	<p>プロダクトデザインの背景：</p> <p>領域、歴史他</p> <p>課題設定の個別確認</p>	[対]

	第 4 回	社会とプロダクトデザイン： ユニバーサルデザイン、エコデザイン、デザイン思考他 課題②：取組む「プロダクトカテゴリー」の背景調査	[録]
	第 5 回	コンセプト作成のための手法： 課題として取組む「プロダクトカテゴリー」の背景（課題②発表） 概要、コンセプト起案法、要求仕様、ペルソナ手法、シナリオ手法他	[対]
	第 6 回	デザインプロセス： デザインプロセス概要、ユーザセンタードデザイン他 課題③：中間発表資料	[録]
	第 7 回	中間発表： 各自テーマのコンセプト発表、討議、意見交換を通じて理解深める。（課題③発表）	[対]
	第 8 回	ユーザ調査のための手法： 概要、アンケート調査、インタビュー調査、観察法、フィールド調査他 課題④：中間発表資料のブラッシュアップ、再構成	[録]
	第 9 回	視覚化のための手法： スケッチとレンダリング、プロトタイプ他 各自テーマ（課題④）について視覚手法の検討	[対]
	第 10 回	プロダクトデザインとビジネス： デザイン組織と活動、ブランド他 課題⑤：デザインコンセプト/プロダクトイメージマップ/イメージボード	[録]
	第 11 回	デザイン評価と科学研究： 概要、専門家による評価、ユーザ評価、デザインレビュー他 デザインコンセプト/プロダクトイメージマップ/イメージボードの共有（課題⑤発表）	[対]
	第 12 回	マーケティングとデザイン： 概要、マーケティングミックス、商品企画のプロセス他 課題⑥：発表資料	[対]
	第 13 回	各自課題についての探求、検討： 各自の課題、提案について情報共有。	[対]
	第 14 回	発表の準備： 各自の課題の完成度を高める。	[対]
	第 15 回	課題成果発表： 全体討議、相互評価、意見交換を通じて理解を深める。（課題⑥発表）	[対]
	試験	レポート試験： 課題発表資料を再構成、ブラッシュアップして提出 活動内容を記録した資料も含める。 pdf（横長）による LMS による提出	
成績評価	次の 3 つのポイントで評価する(合計 100 点満点) 中間発表内容(50 点)+最終発表内容(30 点)+レポート課題(20 点) 1.中間発表内容の評価：成果物作成へ向けた役割や貢献度、相互評価を含む。 2.最終発表内容の評価：口頭発表+発表資料の完成度 3.レポート試験の評価：発想力+表現力+中間及び最終発表内容までの総合的な改善意識と編集力 原則として LMS 出題課題をすべて期限内に提出していることが単位取得の条件		
教科書・教材	①日本インダストリアルデザイン協会編 『プロダクトデザインの基礎』 （ワークスコーポレーション、2014 年）初級レベル ②日本インダストリアルデザイン協会編 『プロダクトデザイン』 （ワークスコーポレーション、2009 年）中級以上 ③日本インダストリアルデザイン協会編 『プロダクトデザイン』（改訂版） （ビー・エヌ・エヌ、2021 年）中級以上 ①②③いずれを使用しても良い。その他、講義資料は LMS にアップ、又は適宜配布する。		
参考図書	佐宗 邦威 著 『21 世紀のビジネスにデザイン思考が必要な理由』（クロスメディア・パブリッシング、2015 年） フレッド・アシュフォード 著、高梨 隆雄 訳 『設計美学』（ダヴィッド社、1991 年） 福田 哲夫 著 『新幹線をデザインする仕事』（SB クリエイティブ、2015 年） その他適宜紹介する。		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	インダストリアルデザイン科目群	科目名 (英文表記)	価値デザイン特論 Kansei Value Design			教員名	蓮池 公威

概要	<p>デザインの価値は、しばしば非言語（かたちや色といった視覚言語など）の操作（かたちの操作）による美的・感性的形式のありようとして議論されるが、本来的にはデザインされたシステムやプロダクトを通じてユーザーにどのような意味が提示できたか、というコミュニケーションや関係性の問題として議論することが重要である。</p> <p>本科目で扱う「価値デザイン」は、このデザインの価値を優先する意味の設計手法である。</p> <p>講義の前半では、「価値デザイン」を理解する前提として、デザインの歴史的解釈や記号的解釈、さらにデザイン思考について学ぶ。</p> <p>後半では、デザイン価値に基づく設計手法について、そのプロセスを具体的な事例とともに学ぶとともに、ユーザーに提示すべき意味をいかに非言語操作で表現するかというコミュニケーションや関係性の設計について、イメージボードを用いた手法で実践的に学んでいく。</p>		
目的・狙い	<p>ここではデザインを、非言語操作によりコミュニケーションや関係性を設計し、ユーザーへ新たな意味を提示すること（意味の設計手法）と捉えている。当然ながら、ユーザーに提示する意味は、非言語で表現することが求められ、ユーザーが解読できるものでなければならない。</p> <p>そこで、ユーザーのコミュニケーションコードに沿って提示すべき意味を非言語に変換するための、ユーザー像、ユーザーのデザインニーズ、さらにはデザイントレンドなどを、言語、非言語（写真、イメージなど）で表現する手法（イメージボード）を学んでいく。これは、デザイン開発において、デザインコンセプトを視覚的に表現できるツールであり、デザイナーへの的確なブリーフィングに有効なものである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・具体的には学修者はこの講義を通じて以下の知識やスキルを習得できる。 ・デザイン価値の理解 ・デザイナー価値の理解 ・価値デザイン（デザイン価値を優先して意味を設計する）の理解 ・デザイン思考の理解 ・イメージボードを活用して意味（主に感性的な形式）を視覚的に定義する手法 ・デザイントレンドについて ・デザインの意味論的分類について ・視覚表現技術：デザインのための意味を設計しそれを視覚的に表現するスキル ・デザイン分析技術：デザインをテストチャートや記号分類を用いて分析するスキル ・イメージボード作成：ユーザー像を視覚的に表現する、またその非言語記号を翻訳するスキル 		
履修条件 （履修数の上限、 要求する前提知識 等）	学修の前提知識として、「誰のためのデザイン（D.A.ノーマン）」を読んでおくことが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	<p>デザイナー：デザインコンセプトに基づいてデザインパラメータをコントロールできる。</p> <p>それ以外：イメージボードを駆使しデザイナーに的確なデザインブリーフィングができる。</p> <p>総合点: 80 点</p>		
	最低到達目標		
	<p>デザイナー：デザインコンセプトを視覚的に表現できる。</p> <p>それ以外：イメージボードを用いてデザインイメージを提出できる。</p> <p>総合点: 60 点</p>		
授業実施形態 （単一または複数 から構成される）	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	議論やグループワークのうち、集合することが必須であるものは対面で実施する。
	ハイフレックス型	○	議論やグループワークのうち、集合することが必須であるものは対面で実施する。 議論やグループワークのうち、オンラインで可能なものはハイフレックスで実施する。
	録画視聴型	○	概念の説明や知識的な内容は録画ビデオ等により実施する。
授業外の学習	<p>1) 授業内で指定する、個人またはグループによる事前調査、事後検討の実施。</p> <p>2) 授業後に講義に関連するテーマをレポートにまとめ提出。</p>		
授業の進め方 （グループワーク 方式など、進め方 の特徴）	<p>本科目で扱う「価値デザイン」は、デザイン思考に基づくデザインの価値を優先する意味の設計手法である。</p> <p>講義の前半では、「価値デザイン」を理解する前提として、デザインの歴史的解釈や記号的解釈を学ぶ。</p> <p>後半では、デザイン価値に基づく設計手法について、そのプロセスを具体的な事例とともに学ぶとともに、ユーザーに提示すべき意味をいかに非言語操作で表現するかというコミュニケーションや関係性の設計について、イメージボードを用いた手法で実践的に学んでいく。</p> <p>授業／グループ活動の進捗に合わせて、対面／ハイブリッドの回と録画視聴の回を柔軟に設定し、組み合わせにより実施する。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	講義概要とデザイン基礎 ・講義の目的と学習内容の解説 ・これまでのデザイン、今日のデザイン	[対]
	第2回	今日のデザイン議論<グループ討議 1> デザインドリブンという意味の急進的なイノベーション	[対]
	第3回	デザインの歴史的解釈 ・デザインの3大機能 ・製品意味論、意味論的転回	[録]
	第4回	無用のデザイン<グループ討議 2> 「無用の用」を原点とするデザイン	[対]
	第5回	デザインの記号的解釈 1 記号論の基礎的理解とデザインのコミュニケーションモデルについて	[録]
	第6回	デザインの記号的解釈 2 C.S.パースの推論と三項理論、デザインの記号的表現と意味の分類	[ハ]
	第7回	デザイン価値 ・デザインの状況 ・デザイン実践の事例	[録]
	第8回	デザインテスト デザインテストによるデザイン分類	[ハ]
	第9回	デザイン思考 デザイン思考の要素	[録]
	第10回	ユーザーイメージボード 1 ・言語操作によるコミュニケーションのためのイメージボードの作成	[対]
	第11回	デザインの評価軸 ・デザインテストによるデザイン分類、デザインの印象評価	[録]
	第12回	ユーザーイメージボード 2 ・ユーザーイメージボードの作成と発表	[対]
	第13回	事例研究 ・デザイン事例	[録]
	第14回	デザインイメージボード 3 ・デザインイメージボードの作成と発表	[対]
	第15回	総括 ・価値デザインの課題と総括	[ハ]
	試験	レポート試験（イメージボードに関するレポート）	
成績評価	次の3つの項目で評価する（合計100点満点）。 ・グループ活動とグループ発表内容：30点 ・授業の際に重要ポイントを記述する講義レポート：30点 ・レポート試験：40点		
教科書・教材	開講時にオリジナルテキストをプリントし配布 また、各回授業の前に講義で使用するスライドや関連資料をプリントし配布		
参考図書	意味論的転回（クラウド・クリッペンドルフ） 誰のためのデザイン、エモーショナルデザイン、未来のモノのデザイン、複雑さと共に暮らす（D.A.ノーマン） デザイン・ドリブン・イノベーション（ロベルト・ベルガンティ） スペキュラティブ・デザイン（アンソニー・ダン、フィオナ・レイビー） 姿勢としてのデザイン 「デザイン」が変革の主体となるとき（アリス・ローソーン） デザイン思考が世界を変える（ティム・ブラウン） イノベーションの達人！発想する会社をつくる10の人材（トム・ケリー） 世界を変える「デザイン」の誕生 シリコンバレーと工業デザインの歴史（バリー・M・カッツ） エスノグラフィー入門 <現場>を質的研究する（小田博志） 記号論への招待（池上嘉彦） 美の構成学（三井秀樹） レトリック感覚（佐藤信夫） エンジニアリングデザイン（ナイジェル・クロス） 生きのびるためのデザイン（ヴィクター・パパネック）		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	インダストリアルデザイン科目群	科目名 (英文表記)	コミュニケーションデザイン特論 Communication Design		教員名	高嶋 晋治 河西 大介	

概要	<p>「コミュニケーションデザイン」は近年のデジタル技術の発達とともにその概念が大きく変化し、単純なビジュアルデザインから GUI、HMI などからインタラクションデザイン、さらには社会的な共同体との関係性構築まで概念が大きく拡大し、またダイナミックに変化を続けている。</p> <p>本講義では、何かを伝えるという「コミュニケーションデザイン」に関わっていく際に必要な基本知識の習得と概念の構築、またコミュニケーションデザインの基本スキルとプロセスを学んでいく。</p> <p>特に HMI(Human Machine Interface)におけるインタラクションデザインやさらに社会的な関係性の構築を目指す新概念のコミュニケーションデザインまでの事例の紹介と研究、また実践的なスモールプロジェクトを行うことで開発実務に必要な知識やスキルの習得を目指す。</p>		
目的・狙い	<p>本講義は、大きく以下の四つのパートによって構成される。まず「コミュニケーション」や「コミュニケーションデザイン」の基本知識と現在のインタラクションデザインにまで至る概念の変化や推移について学ぶ。次に「コミュニケーションデザイン」プロセスと基本スキルのポイントを学習する。また企業や社会における様々な事例を具体的に紹介・研究を行い、学んだことをスモールプロジェクトによって実際に基本のプロセスを習得するという四つの構成である。</p> <p>具体的に学習者は、この講義を通じて以下の知識や能力を習得することを目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.基礎的な知識:コミュニケーションデザインに関する基本的な概念を学修する。 2.理論と手法:コミュニケーション理論と手法についての様々な基本理論を理解する。 3.専門的知識:企業における開発事例、HMI、コミュニケーションデザインの事例を学ぶ。 4.デザイン技術:グループ演習によってコミュニケーションデザインの解決手法を理解体得する。 <p>以上によって自身のコミュニケーションデザインの考え方と基本スキルの構築を目指す。</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	コミュニケーションデザインに関心を持ち、知識を旺盛に吸収する意欲と、社会におけるデザインの関連事項に敏感に反応して知識として身に付けておくこと。		
到達目標	上位到達目標		
	社会や企業において自ら課題に対してコミュニケーションデザインの方向性を意義付けし、企画及び計画ができる専門的知識を習得する。		
	最低到達目標		
	コミュニケーションデザインの基本的知識を獲得し、簡単な問題に対して解決の方向性を提案できる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	スライドを中心とした講義。双方向での質疑や議論など。 12、13、14 回のグループ演習回を除く各回に個人課題レポートが出題される(計 12 回)。 スモールプロジェクトでのグループ討議とプレゼンテーション及び質疑応答。また相互の講評によるポイントの整理と把握。
	ハイフレックス型	○	対面型(双方向)に準ずる。
	録画視聴型	○	課題レポートの提出によって出席とみなす。
授業外の学習	<p>様々なコミュニケーションに関して関心と問題意識を常に持っていること。</p> <p>グループ演習回を除く各回には、授業に関連した課題レポートが課せられる。グループ演習回では各自の調査や資料まとめなどを行う必要がある。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>講義は毎回配布する資料を利用して行う。資料は授業の構成にしたがい第 1 回から第 15 回まで連続したものである。2 名の教員で講義を行うが、その分担は初回で説明する。</p> <p>講義内容を基にしたグループワークとプレゼンを行う演習を 3 回分実施し、各自の実践的な学習と考察を深める。最終回に講義内容に関連した筆記試験が実施される。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	講義全体概説とコミュニケーションデザイン概要： 講義の進め方や学習内容の解説。初回として、拡大するコミュニケーションデザイン全体のイメージを把握し、また日本のグラフィックスの特徴について学ぶ。	[対]
	第2回	情報化時代のコミュニケーションデザインと歴史視点： 情報化時代のコミュニケーションデザイン概念の広がりコミュニケーションデザインにおける歴史的視点について学ぶ。演習課題①出題	[ハ]
	第3回	認知特性とコミュニケーションデザイン： コミュニケーション理論の基本とデザインを深めていく上での必須の知識である人の認知特性と情報認識の中核を占める視覚特性について学ぶ。	[録]
	第4回	アフォーダンスと行為： 環境との関係性を考え直すことで、デザイン概念に影響を与えたアフォーダンスの基本概念を解説、人と環境とのインタラクティブな関係から「行為」を考える。	[録]
	第5回	表現デザイントレーニング： レイアウトの進め方と様々な原則を知り、実際に情報を整理し配置することによりレイアウトの重要性を学ぶ。演習課題①講評、演習課題②出題	[ハ]
	第6回	インタラクションデザインプロセス： 現代の情報デザインの基本となるインタラクションデザインについて、そのデザインシナリオ、概念モデル、UI 構造化など特徴的なプロセスについて ID デザインとの違いを認識して学ぶ。	[録]
	第7回	色彩とコミュニケーションデザイン： 人の視覚情報において強い要素である色彩について、基本的な構造の学習と様々なコミュニケーションデザインへの展開事例やコミュニケーションデザインにおける基本的なグラフィックススキルなどについて学ぶ。演習課題③出題	[対]
	第8回	コミュニケーションデザインにおけるユニバーサルデザイン： ユニバーサルデザイン概念について詳細に学習し、コミュニケーションデザインにおけるユニバーサルデザイン概念の広がりについて学ぶ。	[録]
	第9回	レイアウトデザイントレーニング講評： 第5回の演習課題②の全体講評を行い、多くの事例からレイアウトスキルの基本と CI デザインにおけるロゴ等の扱いに関する基本知識を学ぶ。	[ハ]
	第10回	HMI(Human Machine Interface)デザインの変遷： HMI デザインの時間軸による典型的な変化を自動車のインテリアデザインを例として学習し、インタラクションのあり方について考察する。	[録]
	第11回	最新のインタラクションデザイン研究について： 次の UX デザインに結びついていくような近年の身体性を重視したインタラクションデザインなどの最新研究の方向性について学ぶ。	[録]
	第12回	スモールプロジェクトによる演習 1:テーマ設定と問題の定義 グループ演習としてテーマ設定に沿った課題をグループ内で討議し決定し、その問題点の分析を行う。	[対]
	第13回	スモールプロジェクトによる演習 2:解決手法の決定 グループで選択した課題の問題点の解決手法を検討し決定。発表に向けての準備を行う。	[対]
	第14回	スモールプロジェクトによる演習 3:プレゼンテーション 各グループの最終のプレゼンテーション実施と相互講評を行い、課題への理解を深める。	[対]
	第15回	スモールプロジェクトの各グループの講評/アドバイス： 相互評価のまとめ、教員から各グループ発表に関する講評とアドバイス、第7回講義の演習課題③の全体講評を行う。	[対]
	試験	試験： 講義内容を踏まえ、コミュニケーションデザインに関する小論文テストを行う。	[対]
成績評価	以下の三つのポイントで評価する (合計 100 点)。評価は 10 回以上の出席が前提となる。 1)課題・各講義の課題レポート(全 9 回/1,3,4,6,8,9,10,11,15):20 点 ・3 回の演習課題レポート(全 3 回/2,5,7):15 点 2)チーム単位でのグループ演習発表:15 点(第 14 回の発表:グループ得点+個人の役割貢献等) 3)最終試験:50 点		
教科書・教材	教員が授業の際に準備、配布する講義資料を使用する。		
参考図書	必要に応じ、授業の際に適宜紹介する。		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	インダストリアルデザイン科目群	科目名 (英文表記)	工業デザイン材料特論 Product Design Materials			教員名	内山 純

概要	<p>本講義では、プロダクトデザイナー、デザインエンジニアに求められる工業デザイン材料の知識とその運用力を修得する。講義とグループ、個人ワークを組み合わせることで、材料視点でのプロダクト提案、プロダクトデザイン視点での材料開発提案を試みることで、デザイン価値を見出す手段として工業デザイン材料をとらえる力を身に付ける。</p>		
目的・狙い	<p>プロダクトデザイナー、デザインエンジニアは、使用する材料の物質的な特性だけでなく背景にある製造加工法、環境性、経済性など多くを知ったうえで製品に運用、活用することが求められる。</p> <p>前半は、工業デザイン材料（金属、プラスチック、セラミックス、木材など）について種類、性質、製造加工方法を学び、調査探求、相互意見交換により理解を深める。</p> <p>後半は、最先端素材、エコ素材についての現状を知り、いくつかのプロダクト事例において、材料の運用、活用、開発について紹介する。各自着目した材料について、さらに調査探求し、材料視点でその特徴を生かしたプロダクトを考え、材料開発も示唆するデザイン提案を試みることで材料運用、活用力を高める。</p> <p>課題への取り組み、発表を通して主に以下の能力の向上を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企画提案力 ・要求定義力 ・機能と感性の統合力 ・開発計画力 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<ul style="list-style-type: none"> ・プロダクトデザイン経験者、プロダクトデザイナー、デザインエンジニアを目指している者 ・「プロダクトデザイン特論」、「プロトタイプ工学特論」、「造形デザイン特別演習」の全て単位を修得している、または相当の知識、スキルを有していることが望ましい。 ・設備講習を受講していること 		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な材料、加工法を考慮した上で、審美性の高いプロダクトデザイン提案ができる。 ・工業デザイン材料を新たなデザイン価値を生み出す手段として活用できる。 ・必要とされる工業デザイン材料開発の方向性を示すことができる。 		
	最低到達目標		
	プロダクトデザイン提案の際、最適な材料を選定することができる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	講義およびワークショップ、プレゼンテーション
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	○	録画視聴型の回も、対面授業を実施する。 デザインツール使用環境がない履修者は教室での受講を推奨する。 各回で指定される LMS による課題提出およびチームスレッド内での意見交換で出席扱いとする。
授業外の学習	<p>材料視点でのプロダクト提案の糸口を見出すために、各テーマについての講義後、調査、探求をしてグループ討議に望む。</p> <p>課題発表の資料作成については予習・復習時間を主とし、東京夢工房設備などを利用したデジタルツールの積極的な活用を期待する。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>講義、ワークショップは、第 1 回から第 15 回まで連続したものである。</p> <p>プロダクトデザイン提案課題は各自のデザインスキルレベルに応じ担当教員と相談しながら個別に設定する。</p> <p>設定課題に応じて、調査、探求を行いワークショップ、プレゼンテーションに望む。</p> <p>専門知識、スキルが異なるメンバーの特性を活かし、相互学修によって能力の向上を目指す。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
授業の計画	第1回	工業デザイン材料とは： 授業計画、学修内容を解説し講義選択の判断を促す。 課題についての説明、チーム分けのためのアンケート	[対]
	第2回	金属材料：種類、性質他 課題①：金属材料についての調査、探求	[対]
	第3回	金属材料：応用と展開 調査、探求の発表、共有により理解を深める。（課題① 発表）	[対]
	第4回	金属材料の加工技術：除去、変形、付加加工他 課題②：金属材料の加工技術についての調査、探求	[録]
	第5回	金属材料の加工技術：応用と展開 調査、探求の発表、共有により理解を深める。（課題① 発表）	[対]
	第6回	プラスチック材料：種類、性質他 課題③：プラスチック材料についての調査	[録]
	第7回	プラスチック材料：応用と展開 調査、探求の発表、共有により理解を深める。（課題③ 発表）	[対]
	第8回	プラスチックの成形技術：種類、特徴 課題④：プラスチック成形技術についての調査、探求	[録]
	第9回	プラスチックの成形技術：応用と展開 調査、探求の発表、共有により理解を深める。（課題④ 発表）	[対]
	第10回	セラミック材料、木材他 課題④：各自の調査、探求から各自課題を設定 材料視点でその特徴を生かしたプロダクト、 又はプロダクト視点で材料提案を試みる。	[録]
	第11回	課題設定 課題設定の共有、個別確認（課題④）	[対]
	第12回	最先端素材、エコ素材他 材料視点でその特徴を生かしたプロダクト、又はプロダクト視点で材料提案を試みる。 課題⑤：発表資料	[録]
	第13回	各自課題についての探求、検討 各自の課題、提案の共有、意見交換	[対]
	第14回	発表の準備 各自の課題の完成度を高める。	[対]
	第15回	課題発表 全体討議、相互評価、意見交換を通じて理解を深める。（課題⑤発表）	[対]
	試験	レポート試験： 授業内で発表した資料を全て再構成、ブラッシュアップして提出 活動内容、経緯を記録した資料も含める。 pdf（横長）LMS による提出	[対]
成績評価	次の3つのポイントで評価する(合計100点満点) 中間発表内容(50点)+最終発表内容(30点)+レポート課題(20点) 1.中間発表内容の評価： 複数回の中間発表評価、成果物作成へ向けた役割や貢献度、相互評価を含む。 2.最終発表内容の評価：口頭発表+発表資料の完成度 3.レポート試験の評価：発想力+表現力+中間及び最終発表内容までの総合的な改善意識と編集力 原則としてLMS出題課題をすべて期限内に提出していることが単位取得の条件		
教科書・教材	①日本インダストリアルデザイン協会編 『プロダクトデザインの基礎』 （ワークスコーポレーション、2014年）初級レベル ②日本インダストリアルデザイン協会編 『プロダクトデザイン』 （ワークスコーポレーション、2009年）中級以上 ③日本インダストリアルデザイン協会編 『プロダクトデザイン』（改訂版） （ビー・エヌ・エヌ、2021年）中級以上 ①②③いずれを使用しても良い。その他、講義資料はLMSにアップ、又は適宜配布する。		
参考図書	日経デザイン 編 『素材とデザインの教科書 第3版』（日経BP社、2016年） 岩井正二・青木弘行 著 『工業デザインのための材料知識』（日刊工業新聞社、2008年） Chris Lefteri 著 田中 浩也（監修） 水原文（翻訳） 『「もの」はどのようにつくられているのか？—プロダクトデザインのプロセス事典』（Make: Japan Books、2014年） 井口 信洋 著 『機械材料の特性と選び方』（昭晃堂、1978年） ほか便宜紹介する。		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	1	学期	2Q
科目群	インダストリアルデザイン科目群	科目名 (英文表記)	デジタルデザイン実習 Digital Design Practice			教員名	村田 桂太

概要	デジタル技術の進歩が著しい今日、デジタルデータによるカタチの操作は、インダストリアル・デザインを専門的な職能とするものだけではなく、ものづくりに携わる人材にとって不可欠なコミュニケーションツールとなりつつある。本実習では、これから異分野として、もの作りやインダストリアル・デザイン領域を学ぼうとする学生を想定し、柔軟で多彩な立体表現を可能とする技能として、3DCAD ソフト(Rhinoceros)によるモデリングの基礎技能の修得と、デジタルデータを活用したビジュアル表現やデジタルファブリケーションによる出力などの活用方法を学ぶ。		
目的・狙い	技能と素材を生かしたプロダクト制作を実践し、ものづくりのプロセスを考察する。本実習では、身の回りのプロダクトを、3DCAD スキル及び図学的な知識によって分析し、構成できる技能（3DCAD のスキル+立体構能力）の修得を目的とする。複合的な技能を単純な技能に分解し、練習問題と制作課題によって、確実に技能を身に付けた上で、複数の技能の組み合わせによる、立体の分析と構成に挑戦する。		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	履修にあたって、インダストリアル・デザイン領域における経験は求めない。身の回りのプロダクトへの興味・関心、デザイナーとのコミュニケーションなど実務での問題意識、ひらめきや思いつきではなく学習によって技能を身に付ける意欲などを持っていることが望ましい。また、制作課題において、設備講習を受講していることが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	インダストリアル・デザインにおいて、モデリングの観点から、立体の構成を理解し図学的な知識によって分析したうえで、自ら分析に立脚した複数の代替案を構成したり、プロジェクトのメンバーと具体的な内容を検討したりできることで独自性を発揮できる。		
	最低到達目標		
	身の回りの立体をモデリングの観点から、立体の構成を理解し図学的な知識に置き換えることができる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	○	
授業外の学習	限られた時間での演習のため、3D CAD ソフトに習熟するために予習、復習に努めること。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<ul style="list-style-type: none"> ・意図した立体を 3DCAD によって分析、構成し、デジタルファブリケーションによるアウトプットを行う。 ・分析、構成のための技能を、制作課題や練習問題によって獲得する。 ・実習及び練習問題は個人ワークを重視する。 ・授業内で実施する制作課題のプレゼンテーション及び提出を求める。 		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	3D CAD の理解： 3D CAD のモデリングプロセス・インタフェースを理解する。	[対]
	第 2 回	3D CAD の理解： 3D CAD におけるオブジェクトの種類の理解 〈コマンド演習〉：線・面・立体	[対]
	第 3 回	2D 作図－1： 平面上に、正確に始点と終点を定めて〈線〉を引けるようになる。 平面上で、複数の線を組み合わせて、作図できるようになる。 〈コマンド演習〉：線を描く。	[対]
	第 4 回	2D 作図－2： 平面上で、複数の図形を組み合わせて、複合的な作図ができるようになる。 〈コマンド演習〉：画像を取り込み、線を編集する。 〈制作課題－1〉：線を使ってネームプレートデザインする。 〈練習問題－1〉：数値制御による図形描く。	[対]
	第 5 回	プレゼンテーション： 制作課題－1 のプレゼンテーションを行う。 3D モデリング－1： 3次元空間に立体物をモデリングする。 〈コマンド演習〉：各種立体オブジェクトを作成する。	[対]
	第 6 回	3D モデリング－2： 作成した立体物を移動や変形などの編集を行う。 〈コマンド〉：立体オブジェクトを編集する。 〈練習問題－2〉：数値制御による簡単な立体をモデリングする。	[対]

	第 7 回	制作課題－ 2 : デジタルの技能と素材を生かした回転体モデリングする。 モデリングデータをもとにレーザーカッターで出力する。 〈素材〉：アクリル板	[対]
	第 8 回	制作課題－ 2 : デジタルの技能と素材を生かした回転体モデリングする。 モデリングデータをもとにレーザーカッターで出力する。 〈素材〉：アクリル板 〈練習問題－ 3〉：数値制御による複合立体をモデリングする。	[対]
	第 9 回	プレゼンテーション : 制作課題－ 2 のプレゼンテーションを行う。 3D モデリング－ 3 : 要素が組み合わされた複合立体をモデリングする。 〈コマンド演習〉：作図した線から複合立体をモデリングする。	[対]
	第 10 回	3D モデリング－ 4 : モデリングした複合立体の編集を行う。 〈コマンド演習〉：複合立体を編集する。 〈練習問題－ 4〉：立体の構成を捉えたモデリングをする。	[対]
	第 11 回	3D モデリング－ 5 : 有機的な形状をモデリングする。 〈コマンド〉：直感的な操作方法によるモデリング。	[対]
	第 12 回	3D モデリング－ 6 : 有機的な形状をモデリングする。 〈コマンド〉：直感的な操作方法によるモデリング。	[対]
	第 13 回	〈制作課題－ 3〉 : デジタルの技能と素材を生かしたプロダクトをモデリングする。 これまで習得して来た技能を生かし素材と組み合わせたモデリングを行う。 〈コマンド演習〉：3D オブジェクトのレンダリング。	[対]
	第 14 回	〈制作課題－ 3〉 : デジタルの技能と素材を生かしたプロダクトをモデリングする。 これまで習得して来た技能を生かし素材と組み合わせたモデリングを行う。 モデリングしたプロダクトを実際に外部出力機器により出力する。 〈コマンド演習〉：3D オブジェクトから 2D 図面を作成する。	[対]
	第 15 回	プレゼンテーション : 制作課題－ 3 のプレゼンテーションを行う。	[対]
	試験	なし	
	成績評価	次の提出物について、学習内容を理解し、作品に反映させているかを基準に評価する。 練習問題：4 回（配点 各 10 点） 課題作成：3 回（配点 各 20 点）	
教科書・教材		教科書は特に指定しない（授業内で適宜資料を配布する。） 持ち物：USB メモリー（データ保存用）	
参考図書		デザイン製図ハンドブック、株式会社ダヴィッド社、小山静夫（著） 製図基礎、共立出版株式会社、金元敏明（著）	

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	1	学期	1Q
科目群	インダストリアルデザイン科目群	科目名	デザイン表現実習			教員名	高嶋 晋治 和泉 秀明
		(英文表記)	Design Technics for Idea				

概要	<p>インダストリアルデザインでは、デザイナーはその試行を 2 次元のスケッチや 3 次元のモデルに可視化、具現化することで、自身のアイデア展開を広げ、チームやクライアントに対し対象物の新たな価値や行為の可能性を提示する。</p> <p>このカリキュラムは、各 Q で開講されるインダストリアルデザイン特別演習系科目の最初のプログラムであり、デザイナーにとって不可欠な「思考の可視化」の基本となるスキルを実践的に学ぶ。そして、この「思考の可視化」のプロセスを身に付けることで、抽象的な概念と具体的な対象との結びつきや、カタチで考えるというデザイン思考を身体化し、デザインは必ずしも答えが 1 つではなく多様性が存在するという理解につなげる。</p> <p>インダストリアルデザイン特別演習を継続的に履修しようという学生で、デザインの基本スキルをまだ身に付けていない学生を主対象とし、2Q 以降の「かたちの操作」を行えるスキルの習得を目的に内容を構成している。</p>		
目的・狙い	<p>本実習は、デザインに必要な思考を可視化する基本的なテクニックの基礎を身に付け、そして同時にカタチで考えることのできるスキルとプロセスを体得することを目的とする。</p> <p>特に、デザイン経験のない学生がデザイン表現の基礎を理解し、デザインプロジェクトのみならず一般的なものづくりや自身のプレゼンテーション技術などへの応用展開も可能な基本技術の習得を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各種の図法理解とスケッチ、ドローイング技術、基本的なモデル製作技術の学習 ・スケッチの手法とスケッチによるアイデア展開、およびアイデアの深化の学習 ・課題解決のためのデザインプロセスの習得 ・解決案の提示ープレゼンテーション能力 ・ポートフォリオによる解決案のまとめと伝達 <p>以上、一連の基本的な技術を使用し、抽象的な概念の可視化を用いたデザイン表現と開発力を習得する。</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>デザインに関する参考書を読みデザイン開発への知識を身に付けておくこと。</p> <p>開講前もしくは開講期間中の早い段階で必ず夢工房の設備講習を受講すること。</p> <p>初回にデザイン経験やスケッチ力などに関する簡単な調査を行う（成績には関係ない）ので受講希望者は初回に極力出席のこと。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・デザイン実務を行う上で必要な表現技術を身に付け、アイデアの展開とかたちの操作が可能になる。 ・イメージ、思考などを自由に 2D（スケッチ等）と 3D（モデル等）に変換、可視化する能力を修得する。 ・デザインプレゼンテーション力の獲得 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・デザインを行う上で必要な最低限の表現技術とアイデア展開力を身に付ける。 ・2D 表現（スケッチ等）と 3D 表現（モデル等）との関連の理解と展開。 ・デザインプレゼンテーション力の必要性の理解 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	<p>スライドを利用した基本知識と技術説明の講義</p> <p>実習による表現技術の個人能力向上の学習と課題によるその技術を活用したデザイン展開手法の実践と教員の個別指導</p> <p>プレゼンテーションを通じての相互の比較による重要ポイントの把握</p>
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<p>自然の中の形、色彩、素材、時間、空間と人工物との関係性を良く理解しておく事が望ましい。また、自分の好きなデザイン、良いデザインなどに関してその理由や構成などを観察、考察しておくこと。</p> <p>各回毎に積み上げが必要となるので、確実な各回課題の完了が求められる。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>講義 4 回目までは教員の技術解説(必要性、スキルなど)と講義後に各自による実習で技術を習得する。</p> <p>5 回目以降は、初歩的なデザイン課題が設定され、それを解決するプロセスを段階的に具現化しながらデザイン解決の基本プロセスを習得する。</p> <p>各自のアイデア展開や技術に関しては個人別の指導を行なっていく。制作されたスケッチやモデルとそのプレゼンテーション、および最終提出のポートフォリオで評価される。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
授業の計画	第 1 回	講義の全体概要の説明: デザインと立体表現、スケッチに関する基礎的な知識を理解し、スケッチワークにおける基本技法の習得。	[対]
	第 2 回	マーカーの使い方: マーカーによる簡易な立体表現を学ぶ。立体形状表現の基礎的感覚を身に付ける。	[対]
	第 3 回	モデル(簡易プロトタイピング)の意味と製作手法: スタイロフォームによる簡易な立体表現の基礎技術を習得。	[対]
	第 4 回	基本立体の製作: 実際にスタイロフォームを使い寸法に沿った立方体、円柱、球などを製作することで基本技術を習得。	[対]
	第 5 回	アイデア展開 1: デザイン課題の言葉とスケッチによるアイデアの展開手法を学習する。	[対]
	第 6 回	アイデア展開 2: 発想したアイデアの組み合わせなどで新たなアイデアを展開する手法や最終案への収束の学習。	[対]
	第 7 回	形態の検討: 選択したアイデアの具体的な形態や機能のスケッチによる詳細な検討	[対]
	第 8 回	三面スケッチ(三面図): 三面スケッチによる二次元での立体形状の検討。	[対]
	第 9 回	立体検討 1: 各自のデザイン案を三面スケッチ(三面図)に従ってスタイロフォームによりモデル化する。	[対]
	第 10 回	中間発表: 各自のモデル、三面スケッチ(三面図)、アイデアスケッチなどでデザイン意図(コンセプト)のプレゼンテーションを行う。	[対]
	第 11 回	透視図法(パース) 透視図法の基本学習を行い、パース図でのアイデア表現が可能となるように学習する。	[対]
	第 12 回	パース図の作成: 各自の中間発表時点でのデザイン制作物をパースで表現する。	[対]
	第 13 回	デザイン修正 1: 中間発表のアイデアを基に、各自のデザイン修正をパース、三面スケッチで行う。	[対]
	第 14 回	デザイン修正 2: 修正されたデザインをスタイロフォームを利用して立体モデルを制作する。	[対]
	第 15 回	プレゼンテーション準備: 制作物(モデルなど)の写真やスケッチなどを取り込んで簡易なポートフォリオを制作する。	[対]
	試験	プレゼンテーション: 最終のモデルやスケッチ、簡易ポートフォリオなどを使って各自の最終ポートフォリオを発表する。自身で他者と作品を比べることで、評価力を身につけるとともに、デザインの答えは必ずしも 1 つではなく、多様性が存在するということを理解する。ポートフォリオは後日提出する(修正可)	[対]
成績評価	実習科目であるので試験は行わない。第 10 回中間発表、第 16 回目プレゼンテーション、第 16 回目終了後に提出のポートフォリオで評価する(合計 100 点満点)。 ・ 10 回中間発表:20 点(アイデア、展開、スケッチ、モデル等) ・ 16 回目 プレゼンテーション:30 点(最終デザイン、プレゼンテーション等) ・ 最終提出ポートフォリオ:50 点(最終デザインおよびその表現) なお成績評価には 10 回以上の出席が求められる。		
教科書・教材	課題制作のために、各自でスケッチのための筆記用具(鉛筆、サインペン、黒ボールペン等)、20-30cm の三角定規セット(第 11 回に使用)、コンパス(随時)等を準備すること(そのほかスケッチの用紙、マーカー、色鉛筆などの教材は学校で用意する)		
参考図書	・ James Gibson, 小林茂、鈴木宣也、赤羽享『アイデアスケッチ』(ビー・エヌ・エヌ新社) ・ 清水吉治著『デザインの発想から表現 プロダクトデザインスケッチ』(日本出版サービス 2011 年) ・ 増成和敏著『プロダクトデザインのためのスケッチワーク』(オーム社 2013 年)		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	インダストリアルデザイン科目群	科目名 (英文表記)	造形デザイン特別演習 Advanced Exercises: Compositional Design			教員名	内山 純 和泉 秀明

概要	<p>プロダクトデザイナー、デザインエンジニアはその試行を 2 次元のスケッチや 3 次元のモデルに可視化・具現化することで、ユーザーに対し対象物の新たな価値や行為の可能性を提示する。</p> <p>基本的なプロダクトデザインの知識、スキルを有することを前提とし、具体的なプロダクトのデザイン提案を行うことにより、「かたちの操作」、「コンセプトの可視化」の能力を高める。</p>		
目的・狙い	<p>本演習では、プロダクトデザイナー、デザインエンジニアを目指す者が、デザイン開発の手法を理解し、デザイン展開の技術とプロセスを学修することを目的とする。</p> <p>課題は各自のデザインスキルレベル、目標に応じたものとするが、デザイン経験者を中心としたグループを編成しグループ内での課題共有、相互学修によりメンバーの能力を引き出し、質の高いプロダクトのデザイン提案を目指す。</p> <p>課題への取り組み、発表を通して主に以下の能力の向上を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企画提案力 ・プレゼンテーション力 ・非言語的可視化力 ・機能と感性の統合力 <p>課題制作に際して、デジタルツールの積極的な活用を期待する。</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<ul style="list-style-type: none"> ・プロダクトデザイン経験者、プロダクトデザイナー、デザインエンジニアを目指している者 ・「プロダクトデザイン特論」、「プロトタイピング工学特論」を履修済、「工業デザイン材料特論」と共に履修することが望ましい。 ・設備講習を受講していること 		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・プロダクトデザインスキルを活かし、課題を抽出、コンセプトの立案、具体的なデザイン提案ができる。 ・プロダクトデザイン未経験者を指導し、デザイナーとしてプロジェクトを推進することができる。 		
	最低到達目標		
	プロダクトデザインプロセスを理解し、基本的なコンセプトの可視化ができる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	ワークショップ、プレゼンテーション、東京夢工房を使用する場合がある。
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<p>毎回の演習時間は、造形指導、相互意見交換を中心に当てるため、スケッチ、モデル制作等の作業は次回の指導を受けられるよう東京夢工房などを積極的に活用し進めておくこと。</p> <p>プロダクトデザイン未経験者は基本的なデザイン表現力を習得しながら課題に取り組む必要がある。</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>演習はデザイン実務に基づき、第 1 回から第 15 回まで連続したものである。</p> <p>プロダクトデザイン提案課題は各自のデザインスキルレベルに応じ担当教員と相談しながら個別に設定する。</p> <p>チームメンバーとの共有、相互学修によって専門知識、スキルが異なるメンバーの特性を活かし能力の向上を目指す。</p> <p>課題制作については、東京夢工房などを積極的に活用し、原則として予習・復習時間に行う。授業時間内は周囲との意見交換を中心にブラッシュアップ作業を進める。</p>		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	<p>オリエンテーション：</p> <p>授業計画、学修内容を解説し講義選択の判断を促す。</p> <p>プロダクトデザイン提案演習課題についての説明、チーム分け</p> <p>事前課題、スキルチェック、アンケートの提出 (LMS)</p>	[対]
	第 2 回	<p>課題の抽出：</p> <p>ビジュアルによるブレーンストーミング、調査、イメージのマッピング</p> <p>課題①：演習課題設定</p>	[対]
	第 3 回	<p>課題の共有：</p> <p>調査、イメージのマッピングについてのグループ共有</p> <p>各自デザインスキルに応じた課題の再設定</p> <p>演習課題設定の共有 (課題①発表)</p>	[対]

	第 4 回	計画書の立案: 各自課題のグループ討議、課題制作スケジュールの立案 各自課題についての調査、イメージのマッピング、アイデア展開 各自スケジュールについてのグループ共有 課題②: 計画書	[対]
	第 5 回	アイデア展開: アイデア展開のグループ討議、コンセプトの立案、プロトタイピングによる検証 計画書の共有 (課題②発表)	[対]
	第 6 回	コンセプト立案: コンセプトについてのグループ討議、アイデア展開、プロトタイピングによる検証 課題③: 中間発表資料	[対]
	第 7 回	中間発表:課題③発表 イメージマップ、アイデア展開、プロトタイピングによるコンセプトの可視化 全体討議、相互評価、意見交換を通じて理解を深める	[対]
	第 8 回	中間発表コメントについての意見交換 各自課題計画の見直し。スキル強化点の個別確認	[対]
	第 9 回	プロトタイピングⅠ: プロトタイピングの手法の検討 レベルは各自スキル、目的に応じて個別に対応	[対]
	第 10 回	プロトタイピングⅡ: プロトタイピング作業 レベルは各自スキル、目的に応じて個別に対応 課題④: 発表資料	[対]
	第 11 回	プロトタイピングⅢ: グループ共有と最終発表に向けた計画の見直し	[対]
	第 12 回	プロトタイピングⅣ: プロトタイピング作業 レベルは各自スキル、目的に応じて個別に対応	[対]
	第 13 回	発表の準備Ⅰ: 最終仕上げ、ブラッシュアップ	[対]
	第 14 回	発表の準備Ⅱ: グループ共有、プレゼンテーションの練習	[対]
	第 15 回	課題発表:課題④発表 全体共有、相互評価、意見交換を通じて理解を深める	[対]
	試験	レポート試験: 授業内で発表した資料を全て再構成、ブラッシュアップして提出 活動内容、経緯を記録した資料も含める。 pdf (横長) LMS による提出	
成績評価	次の 3 つのポイントで評価する(合計 100 点満点) 中間発表内容(50 点)+最終発表内容(30 点)+レポート課題(20 点) 1.中間発表内容の評価: 成果物作成へ向けた役割や貢献度、相互評価を含む。 2.最終発表内容の評価: 口頭発表+発表資料の完成度 3.レポート試験の評価: 発想力+表現力+中間及び最終発表内容までの総合的な改善意識と編集力 原則として LMS 出題課題をすべて期限内に提出していることが単位取得の条件		
教科書・教材	①日本インダストリアルデザイン協会編 『プロダクトデザインの基礎』 (ワークスコーポレーション、2014 年) 初級レベル ②日本インダストリアルデザイン協会編 『プロダクトデザイン』 (ワークスコーポレーション、2009 年) 中級以上 ③日本インダストリアルデザイン協会編 『プロダクトデザイン』(改訂版) (ビー・エヌ・エヌ、2021 年) 中級以上 ①②③いずれを使用しても良い。その他、講義資料は LMS にアップ、又は適宜配布する。		
参考図書	ゲイル・グリート・ハナ著 今竹翠翻訳監修 『エレメンツ・オブ・デザイン』(美術出版社、2006) 三井 秀樹著 『新構成学』(六耀社、2006 年) 佐宗 邦威 著 『21 世紀のビジネスにデザイン思考が必要な理由』(クロスメディア・パブリッシング、2015 年) フレッド・アシュフォード 著、高梨 隆雄 訳 『設計美学』(ダヴィッド社、1991 年) 福田 哲夫 著 『新幹線をデザインする仕事』(SB クリエイティブ、2015 年) その他適宜紹介する。		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	インダストリアルデザイン科目群	科目名 (英文表記)	プロダクトデザイン特別演習 Advanced Exercises: Product Design			教員名	伊藤 潤 村田 桂太

概要	<p>インダストリアル・デザインは、民生機器、産業機器、公共機器などの広範な工業製品とそのシステムを対象に、エルゴノミクスやエコロジーなどの機能的な視点と文化的あるいは記号的な視点を融合して、エレガントな設計解（デザイン）を導き出す手法である。</p> <p>それは、変わりやすさ（variability）を探索するプロセス（あるべき姿に近づくための実行可能なオプションを見つけること）を通じて、未だ存在しない人工物、製品、慣行を計画、設計するものである。</p> <p>そこで、この演習では身近なプロダクトを対象に、デザイン開発の基本ステップを体験し、ものづくりの基本スキルを修得する。</p>		
目的・狙い	<p>本演習では身近な製品のデザイン開発に取組みながら、感性価値デザインについて実践的に学修する。学修者はこの演習を通じて以下の知識やスキルの修得を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デザインリファレンスの収集・分析：デザインリファレンスの収集とデザインコンセプトの可視化スキル ・アイデアの可視化：スケッチやペーパーモックアップを作成し、アイデアを可視化するスキル ・デザインモデルの作成：アイデアのリファイニングとプロトタイプデザインの作成スキル ・プレゼンテーション技術：表現力、コミュニケーション力 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>デザインに関する基礎的知識を獲得するために、参考図書を読みデザイン開発への知識をみにつけておくこと。デザイン表現実習、デジタルデザイン実習、造形デザイン特別演習、価値デザイン特論とともに履修することが望ましい。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	意味の探索、意味の可視化手法を駆使し、高度なデザイン提案を行う技術を身につける。		
	提案したデザインに共感を得られるプレゼンテーション技術を身につける。		
	最低到達目標		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	デザイン実務の全体像を理解したうえで、そのプロセスを体験し、最終提案を行う。		
	意味の探索、意味の可視化手法を理解し、独自に行える技術を身につける。		
	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	
授業外の学習	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	—	
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	<p>はじめに、デザインプロセスの序盤にあたる「デザインリファレンスの収集・分析」をグループで取り組み発表する。東京夢工房内のデジタル出力機器によるモックアップ作成技術を習得する。その後、「デザインアイデアの可視化」のステップとしてプロトタイピングを行い、デザインコンセプト、スケッチ、ダーティプロトタイプなどで中間発表を行う。</p> <p>最後に、これまでの検討を踏まえ「デザイン」プロセスを経て、デジタル出力機器でワーキングモックを製作し最終プレゼンテーションを行う。</p>		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
授業の計画	第 1 回	演習の目的、進め方など ・プロダクトデザイン演習について ・グループ編成	[対]
	第 2 回	第 1 回と同様	[対]
	第 3 回	デザインリファレンスの収集・分析 1st プロトタイピング 〈デザインアイデアの可視化〉 ・デザインリファレンスの収集 ・デザインリファレンスのマッピング ・デザインコンセプトの確認 ・デザインスケッチの作成（デザインアイデア創出） ・ダーティモックアップの作成	[対]
	第 4 回	第 3 回と同様	[対]
	第 5 回	第 3 回と同様	[対]
	第 6 回	第 3 回と同様	[対]
	第 7 回	第 3 回と同様	[対]
	第 8 回	第 3 回と同様	[対]
	第 9 回	発表準備 中間プレゼンテーション ・デザインリファレンスマップ ・ダーティモックアップ	[対]
	第 10 回	第 9 回と同様	[対]
	第 11 回	2nd プロトタイピング 〈デザイン、デザインモデルの作成〉 ・デザインデータ作成 ・リファイニングとフィニッシュワーク ・最終プレゼンテーション準備	[対]
	第 12 回	第 11 回と同様	[対]
	第 13 回	第 11 回と同様	[対]
	第 14 回	第 11 回と同様	[対]
	第 15 回	最終プレゼンテーション ・パネル（A2）（PDF の提出） ・モックアップ（写真と CG 画像の提出）	[対]
	試験	第 15 回と同様	[対]
成績評価	次の 3 つのポイントで評価する（合計 100 点満点）。 ・中間発表の内容 30 点 ・最終プレゼンテーション 70 点 （製作したモックアップ、制作したパネルなどで評価）		
教科書・教材	必要に応じ各回講義の際にテキスト、資料などを配布する。		
参考図書	誰のためのデザイン、エモーショナルデザイン、未来のモノのデザイン、複雑さと共に暮らす（D.A.ノーマン）		

IV デジタル技術科目群

組込みシステム特論

システムモデリング特論

ET (Embedded Technology)特別演習

機械学習特論

AI デザイン特論

データサイエンス特論

データサイエンス特別演習

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	デジタル技術科目群	科目名 (英文表記)	組み込みシステム特論 Embedded Systems			教員名	村越 英樹

概要	組み込みシステムとは、様々な装置に組み込まれ、装置の機能を実現するコンピュータシステムである。そして、これらの装置で動作し、装置の機能を実現するソフトウェアが組み込みソフトウェアである。本講義では、組み込みシステムのハードウェアからソフトウェア開発までを網羅的に解説する。		
目的・狙い	組み込みシステムのハードウェアからソフトウェア開発までを概観する。具体的には、組み込みシステムの基本構成、コンピュータシステムの基本構成、MPU 等各種ハードウェア構成要素、組み込みソフトウェアの特徴、クロス開発環境、ソフトウェア構成要素、及び開発手法について学習する。学習者はこの講義を通じて以下の知識や・能力を習得できる。 1.組み込みシステムの基本構成(ハードウェア、ソフトウェア)とその動作原理を理解する。 2.組み込みシステムの基本的なハードウェア要素とその特徴を理解する。 3.組み込みソフトウェアの特徴と役割を理解する。 4.組み込みソフトウェアの開発手法を理解する。		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	パーソナルコンピュータの基本的な操作ができること。 組み込みシステムに興味を持っていること。 プログラミング経験があることが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	組み込みシステムの基本的なハードウェア要素とその特徴を理解し、説明できる。		
	組み込みソフトウェアの特徴と役割を理解し、説明できる。		
	組み込みソフトウェアの開発手法を理解し、説明できる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	パワーポイントを利用して講義し、双方向、多方向に行われる討論や質疑応答を行う。 各講義ごとに、講義内容に対する簡単な課題を、レポートとして提出を求め、このレポートの提出をもって出席扱いとする。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	講義資料を事前に入手し、講義に備えること。 各講義ごとの課題は、次回講義までに提出すること。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	組み込みシステムのハードウェアからソフトウェア開発までを網羅的に解説する。前半がハードウェア、後半がソフトウェアである。毎回の講義では、講義内容に関する課題等について討論を行い、その課題についてレポートの提出を求める。レポートはLMS への提出を想定している。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第 1 回	講義ガイダンス 講義の目的と 15 回の構成を説明する。組込みシステムを概観し、PC などの汎用コンピュータシステムとの比較など講義する。	[ハ]
	第 2 回	コンピュータシステムの基礎 1 コンピュータシステムで扱うデータについて解説する。具体的には、2 進数、16 進数などの数値表現について講義する。	[ハ]
	第 3 回	コンピュータシステムの基礎 2 コンピュータ内部で実行される数値演算や論理演算について解説する。	[ハ]
	第 4 回	ハードウェアの技術 1 MUP の動作原理及び MPU の種類について解説するとともに、演算のしくみについて解説する。	[ハ]
	第 5 回	ハードウェアの技術 2 データを記憶する回路および記憶装置の種類について解説する。また、キャッシュメモリや仮想記憶などについても触れる。	[ハ]
	第 6 回	ハードウェア技術 3 パラレル I/O、シリアル I/O、アナログ I/O と割込み処理について解説する。	[ハ]
	第 7 回	ハードウェア技術 4 SoC によるハードウェア実装について解説する。	[ハ]
	第 8 回	ソフトウェア技術 1 組込みソフトウェアの特徴、開発環境、実行環境等について解説する。	[ハ]
	第 9 回	ソフトウェア技術 2 割込みの利用、コンテキストスイッチ、排他制御など、マルチプログラミングの基本概念について解説する。	[ハ]
	第 10 回	ソフトウェア技術 3 リアルタイムカーネルの機能について概観し、タスクの概念とタスク管理について解説する。	[ハ]
	第 11 回	ソフトウェア技術 4 リアルタイムカーネルのシステムコールやタスク間通信の利用について解説する。	[ハ]
	第 12 回	ソフトウェア技術 5 デバイスドライバとミドルウェアについて解説する。	[ハ]
	第 13 回	システム開発技術 1 組込みシステム開発プロセスモデルとして V 字モデルを紹介するとともに、開発技術について解説する。	[ハ]
	第 14 回	システム開発技術 2 開発プロセス改善手法について解説する。	[ハ]
	第 15 回	まとめ	[ハ]
	試験	組込みシステムに関する筆記試験	[ハ]
成績評価	次の 2 つのポイントで評価する(合計 100 点満点)。 各講義ごとに提出されたレポート 45 点 最終試験 55 点		
教科書・教材	講義資料は LMS 等で配布する。		
参考図書	社団法人組込みシステム技術協会/エンベデッド技術者育成委員会 編著、『改訂 組込みシステム開発のための 改訂 エンベデッド技術』（電波新聞社、2009 年）2,300 円＋税 社団法人組込みシステム技術協会/エンベデッド技術者育成委員会 編著、『エンベデッドシステム開発のための 組込みソフト技術』（電波新聞社、2005 年）3,200 円＋税 株式会社 富士通ラーニングメディア 編著、『標準テキスト 組込みプログラミング ハードウェア基礎』（技術評論社、2008 年）2,580 円＋税 坂巻佳壽美 著、『組込みシステムのハードウェア設計入門講座』（電波新聞社、2008 年）2,400 円＋税 情報処理学会 組込みシステム研究会 監修、戸川望 編著、『組込みシステム概論』（CQ 出版社、2008 年）2,400 円＋税 永井正武 監修、西野誠 杉本英樹 著、『わかりやすい 組込みシステム構築技法 ハードウェア編』（共立出版、2007 年）6,300 円＋税 永井正武 監修、澤田勉 著、『わかりやすい 組込みシステム構築技法 ソフトウェア編』（共立出版、2006 年）5,500 円＋税 独立行政法人 情報処理推進機構ソフトウェア・エンジニアリング・センター 編著、『改訂版 組込みソフトウェア向け開発プロセスガイド』（翔泳社、2007 年）2,286 円＋税		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	デジタル技術科目群	科目名 (英文表記)	システムモデリング特論 System Modeling			教員名	村越 英樹

概要	組込みシステムやロボットの設計では、プロダクトの形状とともに機能や動作を実現するための制御を実現することが重要である。本講義では、まず組込みシステムの開発プロセスである V 字モデルを紹介する。次に、プロダクトに要求される機能や動作のモデリング手法とモデルを用いたシステム分析・設計を学習する。オブジェクト指向モデリング、機能要求と非機能要求(性能、保守など)の仕様化などの話題を取り上げて解説する。また、ソフトウェア要求仕様書、ソフトウェア・アーキテクチャ設計書の作成演習をグループで行い、理解を深める。		
目的・狙い	組込ソフトウェア開発において、システムの要求から分析、設計までに用いるモデリング手法について学習する。ソフトウェア要求仕様書、ソフトウェア・アーキテクチャ設計書の作成演習によって、適切なモデリング手法を利用した記載内容について学ぶ。グループ演習では、メンバと協力して成果物を作成することを学ぶ。具体的には、学習者はこの講義を通じて以下の知識や・能力を習得できる。 1.V 字開発モデルの各工程で用いる、適切なモデルを理解する。 2.ソフトウェア要求仕様書、ソフトウェア・アーキテクチャ設計書に記載する内容を理解する。 3.設計品質を保つため、レビューの重要性を理解する。 4.グループのメンバと協力して、成果物を作成するスキルを学ぶ。		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	パーソナルコンピュータの基本的な操作ができること。プログラミング経験があることが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	適切にレビューを行い、設計品質を考慮した組込みソフトウェアの設計ができる。		
	最低到達目標		
	V 字開発モデルの各工程で、適切なモデルを用いて、分析、設計ができる。 ソフトウェア要求仕様書、ソフトウェア・アーキテクチャ設計書の記述ができる。 グループのメンバと協力して、成果物を作成できる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	パワーポイントを利用して講義し、双方向、多方向に行われる討論や質疑応答を行う。 グループワークが多い講義です。Google Meet 等でのグループ討論参加となる。 印刷物による資料の配布は、郵送となり、履修が確定するまで遅延する。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	グループワークの実施では、講義時間中に共同作業に伴うグループメンバとの意見交換が主に行われることが想定され、個人に分担された作業は、講義時間外の活動になると考えられる。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	本講義では講義資料に沿って、組込みシステム開発工程で利用するオブジェクト指向モデリングについて解説する。また、ソフトウェア要求仕様書、ソフトウェア・アーキテクチャ設計書の作成演習をとおり、各モデリング手法の理解を深める。昨年までは、扇風機のマイコン制御化を題材に演習を行った。		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	講義ガイダンス： 講義の目的と 15 回の構成を説明する。V 字開発モデルの概要と各工程でのインプットとアウトプット、各種モデリングツール、オブジェクト指向モデリングと構造化モデリングなどについて概説する。	[ハ]
	第 2 回	モジュール 1(第 2 回～第 8 回)：要求モデリング+ソフトウェア要求仕様書+インスペクション グループ演習準備：1 グループ 5 名程度。要求分析で利用するオブジェクト指向モデルやツール(ユースケース図、ユースケース記述、イベントリスト、コンテキストダイアグラム、データディクショナリ、タイミング仕様書、非機能要件リスト)について解説して、ソフトウェア要求仕様書の作成演習を開始する。	[ハ]
	第 3 回	グループ演習 1:1：要求モデリング演習(1) 提示された要求をモデリングして、あいまいな部分を洗い出して、質疑によってあいまいさを無くしていく。	[ハ]

	第 4 回	グループ演習 1-2：要求モデリング演習(2) 適切なモデルを作成し、ソフトウェア要求仕様書を記述する。	[/]
	第 5 回	グループ演習 1-3：インスペクション演習(1) 品質向上のためのレビュー手法について解説する。その後、グループごとにインスペクション演習を開始する。	[/]
	第 6 回	グループ演習 1-4：インスペクション演習(2) インスペクションのミーティングを実施し、ソフトウェア要求仕様書の欠陥を洗い出す。その後、ソフトウェア要求仕様書を修正して完成させる。	[/]
	第 7 回	グループ演習 1-5：プレゼンテーション準備 ソフトウェア要求仕様書、インスペクション報告書等の最終チェックを行い、プレゼンテーションに備える。	[/]
	第 8 回	グループ演習 1-6：プレゼンテーション(ソフトウェア要求仕様書、インスペクション報告書) グループごとにプレゼンテーションを行い、モデリング法について討論する。グループごとに成果物(ソフトウェア要求仕様書、インスペクション報告書)、個人別にレポート(演習実施報告書)の提出を求める。	[/]
	第 9 回	モジュール 2(第 9 回～第 15 回)：分析モデリング+ソフトウェア・アーキテクチャ設計書+インスペクション グループ演習準備 1：分析モデリングで利用するオブジェクト指向モデリングツール(分析クラス図、分析クラス仕様書、分析コミュニケーション図、状態遷移図、コンテキストアイアグラム)を解説する。	[/]
	第 10 回	グループ演習準備 2 オブジェクト指向モデルの理解、オブジェクト指向という考え方を理解するために、オブジェクトを擬人化し、オブジェクトの役割をロールプレイで体験する。また、ロールプレイで体験したことをクラス図やシーケンス図と対応づけることにより、オブジェクト指向モデリングの理解を深める。	[/]
	第 11 回	グループ演習 2-1 グループごとにソフトウェア・アーキテクチャ設計書の作成演習を開始する。要求仕様を満たすソフトウェアの構成を決定し、ソフトウェア・アーキテクチャ設計書にまとめる。クラス図を作成し、静的構造を設計する。コミュニケーション図やシーケンス図を作成し、動的構造を設計する。	[/]
	第 12 回	グループ演習 2-2 ソフトウェア・アーキテクチャ設計書を作成する。	[/]
	第 13 回	グループ演習 2-3：インスペクション演習(1) インスペクションの役割分担などを行い、レビューを開始する。	[/]
	第 14 回	グループ演習 2-4：インスペクション演習(2) インスペクションのミーティングを実施し、ソフトウェア・アーキテクチャ設計書を完成させる。	[/]
	第 15 回	グループ演習 2-5:プレゼンテーション(2) (ソフトウェア・アーキテクチャ設計書、インスペクション報告書) グループごとにプレゼンテーションを行い、モデリング法について討論する。グループごとに成果物(ソフトウェア・アーキテクチャ設計書、インスペクション報告書)、個人別にレポート(演習実施報告書)の提出を求める。	[/]
	試験	オブジェクト指向モデリング、ソフトウェア要求仕様書、及びソフトウェア・アーキテクチャ設計書に関する筆記試験。	[/]
成績評価	次の 4 つのポイントで評価する(合計 100 点満点)。 課題 1 グループ成果物及び個人別レポート 30 点 課題 2 グループ成果物及び個人別レポート 30 点 プレゼンテーション 10 点(5 点×2 回) 試験 30 点		
教科書・教材	講義資料は LMS 等で配布する。		
参考図書	<ul style="list-style-type: none"> ・ SESSAME WG2 著、『組込みソフトウェア開発のための オブジェクト指向モデリング』(翔泳社、2006 年) 2,600 円 + 税 ・ 独立行政法人 情報処理推進機構ソフトウェア・エンジニアリング・センター 編著、『改訂版 組込みソフトウェア向け開発プロセスガイド』(翔泳社、2007 年) 2,286 円 + 税 (https://www.ipa.go.jp/sec/publish/index.html) ・ Watts S. Humphrey 著、秋山義博 監訳、JASPIC TSP 研究会 訳、『TSPi ガイドブック』(翔泳社、2008 年) 5,400 円 + 税 ・ SESSAME WG2 著、『組込みソフトウェア開発のための構造化モデリング』(翔泳社、2006 年) 2,200 円 + 税 		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	デジタル技術科目群	科目名 (英文表記)	ET(Embedded Technology)特別演習 Advanced Exercises: Embedded Technology			教員名	村越 英樹

概要	動作や機能を実現する組み込み技術は、近年のものづくりにおける価値創造において重要な役割を果たしている。本講義では、ラピッドプロトタイピング用の CUP ボード(mbed)を利用して、動作や機能の実現方法を演習形式で学習する。具体的には、各種センサ、モーターやドライバになどをブレッドボード上で配線し、目的とする動作に適合するようにプログラムの作成を行うことで、組み込み技術の基礎を身に付け、ラピッドプロトタイピングのスキルを修得する。		
目的・狙い	試作実験等では形状だけでなく、動作や機能を素早く実装することが求められる。本講義では、動作や機能を素早く実現する手法を修得する。 修得できる知識・スキル ・組み込み技術の基本的構成に関する知識 ・センサやモーターなどの周辺デバイスに関する知識 ・C/C++によるプログラミングスキル ・動作や機能を実現するための基礎的スキル(ハードウェア、ソフトウェア) ・動作や機能の実現に適したシステム設計スキル		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	パーソナルコンピュータの基本的な操作ができること。 動作や機能の実現方法に興味を持っていること。 組み込みシステムの開発、組み込みソフトウェアの開発、C/C++言語によるプログラミング等に興味を持っていること。 プログラミング経験があることが望ましい。		
到達目標	上位到達目標		
	動作や機能の実現に適したシステム設計できる。		
	最低到達目標		
	組み込み技術の基本的構成を理解する。 センサやモーターなどの周辺デバイスの特徴を理解する。 C/C++により、目的の動作を実現するプログラミングができる。 動作や機能を実現するための基礎的スキル(ハードウェア、ソフトウェア)を修得する。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	パワーポイントを利用して講義し、双方向、多方向に行われる討論や質疑応答を行う。 回路実装及びプログラミング演習を実施する。 マイコンボードや電子部品の貸し出しをします。適時、品川シーサイドキャンパスで受け取ってください。
	録画視聴型	—	
授業外の学習	マイコンボード等を貸与するので、必要に応じて、プログラミング演習を実施すること。 毎回、講義内容に即した演習課題を課す。レポートとして、次回講義前までに提出すること。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	本講義は、毎回配布する講義資料に基づいて実施する。 各講義の前半は、ハードウェア、プログラミング等の説明、後半は演習である。毎回、演習レポートの提出を求める。レポートは LMS への提出を想定している。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第 1 回	講義ガイダンス 15 回の講義の進め方、マイコンボードの使い方(PC との接続、コンパイル、実行)	[ハ]
	第 2 回	LED 点滅プログラム C/C++言語の基礎 1(main 関数、実行文(代入文、while 文)など)	[ハ]
	第 3 回	PC との通信 C/C++言語の基礎 2(入出力関数(sprintf など)、データ型、演算子など)	[ハ]
	第 4 回	ブレッドボードと外部 LED ブレッドボードの使い方、LED の接続及びプログラミング	[ハ]
	第 5 回	スイッチ入力と if 文 スイッチの接続、C/C++言語の基礎 3(if 文など)	[ハ]
	第 6 回	温度センサ 温度センサの接続、アナログ入力の利用	[ハ]
	第 7 回	ステッピングモーター ステッピングモーター、ドライバ IC の接続、ステッピングモーターの回転制御	[ハ]
	第 8 回	サーボモーター サーボモーターの接続、PWM 制御による位置制御	[ハ]
	第 9 回	DC モーター DC モーター、ドライバ IC の接続、速度制御	[ハ]
	第 10 回	フォトインタラプタ フォトインタラプタによる DC モーターの回転数制御、割り込み	[ハ]
	第 11 回	照度センサ、距離センサ 明るさの検出、距離の計測	[ハ]
	第 12 回	ブザー ブザーの接続、楽曲の演奏	[ハ]
	第 13 回	シリアルインタフェース 1 I2C シリアルインタフェースを利用した加速度センサの接続	[ハ]
	第 14 回	シリアルインタフェース 2 SPI シリアルインタフェースを利用したジャイロセンサの接	[ハ]
	第 15 回	リアルタイム OS の利用 並行処理、排他制御の実現など	[ハ]
	試験	仕様書で指定された動作、機能を実現したプログラムに関する試験	[ハ]
成績評価	次の 2 つのポイントで評価する(合計 100 点満点)。 毎回の講義で課す課題に対するレポート 45 点 (3 点×15 回) 最終試験 55 点		
教科書・教材	講義資料は LMS 等で配布する。		
参考図書	http://mbed.org/ mbed 関連の書籍 (・エレキジャック編集部 編、『mbed/ARM 活用事例』(CQ 出版社、2011 年)、・勝 純一 著、『超お手軽マイコン mbed 入門』(CQ 出版社、2011 年)、など) C/C++言語関連図書		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	デジタル技術科目群	科目名 (英文表記)	機械学習特論 Machine Learning	教員名		林 久志	

概要	<p>近年、人工知能（AI）がブームになっているが、そのブームの中心となっている技術は深層学習である。また、深層学習と強化学習を組み合わせた DQN（Deep Q Network）により、多くの反射的なゲームにおいて、AI がプロゲーマ以上の能力を発揮し、その成果が 2015 年に Nature に掲載されたことは記憶に新しい。その後に登場した Alpha Go では、深層学習と強化学習だけでなく、さらに探索を組み合わせることにより、AI が囲碁の世界王者に勝利することができた。本講座では、強化学習、ニューラルネットワーク、深層学習、深層強化学習、探索と深層強化学習の組み合わせ方法などを学ぶ。</p>		
目的・狙い	<p>人工知能分野の中の一分野である機械学習を中心に学ぶ。本講座により、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 強化学習 2. ニューラルネットワーク 3. 1 と 2 の発展的内容である深層強化学習 <p>を学ぶことができる。</p> <p>強化学習や深層学習（ニューラルネットワーク）により学習した知識は、反射的な推論を短時間で行うことができ、実時間で動作しなければならない多くのシステムに搭載することが期待される。また、探索技術と組み合わせることにより、より熟考的な AI を作成することも期待できる。本講座では、これらの技術の詳細を学ぶのではなく、技術の本質を理解し、応用方法を学ぶことを目指す。</p> <p>なお、機械学習分野のうち、遺伝的アルゴリズムや群知能を用いた最適化や環境への適応技術については、「AI デザイン特論」で取り扱う予定である。</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	コンピュータの基本的な操作ができること。特定のプログラミング言語の知識は前提としないが、基本的な手続き型言語のプログラムは理解できること。基本的な数学を理解できること。		
到達目標	上位到達目標		
	深層強化学習の技術を用いてシステムをモデリング・デザインできるようになること。		
	最低到達目標		
	機械学習の概念と深層強化学習の概要を理解できるようになること。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	初回と演習日はリアルタイム講義を基本とする。
	録画視聴型	○	座学は録画講義を基本とする。 質疑応答は Manaba の掲示板を活用する。
授業外の学習	レポート作成と配布資料の復習		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	講義を基本とし、適宜、コンピュータを用いた演習を行う。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	イントロダクション： 機械学習の概論を学ぶ。	[ハ]
	第2回	強化学習1： 強化学習の概念とバンディットアルゴリズムを学ぶ。	[録]
	第3回	強化学習2： MDPと価値関数とQ学習を学ぶ。	[録]
	第4回	強化学習3： 演習： グループワークによる演習を行う。	[ハ]
	第5回	ニューラルネットワーク1： 単純パーセプトロンとロジスティック回帰を学ぶ。	[録]
	第6回	ニューラルネットワーク2： 多層ニューラルネットワークを学ぶ。	[録]
	第7回	強化学習4： 演習： グループワークの発表を行う。	[ハ]
	第8回	ニューラルネットワーク3： 誤差逆伝搬法を学ぶ。	[録]
	第9回	ニューラルネットワーク4： 演習： ニューラルネットワークの演習を行う。	[ハ]
	第10回	深層学習1： 畳み込みニューラルネットワーク（CNN）を学ぶ。	[録]
	第11回	深層学習2： 演習： 深層学習の演習を行う。	[ハ]
	第12回	深層強化学習1： 強化学習における関数近似と深層Qネットワーク（DQN）を学ぶ。	[録]
	第13回	探索： ゲーム木探索について学ぶ。	[録]
	第14回	深層強化学習2： Alpha Go におけるモンテカルロ木探索と深層強化学習の組み合わせ方法を学ぶ。	[録]
	第15回	総括： 本講義を総括し、その他のトピック（方策勾配法など）を紹介する。	[録]
	試験	強化学習、ニューラルネットワーク、深層学習、深層強化学習、Alpha Go についての基本的知識、モデリングスキルに関する試験を実施する。（オンライン試験を予定）	
成績評価	・レポート課題： 40点×2 ・最終試験：講義終了後に、これまで獲得した知識・スキルを総合的に評価：20点		
教科書・教材	講義で利用するスライドを配布する。		
参考図書	S. Ravichandrian. Deep Reinforcement Learning with Python, second edition, 2020. 大槻知史 著『最強囲碁 AI アルファ碁 解体新書 増補改訂版 アルファ碁ゼロ対応 深層学習、モンテカルロ木探索、強化学習から見たその仕組み』（翔泳社、2018年） 中井悦治 著『IT エンジニアのための強化学習理論入門』（技術評論社、2020年） 中井悦司 著『TensorFlow と Keras で動かしながら学ぶディープラーニングの仕組み』（マイナビ出版、2019年） 伊藤多一、今津義充、須藤広大、仁ノ平将人、川崎悠介、酒井裕企、魏崇哲 著『現場で使える！Python 深層強化学習入門 強化学習と深層学習による探索と制御』（翔泳社、2019年） 久保隆宏 著『Python で学ぶ強化学習 改訂第二版』（講談社、2019年） 谷岡広樹、康？ 著『いちばんやさしいディープラーニング-入門教室』（ソーテック社、2018年） 太田満久、須藤広大、黒澤匠雅、小田大輔 著『現場で使える！TensorFlow 開発入門 Keras による深層学習モデル構築手法』（翔泳社、2018年） 岡谷貴之 著『深層学習』（講談社、2015年） 皆川雅章、三上貞芳 訳 Richard S. Sutton、Andrew G. Barto 著『強化学習』（森北出版 2000年、最新英語版 2018年）		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	デジタル技術科目群	科目名	AI デザイン特論			教員名	林 久志
		(英文表記)	Artificial Intelligence Driven Design				

概要	<p>社会システムをデザインする上で重要なこととしては、社会を構成する各個人にどのようなメリットがあり、各個人あるいは分散配置された各人工知能 (AI) あるいは各サービス提供者などが自分の意思で自分のメリットを追求して行動した結果、社会全体としてどのような現象が創発され、どのような影響があるのかを評価する必要がある。従来の社会科学・工学の分野では、このような巨視的な秩序と個人行動との関連性について評価することが難しかったが、コンピュータと AI 技術の発展により、ミクロレベルのシミュレーション、モデルの修正、パラメタの最適化を繰り返して、仮説、制度、社会インフラ等を評価し、改良することができるようになってきた。本講義では、これらの技術のうち、特に、文系の社会科学的にも利用しているマルチエージェントシミュレーションと、パラメタの最適化技術である進化計算・群知能に注目して、社会システムのモデリング方法の基礎を学ぶ。</p>		
目的・狙い	<p>AI 技術のうち、特に社会システムのデザインに役に立つマルチエージェントシミュレーションや進化計算・群知能の概念やモデリング方法を学ぶ。既存のライブラリやシミュレータを利用する場合があるが、それらのツールや特定のプログラミング言語を使いこなすことが目的ではなく、基本的な概念やモデリング方法の本質を理解することが目的である。マルチエージェントシミュレーションや進化計算・群知能を学習することにより、以下のスキルが習得できる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 各個人（エージェント）の行動パターンのモデリング 2. 各個人やインフラ・環境・制度等の各種パラメタの最適化や適応的学習のためのモデリング <p>これらのスキルを駆使して、多様性のある社会におけるシステムをミクロレベルからデザイン・最適化することを目指す。</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	コンピュータの基本的な操作ができること。基本的な数学および手続き型プログラミング言語の基礎を理解できること。		
到達目標	上位到達目標		
	マルチエージェントシミュレーションや進化計算・群知能の技術を用いて社会システムをデザインするために、社会システムの構成要素をミクロレベルからモデリングできるようになること。		
	最低到達目標		
	マルチエージェントシミュレーションや進化計算・群知能の概念を理解できるようになること。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	初回と演習日はリアルタイム講義を基本とする。
	録画視聴型	○	座学は録画講義を基本とする。 質疑応答は Manaba の掲示板を活用する。
授業外の学習	レポート作成（2 回）と配布資料の復習		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	講義を基本とし、既存のシミュレータ等を用いた実習とグループワークによるモデリングを体験する。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	イントロダクション： 社会システム設計に向けた社会シミュレーションと最適化の概論を学ぶ。	[ハ]
	第2回	マルチエージェントシミュレーション1： エージェントの意思決定方法とマルチエージェントシミュレーションの概要を学ぶ。	[録]
	第3回	マルチエージェントシミュレーション2： マルチエージェントシミュレータのしくみとセルオートマトンを学ぶ。	[録]
	第4回	マルチエージェントシミュレーション3： 演習： マルチエージェントシミュレータ（NetLogo）を学ぶ。	[録]
	第5回	マルチエージェントシミュレーション4： 演習： マルチエージェントシミュレータ（NetLogo）を学ぶ。	[ハ]
	第6回	マルチエージェントシミュレーション5： 演習： 社会システムのモデリングをグループワークで行う。	[ハ]
	第7回	マルチエージェントシミュレーション6： 待ち行列モデル、渋滞モデル、交通・歩行者シミュレーションモデルを学ぶ。	[録]
	第8回	進化計算・群知能1： 局所最適解を探すための山登り法や勾配法、広域最適解を探すための焼きなまし法（SA）、多数のエージェントが解を探すマルチスタート、などの最適化アルゴリズムを学ぶ。	[録]
	第9回	マルチエージェントシミュレーション7： 演習： 社会システムモデリングのグループワークの発表会を行う。	[ハ]
	第10回	進化計算・群知能2： 進化計算の代表的な最適化アルゴリズムである遺伝的アルゴリズム（GA）を学ぶ。	[録]
	第11回	進化計算・群知能3： 進化計算の代表的な最適化アルゴリズムである遺伝的アルゴリズム（GA）を学ぶ。	[録]
	第12回	進化計算・群知能4： 演習： 進化計算のモデリングをグループワークで行う。	[ハ]
	第13回	進化計算・群知能5： 生物（鳥、蜂、虫、蟻、カッコーなど）の群知能や音楽などを模倣した最適化アルゴリズム（PSO, ABC, FA, ACO, CS, HS など）を学ぶ。	[録]
	第14回	進化計算・群知能6： 生物（鳥、蜂、虫、蟻、カッコーなど）の群知能や音楽などを模倣した最適化アルゴリズム（PSO, ABC, FA, ACO, CS, HS など）を学ぶ	[録]
	第15回	進化計算・群知能7： 演習： 進化計算モデリングのグループワークの発表会を行う。	[ハ]
	試験	グループワークおよび終了後のレポート課題により評価する。 15 回目の発表会の続きを試験の時間を使って実施する場合もある。	
成績評価	グループワークおよび終了後のレポート課題：50 点×2		
教科書・教材	講義で利用するスライドを配布する。		
参考図書	Uri Wilensky, William Rand 著『An Introduction to Agent-Based Modeling: Modeling Natural, Social, and Engineered Complex Systems with NetLogo』（The MIT Press、2015 年） 山影進 著『人工社会構築指南』（書籍工房早山、2008 年） 大谷紀子 著『進化計算アルゴリズム入門 生物の行動科学から導く最適解』（オーム社、2018 年） 伊庭齊志 著『人工知能の創発』（オーム社、2017 年） 伊庭齊志 著『人工知能と人工生命の基礎』（オーム社、2013 年） 柳浦睦憲、茨木俊秀 著『組合せ最適化』（朝倉書店、2001 年）		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	デジタル技術科目群	科目名 (英文表記)	データサイエンス特論 Data Science			教員名	岩政 幹人 大久保 友幸

概要	データサイエンスは、「データを科学的に扱う」学問分野である。本講義では、様々なデータの収集、可視化、解析、マイニング、評価等の手法に関する知識とスキルを学ぶ。この際、統計学、コンピュータ科学、システム工学論、信号処理論などの観点から、データに対して仮説発見、仮説検証が行えるよう、客観的・定量的評価を行う資質を身に付ける。さらに、データサイエンスの実習を通じて、この体系を理解し、実践を学ぶ。		
目的・狙い	<p>データ（自然現象、社会システム、物理システム、経済システム等）が持つ有用な特徴を見出し、課題解決に結びつけるための仮説を立てる能力、およびそれを検証するスキルを適切に使いこなせる能力を取得することを目的とする。スキルを実践するためのツールは、Python スクリプト言語とその代表的なパッケージ(SciPy, scikit-learn, OpenCV 等)を用いる。ただしプログラミングはほとんど行わず、それらを使いこなし、得られる結果を適切に評価できる能力を身に付けることを主眼とする。</p> <p>この目的のもとで、本講義の狙いは、次にある。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. データが有する特徴や意味を、その背景から体系的に推定し、意味のある仮説を立てられる能力を習得する。 2. 他者に分かるようなデータの可視化技法を習得する。 3. データの分析手法を習得する。 4. 分析結果の評価に関して、その表現法と説明スキルを習得する。 5. 他者のデータ分析結果に対し、バイアスの混入や誤差等について検討できる能力を取得する。 		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	自立した学習が必要である。このためプログラム解説は原則行わないので（プログラムは提供する）、わずかでもよいので、プログラミングの経験があることが望ましい。Python の文法説明は行わない、自学習に委ねる。コンピュータ操作について基礎的なスキル（ファイル操作、全角・半角の区別、Excel と Word の操作等）があること。基本的な数式は幾つか出現する。数式を用いた解析は行わないが、数式記号や変数を読めること、統計の基礎的な知識を有することが望ましい。Python 実行は、Google Colaboratory を用いる。大学 PC での利用を想定するが、個人所有の PC への Python 実行環境の設定は個人の責任で行うこと。		
到達目標	上位到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・データ解析から仮説発見、仮説検証を行える。 ・データ解析結果から、科学的、社会的、経済的に意味ある説明ができるようになる。 		
	最低到達目標		
	<ul style="list-style-type: none"> ・与えられたデータに対して適切な解析手法を適用、実行できるようになる。 ・データの可視化が行える。 		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	授業参加が原則であるが、仕事上の欠席は個別対応のため事前相談されたし
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・第 1 回目講義に臨む以前に参考図書などでデータサイエンス分野の概要をつかむこと。 ・データを社会でどのようにに利活用し、どのような価値があるかの背景調査、文献調査を行うこと ・データサイエンススキルを獲得するための反復練習を自習で行うこと 		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	manaba(LMS)に掲載の「授業の進め方」の説明文に従い、講義の予習と準備を行っておくこと。授業の実施方法が変わる場合には、manaba に変更の内容を掲示する。授業コンテンツの配市、およびレポートなどの提出は、manaba を利用する。manaba を用いた視聴テストや小テストを授業中に行う。やむをえない事由で授業参加できない場合には、事前申請としてメールで相談すること。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	・講義ガイダンス・ソフトウェアの使い方とレポート作成作法 データサイエンスを概観する。データサイエンスの試行、データの収集、入出力変換などに関する基本操作を習得する。さらにレポート作成方法について説明する。	[ハ]
	第2回	・データの取得と操作 様々なデータの取得の仕方、加工の仕方を学ぶ。さらに Python の pandas パッケージを用いたデータフレームの操作やクロス集計について学ぶ。	[ハ]
	第3回	・データの視覚化 様々なデータに適した可視化技法を学ぶ。視覚化の実践を通じ、視覚化の意義について考察する。	[ハ]
	第4回	・統計分析の基礎 初めに確率論の基礎としての基本統計量を学ぶ。次に、区間推定、仮説検定などについて学ぶ。	[ハ]
	第5回	・回帰分析1 単回帰分析、多項式モデルなどについて学ぶ。	[ハ]
	第6回	・回帰分析2 前回の回帰分析では表現しきれない、データに対する回帰分析手法として、重回帰分析や一般化線形モデルを用いた分析を学ぶ。	[ハ]
	第7回	・パターン認識1 データの識別方法として、線形判別法などについて学ぶ。	[ハ]
	第8回	・パターン認識2 データの識別方法として、クラスタリングの手法、その表現方法について学ぶ。	[ハ]
	第9回	・動的システムの表現 微分方程式で振る舞いが表されるような動的システムについて、1 次応答、2 次応答の見方を説明し、その分析に関する知識とスキルを学ぶ。	[ハ]
	第10回	・時系列データの推定と予測 時系列データの特徴を知ったうえで、統計的な推定を通じた予測モデルの求め方を学ぶ。	[ハ]
	第11回	・周波数分析 データが有する特徴量が周波数成分やパワースペクトルで表される（周波数領域）ことを学んだ後に、周波数領域でのデータ分析について学ぶ。	[ハ]
	第12回	・画像処理 画像処理の基礎（2 値化、エッジ処理）、動画の取得・処理などについて学ぶ。	[ハ]
	第13回	・メディア情報処理 マイク・カメラから得られる音声情報や画像情報に対するデータ処理法と応用例を学ぶ。	[ハ]
	第14回	・位置情報処理 測位方法の基礎を知った上で、得られる位置情報・空間情報に対するデータ処理の応用例を学ぶ。	[ハ]
	第15回	・センサデータ処理 製造装置や生体などに設置するセンサから得られるセンサデータに対する処理法や IoT などの応用例を学ぶ。	[ハ]
	試験	レポート（中間3回＋最終1回）で代替する。	[対]
成績評価	次のポイントで評価する(合計100点満点) ・中間レポート評価20点×3回＝60点 ・最終レポート40点、講義終了後に、これまで獲得した知識・スキルを総合的に評価		
教科書・教材	授業の進め方・教材コンテンツとも、manaba 上にアップしたコンテンツとして提供する。		
参考図書	・橋本・牧野：データサイエンス教本、オーム社 ・東京大学教養学部統計学教室：統計学入門(基礎統計学 I)、東京大学出版会 ・松井他：統計モデルと推測（データサイエンス入門シリーズ）、講談社 ・阿部：データ分析に必須の知識・考え方 統計学入門、ソシム ・Wes McKinney: Python によるデータ分析入門 NumPy、pandas を使ったデータ処理、オライリージャパン		

コース名	創造技術コース	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	デジタル技術科目群	科目名 (英文表記)	データサイエンス特別演習 Data Science Practice			教員名	浅野 浩美 小畑 孝弘 宮津 和弘

概要	<p>データを分析し、分析から得られた結果や知見を活用する「データサイエンス」の実践能力を身に付けるためには、統計解析に関する知識だけでなく、1. 現状把握に基づき課題を設定するための能力、2. 分析を行うツールを使いこなしてデータ分析を推進するための能力、3. データ分析を通じて得られた内容を周囲に伝えるコミュニケーション能力など、さまざまな能力について学び、トレーニングをする必要がある。</p> <p>本授業では、現場の問題解決に役立てることにつながるデータの活用方法、データサイエンスについて、事例と演習を通して実践的な知識とスキルを修得する。</p>		
目的・狙い	<p>本講義では、各種応用分野でデータサイエンスを活用し、社会で活躍されている 3 人の講師を招待し、各種応用分野を念頭にデータサイエンス技術の実践方法を学び、コンピュータを用いた演習を行う。特に、以下の内容を学ぶ（各 5 回）：</p> <p>A: マーケティングにおけるデータ分析 B: 資産運用分野で活用している AI C: テキストマイニング</p> <p>以下の 3 つの目的・狙いで講義を進める：</p> <p>A: 現代マーケティングでは、データにもとづく消費者の理解が不可欠であり、マーケティング戦略やキャンペーンが策定される。本分析では、さまざまな市場データから消費者を理解するための代表的な分析手法について学び、マーケティングへの応用を議論する。</p> <p>B: 資産運用業務で活用している AI の手法（深層学習による時系列データ分析、実数値 GA による最適化など）を中心に紹介し、演習を通して内容の理解と応用力を高める。</p> <p>C: テキストマイニングの手法について学び、KH Coder を用いて演習を行うとともに、事例を通じて、どのようにテキストデータやその分析結果を活用しているかについて理解する。</p> <p>なお、3 人の講師のスケジュール調整により、A と B と C の講義の順番は変更する場合がある。</p> <p>また、一部の講義を録画講義に変更する場合がある。</p>		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<p>初歩的なプログラミングの知識を有すること 高校数学の基礎を理解していること</p>		
到達目標	上位到達目標		
	各応用分野にデータサイエンス技術を適用できるようになること。		
	最低到達目標		
	各応用分野におけるデータサイエンス技術の適用方法を理解すること。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	演習はリアルタイムで行うことを基本とする。
	録画視聴型	○	一部の座学は録画講義にする。
授業外の学習	<p>授業中に扱った演習問題を解けるようになること。 レポート課題を 3 回提出すること。 各非常勤講師への質問は講義中・講義後をお願いします。（メールでの質問はご遠慮ください。）</p>		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	土曜日に 2 コマ連続で講義を実施する。R、Python、Tensorflow、Keras、KH Coder を用いて演習を行う。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
授業の計画	第1回	A1: マーケティングにおける調査とデータ収集の概要について学ぶ。	[録]
	第2回	A2: ブランド選択モデル（ロジット分析）について学び、演習を行う。	[ハ]
	第3回	A3: 市場発見と知覚マップ（因子分析）について学び、演習を行う。	[ハ]
	第4回	A4: 消費者の来店間隔（生存時間分析）について学び、演習を行う。	[ハ]
	第5回	A5: マーケットバスケットとクロスセリング（アソシエーション分析）について学び、演習を行う。	[ハ]
	第6回	B1: 勾配ブースティングについて学び、演習を行う。	[ハ]
	第7回	B2: 実数値遺伝的アルゴリズム等進化計算について学び、演習を行う。	[ハ]
	第8回	B3: 深層学習の基本的なモデルについて学ぶ。	[ハ]
	第9回	B4: 深層学習の基本的なモデルについて演習を行う。また RNN や LSTM について学ぶ。	[ハ]
	第10回	B5: 深層学習の RNN や LSTM について演習を行う。	[ハ]
	第11回	C1: テキストマイニングとは何かについて学ぶ。	[ハ]
	第12回	C2: 分析のしくみについて学び、テキストデータを用いて演習を行う。	[ハ]
	第13回	C3: コーディングについて学び、テキストデータを用いて演習を行う。	[ハ]
	第14回	C4: テキストマイニング手法の活用事例を紹介し、データを用いて演習を行う。	[ハ]
	第15回	C5: 演習課題の分析結果をもとに、分析結果の解釈のしかたについて検討する。	[ハ]
	試験	試験の代わりに各 A,B,C に関するレポート課題を計 3 回出題する。	
成績評価	100 点満点のレポート課題を 3 回出題し、平均点により評価する。 成績の異議申し立ては事務を通して書面で行ってください。 (非常勤講師へのメールによる成績の異議申し立てはご遠慮ください。)		
教科書・教材	教材は適宜配布する。		
参考図書	参考書は適宜紹介する。		

V イノベーションデザイン特別演習

イノベーションデザイン特別演習 1

イノベーションデザイン特別演習 2

コース名	創造技術コース	必修・選択	必修	単位	6	学期	1Q、2Q
科目群	イノベーションデザイン特別演習	科目名 (英文表記)	イノベーションデザイン特別演習 1 Advanced Exercises: Innovation for Design and Engineering 1			教員名	コース担当教員

概 要	PBL(Project Based Learning)を実施する。 PBL プロジェクトは 1 年を通して設計するが、単位は前期、後期に分けて成績をつける。 イノベーションデザイン特別演習 1 は前期 (1Q、2Q) に実施する。 内容は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照のこと
目的・狙い	入学時に有している知識に加え、1 年次に修得した知識を応用して、企業や組織での実業務を実施できる「ものづくり人材」(商品企画責任者と開発責任者の職能を兼ね備え、商品企画の提案から製品設計、製造にいたるプロダクトサイクルを統括してマネジメントできる人材)を育成する。ものづくり人材に期待されるコンピテンシーを、プロジェクト活動を通じて身に付ける。 専門職大学院大学にふさわしいスキル・コンピテンシーを修得する。
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	修了要件として認められる単位を 22 単位以上 (前年度の 10 月入学者は 12 単位以上) 修得していること。
到達目標	上位到達目標 レベル 5 商品企画の提案から製品設計、製造にいたる様々な業務を単独で行うことができ、かつ関係者を指導できる。 最低到達目標 レベル 3 商品企画の提案から製品設計、製造にいたる業務を自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
授業外の学習	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
成績評価	Self Assessment の記載をベースに、週報、成果物、活動実績を参照して、総合判断する。 プロジェクトごとの評価尺度は「PBL プロジェクト説明書」の記述に基づく。 主担当教員と、2 人の副担当教員で成績案を作成し、全教員による PBL 成績判定会議で審議し確定する。
教科書・教材	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
参考図書	「PBL プロジェクト説明書」を参照。

コース名	創造技術コース	必修・選択	必修	単位	6	学期	3Q、4Q
科目群	イノベーションデザイン特別演習	科目名 (英文表記)	イノベーションデザイン特別演習 2 Advanced Exercises: Innovation for Design and Engineering 2		教員名	コース担当教員	

概 要	PBL(Project Based Learning)を実施する。 PBL プロジェクトは 1 年を通して設計するが、単位は前期、後期に分けて成績をつける。 イノベーションデザイン特別演習 2 は (3Q、4Q) に実施する。 内容は、別途配布する「PBL プロジェクト説明書」を参照のこと。
目的・狙い	入学時に有している知識に加え、1 年次に修得した知識を応用して、企業や組織での実業務を実施できる「ものづくり人材」(商品企画責任者と開発責任者の機能を兼ね備え、商品企画の提案から製品設計、製造にいたるプロダクトサイクルを統括してマネジメントできる人材)を育成する。ものづくり人材に期待されるコンピテンシーを、プロジェクト活動を通じて身に付ける。 専門職大学院大学にふさわしいスキル・コンピテンシーを修得する。
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	イノベーションデザイン特別演習 1 を履修していること。
到達目標	上位到達目標
	レベル 5 商品企画の提案から製品設計、製造にいたる様々な業務を単独で行うことができ、かつ関係者を指導できる。
	最低到達目標
	レベル 3 商品企画の提案から製品設計、製造にいたる業務を自身の専門領域を中心に単独で行うことができる。
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
授業外の学習	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
成績評価	Self Assessment の記載をベースに、週報、成果物、活動実績を参照して、総合判断する。 プロジェクトごとの評価尺度は「PBL プロジェクト説明書」の記述に基づく。 主担等教員と、2 人の副担当教員で成績案を作成し、全教員による PBL 成績判定会議で審議し確定する。
教科書・教材	「PBL プロジェクト説明書」を参照。
参考図書	「PBL プロジェクト説明書」を参照。

全コース共通

I 産業技術研究科科目群

国際経営特論

国際開発特論

Technical Writing in English

DESIGN [RE] THINKING

専攻名	全コース共通	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	産業技術研究科科目群	科目名 (英文表記)	国際経営特論 International Entrepreneurship Studies			教員名	前田 充浩

概要	<p>現在、アジア／アフリカ諸国を含む世界の大半の諸国は猛烈な勢いで経済成長を進めている。2015 年 12 月 31 日には AEC（ASEAN 経済共同体）がスタートした。20 世紀中は「落ちこぼれ」と呼ばれたサハラ以南のアフリカでも順調な経済成長が続いている（ここ四半世紀で一人当たり GDP を低下させた「器用な」国は、日本等ごくごく一部である。）。21 世紀とは、世界全体が急成長する時代なのである。2015 年に国連総会が採択した SDGs（Sustainable Development Goals）では、端的に「Leave No One Behind」つまり、世界の全ての国／地域を経済成長させる、と言っている。</p> <p>本講義は、このような変化の中で、受講者に、今日のアジア／アフリカにおける起業／ビジネス展開のために必要な知識、能力を付与するものである。</p> <p>起業／ビジネス展開に関する他の講義と比べると、本講義は以下の点に明確な特徴がある。</p> <p>第 1 は、ビジネスを行う場が日本国内ではなく、アジア／アフリカを前提としている。現在急成長を遂げつつある多くのアジア／アフリカ諸国には、驚くようなビジネス機会が数多く転がっている。それらをモノにしない、というのは、あまりにも残念ではないか。勿論、ビジネスの実務は、日本国内のようにはいかない。思いもしなかったような困難な問題があるだろう。しかしながら、そのような困難に敢然と立ち向かう、それも人生ではないか。そのために必要な知識、能力をこの講義で付与する。</p> <p>第 2 は、起業のための具体的な手法として、特にファイナンス面に重点を置くことである。言うまでもなく、Industrie4.0、Society5.0 においては、ファイナンス産業自体が時代を牽引するイノベーションの源である。日本国内で起業／ビジネスを行う場合には、ファイナンスについてはあまり選択肢がない（結局、銀行（間接金融）に頭を下げることになる。）。しかしながら今日、日本を一步出れば、さまざまな人々がさまざまな新しいファイナンスの方式を考案し、爆発的な成功を収めている人々は少なくない。すなわち今日の世界では、「良いファイナンス」を得られるかどうかはビジネスの勝負の要である。ものづくりのやり方、ビジネスの内容等を考える労力と少なくとも同等の労力を、ファイナンスに関して投入すべきなのである。</p> <p>ファイナンスに関するクリエイティビティとは、ファイナンスそのものに関するクリエイティビティに加えて、ビジネスを行う分野の拡大も含む。例えば、講義で説明する PPP（Public Private Partnership）という考え方は、「市場の失敗」ゆえにビジネスが成立しない案件で、いかにしてビジネスを成立させるか、という手法であり、21 世紀においてはアジア／アフリカのインフラ案件等で発達している。</p> <p>本講義では、特に開発ファイナンス（Developmental Finance）という手法について集中的に見ていく。これは、いわゆる市場の失敗が発生する分野に対する譲許的ファイナンスのことである。市場の失敗が発生する分野であるため、従来は政府の役割、とされて、ビジネスの対象とは見なされることが少なかった。21 世紀においてはこの分野で爆発的な技術開発が相次いでおり、今後の大きなビジネス分野となることが予想されている。一方で、現時点では世界の中で、開発ファイナンスに関するビジネスの専門家は、まだまだ少ない。今がチャンスである。あと 10 年も、いや 5 年もすると、多くの人の知るところとなり、最早レントは取れなくなるであろう。</p> <p>そもそも今日では、国民国家を核とする近代世界システム自体が大きく変容しつつあるのである。その中で折角ビジネスに一生を投じようとするのであれば、晴れの舞台を、狭く、かつ成長率が「世界屈指に低い」日本に限定する必要がどこにあるのか。広くアジア／アフリカに目を向けよう。広大な世界に、とんでもない大チャンスがごろごろと転がっている。</p> <p>そのチャンスをものにできるかどうかの鍵は、第 1 に、アジア／アフリカの現在の動きについてよく知ること、第 2 に、ファイナンスについて、ライバルを一步先んじる知見を得ることである。</p>
目的・狙い	<p>この講義は、学習者が、「世界全体が急成長する」21 世紀という文明史上の特別な時期において適切に「天職」を全うできるための、ものの考え方の枠組みを獲得するとともに、適切な実務能力を獲得することを目的とする。</p> <p>具体的には、講義により特に以下の点に関する知見を獲得することができる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域機構及び FTA（Free Trade Agreement）／EPA（Economic Partnership Agreement）等、日々ニュースを賑わす現下の世界経済の重要な動きに関する適切な理解 2. 本学が誇るグローバル・ネットワーク（例えば、ASEAN＋日中韓印の大学のネットワークである APEN（Asia Professional Education Network）、AIIT 経営倫理研究所（ERISE）が毎年世界数十か国以上で開催している共催セミナー、SADC-dfrc（南部アフリカ開発共同体開発銀行協会）等世界各地の地域共同体等との連携等）を全面的に活用したアジア／アフリカの現状と発展戦略に関する適切な理解 3. 現下のビジネス（プロジェクト）に適用な最先端のファイナンス手法、特に開発ファイナンス及び PPP（Public Private Partnership）に関する他を先んじた理解 <p>さらに演習により、</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. アジア／アフリカにおけるビジネス（プロジェクト）遂行のための基礎的企画立案能力を獲得することができる。
履修条件 (履修数の上限、要求する前提知識等)	<p>アジア／アフリカを中心とする発展途上国の経済発展への貢献に関心があること。</p> <p>（将来、アジア／アフリカにおけるビジネスに携わる希望があれば、更に望ましい。起業の予定があれば、更に更に望ましい。）</p>
到達目標	<p>上位到達目標</p> <p>アジア／アフリカを中心とする海外（発展途上国）における企業設立、運営に関する十分な実務能力を獲得し、実現性のある経営計画を策定できるようになる。</p> <p>上記企業の経営の中核を担うことができるようになる。</p> <p>最低到達目標</p> <p>アジア／アフリカを中心とする海外（発展途上国）における企業設立、運営に関する基礎知識を理解し、経営計画の必要項目を記述できるようになる。</p> <p>上記企業の経営の補佐ができるようになる。</p>

授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	毎回、講義の時点での世界情勢に関する白熱の議論を行う。世界情勢の評価に正解も間違いもない。ぜひ、積極的にあなたの見解を述べていただきたい。あなたが大きく成長する絶好の機会である。
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	毎回、次の授業に関連する課題を指示するので、事前に考えを整理し、次回に発表すること。		
授業の進め方 (グループワーク方式 など、進め方の特徴)	<p>第1部は講義であり、「世界全体が急成長する」21世紀の本質を理解するための幾つかの理論的な方法論を提示する。具体的には、地域機構及びFTA（Free Trade Agreement）／EPA（Economic Partnership Agreement）、情報社会学近代化モデルに依拠する発展戦略（Developmental Strategies）分析、本学の誇るグローバル・ネットワークを駆使したアジア／アフリカの現状、グローバル生産ネットワークに関する分析等である。</p> <p>第2部も講義であり、学習者がビジネス、起業を行う際に用いることのできる開発ファイナンス等最先端の様々な形態のファイナンス手法を提示する。</p> <p>第3部は演習であり、学習者が、具体的なアジア／アフリカのビジネス・プロジェクトの企画立案を行い、指導を受ける。</p>		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	FTA（自由貿易協定）（EPA（経済連携協定））という制度の概要を理解する。ここ数年、最もホットな 이슈であり、日々のニュースを理解するのに不可欠である。（講義）	[対]
	第2回	講義の時点における FTA（EPA）の最新の動きを理解する（シラバス執筆時には確定できない。2021年度はRCEPで、2020年度はCPTPPであった。今回も、講義の時点では熱い 이슈となっているものと思われる。）（講義）	[対]
	第3回	地域機構の代表例として ASEAN を取り上げ、1967年の ASEAN 設立から 1992年の AFTA-CEPT を経て 1997年のアジア通貨危機に至る経緯を理解する。（講義）	[対]
	第4回	ASEAN の、アジア通貨危機から 2015年の AEC（ASEAN Economic Community）2015に至る経緯を理解する。（講義）	[対]
	第5回	発展戦略の基本的な構造を理解する。人民がどんなに汗水たらして労働に励んでも、国家の発展戦略が間違っていれば、経済成長はない、のである。国家は正しい発展戦略を採用しなければならない。（講義）	[対]
	第6回	発展戦略の成否を決定する「世界の動向」を見極める枠組みとして、国際経済学のグローバル生産ネットワーク理論を取り上げ、それに基づく世界経済の変化と発展戦略の関係を理解する。（講義）	[対]
	第7回	発展戦略の成否を決定する「世界の動向」を見極める枠組みとして、情報社会学近代化モデルを取り上げ、それに基づく近代文明の変化と発展戦略の関係を理解する。（講義）	[対]
	第8回	現下のファイナンス面におけるイノベーションが期待される分野として開発ファイナンスを取り上げ、その基本的な仕組みを理解する。開発ファイナンスとは、赤字になるため通常ではビジネスが成立しないプロジェクトに対するファイナンスである。あなたのライバルは、まだこれをビジネス化するという発想に気づいていないであろう。（講義）	[対]
	第9回	開発ファイナンスの典型として、中小企業ファイナンスとインフラ・ファイナンスを取り上げ、その構造を理解する。（講義）	[対]
	第10回	開発ファイナンスの分野における世界最先端の動きについて、（何と！日本ではなく！）アフリカ等の事例を理解する。アフリカで世界最先端の取り組みがなされているのである。視野を広く持って、かつ「先入観に囚われないで」ビジネス・チャンスを探ることが必要である。（講義）	[対]
	第11回	金融システムとは独立した資本システム、という考え方（教科書参照のこと）を理解し、それに基づく近代の金融システム＋資本システムの経緯を理解する。（講義）	[対]
	第12回	アジア／アフリカにおける金融システム＋資本システム構築をビジネスの対象として捉える視座を獲得し、先行する幾つかの動きを理解する。（講義）	[対]
	第13回	アジア／アフリカのビジネス・プロジェクト企画書の発表予行（成績評価に反映しない）	[対]
	第14回	アジア／アフリカのビジネス・プロジェクト企画書の発表予行（成績評価に反映しない）	[対]
	第15回	アジア／アフリカのビジネス・プロジェクト企画書の発表（成績評価の対象）	[対]
	試験	筆記試験を行う	[対]
成績評価	筆記試験 50%、アジア／アフリカのビジネス・プロジェクト企画書の発表 50%		
教科書・教材	公文俊平＋前田充浩『応用情報社会学』、世界応用情報社会学会出版局、2021 前田充浩『金融植民地を奪取せよ』、プレジデント社、2010 倉都康行『金融史の真実—資本システムの1000年』、ちくま新書、2014 倉都康行『危機の資本システム』、岩波書店、2018 西村英俊『アセアン・ライジング』、勁草書房、2018 リチャード・ボールドウィン『世界経済大いなる収斂』、日本経済新聞出版社、2018		
参考図書	A.ネグリ、M.ハート『帝国—グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』水嶋一憲訳、以文社、2003 アンドレ・グンダー・フランク『リオリエント—アジア時代のグローバル・エコノミー』山下範久訳、藤原書店、2000 ジョヴァンニ・アリギ『北京のアダム・スミス』中山智香子訳、作品社、2011		

専攻名	全コース共通	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	産業技術研究科科目群	科目名 (英文表記)	国際開発特論 International Development Studies			教員名	前田 充浩

概要	<p>国際開発、とは、発展途上国（一人当たりがおおむね 14,000 ドル未満の国）の経済発展を進めること、を指す。ご存知 SDGs（Sustainable Development Goals）はその典型である。その中で、先進国（一人当たり GNI が概ね 14,000 ドル以上の国）が発展途上国に対して行う、各種の経済成長支援政策のことを、開発援助（経済協力）と呼ぶ。</p> <p>開発援助論の講義は、本学のみならず、世界中の大学で行われている。それらと比べて本講義の特徴は、通常の大学で行われているオーセンティックな開発援助論に加えて、あと 2 つ、「ここでしか聴けない」内容を提供することである（一粒で 3 度．．．）。</p> <p>第 1 の内容は、通常の、オーセンティックな開発援助論である。第 2 次世界大戦以降現在の SDGs（Sustainable Development Goals）に至る世界の開発援助の歴史、オーセンティックな開発援助論の理論的裏付けとなる新古典派成長会計（開発経済学）等を講義する。将来開発援助関係の仕事（政府関係機関、国際機関、世界銀行・アジア開発銀行等の MDBs（Multilateral Development Banks：多国籍開発金融機関、NPO 等）を目指す学生に、必須の知識と能力を付与するものである。これらのオーセンティックな開発援助論は、基本的に「先進国は豊かで、発展途上国の人々は貧しくて可哀そうだから助けてあげる」という考え方に基いている。Beautiful Mind とでも呼ぼうか。</p> <p>第 2 の内容は、AIIT ならではの、他では聴けない内容である。すなわち、国際関係論の視点による開発援助論である。考えてみれば当たり前の話で、開発援助は、先進国が国民のカネを用いて行うことである。そこに国益の視点が入らないわけがないではないか。講義で紹介するように、実は OECD 等の国際機関では、各国が開発援助を国益のために使っていることを正面から認めて、その調整が行われているのである。すなわち開発援助は、単に発展途上国の貧しい人々を助ける、という機能とは別に、世界システムにおける大国間の関係を左右する、という大きな機能がある。それは開発経済学では分析できず、どうしても国際関係論、世界システム論等を用いなくては分らないのである。</p> <p>開発援助は実は国益増大の側面が強いことについては、今日では中国が見事に示していて、またそれをアメリカ等が強く非難しているため、誰の目にも明らかになってきている。Beautiful Mind だけでは、もう、どうにもこうにも。</p> <p>この第 2 点目だけでも大きな話である。一方本講義では、それらに加えて、第 3 の内容がある。それは、何と！開発援助を用いたビジネスの作り方である。開発援助とは、突き詰めればカネの流れ（国際金融）である。そのカネは、講義で説明するように開発ファイナンスという特殊な（譲許的な）ものであるものの、カネであることには変わりはない。カネの流れあるところにビジネスあり！したがって、開発援助を用いたビジネスを考えることは十分に可能である。「ええっ、でもそんな話、聞いたことがありませんけれど」。それは、開発ファイナンスのカネの内容を知っている人が、各国とも政府関係者に限定されているためである。その知見を講義で披露する。勿論、普通のカネを扱うビジネスに比べて、いろいろと難しい。一方で、マスターしてしまえば、世界の中で競争相手は極めて少ないのである。</p> <p>開発援助を「カネの流れ」として捉えてそこにビジネス機会を見出していく姿勢は、今日においては、第 1 の内容の立場、すなわち正統派の開発援助論においても邪（よこしま）なものではない。20 世紀中とは異なり、殆ど全ての発展途上国が順調に産業化、経済成長を進めている 21 世紀においては、適切なビジネスの展開は経済成長のための基幹的なエンジンであり、そのことは SDGs（対象は 2016～2030 年）においても明確に謳われている。</p> <p>「そんなに良いことならば、どうして AIIT 以外ではそのことを教えないのか。」という疑問はごもっともである。答えは簡単で、開発援助に関するカネの流れはあまりに特殊であるため、その世界にいた人でなければ分かりにくい上に、その世界にいたとしても、それをビジネスの「宝の山」として鋭敏に神経を張り巡らせてきた、という人は大変に少ない、ということである。</p> <p>15 回のうち、12 回は講義を行う。最後の 3 回では、受講者に、実際の開発援助プロジェクトを構想していただく。開発援助プロジェクトなんて、考えたことがない、とおっしゃるだろう。御心配なく。中間発表とそれに対する指導の時間を十分に設けている。</p>
目的・狙い	<p>この講義は、学習者が、今日の発展途上国の発展問題についての理解を深め、開発援助の手法についての実務的な能力を身に付け、さらには具体的な開発援助プロジェクトを企画立案できる能力を獲得することを目的とする。具体的には、学習者はこの授業を通じて以下の知識や・能力を習得できる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 開発援助の基礎的概念と、新古典派経済成長理論に基づく通常の開発経済学上の基礎を理解する（第 1 の内容）。 2. 国際関係論等新たな視点に基づく開発援助の捉え方を理解し、具体的な開発援助プロジェクトに関する実務的な企画立案能力を獲得する。（第 2 の内容） 3. さらに、開発援助のファイナンス面についての実務的知識を獲得し、開発援助を開発ファイナンスという特殊な「カネの流れ」として理解し、ビジネス機会を捉える能力を獲得する（第 3 の内容）。
履修条件 (履修数の上限、要求する前提知識等)	<p>発展途上国の開発問題、開発援助に関心を有すること。平たく言えば、世界全体をより望ましい状態にするために、たとえ微力であっても何かしらの貢献をすることに使命を感じる。特に、発展途上国の現状に強い関心を持ち、「何かをしたい。」という気持ちを持つこと。</p> <p>その「何かをしたい。」という気持ちは、起業等ビジネスの展開であっても全く構わない。発展途上国におけるビジネスの成功は、直截に発展途上国の経済成長に繋がるのである。</p>
到達目標	<p>上位到達目標</p> <p>開発援助の基礎概念の理解の上に、最先端の手法を用いて今日的な課題に対応できる開発援助プロジェクトを企画立案することができるようになる。</p> <p>（第 1 の内容の場合）</p> <p>開発援助関連の機関（国際機関、NPO、政府等）における政策提案（アドボカシー）ができるようになる。</p> <p>（第 2 の内容の場合）</p> <p>ODA を用いた開発援助案件と連携して、適切なビジネスの企画、実施ができるようになる。</p>

授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	最低到達目標		
	開発援助の基礎概念について理解し、従来型の開発援助経済学の枠組みで自らの関心ターゲットに対する開発援助プロジェクトを企画立案することができるようになる。 (第1の内容の場合) 開発援助関連の機関(国際機関、NPO、政府等)における政策立案の補佐ができるようになる。 (第2の内容の場合) ODAを用いた開発援助案件と連携したビジネスの補佐ができるようになる。		
	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	毎回、講義の時点における世界情勢に関する白熱の議論を行う。何が起こるか分からない。起こったことについて、ぜひ、積極的にあなたの考えを述べていただきたい。世界情勢の分析に、正解も間違いもない。あなたが大きく成長するための絶好の機会である。
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	毎回、その回の授業に関連する課題を指示するので、その課題に関する考えをレポートにまとめ、次回授業までに提出すること。		
授業の進め方 (グループワーク方式 など、進め方の特徴)	<p>開発援助(経済協力、国際開発)を通じた発展途上国の発展への貢献を行うための実務能力の習得を、講義と演習の組み合わせによって実施する。</p> <p>内容の第1の柱は、開発援助の基礎概念、開発援助政策史、新古典派経済成長理論等の講義を行う(一般的な開発援助論の講義と共通する内容である)。</p> <p>第2の柱は、国際関係論の視点等にも立脚し、開発援助を「カネの流れ」として捉える視座を獲得し、それに基づくビジネス機会に関する内容の講義を行う(AIIT 独自の内容である)。</p> <p>第3の柱は、演習で、学習者が具体的な開発援助プロジェクトの企画案を策定し、指導を得る。</p>		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第1回	世界の開発援助関連の基本的なレジーム(先進国=OECD v.s. 発展途上国)を理解する。(講義)	[対]
	第2回	ODA、譲許性等開発援助の基本的な概念を理解する。(講義)	[対]
	第3回	第2次世界大戦後から西側の開発援助体制が固まった1970年代までの世界の開発援助の経緯を理解する。(講義)	[対]
	第4回	1980年代から20世紀中の世界の開発援助の経緯を理解する。(講義)	[対]
	第5回	21世紀における世界の開発援助の経緯、特に中国の台頭とそれに対する対応を理解する。(講義)	[対]
	第6回	日本独自の開発援助思想である、Japan ODA Modelについて理解する。(講義)	[対]
	第7回	20世紀中における日本の開発援助の経緯について理解する。(講義)	[対]
	第8回	21世紀における日本の開発援助の経緯について理解する。(講義)	[対]
	第9回	金融地政学(Financial Geopolitics)の考え方と、それに基づく20世紀の国際開発金融の歴史を理解する。(講義)	[対]
	第10回	金融地政学の考え方に基づき、今日の中国の開発援助攻勢を読み解き、将来を展望する。(講義)	[対]
	第11回	正統派開発援助論(新古典派成長会計)を理解する。 (内生的経済成長論まで) (講義)	[対]
	第12回	20世紀末から21世紀にかけての正統派開発経済学における研究の進展を理解する。 (貿易・投資、グッド・ガバナンス等) (講義)	[対]
	第13回	開発援助プロジェクト案のアイディア提示(成績に反映されない)。	[対]
	第14回	開発援助プロジェクト案のアイディアの提示(成績に反映されない)。	[対]
	第15回	開発援助プロジェクト案の発表(成績に反映)。	[対]
成績評価	試験	筆記試験を実施。	[対]
教科書・教材	最終筆記試験 50%、開発援助プロジェクト企画案の発表 50%		
参考図書	公文俊平+前田充浩『応用情報社会学』、世界応用情報社会学会出版局、2021 前田充浩『国益奪還』、アスキー新書、2007 前田充浩『金融植民地を奪取せよ』、プレジデント社、2010 白井早百合『マクロ開発経済学』、有斐閣、2005 村上泰亮『反古典の政治経済学・下巻』、中央公論新社、1992		
	アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『帝国』水嶋一憲他訳、以文社、2003 William Easterly "The White Man's Burden" The Penguin Press、2006 アンドレ・グンター・フランク『リオリエントーアジア時代のグローバル・エコノミー』山下範久訳、藤原書店、2000		

専攻名	全コース共通	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	産業技術研究科科目群	科目名 (英文表記)	Technical Writing in English			教員名	嶋津 恵子

概要	<p>本講義では、論理的な文章を作成するための導入的知識と実践練習を提供する。</p> <p>昨今、SNS 等の広がりにより、だれでも自由に世の中に自身の考えや計画を発信することができるようになった。これは、人のつながりに関し、各段にこれを広げる手段となった。</p> <p>その一方で、第三者による精査されないままの文章が許容される状況を生み、論理的な文章の作成力の低下が問題視されている。</p> <p>本講義では、母国語の能力以上には、第二言語の能力は成長しないことに注目し、日本語の文章を論理的に記述する方法の習得を行い、日本語と欧州の言語との違いを確認し、英語の作文方法につなげる。</p>		
目的・狙い	<p>目的</p> <p>科学的視点に立脚した論理的な文章を作成するスキルを身に着けることで、自身の思考内容を構造化し整理する能力を身に着けることと、他者から理解される情報提供方法を学ぶことで、業務遂行力を向上させる。</p> <p>また、これらを英語でも実践できる糸口をつかむことで、今後ますます広がるグローバル化への対応力育成のきっかけを掴む。</p> <p>狙い</p> <p>論理的な文章を作成するためには、論理的な思考力を身につける必要がある。</p> <p>本授業を通してこの基本能力を習得する。</p> <p>これは AIIT での PBL 等の実践型学習に直接貢献するだけでなく、社会人学生にとっての即戦力強化につながる。</p> <p>修得できる知識単位：</p> <p>(A3) K-09-22-01 経営・組織論（レベル4）行動科学（コミュニケーション、テクニカルライティング、プレゼンテーション）</p>		
履修条件 (履修数の上限、要求する前提知識等)	<p>論理的な文章の作成指導を受けたことのない方。</p> <p>論文投稿するも査読合格に至らない方。</p> <p>学術ジャーナル採択経験のある者、英検 1 級や TOEIC800 点以上取得者は受講者として想定していない。</p>		
到達目標	上位到達目標		
	教員の指導を受けながら英文ジャーナルに採択される論文を執筆できる。		
	最低到達目標		
	過去に自身が作成した日本語の研究計画書等を論理的な文章に更新できる。		
授業実施形態 (単一または複数から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	<p>毎週、偶数回目の授業に課題を提示します。</p> <p>締め切りまでの提出が必須です。</p> <p>未提出（締め切りにまでに提出できなかったもの）は減点対象になります。</p> <p>業務の都合等特別な事情がある場合は事前に連絡の上、相談してください。</p>		
授業の進め方 (グループワーク方式など、進め方の特徴)	15 sessions + a final examination.		
授業の計画	回数	内容	授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	<p>オリエンテーション</p> <p>講義履修の判断材料を提供する。</p> <p>シラバスの記載に従って講義内容を紹介し、昨年度の履修生の声を紹介する。</p> <p>また、授業の導入として“What is Technical Writing ? ”を解説する。</p>	[ハ]
	第 2 回	<p>ヨーロッパ言語と日本語の特徴差を Technical Writing に向いているか不向きかの観点で議論する。</p> <p>教科書：作文術の心得</p> <p>§1 書き言葉は「外国語」、§2 書くとは「引用」、§3 文章指南書の教を鵜呑みにするな、§4 定型表現のリサイクル</p> <p>実習課題 1：学修計画書/研究計画書 の作成 Ver1.0</p>	[ハ]
	第 3 回	<p>第 2 回講義の復習を、提出課題をレビューすることで実施する。</p> <p>レビュー観点 1：指定（仕様）に合致しているか</p> <p>レビュー観点 2：参照したドキュメントは何か</p> <p>レビュー観点 3：リサイクルした定型表現</p>	[ハ]
	第 4 回	<p>一文を短文化することの価値と意義を、修飾語と句読点とさらに文の並べ方の観点で学修する。</p> <p>教科書：作文術の心得（続）</p>	[ハ]

		§5 短文で分かりやすく、§6 文の単位は?い順に並べる、§7 修飾語は曲者、§8 読点の打ち方に決まりはあるか 実習課題 2 : 学修計画書/研究計画書 の更新 Ver2.0	
	第 5 回	第 4 回講義の復習を、提出課題をレビューすることで実施する。 レビュー観点 1 : 短文化箇所が 5 か所以上あるか レビュー観点 2 : 短文化したことへのメリットを把握しているか レビュー観点 3 : 更新記録がもれなく正しく記載されているか	[/ \]
	第 6 回	日本語の特徴を把握し活かしながら、Technical Writing を習得する方法を学修する。 教科書 : 作文術の心得 (続 2) §9 ハとガの使い分けのポイント、§10 ハとガの微妙な関係、§11 ハは変幻自在、§12 日本語は主観的言語、§13 日本語の論理、欧州語の論理、§14 和文和訳で表現力を高める 実習課題 3 : 学修計画書/研究計画書 の更新 Ver3.0	[/ \]
	第 7 回	第 6 回講義の復習を、提出課題をレビューすることで実施する。 レビュー観点 1 : 短文化箇所が 5 か所以上あるか レビュー観点 2 : 和文和訳 (別の文への置き換え) をしたことへのメリットを把握しているか レビュー観点 3 : 更新記録がもれなく正しく記載されているか	[/ \]
	第 8 回	最適な文書の構造体の作り方を段落化とその構成方法で学修する。 教科書 : 文をまとめる 一段落道場 §15 文から文章へ、§16 段落とはなんだろう、§17 結論を先に、§18 段落の流れ、§19 段落の分割 実習課題 4 : 学修計画書/研究計画書 の更新 Ver4.0	[/ \]
	第 9 回	第 8 回講義の復習を、提出課題をレビューすることで実施する。 レビュー観点 1 : 段落化、段落構成方法、および段落出現方法の更新箇所が 3 か所以上あるか レビュー観点 2 : 更新したことへのメリットを把握しているか レビュー観点 3 : 更新記録がもれなく正しく記載されているか	[/ \]
	第 10 回	結論となる主張を論理的に正しく成立させるための方法を学修する。 教科書 : 段落を組み立てる 一論証道場 §20 「強い」論証と「弱い」論証、§21 人は「権威」に弱い、§22 演繹論証、§23 帰納論証、§24 演繹法か帰納法か、§25 起承転結は実用文向きではない、§26 仕上げるの注意点 実習課題 5 : 学修計画書/研究計画書 の更新 Ver5.0	[/ \]
	第 11 回	第 10 回講義の復習を、提出課題をレビューすることで実施する。 レビュー観点 1 : 主張を論理的に成立させるための更新箇所が 3 か所以上あるか レビュー観点 2 : 更新したことへのメリットを把握しているか レビュー観点 3 : 更新記録がもれなく正しく記載されているか	[/ \]
	第 12 回	英語による Technical Writing 力は日本語のそれが基盤になっていることを理解する。 教科書 : 第 1 章 概論、第 2 章 スタイル、バランス、インパクトある英文ライティングのテクニック 実習課題 6 : 日本語の 学修計画書/研究計画書 を英語でリライトしてみよう	[/ \]
	第 13 回	英語の特徴と学習法を理解し、Technical Writing 力を向上させる方法を学修する。 教科書 : 第 3 章 語彙・表現力を Up するテクニック、第 4 章 英文法編	[/ \]
	第 14 回	日本語の Technical Writing で学修した論理力の向上を英語で試す。 教科書 : 第 5 章 論理的で説得力のあるライティング 実習課題 7 : 日本語の学修計画書/研究計画書 を英語でリライトしてみよう その 2	[/ \]
	第 15 回	本講義のまとめとして、英語による Technical Writing の「肝」的要素を整理し、実習課題 6 と同 7 のレビューを行う。 教科書 : 第 7 章 実践問題編 1. テクニカルライティングのコツをマスター	[/ \]
	試験	最終試験を行う。	[/ \]
成績評価	7 回の課題提出結果の評価 (10 点×7) 試験 (30 点) に授業貢献等を加味して最終判定を行う。 注意 : 授業を 5 回以上欠席すると原則評価の対象としない。 (In the case of a recorded lecture, the attendance will be checked with the score obtained at a small test given as homework after the lecture. A score of at least 60% is required)		
教科書・教材	日本語作文術、野内良三、中公新書 英語ライティング 至高のテクニック 36、植田一三他、ベレ出版		
参考図書	必要に応じて講義中に指示する。		

専攻名	全コース共通	必修・選択	選択必修	単位	2	学期	4Q
科目群	選択必修科目群	科目名 (英文表記)	DESIGN [RE] THINKING DESIGN [RE] THINKING			教員名	松井 実

概要	In recent years design thinking has gained legitimacy and popularity as a process for developing design and business to solve problems. Design thinking typically shares a couple of basic principles: namely human-centered, empathizing, prototyping, and testing. Design thinking has proven itself valuable in fostering creative culture; all the while, it has also been vastly misinterpreted and evangelized as a quick-fix solution that anyone can apply to a so-called wicked problem. Its ability to instantly enable anyone to solve problems creatively as advertised is dismissed. We investigate design thinking throughout the course while leaving space to critically reconsider and improve its principles.		
目的・狙い	This course aims to simultaneously enrich and question students' understanding of the creative process of design. We study, review, criticize, perform, and modify design thinking throughout the course. The advocates intended design thinking as an anti-designerly way of designing. This course aims to educate designers and non-designers altogether. As we re-think design thinking, we certainly do not take design thinking as a norm: we rather stay neutral on the subject by covering both sides of the story.		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	We welcome non-designer students. The slide deck is mainly in English, but you are not required to submit your assignments in English. The lecture itself and communications are done mainly in Japanese. You must be able to learn by yourselves, since the ho		
到達目標	上位到達目標		
	Being able to modify design thinking to their design process that fits their way of thinking in general		
	最低到達目標		
	Understanding what design thinking is; why and how it is criticized.		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	—	
	ハイフレックス型	○	Though it is advisable for students to join the classes in real-time, you may take the classes via on-demand videos. Note that some homeworks must be done before the beginning of certain classes.
	録画視聴型	○	Some classes requires real-time attendance in order for students to present their assignments. Such classes are initially scheduled on #6, #9, and #15, and may be changed in accordance with the progress of the lecture.
授業外の学習	This class requires heavy effort on the assignments. For the majority of the classes (initially scheduled #3, #4, #7, #8, #10, #11, #12, #13, and #14), students are to perform literature reviews and present the literature to everyone. The literature may b		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	Following an introductory class (#1), three classes are dedicated to learning (#2-3) and criticizing (#4) design thinking. You then briefly perform a simplified version of design thinking (#5) and present your effort (#6). In the following three classes we exemplify the limits and the challenges design thinking is currently facing (#7-8) and then discuss how one may define good and bad designs (#9). We spend the rest of the classes investigating design thinking beyond its current state (#10-14). In the last class, students present their point of view (#15). The points for each homeworks are, if available, indicated in the parentheses ().		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
授業の計画	第1回	Introduction. Introduction to the course, what this course is and what it is not. Students considering taking this course are then given the permission to edit a shared Google Drive folder that contains Google Slides files that they are supposed to submit	[八]
	第2回	Basics of design thinking (1 of 2). Step by step, general introduction to design thinking.	[八]
	第3回	Basics of design thinking (2 of 2). A bit more specific details on each steps. Homework: literature review regarding #2 and #3 (10 points).	[八]
	第4回	We investigate current criticisms on design thinking; how it is advertised; how it is harmful; what it actually can achieve; what it hasn't been able to. Homework: literature review on criticisms (5 points).	[八]
	第5回	Practice design thinking. You find a daily annoyance, empathize on yourself about the problem, define what the actionable problem is, and then ideate on the solutions. The procedures are based on a slide, and you fill in the blanks to process your pain in	[八]
	第6回	Present your prototype, followed by the feedbacks on it. Homework: evaluate and give critique on the other students' works (5 points).	[八]
	第7回	Human-centered design and design thinking. Basics of HCD and the relationships with modern marketing are discussed. Usability, sustainability, and other ethical cores of design thinking are introduced. Homework: literature review (5 points).	[八]
	第8回	Extended HCD, but not too extended. Abuse of questionable HCD, issues on addictive designs, and contradicting ethics and demands other than human-centeredness are introduced. Homework: what defines good design, and what should not (10 points, deadline: th	[八]
	第9回	Extended HCD (cont'd). If time permits, we hold an open discussion session on the conflicting standpoints between students. Students' point of view on what 'good' design and 'bad' design should be defined with, and which 'goodness' should supersede another	[八]
	第10回	Personality. I argue that design thinking requires a certain set of personal traits. Findings from personality psychology and their relationships to design thinking are discussed. Homework: evaluate your personalities, and literature review (5 points).	[八]
	第11回	Next-gen design thinking. Design thinking lookalikes are introduced. How they have evolved, and their differences. Since the popularization of design thinking, a handful of alternatives and refinements are proposed. Design thinking as a quasi-scientific method	[八]
	第12回	Designs worth dying for. The basic ideas of memetics and cultural evolution are introduced. The lecturer's design-centered point of view, i.e., humans as a resource to the designs to replicate themselves, is introduced. Design thinking as a conspicuous design	[八]
	第13回	Hype. The difference between classical design and design thinking is discussed. How design theories evolved is shown. Hype spiral of buzzwords, technologies and their lifecycles are discussed. Homework: plot buzzwords, research trends, and innovations in	[八]
	第14回	Computational design. How design thinking may get obsolete in the future is discussed. Statistical ways of improving and testing designs and generative methods by machine learning are introduced. How they are outperforming the existing human designers is	[八]
	第15回	Design rethinking. With the classes, students would have constructed the knowledge on design thinking, and then deconstructed by criticizing them from various perspectives. Now is the turn to reconstruct and to improve it and modify so that it fits their point	[八]
	試験	There is no exams.	
成績評価	Homeworks (75 points in total) and the major presentation (25 points in total).		
教科書・教材	Lecture slide deck is available as a Google Slides slide deck. References available online are linked directly from it. Students are strongly advised to check these out after the class.		
参考図書	Miller, G. (2009) Spent: Sex, Evolution, and Consumer Behavior. Viking Adult Hustwit G. (2009) Objectified. (Video documentary), Swiss Dots Production Brown, T. (2009) Change by Design. Harper Business Maeda, J. (2018) Design in Tech Report		

Ⅱ 選 択 必 修 科 目 群

技術倫理

情報技術者倫理

専攻名	全コース共通	必修・選択	選択必修	単位	2	学期	1Q
科目群	選択必修科目群	科目名 (英文表記)	技術倫理 Engineering Ethics	教員名		伏見 靖	

概要	ものづくりアーキテクトは間違いのない意思決定をする必要がある。このような意思決定の際、技術倫理に関係する問題について判断できるようになるためには、倫理問題についての理解を深める必要がある。特に、事前に起こりうる問題を想定して、予めその回答を用意するトレーニングを通じて技術倫理に関する問題解決能力を取得することを目標として授業を設計している。受講者には討論への参加、演習課題についてレポートの提出、自ら探した事例についてのプレゼンテーションを求める。		
目的・狙い	本講義では、技術倫理について学び、予め判断力を養うトレーニングすることを学ぶ。政府・自治体・企業・諸機関を取り巻く様々な問題が発生したとき、トップとしての判断、中間管理職としての判断、一般社員としての判断は、それぞれの立場によって異なるであろう。また、法的な視点での議論は法学にゆだねるとしても、すべての法を熟知して産業活動を実施することが困難な状況で最低限守るべき倫理基準などを学ぶことで、知らないうちに法に抵触することなく業務活動が円滑に実施できるようになるメリットは大きい。本授業は講義と、事例について考える演習とを通じて受講者が判断力を培うことを支援する。受講者は、技術倫理問題について判断する力を獲得する。		
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	技術倫理に関する興味を有すること。		
到達目標	上位到達目標		
	複雑な技術倫理問題についても、合理的な判断ができるようになる。技術倫理問題を合理的に解決するための前提となる情報を体系的に収集できるようになる。		
	最低到達目標		
	基本的な倫理判断についての理解が深まり、講義で用いた例題と同様な問題について倫理判断できるようになる。専門職業集団が持つべき倫理綱領などを作成することができるようになる。		
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点
	対面型	○	スライドや配布資料に基づき、技術倫理の基礎知識を学ぶ。個人ワークでは、インターネットや図書館を活用して、様々な事例をサーチし、発表する。グループワークには、積極的に参加し、成果を出すようにする。毎回出席を取る。 レポート作成や筆記試験解答には、エンジニアとしてのやや上級レベルの文章作成能力を必要とする。レポートは WORD で提出し、A4 で 2 枚(1200 字以上)を原則とする。なお、講義の内容・進行は、受講人数等によって調整する場合がある。
	ハイフレックス型	—	
	録画視聴型	—	
授業外の学習	配布資料及び参考文献に基づいて予習・復習すること。インターネット等を用いて技術倫理事例にあたること。		
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	講義は、第 1, 2 回で技術倫理の概要を説明し、簡単な事例についてグループワークを行う。第 3, 4 回で実際に起きた事例を紹介し、仮想事例に基づき、グループで討議して理解・判断力を深める(翌週期限のレポート提出有)。第 5, 6 回で技術倫理に関連する分野(倫理学・応用倫理学・心理学・行動経済学)を説明すると共に、個人ワーク及びグループディスカッションを行う。第 7, 8 回で、実際に起きた事例を紹介し、仮想事例に基づき、グループで討議して理解・判断力を深める(翌週期限のレポート提出有)。第 9, 10 回で、技術関係の各種学協会の倫理規範を調査し、倫理規範を比較検討することを通じて職業倫理の考え方から現代の倫理学が扱う諸問題について学ぶ。さらに、仮想事例に基づき、グループで討議して理解・判断力を深める(翌週期限のレポート提出有)。第 11 回以降は個人で調べた事例発表を行う。全講義を通じて、ものづくりアーキテクトとして意思決定する演習を実施し、誤った判断をしないトレーニングとする。各講義の最後には簡単な復習テストを行う。		

	回数	内容	授業実施形態 [対]、[八]、[録]
授業の計画	第1回	講義の目的と全体の授業計画を説明し、学生が本講義を受講するか否かの選択ができるようにする。技術倫理を修得する意義や基本的な知識について学ぶ。レポート作成上の注意点等を説明する。最後に復習テストを実施する。	[対]
	第2回	実例や仮想事例に基づいて、グループ討論し、発表を行う。	[対]
	第3回	技術倫理に関する基本的な用語や概念について学習すると共に、米国の事例を紹介する。	[対]
	第4回	技術倫理事例グループ演習(1) 仮想事例に基づいて、問題点についてグループで検討し、発表する。質疑応答を踏まえた個人レポートⅠを翌週までに提出する。	[対]
	第5回	技術倫理に関連する分野(倫理学・応用倫理学・心理学・行動経済学)を説明する。例えば、倫理学においては、「最大多数の最大幸福原理」等の基本原理について学ぶ。倫理学上の理論や、倫理学の応用として環境倫理について学ぶなど、倫理判断が広い分野に適用できる可能性を持っていることを理解する。	[対]
	第6回	仮想事例に基づいて、問題点や課題についてグループで検討し、発表を行う。	[対]
	第7回	技術倫理に関するトピックや概念について学習すると共に、国内の事例や事故調査を紹介する。	[対]
	第8回	技術倫理事例グループ演習(2) 仮想事例に基づいて、問題点についてグループで検討し、発表する。質疑応答を踏まえた個人レポートⅡを翌週までに提出する。	[対]
	第9回	日本及び欧米の科学技術分野における学協会の倫理綱領について、どのような倫理判断で構築されているのか分析する。	[対]
	第10回	技術倫理事例グループ演習(3) 仮想事例に基づいて、問題点や倫理綱領の改善についてグループで検討し、発表する。質疑応答を踏まえた個人レポートⅢを翌週までに提出する。	[対]
	第11回	事例発表(日程A) 任意の技術倫理事例(条件は別途指示する)を各自で調査し、プレゼンテーション資料を作成し、事例発表を行う。	[対]
	第12回	事例発表の続き	[対]
	第13回	事例発表(日程B) 任意の技術倫理事例(条件は別途指示する)を各自で調査し、プレゼンテーション資料を作成し、事例発表を行う。	[対]
	第14回	事例発表の続き。 第1回～第13回までの総括、質疑応答等	[対]
	第15回	技術倫理に関するその他の視点(心理学・行動経済学等)からの考察、その他の事例についての紹介。	[対]
	試験	技術倫理に関する筆記試験を実施する。	[対]
成績評価	次の3つのポイントで評価する(合計100点満点)。 グループワークに伴う個人レポートⅠ～Ⅲ 計45点 事例発表 15点 最終試験 40点		
教科書・教材	配布資料 指定のテキストは無いが、任意の技術倫理の図書を1冊は通読して欲しい。		
参考図書	加藤 尚武(著):現代倫理学入門(講談社学術文庫) 杉本泰治・高城重厚(著):大学講義 技術者の倫理入門(丸善出版) 応用倫理学や、インターネット上の事故調査資料など。		

専攻名	全コース共通	必修・選択	選択必修	単位	2	学期	3Q
科目群	選択必修科目群	科目名 (英文表記)	情報技術者倫理 Computer Ethics for Information Society			教員名	稲垣 実

概要	この科目では、「何故、情報技術者に倫理観が必要なのか」といった問いかけから、情報技術者に関係する各種法令やガイドライン、ルール、マナー、エチケットが構成されてきたことを確認し、その重要性や社会的背景を考慮しながら、自らの業務にどのように適用させるべきかを考え、グループで検討する。また、この科目で検討していく内容は、システム開発者や情報化の推進者として様々なジレンマに直面することがあるが、これらの事象は、情報技術の発展が定着したビジネスルールと相反するものでもあり、どの様に解決すべきか、常に考えていく必要がある。 講義の進め方は、1 週間の中で都合の良い時間に Web 教材による事前学習を行い、大学院での対面講義とグループ討議によって考えを深化させ、その成果を導く「ブランディッド・ラーニング」とする。			
目的・狙い	この科目は、まずは情報技術者として遵守すべき法令やガイドラインおよび一般化したマナーに関する基本的な知識を修得し、次に情報技術者が備えるべき倫理観を育み、その知識と倫理観を現実社会の諸問題に応用できるスキルを修得することを主たる目的とする。そのため、対面回のグループ討議においては、積極的に意見を述べるとともに、メンバーの意見を傾聴する姿勢が望まれる。 あわせて、内部統制、IT ガバナンスの意義や目的、法令遵守状況の評価・改善活動などを理解することにより、情報技術者としての倫理観を高めることを目指す。			
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	特になし（情報システムやインターネットの利活用に関するある程度の知識があることが望ましい）。			
到達目標	上位到達目標			
	情報技術者倫理の高度な知識・スキルを有し、情報技術者のプロフェッショナルとしての業務を遂行でき、経験や実績に基づいて倫理的観点を含めた作業指示ができる。また、情報技術者のプロフェッショナルとして求められる経験を形式知化し、後進育成に応用できる。			
	最低到達目標			
	情報技術者倫理の基本的知識・スキルを有し、一定程度の難易度又は要求された作業について、倫理的観点を含めながら独力で遂行できる。			
授業実施形態 (単一または複数 から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点	
	対面型	○	奇数回は対面講義とグループ討議を品川キャンパスにて行い、グループ討議の結果を踏まえた小レポートの提出によって平常点を加点する。 パンデミックの状況によっては、ハイフレックス型に切り替える。	
	ハイフレックス型	—		
	録画視聴型	○	偶数回は Web 講義を自分のペースで受講する録画視聴型とし、受講後の視聴確認テストの合格点をもって出席とみなし、質問などは LMS にて受け付ける。	
授業外の学習	3 回目以降の奇数回でのグループ討議にて積極的に意見を述べるために、各回ごとに設定したテーマに関する自らの経験談やメディアなどの情報を整理しておくことが望ましい。			
授業の進め方 (グループワーク 方式など、進め方 の特徴)	この科目は、講師独自のオリジナルプリントで行う。偶数回の Web 講義では、受講後の LMS で行われる視聴確認テストを通じて知識の定着を図り、奇数回の対面講義では、グループ討議を通じて応用力を高め、小レポートの作成を通じて自分の業務に適用できる能力を育成する。 なお、授業内容の詳細は、第 1 回目の「アンケート」や、直近の「情報技術関連事件」などにより、内容を変更することがある。			
授業の計画	回数	内容		授業実施形態 [対]、[ハ]、[録]
	第 1 回	【オリエンテーションと基本講義】 当該科目の目的と内容および評価方法、講義を進める上で必要となる「情報技術者倫理」に関する基本用語を解説する。内容を調整するために、前提知識テスト（評価対象外）を実施する。		[対]
	第 2 回	【民法改正と知的財産権①】 民法の改正、および知的財産権法、著作権法、産業財産権法の中心となる 4 法、不正競争防止法などに関わる法律の考え方を修得し、業務へ適用するための講義を行う。		[録]
	第 3 回	【民法改正と知的財産権②】 第 2 回の講義内容を前提に、民法改正による情報システム開発や情報サービス産業への影響、ファスト動画における著作人格権や著作権および著作物の引用などをグループ議論を通じて気付きを獲得する。		[対]

	第4回	【インターネットの影響①】 インターネットを構築する技術者、およびインターネットの利用者の視点に立って、サイバー犯罪やマルウェア、ネットトラブルなどの事例を踏まえながら、その対策を考える講義を行う。	[録]
	第5回	【インターネットの影響②】 第4回の講義内容を前提に、ダークウェブで展開されるアンダーグラウンドビジネスの展開、若者たちが夢中になるネットゲームにおけるチート行為などの事例の問題点や具体的な対策などをグループ議論を通じて気付きを獲得する。	[対]
	第6回	【情報セキュリティ関連法規①】 サイバーセキュリティに関する施策の基本となるサイバーセキュリティ基本法などの考え方を修得し、セキュリティ上の脅威を確認し、その対策を適用するための講義を行う。	[録]
	第7回	【情報セキュリティ関連法規②】 ネットワークサービスを利用する際のアカウントやクレジット情報などを搾取するフィッシング詐欺が急増している背景、SNS利用から派生するフォートハラスメントについて、その問題点や具体的な対策などをグループ議論を通じて気付きを獲得する。	[対]
	第8回	【情報サービス産業と情報倫理①】 情報化社会をリードする情報サービス産業の視点からIoTやAIなどのITトレンドを駆使して実現する Society5.0 について理解し、ITトレンド利活用に関する際の倫理観などの講義を行う。	[録]
	第9回	【情報サービス産業と情報倫理②】 ソサイエティ 5.0 実現に向けた共通重要課題と主な論点と検討の方向性に向けた規制・制度、社会受容性、およびマイナンバー制度とマイナンバーカードの利活用における問題点などをグループ議論を通じて気付きを獲得する。	[対]
	第10回	【個人情報とプライバシー①】 個人情報保護やプライバシー保護の考え方や実際の保護に関する手法や技法、マイナンバー制度などの考え方を修得し、業務へ適用するための講義を行う。	[録]
	第11回	【個人情報とプライバシー②】 個人情報保護違反やプライバシー保護違反などの事例、街中にある防犯カメラや自動車のドライブレコーダーにおける肖像権やプライバシー権などの問題点などをグループ議論を通じて気付きを獲得する。	[対]
	第12回	【企業とコンプライアンス①】 法と企業のコンプライアンスの在り方、さらに企業のITガバナンスの仕組みづくりについて考え、業務への適用を目的とした講義を行う。	[録]
	第13回	【企業とコンプライアンス②】 GAF Aを取り巻く経営環境と各国における様々な課題およびGAF Aとどの様に各国は共存すべきか、また、ユニコーン企業の事例を参考にどの様な要素や要因を持つベンチャー企業がユニコーン企業へと成長できるか、などをグループ議論を通じて気付きを獲得する。	[対]
	第14回	【情報倫理教育①】 従来の倫理教育を踏まえ、情報技術者倫理とは何かを再度確認し、情報技術者としてどの様な情報倫理教育をすべきかをさまざまな視点から考え、業務への適用を目的とした講義を行う。	[録]
	第15回	【情報倫理教育②】 この科目のまとめとして、小・中学校や高等学校の学校教育における基礎倫理や情報倫理教育はどうあるべきか、また、情報系の大学・大学院や専門学校における情報技術者倫理教育についてどうあるべきか、などをグループ議論を通じて気付きを獲得する。	[対]
	試験	これまでに学んだ知識の確認と、それを利用した事例分析ができるかどうかを問う基本的な論述問題に解答する。 パンデミックの状況により、レポートに切り替えることがある。	[対]
成績評価	講義中に行う課題と期末テストを合わせて100点満点評価する。 ・課題: 70点(テーマ別となる2-3、4-5、6-7、8-9、10-11、12-13、14-15回の活動を評価する) ・期末試験: 30点(2つのテーマを出題し、それぞれ800文字程度で論じたものを評価する)		
教科書・教材	教材はLMS上に「オリジナルプリント」を提供する。		
参考図書	参考図書類はレジュメなどで紹介する。(購入は、受講者各自の判断に委ねる)		

2022（令和 4）年度 東京都立産業技術大学院大学 シラバス

2022 年 4 月 1 日発行

編集・発行 東京都立産業技術大学院大学 教務学生委員会
東京都品川区東大井 1-10-40
電話 03(3472)7834
URL <https://aiit.ac.jp/>